富士市埋蔵文化財調査報告　第 64 集

静岡県　富士市

伝法 東平第 1 号墳

2018 年 3 月

富士市教育委員会

東平第１号墳　出土遺物集合

例　言

1　本書は、静岡県富士市伝法字東平 2329 番 1 外 2 筆において実施した東平第 1 号墳（東平遺跡第 12 地区）の発掘調査にかかわる報告である。発掘調査は貸事務所建設に先立つ事前調査として、事業者からの委託により富士市教育委員会が実施した。

2　発掘調査は、平成元年（1989 年）11 月 15 日から 12 月 29 日にかけて実施した。
実際の調査掘削面積は 803.786 ㎡である（確認調査 403.676 ㎡、本発掘調査 457.610 ㎡、重複部分あり）。

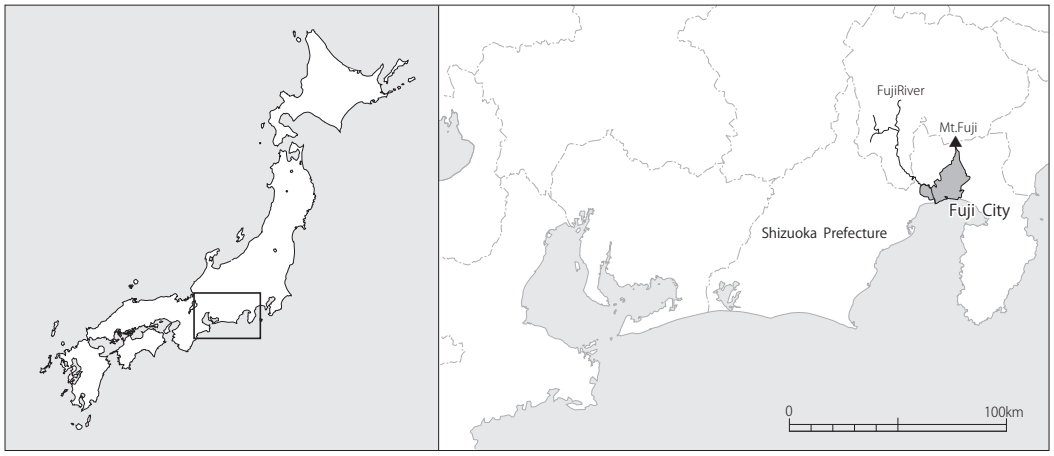
3　本報告書刊行に向けた整理作業は、平成 28 年（2016 年）に開始し、本書の刊行をもって終了した。

4　本書の執筆･編集は佐藤祐樹（市民部文化振興課主査）が担当し､若林美希（市民部文化振興課臨時職員）が補佐した。
ただし、第 4 章では、鈴木 一有（浜松市文化財課：第 2 節）、大谷 宏治（静岡県教育委員会：第 3 節）、藤村 翔（富士山かぐや姫ミュージアム：第 4 節）の各氏に玉稿を賜った。

5　現地調査における記録写真撮影は調査担当者による。
整理作業における遺物写真は、集合写真を杉本和樹（西大寺フォト）が、その他を佐藤が撮影した。
金属製品の X 線写真は静岡県埋蔵文化財センター（担当：大森信宏）に依頼した。

6　本書で報告した調査に関わる記録図面・出土遺物等の資料は、すべて富士市教育委員会で保管している。
今後、富士山かぐや姫ミュージアム（富士市立博物館）に移管する予定でいる。

7　本書の作成にあたり、次の方々にご協力とご指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。（敬称略、五十音順）
石松 崇（香美町教育委員会）　内山敏行（とちぎ未来づくり財団）　太田宏明（河内長野市教育委員会）
大森信宏（静岡県埋蔵文化財センター）　大谷宏治（静岡県教育委員会）　菊池吉修（静岡県教育委員会）
草野潤平（山形県埋蔵文化財センター）　鈴木一有（浜松市文化財課）　高橋照彦（大阪大学）　滝沢 誠（筑波大学）
田村隆太郎（菊川市教育委員会）　菱田哲郎（京都府立大学）　若狭 徹（明治大学）　和田達也（浜松市文化財課）



静岡県富士市の位置

凡　例

1　埋蔵文化財包蔵地の管理上の古墳の正式名称は、伝法 2 古墳群に存在する東平第 1 号墳である。ただし、学術的・研究史的に「伝法古墳群」に属すると考え、東平第 1 号墳の前に「伝法」を付して表現する場合もある。また、「第」を省略し、東平 1 号墳と表記することもある。

2　調査は任意座標を使用して行ったが、本書で示す座標は、平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標である世界測地系（平成 14 年 4 月施行）を使用している。

報告書抄録の緯度・経度は、東平第 1 号墳石室の中心を記している。

3　石室について、東平第 1 号墳では 3 面の床面が確認された。

本報告では、最下面から順に第 1 次床面、第 2 次床面、第 3 次床面と呼称する。

4　土層・遺物の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。

5　遺構の略記号は以下の通りである。

SB：竪穴建物跡

目　次

例　言

凡　例

目　次

第 1 章　調査経緯と経過

第 1 節　発掘調査の経緯と経過　1

第 2 節　整理作業の経緯と経過　4

第 2 章　立地と環境

第 1 節　地理的環境　5

第 2 節　歴史的環境　6

第 3 章　調査成果　13

第 4 章　考　察

第 1 節　日本列島における丁字形利器について（佐藤 祐樹）　53

第 2 節　丁字形利器とその系譜（鈴木 一有）　63

第 3 節　東平 1 号墳副葬馬具と大刀の特徴からみた被葬者像（大谷 宏治）　79

第 4 節　東平 1 号墳出土鉄鏃の評価と意義（藤村 翔）　101

第 5 節　東平 1 号墳における埋葬過程の復元（佐藤 祐樹）　113

第 5 章　総 括　116

出土遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 章　調査経緯と経過
第 1 節　発掘調査の経緯と経過
第 1 図　調査地位置図　1
第 2 図　確認調査トレンチおよび本発掘調査区配置図　2
第 2 節　整理作業の経緯と経過
第 3 図　『静岡県史』資料編 2 考古二　566・567 頁　4
第 2 章　立地と環境
第 1 節　地理的環境
第 4 図　駿河湾上空から富士市を望む　5
第 5 図　周辺地形図　5
第 2 節　歴史的環境
第 6 図　東駿河の後期古墳と国衙・郡衙遺跡　6
第 7 図　潤井川東岸遺跡分布図　7
第 8 図　東平遺跡内の古墳と官衙関連遺物　8
第 9 図　伝法古墳群分布図　9
第 3 章　調査成果
第 10 図　測量図・周溝平面図・周溝断面図　14
第 11 図　周溝出土遺物実測図 1　15
第 12 図　周溝出土遺物実測図 2　16
第 13 図　石室展開図（第 1 次床面）　18
第 14 図　石室平面図・断面図（第 2 次床面）　19
第 15 図　石室平面図・断面図（第 3 次床面）　20
第 16 図　石室基底石・基底石据え方・墓坑　平面図・断面図　21
第 17 図　石室（第 1 次床面）全景（南より）　21
第 18 図　石室基底石全景（南東より）　21
第 19 図　石室基底石据え方・墓坑（南より）　21
第 20 図　石室（第 3 次床面）全景（南より）　22
第 21 図　石室エリア区分図　22
第 22 図　石室遺物出土状況図　23
第 23 図　エリア別遺物出土状況詳細図（A・B・C エリア）　24
第 24 図　エリア別遺物出土状況詳細図（D・E エリア）　25
第 25 図　第 1 次床面遺物出土状況図　26
第 26 図　第 3 次床面遺物出土状況図　27
第 27 図　B エリア（第 3 次床面）遺物出土状況（東より）　29
第 28 図　石室内　武器出土状況図　30
第 29 図　石室内　馬具出土状況図　31
第 30 図　石室内　農工具出土状況図　32
第 31 図　古墳出土遺物一覧図　35
第 32 図　武器実測図 1　36
第 33 図　鍔（30a）　37
第 34 図　武器実測図 2　38
第 35 図　武器実測図 3　39
第 36 図　武器実測図 4　40
第 37 図　武器実測図 5　40
第 38 図　武器実測図 6　41
第 39 図　武器実測図 7　41
第 40 図　武器実測図 8　43
第 41 図　武器実測図 9　44
第 42 図　馬具実測図 1　45
第 43 図　馬具実測図 2　46
第 44 図　馬具実測図 3　47
第 45 図　馬具実測図 4　48
第 46 図　馬具実測図 5　49
第 47 図　馬具実測図 6　50
第 48 図　馬具実測図 7　51
第 49 図　農工具実測図　51
第 50 図　石室出土土器実測図　52
第 51 図　不明鉄製品実測図　52
第 52 図　古墳外出土遺物実測図　52
第 4 章　考　察
第 1 節　日本列島における丁字形利器について
第 53 図　丁字形利器出土状況　53
第 54 図　宮原 2 号墳出土遺物　54
第 55 図　宮原 2 号墳丁字形利器　55
第 56 図　多賀城跡 SI2300B 出土遺物　56
第 57 図　月岡下古墳遺物出土状況（1）　57
第 58 図　月岡下古墳遺物出土状況（2）　57
第 59 図　月岡下古墳出土遺物　58
第 60 図　月岡下古墳丁字形利器　59
第 61 図　月岡下古墳　出土遺物　60
第 62 図　列島における丁字形利器　61
第 63 図　丁字形利器出土分布図　62
第 2 節　丁字形利器とその系譜
第 64 図　丁字形利器と部分名称　63
第 65 図　丁字形利器集成　65
第 66 図　丁字形利器の祖形　66
第 67 図　枘穴鉄斧集成　67
第 68 図　枘穴鉄斧の分布　69
第 69 図　後漢画像石・高句麗古墳壁画にみる闘斧と軍事編成　72
第 70 図　中国画像石にみる斧鉞　73
第 71 図　三角縁神獣鏡にみる斧鉞　73
第 72 図　宮原 1 号墳出土遺物　74
第 3 節　東平 1 号墳副葬馬具と大刀の特徴からみた被葬者像
第 73 図　東平 1 号墳大刀及び馬具出土状況図　79
第 74 図　大刀出土状況　80
第 75 図　鉄製無象嵌円頭柄頭の類例と拵え　81
第 76 図　東平 1 号墳出土大刀の拵え　81
第 77 図　連珠文象嵌鍔の類例と変遷　82
第 78 図　東平 1 号墳出土馬具の編年的位置づけ①（帯状吊金具付大型矩形立聞環状鏡板付轡・横長心葉形鏡板付轡と関連する轡）　84
第 79 図　東平 1 号墳出土馬具の編年的位置づけ②（横長心葉形鏡板付轡・棘付花弁形杏葉）　85
第 80 図　東平 1 号墳出土馬具の編年的位置づけ③（飾金具）　89
第 81 図　東平 1 号墳出土馬具の編年的位置づけ④（金属製壺鐙）　91
第 82 図　副葬された大刀と馬具の編年的位置からみた東平 1 号墳の埋葬時期　93
第 83 図　横長心葉形鏡板付轡・棘付花弁形杏葉・金属製壺鐙の分布　94
第 4 節　東平 1 号墳出土鉄鏃の評価と意義
第 84 図　東平 1 号墳の鉄鏃　101
第 85 図　三角形式鉄鏃の諸例　103
第 86 図　五角形式・片刃箭鏃の諸例　103
第 87 図　鉄鏃構成の類例（遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉）　106
第 88 図　駿河東部地域の後・終末期古墳における鉄鏃組成の変遷　107
第 89 図　駿河・伊豆地域の手工業関連遺跡と地域型式鉄鏃の広がり　108
第 90 図　甲斐地域における有力階層の鉄鏃組成　109
第 5 節　東平 1 号墳における埋葬過程の復元
第 91 図　石室内の空間認識と副葬品出土状況　113
第 92 図　埋葬過程の復元　114
第 5 章　総　括
第 93 図　伝法古墳群の展開と富士郡衙の成立　117
第 94 図　伝法古墳群と富士郡衙の展開　118

挿 表 目 次

第 2 章　立地と環境
第 2 節　歴史的環境
　第 1 表　伝法古墳群一覧表　10
第 3 章　調査成果
　第 2 表　出土位置別遺物一覧表　28
　第 3 表　石室内出土遺物種類別一覧表　34
第 4 章　考　察
第 2 節　丁字形利器とその系譜
　第 4 表　枘穴鉄斧および丁字形利器出土例　70
第 3 節　東平 1 号墳副葬馬具と大刀の特徴からみた被葬者像
　第 5 表　鉄製無象嵌円頭大刀出土例　80
　第 6 表　帯状吊金具付大型矩形立聞環状鏡板付轡出土例　83
　第 7 表　横長心葉形鏡板付轡出土例　83
　第 8 表　横長心葉形鏡板付轡と関連する
　　透十字文心葉形鏡板付轡出土例　83
　第 9 表　棘付花弁形杏葉出土例　87
　第 10 表　壺鐙出土例　90
第 4 節　東平 1 号墳出土鉄鏃の評価と意義
　第 11 表　駿河東部の古墳出土鉄鏃構成　105

巻 頭 図 版 目 次

東平第 1 号墳　出土遺物集合

写 真 図 版 目 次

PL.1
1. 第 3 次床面遺物出土状況全景（南より）
PL.2
1. 調査前全景（西より）
2. 1Tr 精査作業の様子（北より）
3. 2Tr 重機掘削の様子（東より）
4. 1Tr 完掘（北より）
5. 2Tr 完掘（西より）
6. 4Tr 土層
7. 3Tr　壺鐙（132）出土の様子（南東より）
8. 3Tr　大刀（30・31・32）出土の様子（東より）
PL.3
1. 第 3 次床面後室
丁字形利器（29）、大刀（30・31・32）出土状況（西より）
2. 第 3 次床面後室
丁字形利器、大刀、刀装具、馬具など出土状況（東より）
PL.4
1. 第 3 次床面後室　鉄鏃出土状況（北より）
2. 第 3 次床面後室　刀装具（34）出土状況（南より）
3. 第 3 次床面後室　円頭柄頭（32a）出土状況（南より）
4. 第 3 次床面　馬具（157）出土状況
5. 第 3 次床面　馬具出土状況
PL.5
1. 第 3 次床面前室
壺鐙（132・133）、轡（130・131）、鉸具（135）出土状況（西より）
2. 第 3 次床面前室　轡（130・131）出土状況（南より）
PL.6
1. 第 3 次床面　遺物取り上げ後全景（南より）
PL.7
1. 後室東および前室西　下部床面検出状況（南より）
2. 3Tr 全景（西より）
3. 下部床面鉄鏃出土状況
4. 前室西　下部床面検出状況（北より）
5. 後室東　下部床面検出状況（南より）
6. 前室西　下部床面検出状況（西より）
7. 後室東　下部床面検出状況（東より）
PL.8
1. 第 2 次床面全景（南より）
2. 第 2 次床面（北より）
3. 第 1 次床面前室　馬具（135・163）出土状況（西より）
4. 第 1 次床面全景（南より）
5. 第 1 次床面（北より）
6. 第 1 次床面（南より）
PL.9
1. 石室床面東側半裁状況（南より）
2. 前室床面東側半裁状況（東より）
3. 石室床面形成面全景（南より）
4. 仕切り石（北より）
5. 仕切り石（南より）
6. 石室基底石全景（南東より）
7. 石室基底石全景（北西より）
PL.10
1. 石室基底石・墓坑・周溝全景（南より）
2. 石室基底石　奥壁側（東より）
3. 奥壁裏込め（南より）
4. 石室基底石抜取り痕全景（南より）
5. 完掘全景（南より）
PL.11 ～ 29
出土遺物

第１章　調査経緯と経過

第１節　発掘調査の経緯と経過

調査経緯

平成元年、岩佐平十氏（以下、事業者とする。）は、静岡県富士市伝法字東平 2329 番 1 外 2 筆において貸事務所の建設工事を計画したため、土地利用対策委員会（都市計画課）に土地利用計画申請書を提出した。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「東平遺跡」に該当することから、事業者は平成元年 11 月 9 日、文化財保護法第 57 条の 2 第 1 項の規定に基づき、文化庁長官に「埋蔵文化財発掘の届出について」を提出した。平成元年11月13日、富士市教育委員会（以下、市教委とする。）では、届出を静岡県教育委員会教育長（以下、県教委とする。）に進達するとともに、平成元年 11 月 14 日、文化財保護法第 98 条の 2 第 1 項の規定に基づき、「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を提出した。その後、県教委より事業者に対して市教委と協議し、工事着手前に発掘調査を実施するように通知があった。

調査は平成元年 11 月 15 日から開始し、12 月 29 日に終了した。確認調査からそのまま記録保存を目的とした本発掘調査に移行しており、確認調査と本発掘調査の区別が明確ではないが、トレンチ調査を行っていた 11 月 20 日までを確認調査、石室発見を契機としたトレンチの平面的拡張を行なった 11 月 21 日から 12 月 29 日までを本発掘調査としておく。

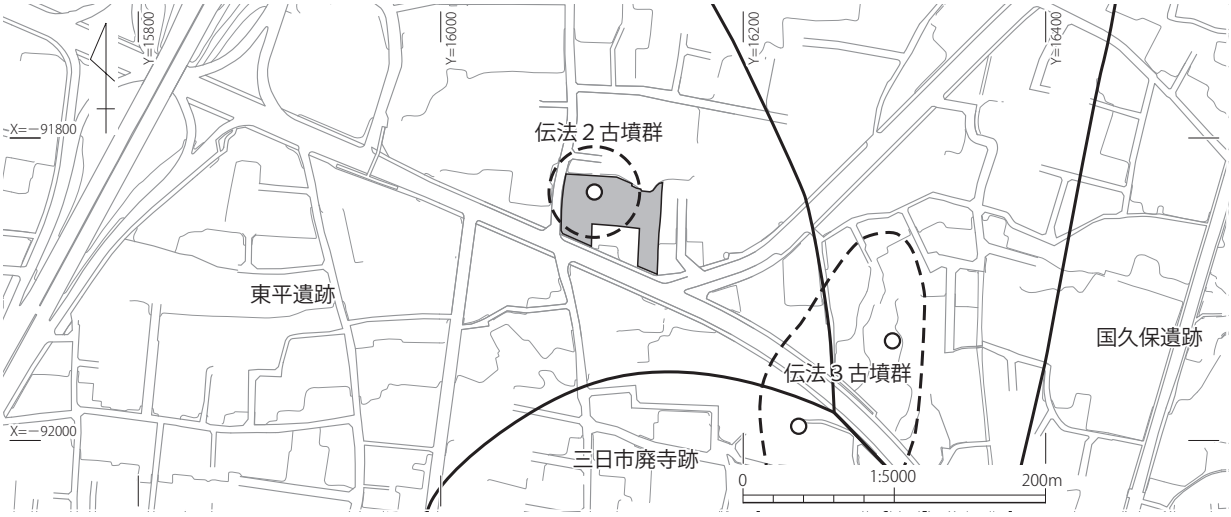
幅 2m 程度のトレンチを 4 本設定し、掘削を行なった結果、新規発見の古墳 1 基（東平第 1 号墳）と奈良・平安時代の竪穴建物跡を検出した。記録保存を目的とした本発掘調査は、新規発見の古墳部分に限って行なわれ、竪穴建物跡については現地に保存されている可能性が高い。

調査体制

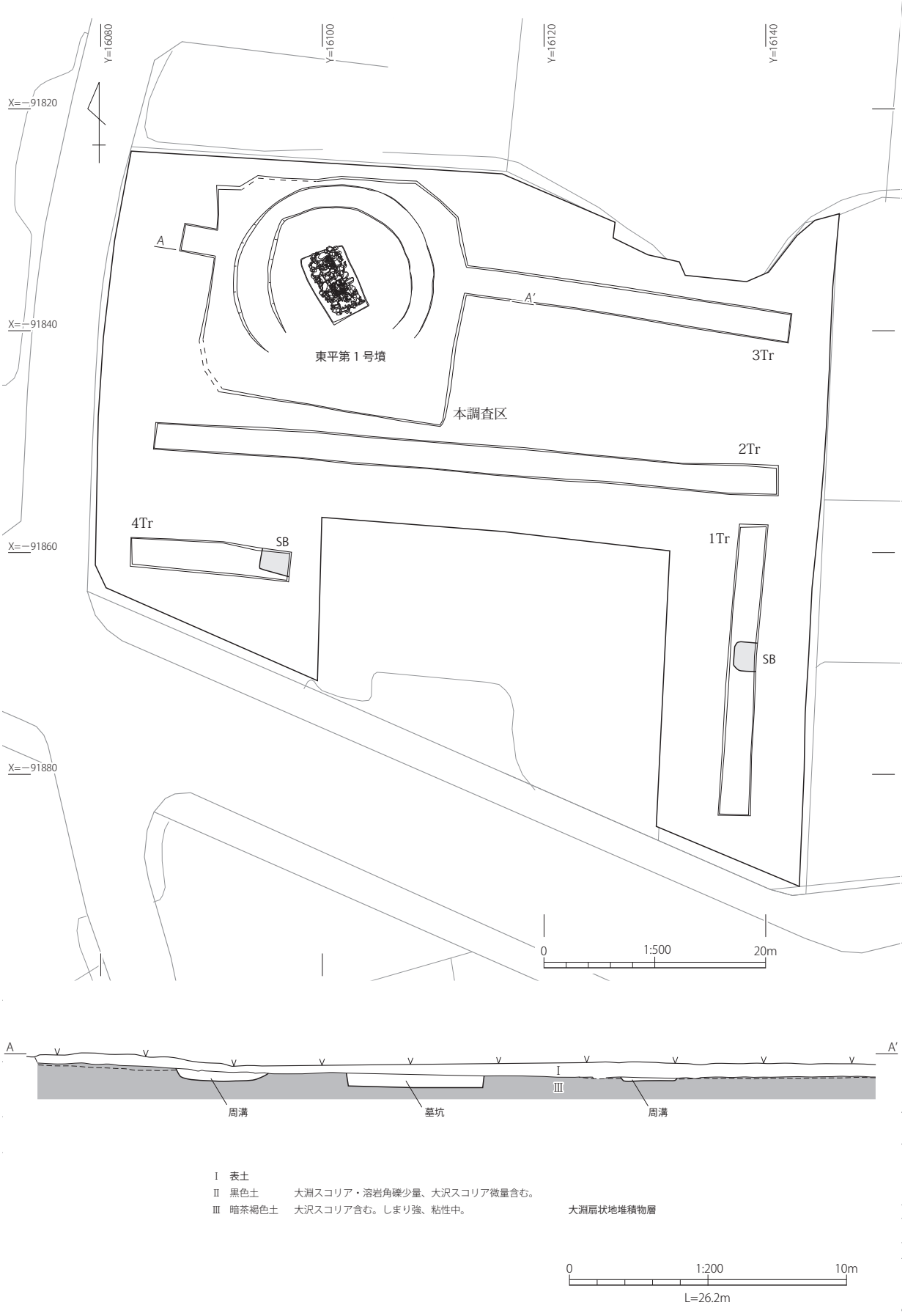
本発掘調査は以下の体制で実施した。

【平成元年度】

調査主体者	富士市教育委員会	教育長	山本　厚
		教育次長	伊藤　輝英
	文化体育課	課長	小長谷秀夫
		課長補佐	渡邉　誠
	文化振興係	係長	杉本　篤
		主事	宮本　眞悟
		主事	平林　将信
		主事	渡邉　友子
		主事	渡井　義彦
		主事	久松　義昭



第１図　調査地位置図



第２図　確認調査トレンチおよび本発掘調査区配置図

調査経過

発掘調査は平成元年 11 月 15 日から平成元年 12 月 29 日まで実施した。調査終了後、東平第 1 号墳は消滅し、周囲の竪穴建物跡などは現地に保存されたものと考えられる。

以下、概要報告の調査経過を抜粋して再録する。

11 月 15 日（水） 曇

調査を開始する。第 1 トレンチ耕作土中及び下層の大淵スコリア包含黒色土層中から土師器・須恵器片が多量に出土する。

11 月 17 日（金） 曇のち雨

第 1 トレンチを精査、律令時代に比定される須恵器を伴った竪穴住居址の平面プランを 1 軒検出する。第 3 トレンチ西側部分の耕作土中から、拳大から人頭大の地山溶岩礫が多量に出土する。その西側で、大淵スコリアと大沢スコリアを包含する黒色土層の厚い堆積を検出し、同層中から古墳時代後期に比定される須恵器甕破片・同長頸坩破片が多量に出土する。

11 月 20 日（月） 曇

第 4 トレンチを精査、律令時代に比定される須恵器を伴った竪穴住居址の平面プランを 1 軒検出する。第 3 トレンチ西側から平面方形に組まれた溶岩礫群の存在を確認する。

11 月 21 日（火） 晴

第 3 トレンチ溶岩礫群北隅黒色土中から金銅製円形飾金具が 1 点出土し、礫群中央部黒色土中から、大刀 3 点と丁字形利器 1 点が出土する。

この時点で当該溶岩礫群が古墳の石室残存部であることを確定し、石室を中心に 15m　15m の範囲で重機による表土除去を行なう。

11 月 22 日（水） 晴

開口部推定地点前方にサブトレンチを設定し、右側壁を検出する。更に、石室中央部推定位置にサブトレンチを設定し掘り下げたところ、左側壁寄りの黒色土中に、銅製杓子型壺鐙が確認された。

11 月 24 日（金） 晴

石室実測用遣り方を設定する。石室北西側に周溝確認用サブトレンチを設定。

11 月 27 日（月） 晴

浜松市博物館の川江氏に調査指導を受ける。県教育委員会文化課の植松・佐藤両氏並びに沼津市歴史民俗資料館の瀬川氏が到着し、指導･助言を受ける。

床面を検出し、石室が仕切石により前室と後室に分かれることを確認する。

11 月 29 日（水） 晴

石室の全体写真を撮影する。

12 月 4 日（月） 晴

報道関係者向けの現場説明会を行なう（SBS 他 8 社来訪）。

12 月 6 日（水） 晴

礫床を 4 分の 1 カットしたところ、下面から礫床及び棺座が検出され、下面礫床上から、円頭柄頭 1 点、金銅製鉈尾 1 点が出土。

12 月 9 日（土） 晴

周溝確認のため重機により発掘区域の拡張。

12 月 11 日（月） 晴

前室側の棺座を除去したところ、下面より鉸具及び金銅製馬具飾金具が出土。

12 月 12 日（火） 晴

下面礫床を主軸方向に半裁し、石室掘り方上面を検出。周溝北側部分を検出。

12 月 15 日（金） 晴

墓前域・墓道検出のため開口部前方にサブトレンチを 4 ヵ所設定し掘り下げるが検出できず。東側周溝を検出する。

12 月 19 日（火） 晴

根石を残した状態で全体写真を撮影後、クレーン車により根石を撤去し､根石下面をレベリングする。

12 月 20 日（水） 晴

古墳全体を写真撮影し、調査を終了する。

12 月 29 日（金） 晴

重機により埋め戻し作業を行なう。

第2節　整理作業の経緯と経過

基礎整理作業

東平第1号墳の発掘調査終了後、富士市負担により基礎整理作業を実施した。基礎整理作業では、遺物の洗浄、注記、台帳作成や図面整理を行った。また、鉄製品の一部は財団法人山梨文化財研究所に委託し、保存処理を行った。これらの成果をまとめ、平成2年6月29日、『東平第1号墳発掘調査概報』を刊行した。

報告書作成事業

平成2年の概要報告書刊行以降、県内外の研究者から正式な発掘調査報告書の刊行が待たれていた。平成2年3月31日に発行された『静岡県史』資料編2　考古二には、巻頭の口絵において調査写真が掲載されるとともに、調査を担当した平林将信により調査成果が報告された。さらに平成4年3月31日発行の『静岡県史』資料編3　考古三には、川江秀孝により、銀象嵌をもつ大刀2、轡2、壺鐙2、飾金具4、鉸具1、刀子1、鉄鏃7、そして、丁字形利器の図面が掲載され、その重要性が広く知られることとなった。

しかし、開発行為に伴う発掘調査件数の多さから、当時の富士市では、報告書刊行にいたる整理作業が追いつかない状況であったが、平成27年度、東平1号墳と同じ伝法古墳群の古墳である6世紀後半の中原4号墳の報告書を刊行する過程で、東平1号墳の調査成果を報告することが急務であるとの結論に至り、平成28年度より二カ年計画で報告書を刊行することとなった。

平成28年度は、基本的に出土鉄製品の再保存処理を行なうのみで、報告書刊行に向けた遺物実測などの本格的な作業は、平成29年度に行った。

第3図　『静岡県史』資料編2考古二　566・567頁

整理作業体制

報告書刊行に向けた整理作業は以下の体制で行った。

事業主体者

富士市市民部　部　　長 加納　孝則（平成28年度）
　　高野　浩一（平成29年度）
　文化振興課　課　　長 町田しげ美（平成28年度）
　　久保田伸彦（平成29年度）
　文化財担当　統括主幹 久保田伸彦（平成28年度）
　　植松　良夫（平成29年度）
　　主　　幹 石川　武男
　　主　　査 佐藤　祐樹
　　主 事 補 伊藤　愛（平成29年度）

金属製品再保存処理

金属製品については発掘調査終了後の平成元年度に保存処理を行っていたが、改めて処理を行う必要があると考え、『平成28年度国宝重要文化財等保存整備費補助金』の交付を受け、静岡文化財研究所（代表　西尾太加二）に委託し、再保存処理を行った。また、X線撮影については、静岡県埋蔵文化財センター（担当　大森信宏）に依頼した。

写真撮影

金属製品の保存処理や遺物挿図プレートが確定した後、出土遺物の集合写真の撮影や個別写真の撮影を行った。集合写真については西大寺フォト（杉本和樹氏）に撮影を委託し、その他の遺物は佐藤が撮影した。

第2章　立地と環境

第1節　地理的環境

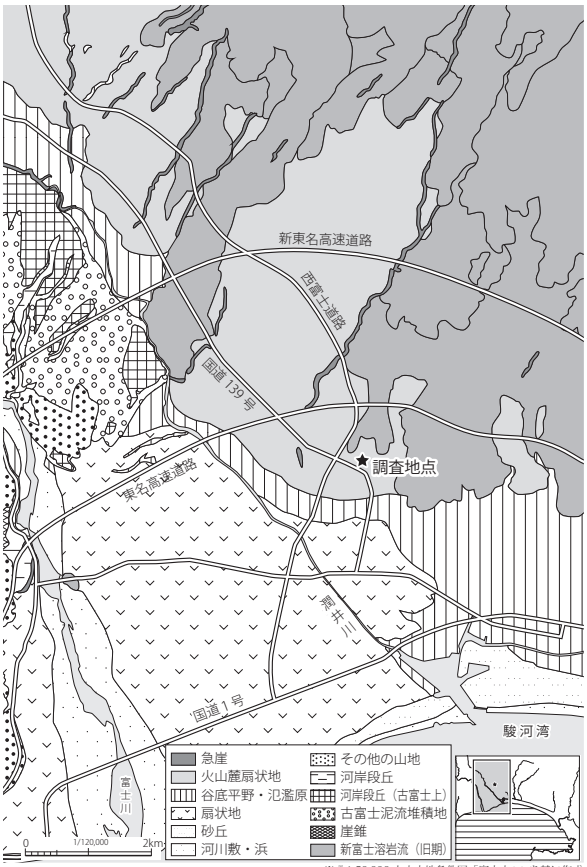
東平第1号墳が所在する富士市は、静岡県の東部に位置する。その地理的環境を概観すると、駿河湾を南に臨み、北には富士山がそびえ、山裾を南西に広げている。西には岩本山を有する星山丘陵と岩淵火山地が、東には既に火山としての活動を停止している愛鷹山が存在する。西方には北から流下する富士川と富士山西麓を源とする潤井川が駿河湾に注ぎ、東方には愛鷹山に源流をもつ須津川や赤淵川、浮島ヶ原低湿地を西流する沼川など、多数の河川が流れる。

こうした環境にある富士市域の地形は、富士山や愛鷹山の火山活動により形成された丘陵地、富士川や潤井川が運搬した土砂の堆積により形成された沖積平野、河川の放出砂礫が駿河湾の沿岸流や波浪によって運搬され形成された田子浦砂丘、砂丘の内側につくられた湖沼に沖積層が堆積して発達した浮島ヶ原低湿地など、変化に富んだ様相をみせている。

地形の基盤のひとつである富士山の噴火活動は、小御岳火山の噴火（数十万年前）に始まり、古富士火山（8万年～1万6千年前）、新富士火山（1万4千年前～現在）と大きく3期に分けられる。不透水性の古富士泥流の上に、透水性の新富士火山溶岩流が広がるため、新富士火山溶岩流の末端には数多くの湧水地が存在する。また、浮島ヶ原低湿地は、内湾交通に適した土地であった。

東平第1号墳は、潤井川の北東岸、富士山南麓に広がる大淵扇状地の緩斜面上、標高約25mに位置する。本墳の800mほど西には伝法沢川が流れ、潤井川から分岐した小潤井川に合流し、駿河湾へと至る。本墳近くの伝法沢川沿いには伊勢塚古墳や西平第1～6号墳が、北へ遡ると横沢古墳や中原第4号墳が築かれている。

第4図　駿河湾上空から富士市を望む



第5図　周辺地形図

第2節　歴史的環境

駿河東部の古墳

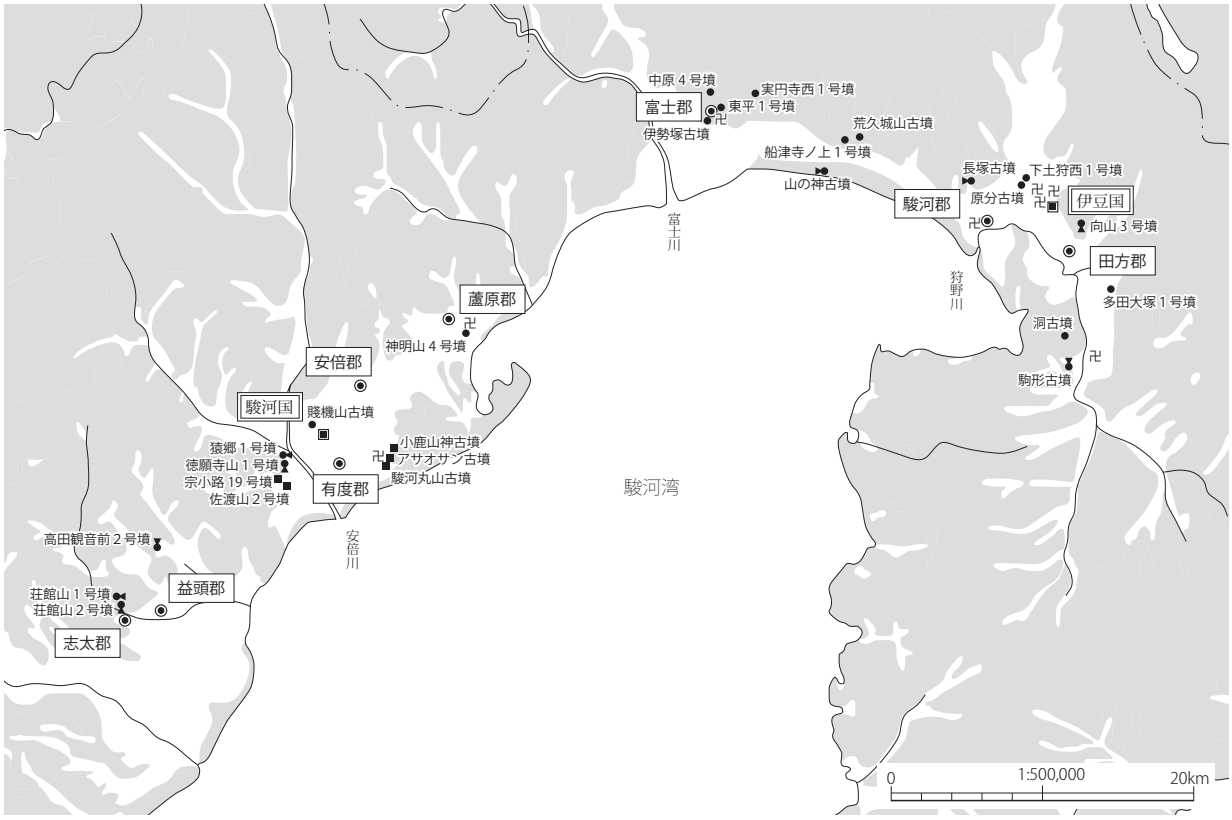
駿河東部（富士川流域以東、黄瀬川以西）に最初に築かれたとされる古墳は、愛鷹山南東麓に位置する高尾山古墳である。高尾山古墳は、古墳時代前期前半に築かれたとみられる前方後方墳であり、東海西部系・北陸系・近江系などの外来系の土器が出土していることから、東日本の諸地域との交流を基盤とする首長墓と位置づけられている。高尾山古墳に続く前期古墳としては、田子浦砂丘上の神明塚古墳（前方後円墳）、富士市域の愛鷹山南西麓に位置する浅間古墳（前方後方墳）、東坂古墳（前方後円墳）など、大型の首長墓が築かれている。

中期には、愛鷹山南西麓で琴平古墳（円墳）、薬師塚古墳（円墳）、ふくべ塚古墳（前方後円墳）などが首長墓として築かれたようだが、その実態は不明瞭である。

後期に入ると、愛鷹山南西麓には天神塚古墳（TK47 ～ MT15 併行、前方後円墳？）が築かれ、それに続く首長墓とみられる寺屋敷古墳（前方後円墳？）では埴輪が採用されるようになる。愛鷹山南東麓の長塚古墳（前方後円墳）、田子浦砂丘上の山の神古墳（前方後円墳）でも埴輪が確認されており、同時期に位置づけられる。

また、富士山南麓の潤井川流域が新たに古墳の造営地となり、その初めとして伊勢塚古墳（TK47 併行、円墳？）が築かれる。伊勢塚古墳は、沢東 A 遺跡に認められる潤井川流域の本格的な開発をおこない、倭王権との関連を有する集団の首長墓と位置づけられている。

後期後半以降の駿河東部では、古墳の埋葬施設として、竪穴状の墓坑をもち、石室床面が周囲の地面より低くなるために開口部に段をもつ、無袖の横穴式石室がつくられるようになる。この有段無袖石室は、潤井川流域につくられた中原第 4 号墳を初現とし、被葬者の階層を問わず、7 世紀を通じて構築し続けられる。石室の特徴からは、倭王権との直接的



第６図　東駿河の後期古墳と国衙・郡衙遺跡

関連は想定し難いが、原分古墳のように、装飾大刀や馬具など、質・量ともに豊富な副葬品を有する古墳も多く、当地域と王権とが深い関わりを有していたと考えられる。

潤井川流域の遺跡

東平第 1 号墳が位置する潤井川北東岸の大淵扇状地上では、旧石器時代・縄文時代・弥生時代の遺跡はほとんど確認されていない。

古墳時代については、沢東 A 遺跡第 3 次調査地点や川窪遺跡第 1 地区において前期の遺物が確認されているが、確実な集落跡（建物跡）は沢東 A 遺跡で認められる中期後半（TK208 型式併行期）からである。沢東 A 遺跡は古墳時代後期から 7 世紀にかけて大規模に発展し、9 世紀初頭ごろまで集落が営まれ続ける。

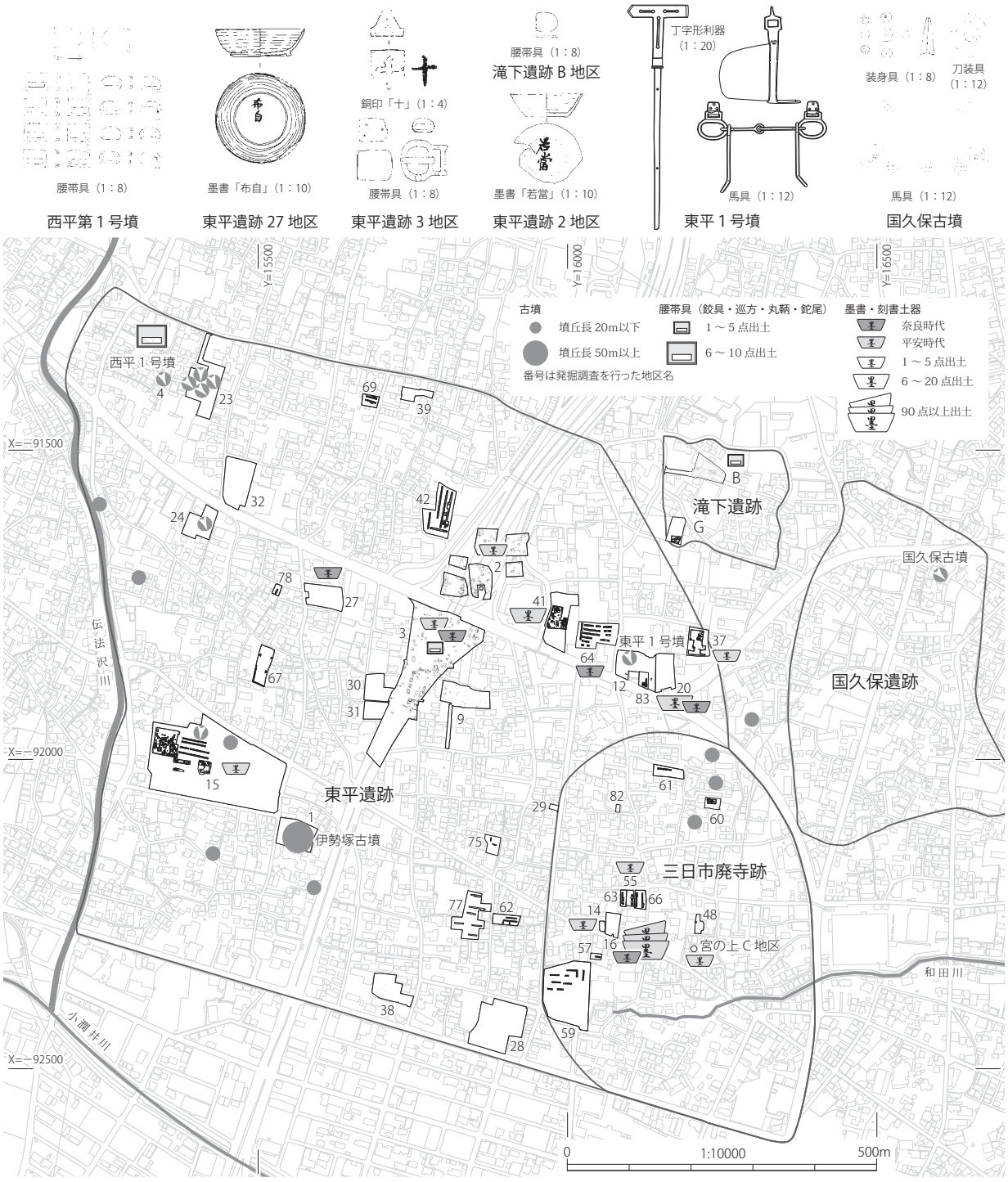
沢東 A 遺跡から約 850m 南東に位置する中桁・中ノ坪遺跡でも、中期から集落の形成がみとめられ、8 世紀代に空白期をおくものの、10 世紀前葉（O-53 窯式期）頃まで継続する。

中桁・中ノ坪遺跡から 400m ほど東に、東西 1000m、南北 1000m ほどの範囲に広がる東平遺跡においては、古墳時代後期から集落がみとめられる。沢東 A 遺跡や中桁・中ノ坪遺跡と相対するように、8 世紀から富士郡衙の中枢とみられる大規模集落と寺院（三日市廃寺跡）が営まれるが、10 世紀初頭には衰退するようである。

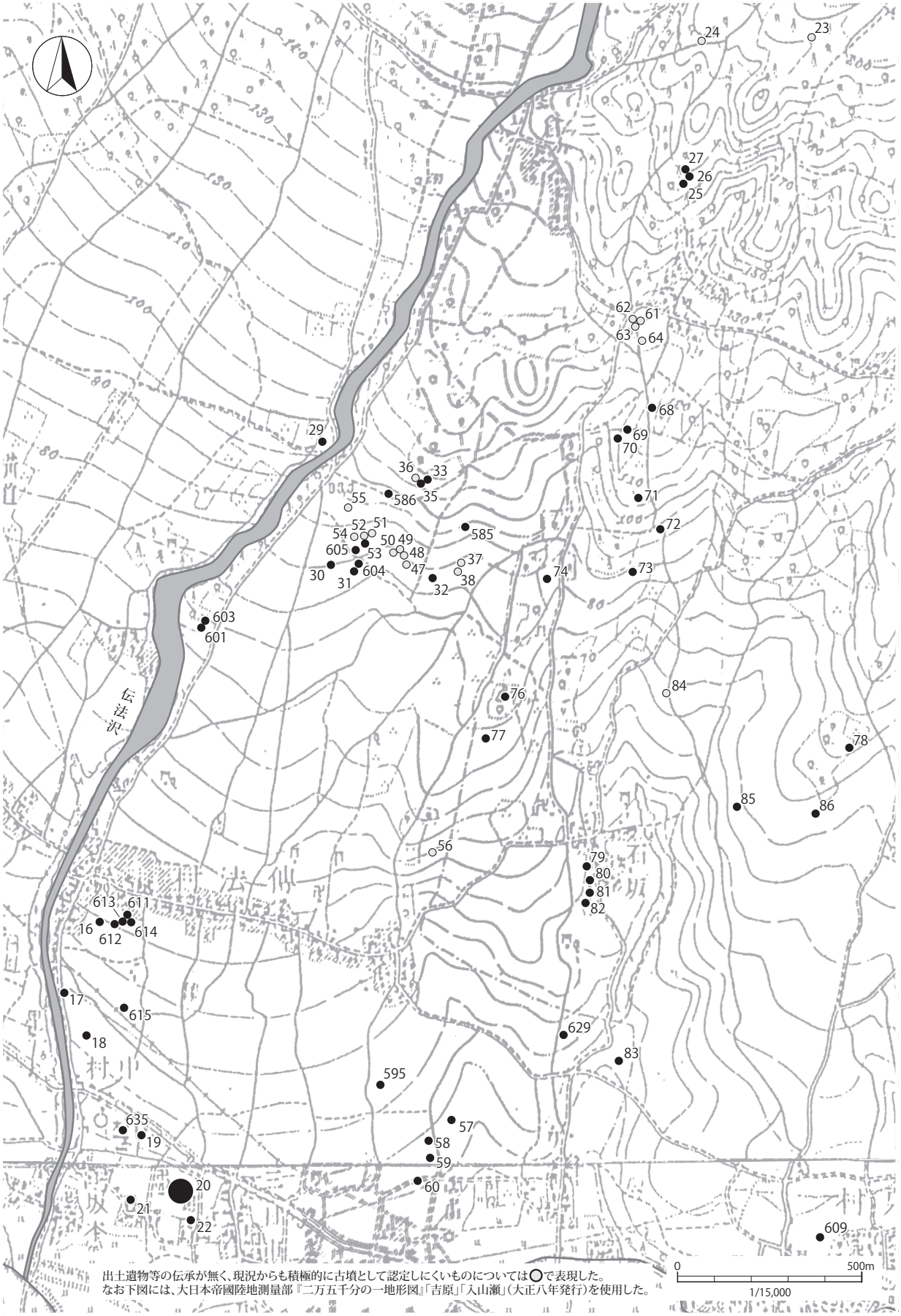
沢東 A 遺跡の東に位置する沢東 B 遺跡では奈良時代の集落跡が確認されている。

先述の通り、この地域に古墳が築かれ始めるのは、古墳時代後期初頭（6 世紀初頭）頃からである。まず、伝法沢川と小潤井川が合流する地点の北東約 450m に、径 54m を測る首長墓級の伊勢塚古墳（TK47 ～ MT15）が築造される。これ以降、中原第 4 号墳（TK43）、横沢古墳（TK209）、中原第 3 号墳（TK209）、中村上第 1 号墳（TK209 ～飛鳥Ⅰ）といった 6 世紀～ 7 世紀初頭の古墳が伝法沢川流域に築かれる。しかし、東平第 1 号墳や西平第 1 ～ 6 号墳、国久保古墳、片倉第 1 号墳など、7 世紀～ 8 世紀前葉に位置付けられる古墳は、伝法沢川東岸の伝法・石坂地区に広く分布して築かれるようになる。

第 7 図　潤井川東岸遺跡分布図



第8図　東平遺跡内の古墳と官衙関連遺物



第9図　伝法古墳群分布図

第 1 表　伝法古墳群一覧表

古墳番号	古墳名	現状	標高（m）	墳形	墳長（m）	内部主体	開口方向	築造年代	主な出土遺物	備考	参考文献
16	伝法 A- 第 35 号墳 西平第 1 号墳	存在	37	-	-	横穴式石室、段構造？ （残存長 3.2m、 幅 1.3m、床面 1 面）	南南東	8c 前葉	蕨手刀 1・直刀 1・金銅製方頭柄頭 1・鉄製喰出鍔 2・足金具 3・責金具 1・金銅製鞘口金具 1・鉄製切羽 1・銅製鋳帯金具（巡方 4・丸鞆 4・鉈尾 1）・須恵器（瓶 2・長頸瓶 1・坏身 1）		8 11 12 18
17	伝法 A- 第 34 号墳 西ノ平古墳	消滅	29	-	-	（無袖形横穴式石室）	-	-	直刀・直刀装具・鉄鏃・金環		3 12
18	伝法 A- 第 5 号墳 兜塚	消滅	26	-	-	-	-	-	（伝）大刀身・甲冑残片・須恵器片		2 12
19	伝法 A- 第 2 号墳 コンニャク稲荷塚	存在	20	円墳	15	（横穴式石室 ・組合式箱形石棺）	-	（6c 後半 ～ 7c 前半）	刀子・銀環・須恵器片（横瓶）		2 12
20	伝法 A- 第 1 号墳 伊勢塚古墳	存在	15	円墳 （二段）	54	-	-	（6c 初頭）	円筒埴輪片	盾形周溝？ （幅 7 ～ 8m、 東側で確認） 上段下段とも 斜面に葺石 県指定史跡 （S33.9.2）	1 9 11 12
21	伝法 A- 第 3 号墳 九郎林塚	消滅	14	円墳	-	（竪穴式石室、 長 3m、幅 1m）	-	-	大刀身・鍍金轡・鍍金鏡板・須恵器（坩）		2 12
22	伝法 A- 第 4 号墳 鏡塚	消滅	13	円墳	-	-	-	-	（伝）鏡 1		2 12
23	片倉第 4 号墳	存在	195	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
24	片倉第 5 号墳	存在	190	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
25	片倉第 1 号墳	存在	170	-	-	無袖形横穴式石室、段構造 （残存長 4.5m、幅 1.3m、 高さ 1.7m）	南南東	7c 後葉	土師器（てづくね坏数点）		10 11 12
26	片倉第 2 号墳	存在	170	-	-	-	-	-			12
27	片倉第 3 号墳	存在	170	-	-	-	-	-	須恵器片（瓶）		12
29	横沢古墳	消滅	97	円墳	16	無袖形横穴式石室、段構造（改修あり） 第 I 期 : 全長 8.7m、幅 2.3m、床面 1 面（第 3） 第 II 期 : 全長 7.8m、幅 2.3m、床面 2 面（第 1・第 2）	南南東	6c 後半	第 I 期周溝 : 須恵器片（坏身） 第 I 期前庭部 : 須恵器（坏身・坏蓋・無蓋高坏・有蓋高坏） 第 II 期周溝 : 須恵器（大甕）・鉄鏃 第 II 期前庭部 : 土師器（坏）・須恵器（坏身・坏蓋・長頸壺） 第 1 床面 : 骨片 第 2 床面 : 須恵器（坏身蓋 6 セット）・直刀・鉄鏃・刀子 第 3 床面 : 須恵器（提瓶・瓶）・鉄鏃・直刀・刀子・鉸具・矩形立聞式轡・金銅製鈴 5 点・金銅製花形飾鋲・木製金箔製品	周溝 2 本（第 I 期・第 II 期、開口部を除く 2/3 周） 葺石	6 11 12
30	中原第 1 号墳	消滅	83	（円墳）	-	無袖形横穴式石室、段構造（残存長 3m、幅 0.95m）	南南東	（8c 前葉）	玉類（瑪瑙製勾玉・石英製勾玉・碧玉製管玉・琥珀製棗玉・水晶製切子玉・蛇紋岩製臼玉・翡翠製臼玉・ガラス製丸玉・蛇紋岩製丸玉・ガラス製小玉・蛇紋岩製小玉）・刀子・須恵器片（大甕・平瓶）		4 11 12
31	中原第 2 号墳	消滅	78	-	-	無袖形横穴式石室、段構造（残存長 2.8m、幅 1.2m）	南南東	（8c 前葉）	須恵器片（平瓶）		5 11 12
32	土手内第 1 号墳	消滅	80	-	-	無袖形横穴式石室、段構造（全長 6.0m、幅 1.3m、床面 2 面）	南南東	7c 末 ～ 8c 初頭	追葬時床面 : 鉄鏃 6 築造時床面 : 須恵器（長頸瓶 1・長頸壺 1・瓶 1）・土師器（坏 3）・ガラス製小玉 109・鉄鏃 4		7 11 12
33	土手内第 2 号墳	存在	104	-	（6）	無袖形横穴式石室、段構造（全長 5.4m、幅 1.0m）	南南東	-			12
35	土手内第 4 号墳	存在	104		（9.5）	（横穴式石室）	（南南東）	-			12
36	土手内第 5 号墳	存在	105	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
37	土手内第 6 号墳	存在	82	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
38	土手内第 7 号墳	存在	80	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
47	土手内第 16 号墳	存在	84	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
48	土手内第 17 号墳	存在	86	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
49	土手内第 18 号墳	存在	89	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
50	土手内第 19 号墳	存在	87	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
51	土手内第 20 号墳	存在	91	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
52	土手内第 21 号墳	存在	88	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
53	土手内第 22 号墳	存在	84	-	-	横穴式石室（内法長 3 ～ 4m、幅 1m）	南南東				12
54	土手内第 23 号墳	存在	88	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
55	土手内第 24 号墳	存在	94	-	-	墳丘状の地膨らみ	-	-			12
56	土手内第 25 号墳	存在	50	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
57	伝法 B- 第 7 号墳	消滅	18	円墳	20	（横穴式石室）	-	（7c 末 ～ 8c 中葉）	須恵器片		2 12
58	伝法 B- 第 8 号墳	消滅	22	円墳	-	（箱形石棺墳）	-	（7c 末 ～ 8c 中葉）	須恵器片 （伝）大刀身		2 12
59	伝法 B- 第 9 号墳	消滅	17	円墳	-	（箱形石棺墳）	-	（7c 末 ～ 8c 中葉）	（伝）直刀残片・須恵器片		2 12
60	伝法 B- 第 10 号墳	消滅	15	円墳	-	（箱形石棺墳）	-	（7c 末 ～ 8c 中葉）	（伝）直刀残片・須恵器片		2 12
61	八ヶ窪第 1 号墳	存在	129	-	-	溶岩の自然石露出	-	-	-		12
62	八ヶ窪第 2 号墳	存在	131	-	-	溶岩の自然石露出	-	-	-		12

古墳番号	古墳名	現状	標高（m）	墳形	墳長（m）	内部主体	開口方向	築造年代	主な出土遺物	備考	参考文献
63	八ヶ窪第 3 号墳	存在	130	-	-	溶岩の自然石露出	-	-	-		12
64	八ヶ窪第 4 号墳	存在	124	-	-	溶岩の自然石露出	-	-	-		12
68	石坂 C- 第 11 号墳	消滅	110	円墳	8	（横穴式石室）	-	-	-		2.12
69	石坂 C- 第 25 号墳 二タ子塚第 1 号墳	存在	110	円墳	（13）	無袖形横穴式石室 （全長 7.1m、幅 1.4m）	南南東	（7c 中葉）	-		12
70	石坂 C- 第 26 号墳 二タ子塚第 2 号墳	存在	108	円墳	（14）	無袖形横穴式石室 （全長 9.0m、幅 1.4m）	南南東	（7c 前半）	須恵器片（坏・大甕）	周溝（幅 6m、北側で確認）	12 24
71	石坂 C- 第 12 号墳	消滅	102	円墳	-	（横穴式石室、組合式箱形石棺）	-	-	（伝）大刀身残片・須恵器片		2 12
72	石坂 C- 第 13 号墳	消滅	92	円墳	-	（横穴式石室）	-	-	（伝）須恵器片		2.12
73	石坂 C- 第 14 号墳	消滅	78	円墳	-	（横穴式石室）	-	-	（伝）須恵器片		2.12
74	石坂 C- 第 15 号墳	消滅	84	円墳	10	-	-	-			2.12
76	石坂 C- 第 16 号墳 カネ山塚	存在	73	円墳	-	（横穴式石室）	-	-	灰釉陶器片 （伝）直刀・須恵器（坩）	『吉原市の古墳』では石坂 C- 第 17 号墳	2 12
77	石坂 C- 第 17 号墳	消滅	65	-	-	-	-	-	灰釉陶器片	『吉原市の古墳』では石坂 C- 第 16 号墳	2 12
78	石坂 C- 第 23 号墳	消滅	76	円墳	-	（無袖形横穴式石室）	-	-	（伝）かわらけ（須恵器か土師器 ?）		2.12
79	石坂 C- 第 18 号墳	消滅	41	-	-	-	-	-	須恵器片		2.12
80	石坂 C- 第 19 号墳	消滅	39	-	-	-	-	-	須恵器片		2.12
81	石坂 C- 第 20 号墳	消滅	39	-	-	-	-	-	須恵器片		2.12
82	石坂 C- 第 21 号墳	消滅	39	-	-	-	-	-	須恵器片		2.12
83	石坂 C- 第 22 号墳	消滅	20	円墳	-	-	-	-	（伝）直刀残片・須恵器片		2.12
84	桑原古墳	存在	60	-	-	一部露出	-	-			12
85	汁谷古墳	消滅	66	-	-	-	-	-	須恵器		12
86	荒久古墳	消滅	68	-	-	無袖形横穴式石室 （全長 6.2m、幅 1.8m）	南南東	（6c 末～ 7c 中葉）	須恵器片（坏身・坏蓋・甕・長頸坩 ?）・土師器破片（甕）・刀子・鉄片		12 14
585	土手内第 26 号墳	存在	92	-	（10）	良好に残存	南南東	-	須恵器片		12
586	土手内第 27 号墳	存在	101	-	-	側壁 2 段残存（全長 4.7m、幅 1.0m）	南東	-	須恵器片（甕・坏蓋）・土師器片（てづくね坏）		12
595	東平第 1 号墳	消滅	25	円墳	13	無袖形横穴式石室、段構造（全長 5.12m、幅 1.44m、床面 3 面）	南南東	（7c 前葉）	第 1 次床面：武器（鉄鏃）、馬具（鉸具・辻金具）、農工具（刀子） 第 3 次床面：武器（大刀 3・丁字形利器 1・弓金具 1・鉄鏃）、馬具（轡 2・壺鐙 2・鉸具・杏葉？・辻金具・飾金具）、農工具（刀子） 周溝：須恵器（坏蓋・坏身・壺・瓶・甕）	周溝（幅 2.0 ~3.3m、南側以外で確認）	13 17 本書
601	中原第 3 号墳	消滅	72	円墳	7.5	無袖形横穴式石室、段構造（全長 4.5m、幅 0.75m、床面 2 面）	南	（6c 末～ 7c 初頭）	耳環 2、武器（大刀 1・小刀 1・鉄鏃 31 以上）、農工具（刀子 4 以上）、須恵器（提瓶 1）	周溝（幅 1.5 ～ 2m、全周）	15 25
603	中原第 4 号墳	消滅	73	円墳	11	無袖形横穴式石室、段構造（全長 5.6m、幅 1.1m）	南南西	6c 後半	玉（勾玉 12・管玉 22・切子玉 24・棗玉 6・臼玉 8・丸玉 115・小玉 232）、武器（大刀 2・剣 1・鉄鏃 131 以上）、農工具（砥石 2・鎌 3 以上・鍬鋤先 4・刀子 10 以上・斧 3・鉈 5・鑿 1）、鍛冶具・生産用具等（鉄鉗 1・鑷子 1・針 14）、馬具（轡 3・鐙吊金具 2・帯飾金具 6・鉈留金具 2・雲珠？ 1・鉸具 4）、須恵器（坏蓋 3・坏身 9・瓶 6・短頸壺 3・把手付碗 1・提瓶 5・横瓶 2）、土師器（坏 1）	周溝（幅 1.5 ～ 1.7m、全周）	15 21 25
604	中原第 5 号墳	消滅	81	円墳	9	横穴式石室（残存長 2.0m、幅 1.3m）	南南東	-	武器（鉄鏃 1）、農工具（刀子 1）、須恵器（壺 1・坏蓋 1）、土師器（坏 1）		25
605	中原第 6 号墳	消滅	83	円墳	10	無袖形横穴式石室、段構造（全長 5m、幅 1.2m）	南南東	-	武器（大刀身片・鏃・鉄鏃 11 以上）、農工具（刀子 2 以上）、馬具（帯飾金具 2・鉸具 1）、須恵器（壺 1）	周溝（幅 2m、南側除く）	25
609	今泉 6 丁目第 1 号墳	消滅	25	-	-	無袖形横穴式石室、段構造（推定全長 4.4m 以上、幅 1.4m）	南南東	7c ？	耳環・須恵器		16
611	西平第 2 号墳	存在	38	-	-	無袖形横穴式石室 （残存長 2.2m、幅 0.65m、床面 1 面）	南	（8c 前半）	-		20
612	西平第 3 号墳	消滅	37	-	-	無袖形横穴式石室（残存長 1.5m、幅 0.6m、床面 1 面）	南東	（8c 前半）	-		20
613	西平第 4 号墳	消滅	37	-	-	無袖形横穴式石室（残存長 4m、幅 0.7m、床面 1 面）	南東	（8c 前半）	須恵器片（長頸瓶・坏身・甕）		20
614	西平第 5 号墳	消滅	38	-	-	無袖形横穴式石室（推定長 2m、幅 0.6m、床面 1 面）	南南東	（8c 前半）	-		20
615	西平第 6 号墳	消滅	28	-	-	無袖形横穴式石室（残存長 3.2m、幅 0.9m、床面 1 面）	南南東	（7c 後半～末）	-		19
629	国久保古墳	存在	25	円墳	（8）	無袖形横穴式石室、段構造（全長 4.7m、幅 1.2m）	南東	7c 前葉～中葉	銀装大刀柄頭片・鵜目金具 2・鉄製八窓鍔 1・大刀身茎部片・鉄鏃・鉸具造立聞式環状鏡板付轡 1・玉類（ガラス製雁木玉 1・水晶製切子玉 2・珪化木製丸玉 2・ガラス製丸玉 26）・耳環 1・鉄鐔 1・須恵器片（坏）	周溝（幅 1.2m）	23
635	中村上第 1 号墳	消滅	18	-	-	無袖形横穴式石室、段構造（残存長 4.8m、幅 1.3m、床面 1 面）	南南西	7c 前葉～中葉	須恵器（フラスコ形長頸瓶 1・提瓶 1）・鉄鏃 3・鉄製刀子 3・銅製耳環 1		22

参考文献

藤村 翔　2011「伝法古墳群の概要」『平成 13 年度　富士市内遺跡・伝法 国久保古墳　埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会

第 1 表の参考文献

1　後藤 守一ほか　1958「第四　伊勢塚古墳」『吉原市の古墳』吉原市教育委員会
2　中野 国雄　1958「第五　吉原市域の古墳」『吉原市の古墳』吉原市教育委員会
3　中野 国男　1972「第一章第四節 (4) 伝法･石坂古墳群」『吉原市史　上巻』 富士市
4　及川 司　1981「古墳時代の調査　第 2 章　中原 1 号墳」『西富士道路（富士地区）岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書　横沢古墳・中原 1 号墳　伝法遺跡群（伝法 A ～ E 地区）　天間地区』 富士市教育委員会
5　及川 司　1981「Ⅵ -2　中原第 2 号墳」『左富士臨港線埋蔵文化財発掘調査報告　土手内古墳・中原第 2 号墳・中原遺跡』
富士市教育委員会
6　志村 博　1981「古墳時代の調査　第 1 章　横沢古墳」『西富士道路（富士地区）岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書　横沢古墳・中原 1 号墳　伝法遺跡群（伝法 A ～ E 地区）　天間地区』 富士市教育委員会
7　志村 博　1981「Ⅵ -1　土手内古墳」『左富士臨港線埋蔵文化財発掘調査報告　土手内古墳・中原第 2 号墳・中原遺跡』
富士市教育委員会
8　志村 博　1983「西平第 1 号墳緊急発掘調査報告」『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』 富士市教育委員会
9　志村 博　1983「伊勢塚古墳周溝緊急発掘調査報告」『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』 富士市教育委員会
10　志村 博　1983「大渕片倉第 1 号墳石室実測調査報告」『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』 富士市教育委員会
11　渡井 義彦　1984『第 10 回企画展　富士の古墳文化』富士市立博物館
12　渡井 義彦　1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』 富士市教育委員会
13　久松 義昭　1990『東平第 1 号墳発掘調査概報』 富士市教育委員会
14　久松 義明　1991「荒久古墳発掘調査報告」『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書 - 第 2 集 - 』 富士市教育委員会
15　富士市教育委員会　1994『中原第 3 号墳・第 4 号墳　発掘調査概要報告書』
16　富士市教育委員会　1996『舟久保遺跡　第 20・21・33・34 地区発掘調査報告書』
17　富士市教育委員会　2001 『富士市の文化財』
18　志村 博　2003「第Ⅱ章第 1 節　第 4 地区の調査」『東平遺跡発掘調査報告書』 富士市教育委員会
19　志村 博　2003「第Ⅱ章第 3 節　第 24 地区の調査」『東平遺跡発掘調査報告書』 富士市教育委員会
20　前田 勝己　2003「第Ⅱ章第 2 節　第 23 地区の調査」『東平遺跡発掘調査報告書』 富士市教育委員会
21　前田 勝己　2008「駿河東部の事例報告　富士市中原 4 号墳」『静岡県考古学会 2007 年度シンポジウム　東国に伝う横穴式石室 - 駿河東部の無袖式石室を中心に - 』 静岡県考古学会
22　藤村 翔　2010「第Ⅲ章第 1 節－ 1　中村上 1 号墳」『東平遺跡　第 15 地区』 富士市教育委員会
23　藤村 翔　2011「第 3 章　伝法 国久保古墳の調査」『平成 13 年度　富士市内遺跡・伝法 国久保古墳　埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会
24　富士市教育委員会　2015「第 3 章　石坂 2 古墳群の調査」『富士市内遺跡発掘調査報告書　－平成 24・25 年度－』
25　富士市教育委員会　2016『伝法 中原古墳群』

第 3 章　調査成果

1　発見時の状況

東平第 1 号墳は、今回の調査で石室が確認されるまでその存在を知られなかった新規発見の古墳である。

調査地は畑地として使用されており、本墳周辺においては耕作土（I 層）が地表面下 50 ～ 70cm の厚さで存在する。古墳時代から律令期にかけての遺構検出面である黒色土（Ⅱ層）はほとんど失われており、大淵扇状地堆積物層（Ⅲ層）上面で石室基底石と周溝の残存部が検出された。本墳の墳丘および石室の天井部や側壁・奥壁の上部は耕作に伴う掘削により失われたものとみられる。

遺構検出高は標高 25.50m 前後である。

2　墳丘の構造

墳丘　墳丘盛土は耕作に伴う掘削により失われており、しかも、石室の基底石しか残存せず、墳丘盛土の構築と石室構築の関係などについては、まったく明らかとならなかった。

周溝　南側の 4 分の 1 ほどを欠くが、外縁は正円に近い形で、内縁もややいびつながら円形を呈する。検出された周溝の幅は西側で上端 3.30m、下端 2.70m、北側で上端 2.00m、下端 1.80m、東側で上端 2.20m、下端 2.10m を測る。上部が削られているため、深さは最も深い西側で 30cm、東側は 5cm 前後である。周溝断面は浅い台形を呈し、覆土は大淵スコリア・大沢スコリアを含む黒色土の自然堆積と考えられる。周溝底の標高は西側と南東側が低く 25.3m、北側と南西側が高く 25.5m、東側で 25.4m である。周溝の内縁から推定される墳丘規模は南北 13.50m、東西 12.75m を測り、周溝外縁までを含めた古墳全体の規模は南北 17.45m（推定）、東西 18.15m である。周溝外縁の中心が石室の中心とほぼ一致する。

3　周溝出土遺物

周溝からは古墳に関係する須恵器や土師器のほか、周溝埋没段階における周辺からの流れ込みの遺物も多く認められる。また、出土位置が明らかでなく、周溝出土と報告する遺物の中には石室周辺から出土したものも含まれる可能性もあるが、それらを一括して周溝出土の土器として報告する。

須恵器

蓋・坏（第 11 図 1 ～ 3）　1 は坏蓋である。摘蓋と考えられ、口縁部の折り返しが大きい。2 は須恵器の坏もしくは碗とされるものである。底部に回転ヘラケズリの痕跡を残し、底部から屈曲して直線的に口縁部にいたる。7 世紀後半から末頃と考えられる。3 は有台坏身の底部である。腰部は折れ、底部は丸みをもつものの、高台よりは下に出ない。8 世紀前半か。

壺（第 11 図 4 ～ 12）　4 は広口壺である。底部はやや平底で緩やかに弧を描きながら頸部にいたる。外面には格子状のタタキ痕、内面には青海波状のあて具痕が認められる。5 ～ 11 は長頸壺である。5 は体部の破片で、肩部の屈曲はあまり強くないものの明確に認められる。7 から 9 は口縁部である。7 は直線的に立ち上がり、緩やかに屈曲しながら口唇部にいたる。7 世紀末から 8 世紀頃のものが多い。

瓻・瓶（第 11 図 13 ～ 15）　瓻（13）は有台瓻である。高台よりも突出する底部から弧を描きながら片部にいたる。肩部は乾燥工程を置くことで明確な屈曲が認められる。7 世紀末から 8 世紀初頭と考えられる。14 は瓶の底部、15 はフラスコ瓶である。体部はやや横長の球胴状で、肩の張りは弱い。外面には回転ヘラケズリが施される。頸部は外反しながら立ち上がる。7 世紀中ごろと考えられる。

甕（第 11 ～ 12 図 16 ～ 20）　16 から 18 は口縁部の破片である。口唇部は T 字状に張り出す。19・20 は胴部の破片で外面にタタキの痕跡が明瞭に残る。内面はヘラ状工具によるナデが施される。

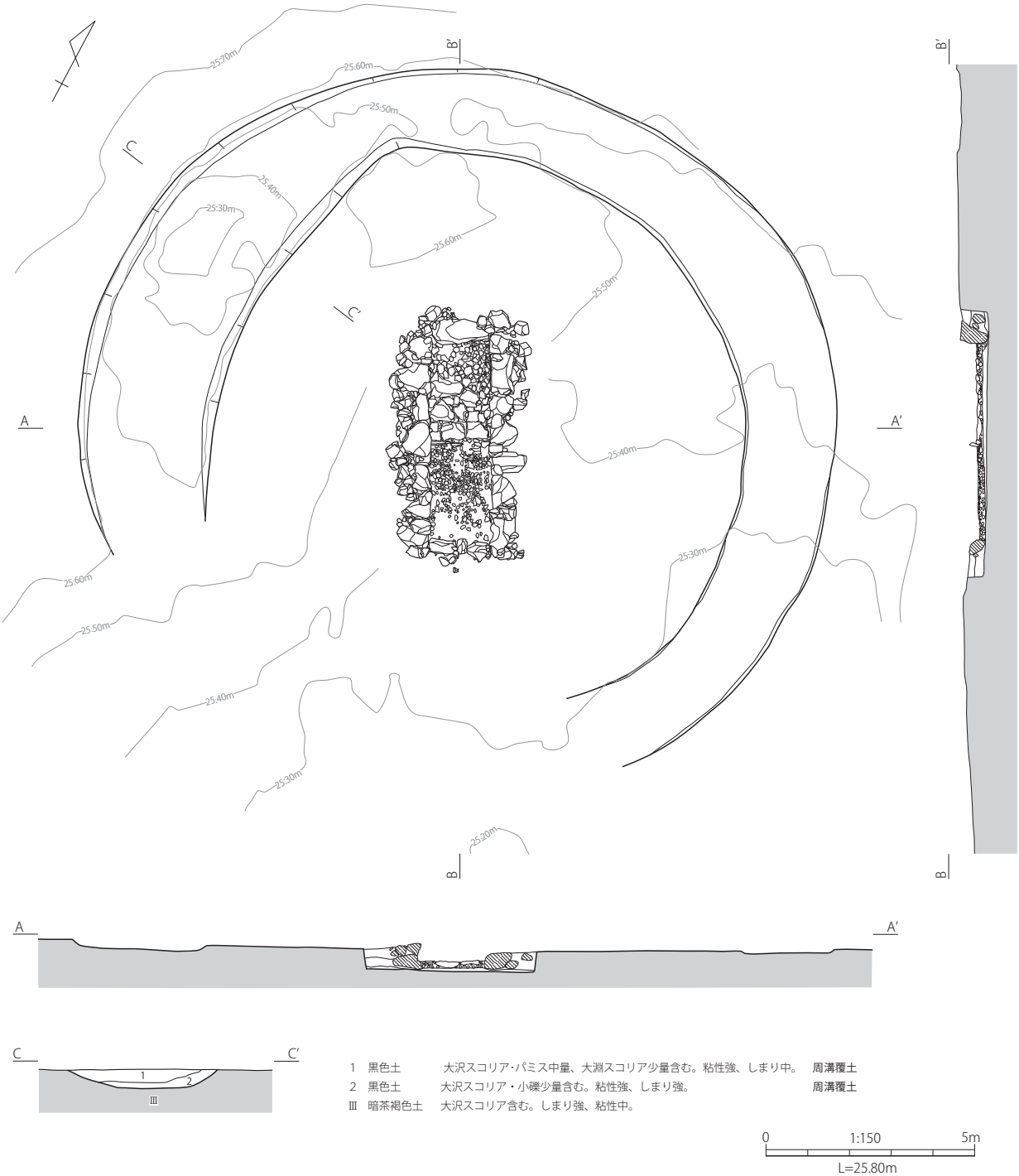
土師器

坏（第 12 図 21） 駿東坏の底部と考えられる。見込み部には暗文状のヘラミガキが施される。

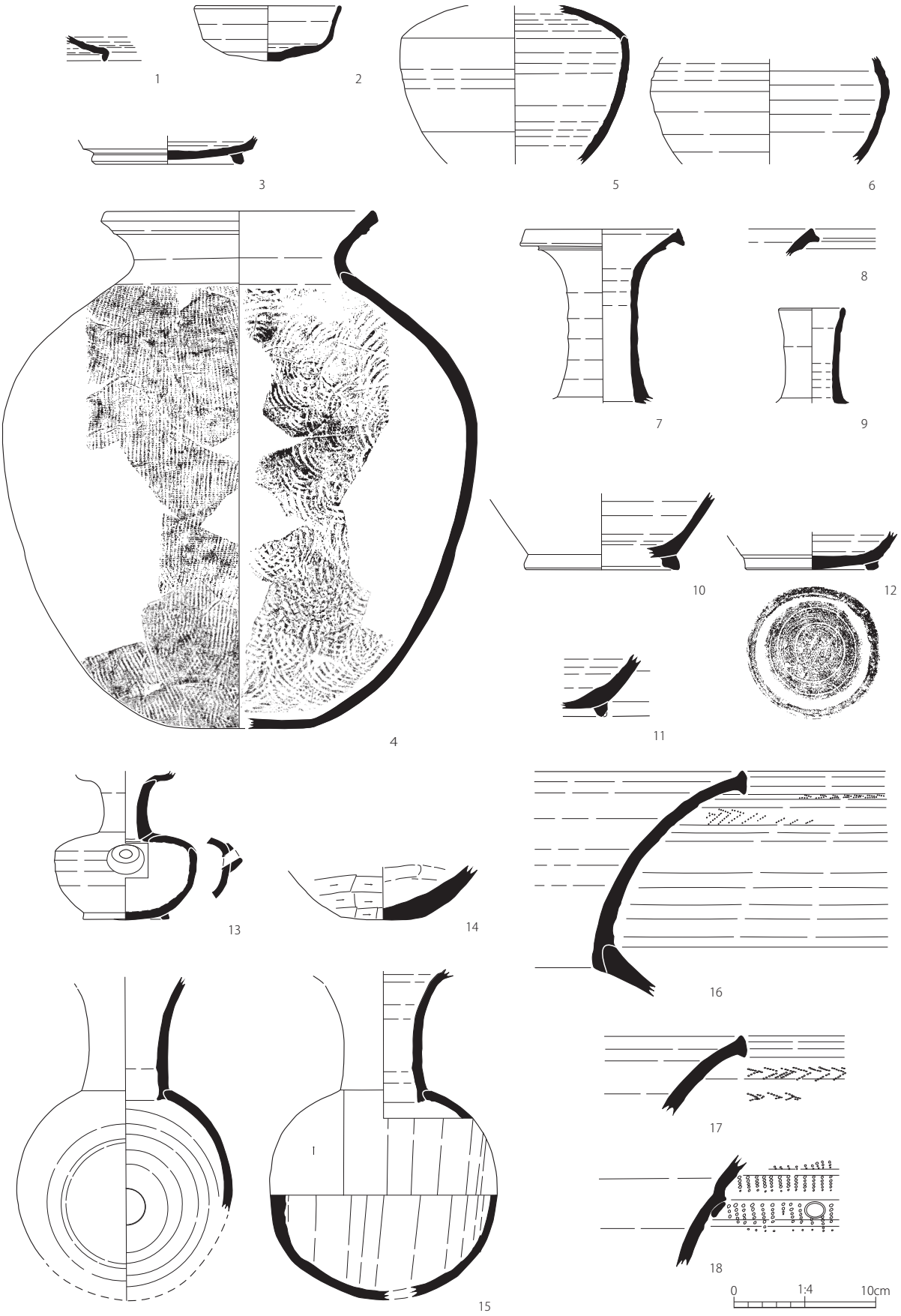
甕（第 12 図 22） 胴下半に乾燥工程をおき、胴上半はあまり肩が張らない。頸部の屈曲は緩やかで口唇部内面は窪みをもつ。胎土が砂っぽく、焼成も良好ではない。また、口唇部内面の突出もほとんどなく、駿東甕の古い様相（7 世紀）を示す甕である。

その他（第 12 図 23 ～ 28）

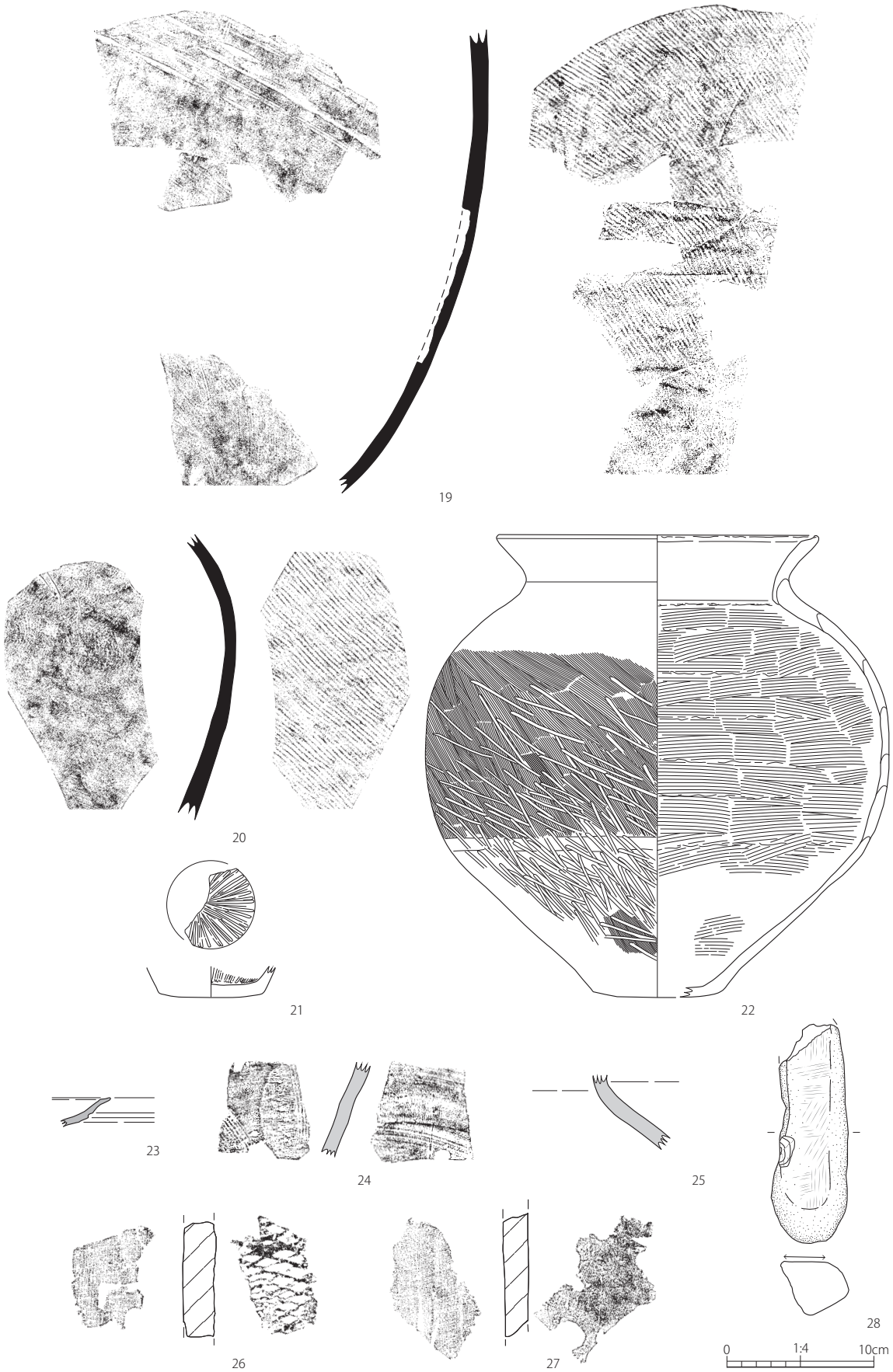
23 は灰釉陶器の皿である。9 世紀後半頃と考えられる。24 は陶器（常滑か）のすり鉢、25 は陶器（常滑か）甕である。いずれも中世の可能性が有る。26･27 は布目瓦である。三日市廃寺（定額寺「法照寺」か）にかかわる遺物と考えられる。28 は磨り石で、年代は明らかではない。



第 10 図 測量図・周溝平面図・周溝断面図



第 11 図　周溝出土遺物実測図 1



第 12 図　周溝出土遺物実測図 2

4　埋葬施設の構造

埋葬施設は、南南東に開口する無袖の横穴式石室である。天井石および側壁・奥壁の上部が失われているが、墓坑の中に石室を構築し、開口部にも壁石が認められることから、段構造を有する石室とみられる。

墓坑　墓坑は竪穴構造である。平面形はややいびつな長方形で、東辺 5.95m、西辺 6.65m、南辺 3.65m、北辺 3.90m、最も広くなる部分の東西幅は 4.15m を測る。検出面からの深さは北側で 66cm、南側で 40cm を測る。南側の 4 分の 1 ほどを除く広い範囲に溶岩角礫が混ざる黒色土を 14 ～ 6cm の厚さで入れて突き固め（土層 3 層に対応）、墓坑の底面を調整している様子が認められる。

石室　石室は溶岩の自然石で構築される。石室全長は 5.12m で、主軸方位は N‐152　‐E である。玄室平面形は長方形で、胴張りなどは認められない。玄室の規模は主軸長 4.67m、奥壁幅 1.40m、中央幅 1.44m、玄門幅 1.48m を測る。

奥壁　奥壁鏡石は幅 138cm、高さ 65cm の大型の自然石を立て、拳から人頭大の溶岩礫を裏込めに用いている。鏡石の上面は、西側壁に一部残る側壁 2 段目の石の上面より若干低くなる。

側壁　西側壁、東側壁とも上部の石は失われ、基底石と裏込めの溶岩礫、2 段目の石の一部が残存するのみである。基底石は幅 110cm を超える大きなものから 50cm ほどのものまで取り混ぜて、平坦な面を石室内側に向けて据え、直線的な玄室を構築している。西壁の奥壁寄りおよび開口部寄りと、東壁の中央から北側の基底石の上端高はおおむね揃えられているようである。

段構造（框石）　両側壁の南端内側に収まる位置に、3 個の自然石を、平坦面を石室内側に向けて据えている。これらの石の上端高は、部分的に揃えられているように見える側壁基底石の上端高とほぼ同じである。裏込めの石は認められない。

床面　石室中央東側に据えられた仕切石を境として、奥（北）の後室に 2 面、手前（南）の前室に 3 面の床面が構築された、との調査所見が残っている。構築された順に、下から第 1 次床面、第 2 次床面、第 3 次床面と呼称する。

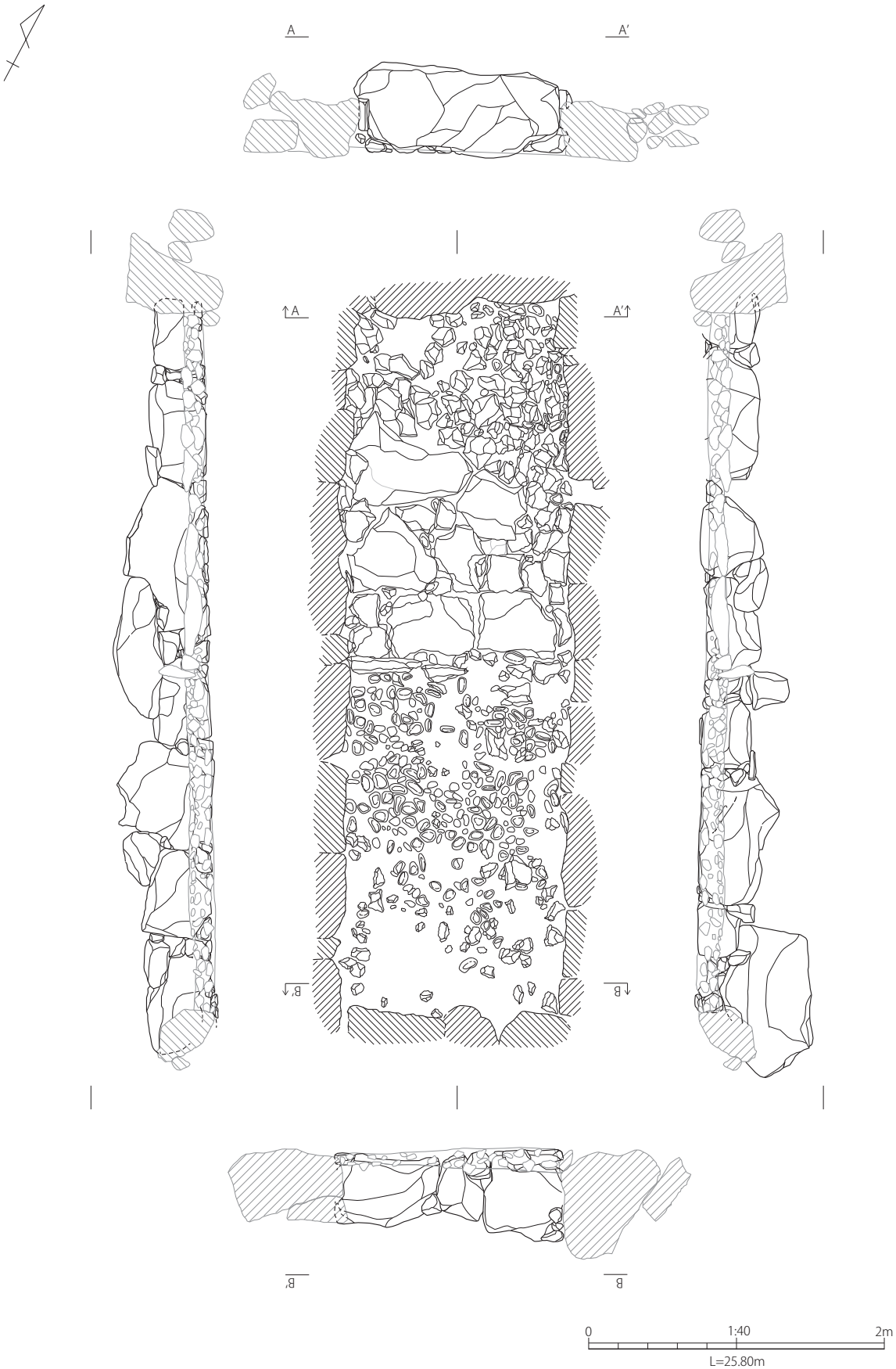
前室と後室の対応関係を整理すると、次のとおりである。

第 1 次床面：前室［下層］後室［下層］
第 2 次床面：前室［中層］後室［下層］
第 3 次床面：前室［上層］後室［上層］

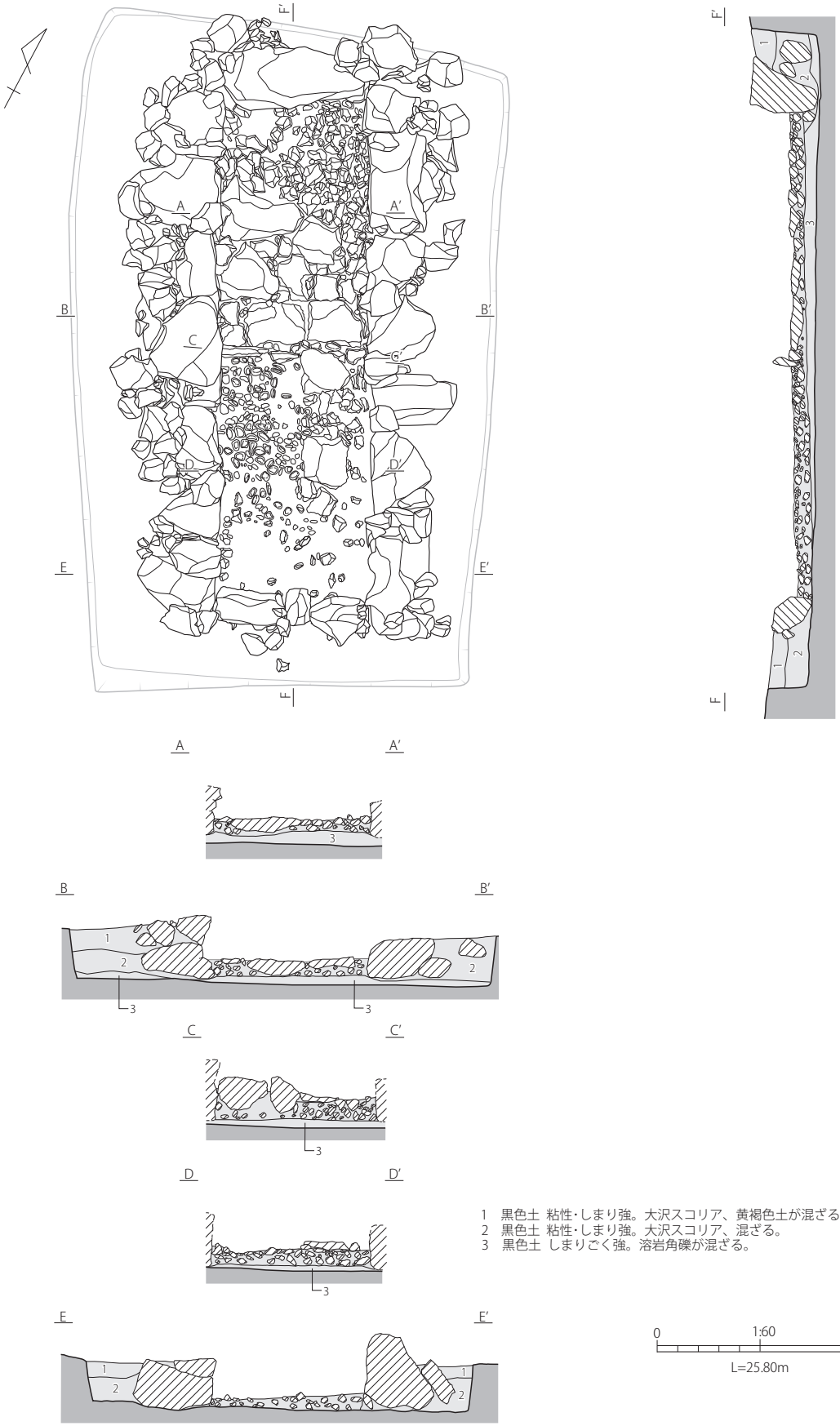
第 1 次床面は、後室の下層、前室の下層が対応する。墓坑底面から 14cm ほどの厚さで構築される。墓坑内に 5 ～ 10cm ほどの溶岩礫が混ざる黒色土を敷きつめ床面とし、玄室中央西寄りに厚さ 10cm、幅 50cm ほどの板状溶岩礫を 2 枚立て並べて、前室（玄室南半分）と後室（玄室北半分）を区切る仕切石としている。そして、前室には 10cm 前後の河原石を敷きつめ、後室には 50 ～ 80cm の板状溶岩礫や 10 ～ 25cm の溶岩角礫を敷き並べている。前室と後室を明確に区別する意図を見てとることが出来る。

第 2 次床面は、後室の下層、前室の中層が対応する。第 1 次床面の前室東側に、50cm ほどの板状溶岩礫 2 枚を棺座のように並べて敷き、新たな床面（埋葬場所？）としたものである。第 1 次床面よりこの部分だけが 8cm ほど高くなる。

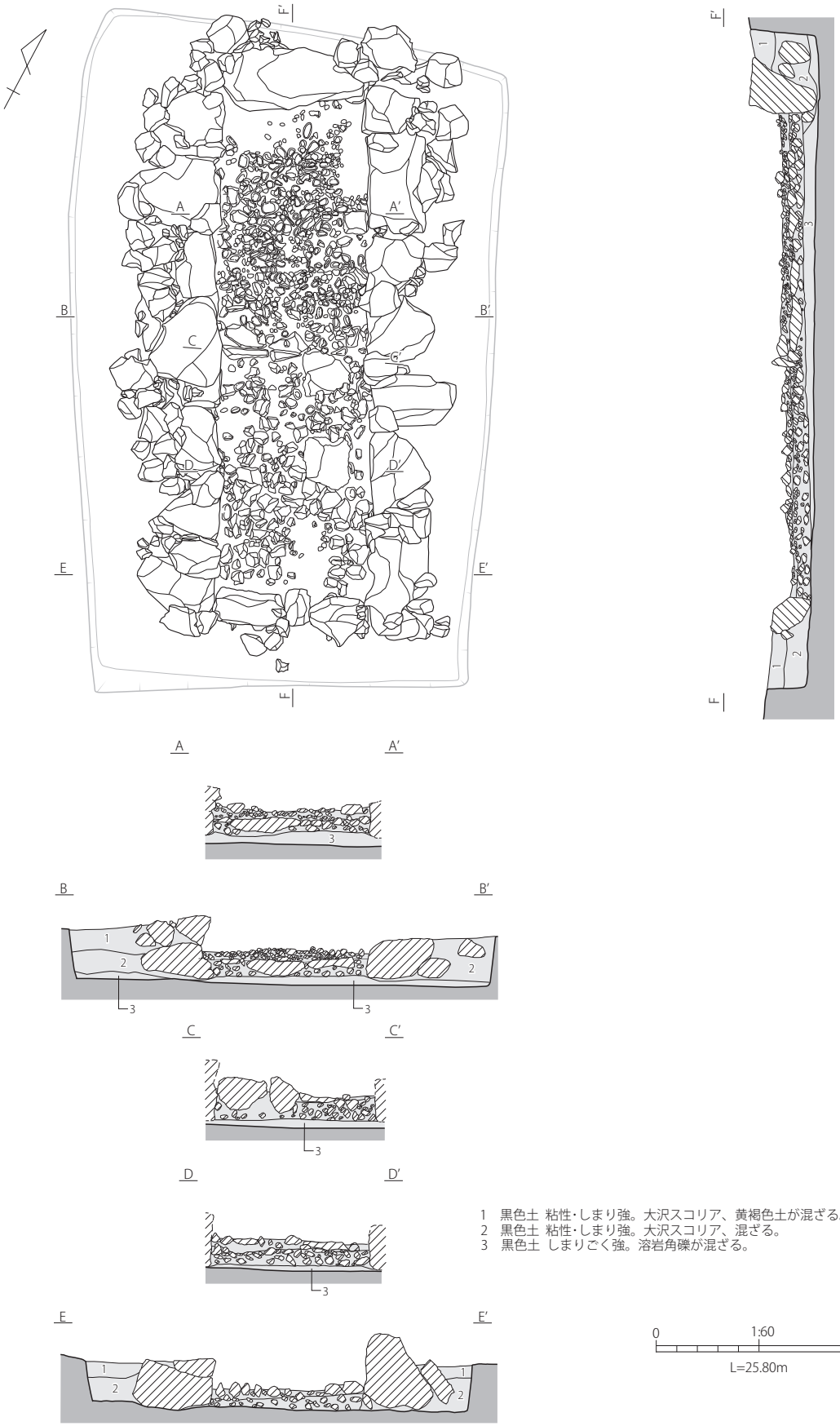
第 3 次床面は、後室の上層、前室の上層が対応する。前室では第 2 次床面の棺座状部分と床面高を揃えるように、溶岩礫と黒色土を敷きつめている。これに対して後室には、それまでの床石を隠すように、河原石が 10cm ほどの厚さで敷きつめられている。第 1 次床面が前室に河原石を、後室に溶岩礫を敷いたのとは用いる石が入れ替わるが、同じように前室と後室を区別している。



第 13 図　石室展開図（第 1 次床面）

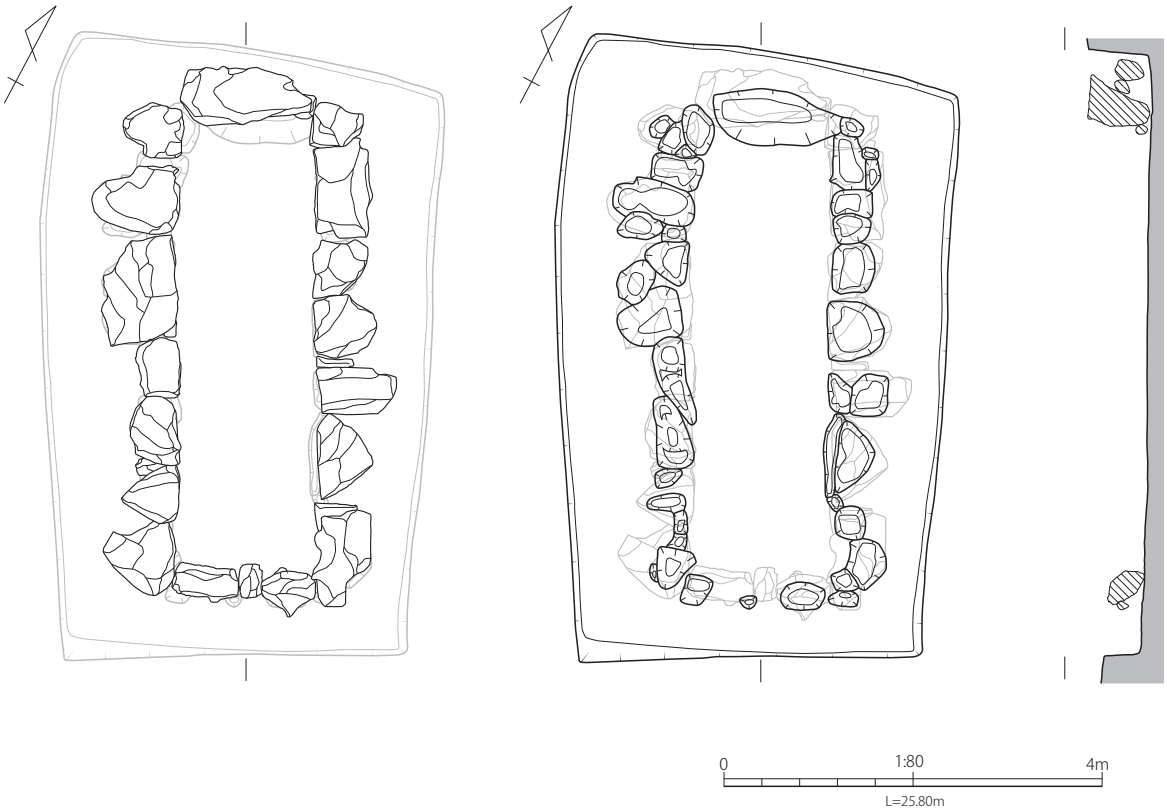


第 14 図　石室平面図・断面図（第 2 次床面）



1　黒色土　粘性・しまり強。大沢スコリア、黄褐色土が混ざる。石室構築土
2　黒色土　粘性・しまり強。大沢スコリア、混ざる。　石室構築土
3　黒色土　しまりごく強。溶岩角礫が混ざる。　石室構築土

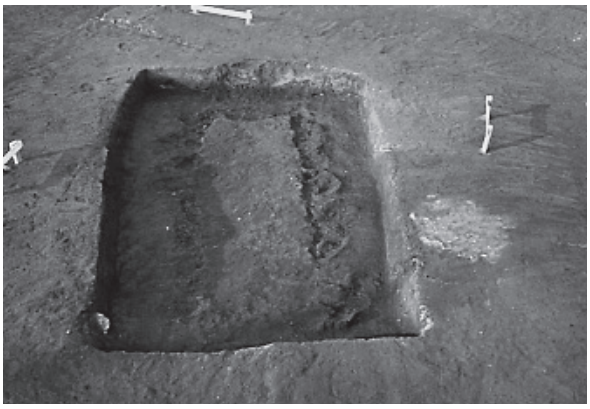
第 15 図　石室平面図・断面図（第 3 次床面）



第 16 図　石室基底石・基底石据え方・墓坑　平面図・断面図

第 17 図　石室（第 1 次床面）全景（南より）

第 18 図　石室基底石全景（南東より）



第 19 図　石室基底石据え方・墓坑（南より）

5　副葬品出土状況

床面について

東平第1号墳では、石室中央西側に据えられた仕切石を境として、奥（北）の後室に2面、手前（南）の前室に3面の床面が確認された。本報告では、構築された順に下から第1次床面、第2次床面、第3次床面と呼称し、前室と後室の対応関係は次のとおりである。

第3次床面：前室［上層］・後室［上層］

第2次床面：前室［中層］・後室［下層］

第1次床面：前室［下層］・後室［下層］

このうち、第2次床面は第1次床面の後に、前室東側に板状の溶岩礫を棺座のように敷き並べて、部分的に構築された床面である。

遺物の出土面について

概報では遺物の出土状況を「上面床面」「下面床面」「前室棺座様敷石除去後」の3面に分けて図示している。本報告では、遺物が出土した標高値や検出状況をもとに、遺物が帰属する床面について再検討を行った。その結果、「下面床面」に分けられた遺物のうち、後室出土のものを第3次床面に、前室出土のものを第1次床面に振り分けた。明確に第2次床面に伴う遺物は認められず、遺物の出土面は第1次床面及び第3次床面とする。

出土位置のグルーピング

位置別の出土状況を示す上で、石室内における遺物のまとまりや有無から、A～Eの5つの空間的グルーピングを行った。次のとおり、後室をA～Cの3つに、前室をD・Eの2つに分けた。

A：石室の最奥

　奥壁から1mほどの、鉄鏃が出土するエリア

B：後室東半

　大刀類が出土するエリア

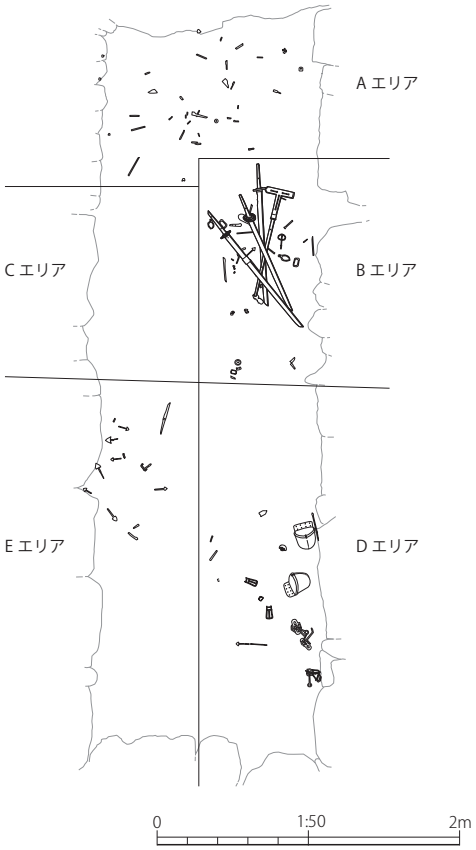
C：後室西半　遺物が認められないエリア

D：前室東半　轡・鐙が出土するエリア

E：前室西半　鉄鏃が出土するエリア

以下、このA～Eのエリア区分を基に記述していくこととする。

第20図　石室（第3次床面）全景（南より）



第21図　石室エリア区分図

A エリア

石室の最奥、奥壁から 1m ほどのエリアである。

このエリアでは、第 1 次床面に伴う遺物は認められない。

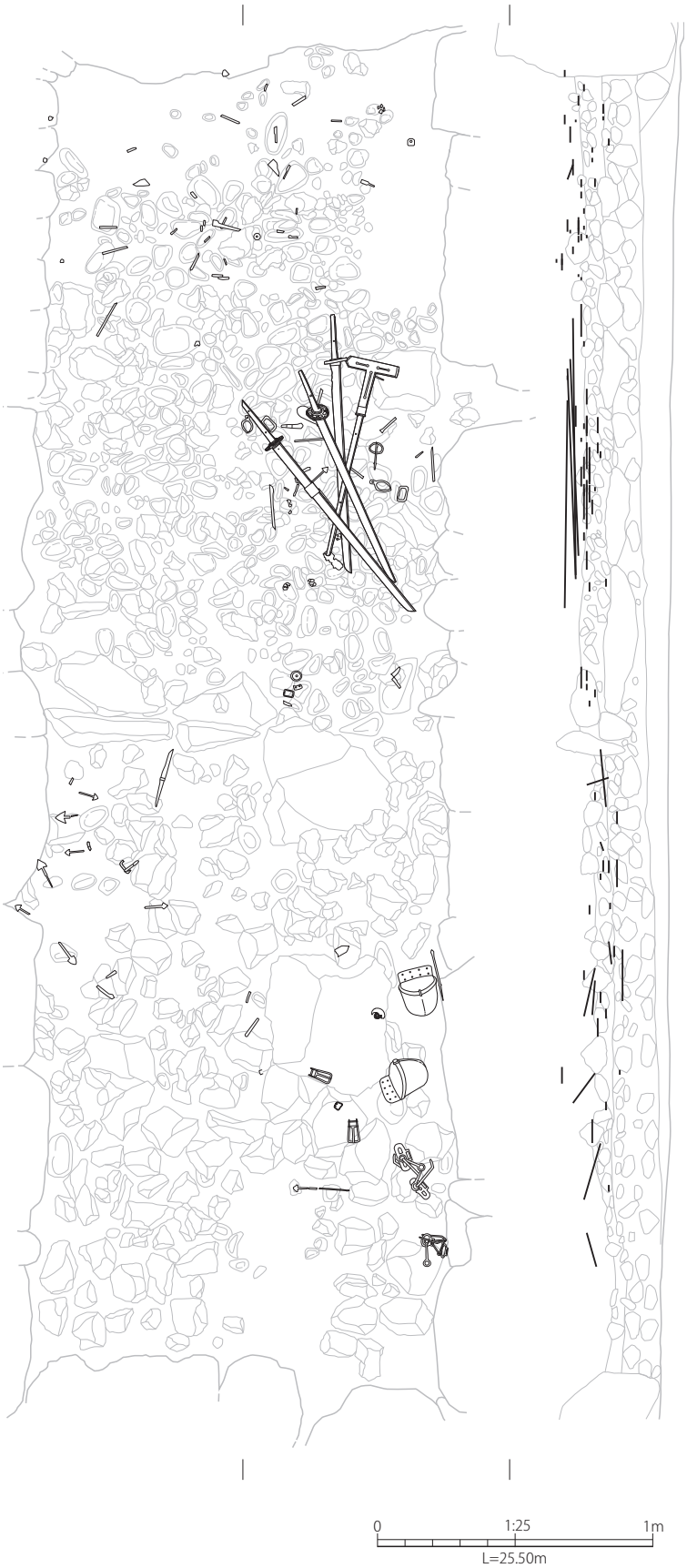
第 3 次床面では、鉄鏃が多く散在しており、形式が判明するもので 10 点（内 4 点は概報の記述に基づく）、形式が不明な茎部片などで 19 点を数える。石室全体で出土位置の明らかな鉄鏃が 61 点であることから、その半数近くが A エリアで出土していると言える。形式が判明するもの 10 点のうち、平根式は 1 点で、残る 9 点は尖根式である。さらに概報によれば、馬具の飾金具が石室東半に 3 点散在し、刀装具が奥壁中央壁際で 1 点、土師器片も 2 点出土しているとされるが、現在確認できる遺物との照合が取れず、詳細は不明である。

B エリア

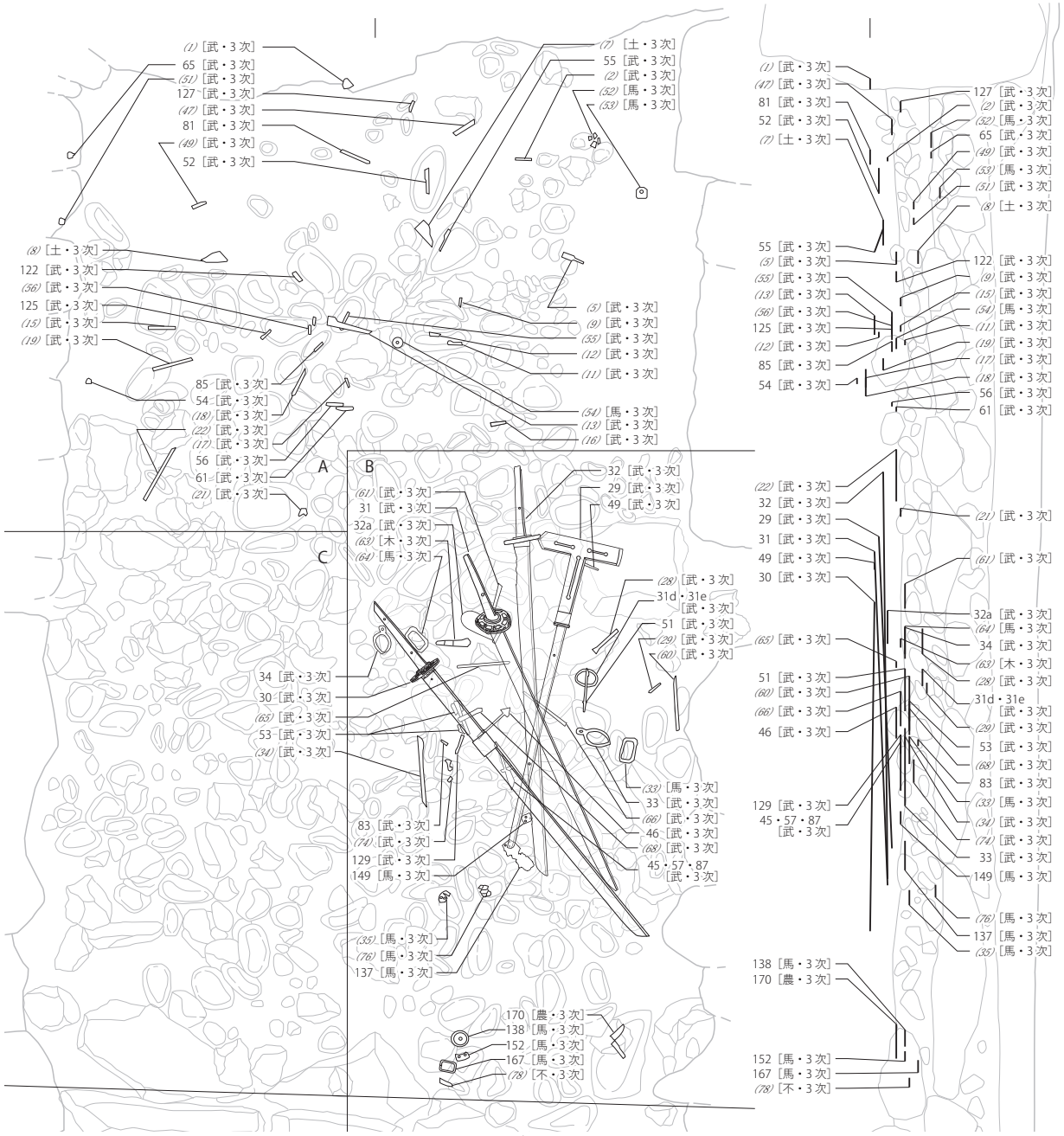
後室の東半、大刀 3 振と丁字形利器が出土したエリアである。

A エリアと同様、第 1 次床面に伴う遺物はない。

第 3 次床面において、丁字形利器（29）は身部を北（奥壁側）に向け、大刀 3 振（30 ～ 32）は切先を南もしくは南東に（入り口側）に向けて、整然とではないが、まとまって出土した。これら大刀類の周辺からは、把頭（32a）、責金具（31d･31e）、足金物（33･34）などの刀装具 5 点、鉄鏃が 17 点、弓金具 1 点（129）といった武器類などが多数出土し、そうした武器のまとまりよりも南を中心に、杏葉の可能性がある金銅製の板状金具（137）、辻金具（138）、飾金具（149・152）などの馬具 9 点、農工具の刀子 1 点（170）も出土している。

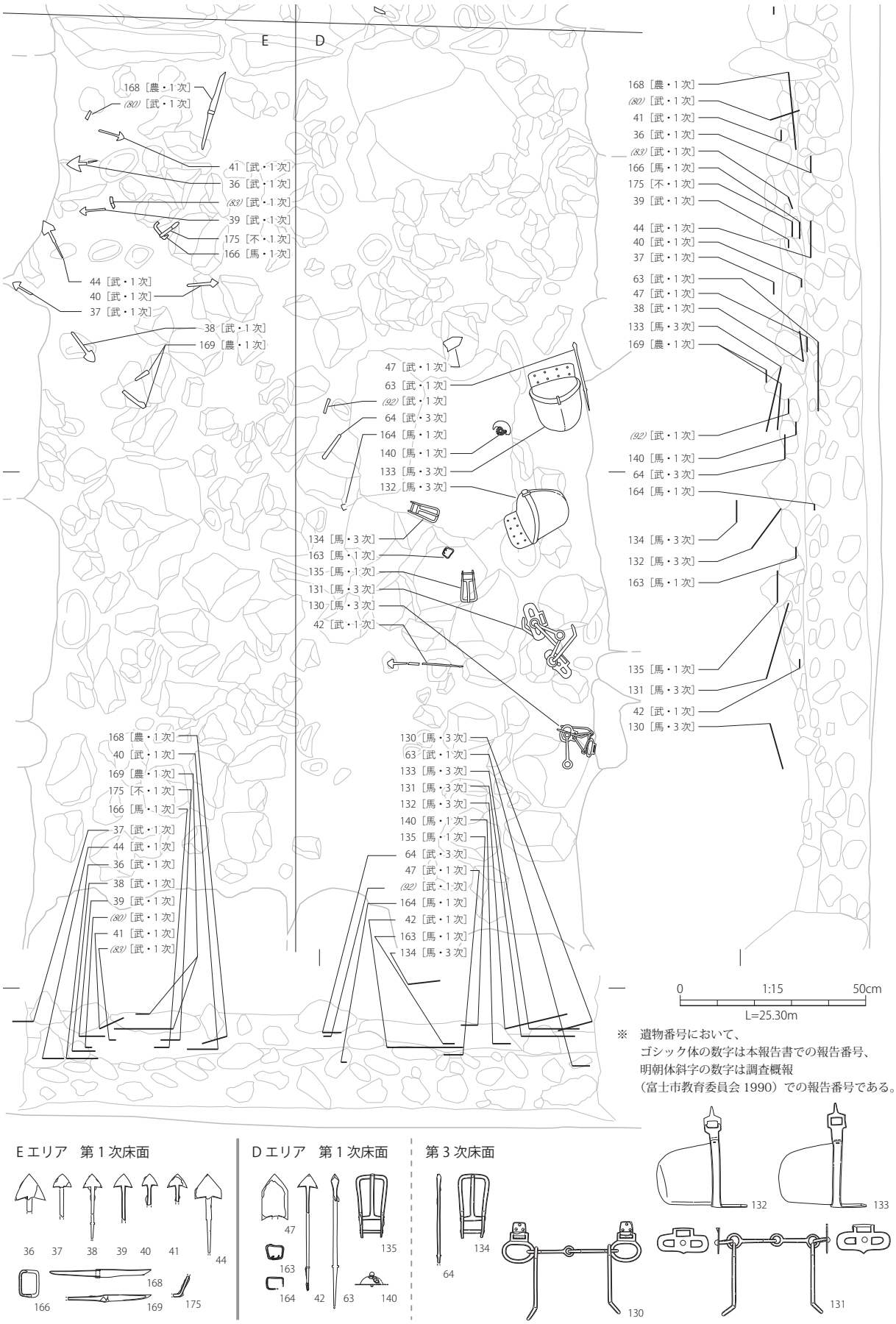


第 22 図　石室遺物出土状況図



※ 遺物番号において、
ゴシック体の数字は本報告書での報告番号、
明朝体斜字の数字は調査概報（富士市教育委員会 1990）
での報告番号である。

第 23 図　エリア別遺物出土状況詳細図（A・B・C エリア）



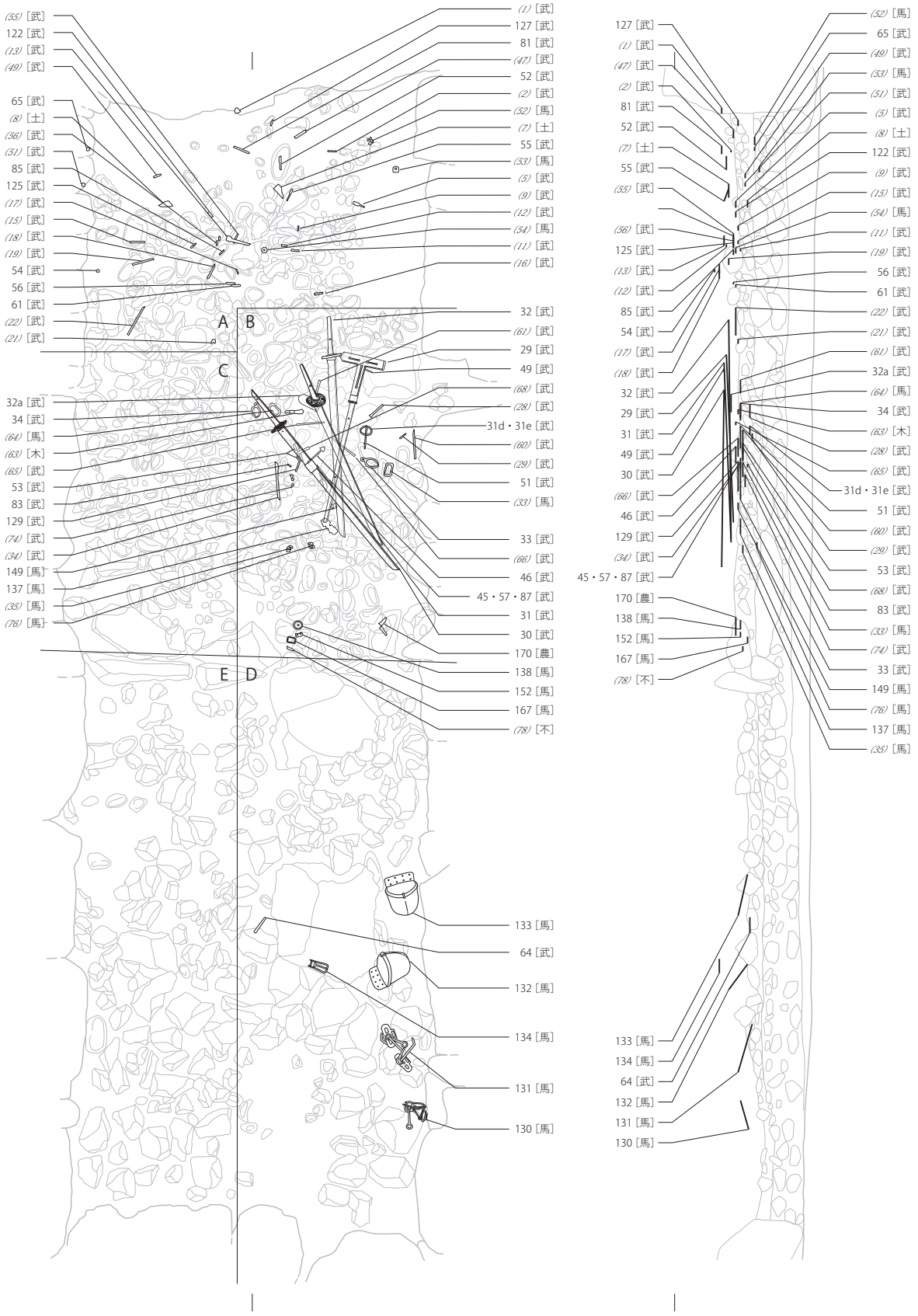
※　遺物番号において、
ゴシック体の数字は本報告書での報告番号、
明朝体斜字の数字は調査概報
（富士市教育委員会 1990）での報告番号である。

第 24 図　エリア別遺物出土状況詳細図（D・E エリア）

※　遺物番号において、
ゴシック体の数字は本報告書での報告番号、
明朝体斜字の数字は調査概報（富士市教育委員会 1990）での報告番号である。

0　1:25　1m
L=25.50m

第 25 図　第 1 次床面遺物出土状況図



※　遺物番号において、
ゴシック体の数字は本報告書での報告番号、
明朝体斜字の数字は調査概報（富士市教育委員会 1990）での報告番号である。

第 26 図　第 3 次床面遺物出土状況図

第２表　出土位置別遺物一覧表

		武器								馬具	38 *7*	農工具	6	土器					その他	8 *2*
		刀剣	4	刀装具	6 *1*	鉄鏃	93 *30*	弓	1					須恵器	21	土師器	2 *2*			
周溝		総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	20	総点数	2		総点数	6
														【坏蓋】1 【蓋】2 【坏身】3 【広口壺】4 【長頸壺】5 ～ 12 【甕】13 【瓶】14・15 【甕】16 ～ 20	1 1 1 1 8 1 2 5	【坏】21 【甕】22	1 1		【灰釉陶器皿】23 【陶器擂鉢】24 【陶器甕】25 【瓦】26・27 【石器】28	1 1 1 2 1
A	3 次	総点数	0	総点数	*1*	総点数	11 *18*	総点数	0	総点数	*3*	総点数	0	総点数	0	総点数	*2*		総点数	0
				【不明】 *(1)*	*1*	【平根三角形式】 *(21)* 【尖根片刃箭式】 52 *(3)*・54 *(20)*・55 *(6)* 56 *(58)*・61 *(59)* *(18)*・*(22)*・*(47)* 【尖根鑿箭式】 65 *(50)* 【不明】 81 *(4)*・85 *(14)*・122 *(10)* 125 *(57)*・127 *(48)* *(2)*・*(5)*・*(9)*・*(11)*・*(12)* *(13)*・*(15)*・*(16)*・*(17)* *(19)*・*(49)*・*(51)*・*(55)* *(56)*	*1* 5 *3* 1 5 *14*			【飾金具】 *(52)*・*(53)*・*(54)*	*3*					【破片】 *(7)*・*(8)*	*2*		
	1 次	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0		総点数	0
B	3 次	総点数	4	総点数	5	総点数	8 *9*	総点数	1	総点数	5 *4*	総点数	1	総点数	0	総点数	0		総点数	*2*
		【丁字形】 29 *(23)* 【大刀】 30 *(26)* 31 *(25)* 32 *(24)*	1 3	【把頭】 32a *(62)* 【責金具】 31d *(20)* 31e *(20)* 【足金物】 33 *(32)* 34	1 2 2	【平根五角形式】 45 *(71)*・46 *(67)* 【尖根片刃箭式】 49 *(27)*・51 *(31)*・53 *(69)* 57 *(72)* *(29)*・*(34)*・*(65)* 【不明】 83 *(70)*・87 *(72)* *(28)*・*(60)*・*(61)*・*(66)* *(68)*・*(74)*	2 4 *3* 2 *6*	【弓金具】 129 *(73)*	1	【杏葉】 137 *(36)* 【辻金具】 138 *(38)* 【飾金具（爪形）】 149 *(75)*・152 *(39)* 【飾金具】 *(35)*・*(76)* 【方形金具】 167 *(77)* *(33)*・*(64)*	1 1 2 *2* 1 *2*	【刀子】 170 *(37)*	1					【木片】*(63)* 【鉄塊】*(78)*	*1* *1*
	1 次	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0		総点数	0
C	3 次	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0		総点数	0
	1 次	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0		総点数	0
D	3 次	総点数	0	総点数	0	総点数	1	総点数	0	総点数	5	総点数	0	総点数	0	総点数	0		総点数	0
						【尖根鑿箭式】 64 *(41)*	1			【轡】 130 *(46)*・131 *(45)* 【鐙】 132 *(43)*・133 *(40)* 【鈴具】 134 *(44)*	2 2 1								
	1 次	総点数	0	総点数	0	総点数	3 *1*	総点数	0	総点数	4	総点数	0	総点数	0	総点数	0		総点数	0
						【平根三角形式】 42 *(94)* 【平根五角形式】 47 *(95)* 【尖根鑿箭式】 63 *(93)* 【不明】 *(92)*	1 1 1 *1*			【鈴具】 135 *(99)* 【辻金具】 140 *(96)* 【方形金具】 163 *(98)*・164 *(97)*	1 1 2								
E	3 次	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0	総点数	0		総点数	0
	1 次	総点数	0	総点数	0	総点数	8 *2*	総点数	0	総点数	1	総点数	2	総点数	0	総点数	0		総点数	1
						【平根三角形式】 36 *(82)*・37 *(89)*・38 *(90)* 39 *(84)*・40 *(88)*・41 *(81)* 【平根五角形式】 43 *(100)*・44 *(87)* 【不明】 *(80)*・*(83)*	6 2 *2*			【方形金具】 166 *(86)*	1	【刀子】 168 *(79)* 169 *(42・91)*	2					【不明鉄製品】 175 *(85)*	1
不明		総点数	0	総点数	1	総点数	62	総点数	0	総点数	23	総点数	3	総点数	1	総点数	0		総点数	1
				【縄】 35	1	【尖根三角形式】 48 【尖根片刃箭式】 50・58 ～ 60・62 【不明】 66 ～ 80・82・84 86・88 ～ 121・123 124・126・128	1 5 56			【杏葉】 136 【辻金具】 139・141 ～ 147 【飾金具（爪形）】 148・150 151・153・154 【飾金具（円形）】 155 ～ 162 【方形金具】 165	1 8 5 8 1	【刀子】 171 【刀子（縄）】 172・173	1 2	【長頸壺】176	1			【不明鉄製品】 174	1

※ ゴシック体の数字は本報告書での報告番号、明朝体斜字の数字は調査概報（富士市教育委員会 1990）での報告番号である。

C エリア

後室の西半で、第 1 次床面、第 3 次床面のいずれにおいても遺物が認められないエリアである。

D エリア

前室東半の、轡・鐙などが出土したエリアで、第 1 次床面、第 3 次床面ともに遺物が認められている。

第 1 次床面では、鉄鏃 4 点と鉸具（135）、辻金具（140）といった馬具 4 点が出土している。

第 3 次床面では、東側壁際に轡 2 点（130・131）と壺鐙 2 点（132・133）が並び、鉸具 1 点（134）と鉄鏃 1 点（64）が出土している。

出土した鉸具 2 点については、出土位置が近く、形状や大きさも似ていることから、本来は 1 対のものとして副葬された可能性が高い。

E エリア

前室西半の鉄鏃・刀子が出土したエリアである。

E エリアでは第 3 次床面に伴う遺物は認められない。

第 1 次床面では、鉄鏃 10 点、馬具 1 点（166）、刀子 2 点（168・169）が散在して出土した。鉄鏃 10 点のうち形式が判明する 8 点（36 ～ 41・43・44）はすべて平根式である。刀子は出土位置が特定できる 3 点のうち 2 点が E エリアからの出土である。

第 27 図　B エリア（第 3 次床面）遺物出土状況（東より）

6. 遺物種類別出土状況

武器

刀剣類　丁字形利器 1 振（29）、大刀 3 振（30 ～ 32）が出土している。

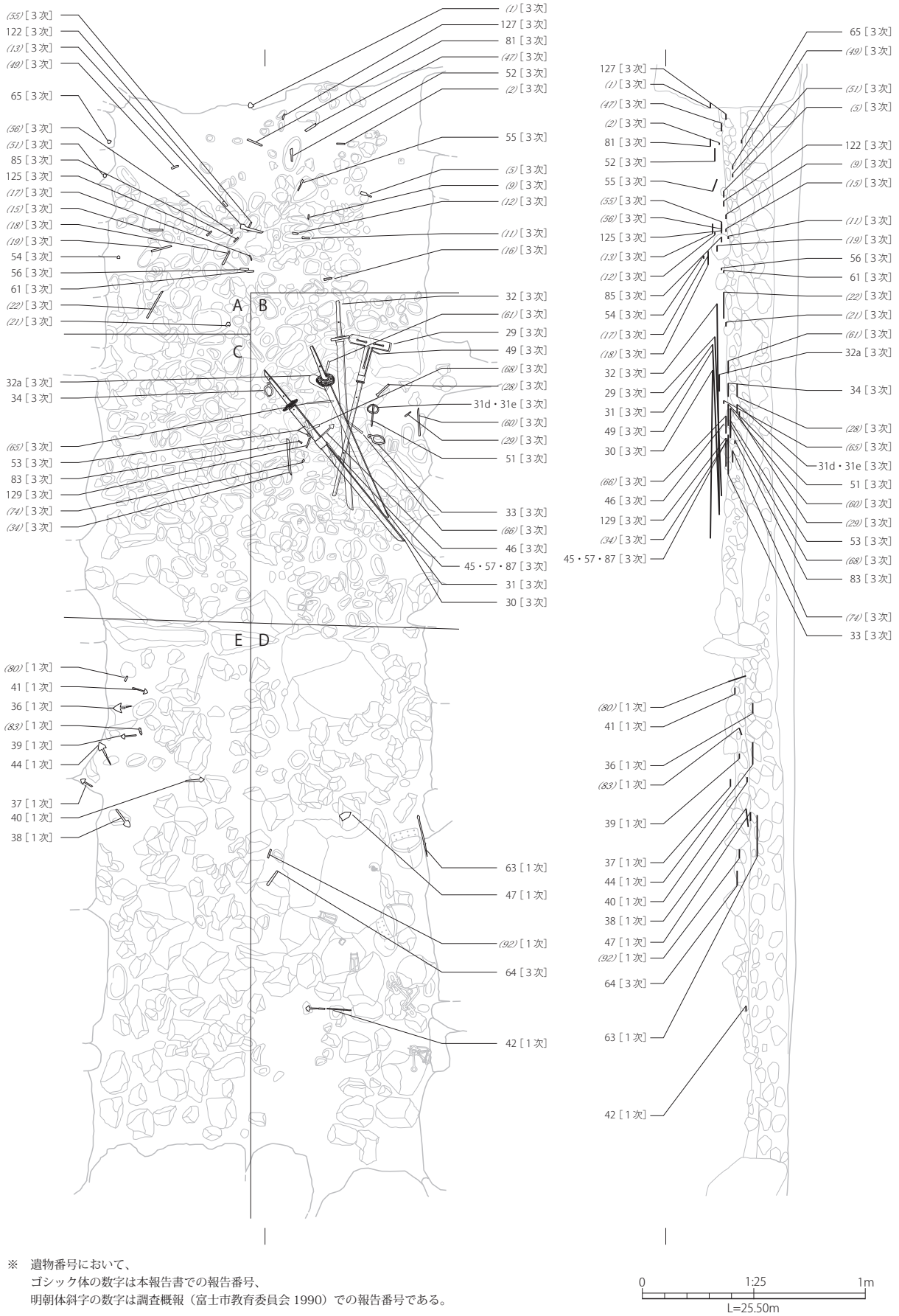
すべて後室東側の B エリア第 3 次床面からの出土で、整然とではないが、まとめて置かれている。丁字形利器（29）は身部を北（奥壁側）に向けている。大刀（32）は刀身が丁字形利器の下にあり、切先を南（入り口側）に、刃部を西（石室内側）に向けている。刀身が丁字形利器の上にある残る 2 本の大刀（30･31）は、石室に対してやや斜めに置かれ、切っ先が南東を向いているが、刃部は 32 と同様に石室内側に向けられている。これらはたてかけられていたものが倒れた可能性も残る。

刀装具　円頭把頭 1 点（32a）、責金具 2 点（31d・31e）、足金物（33・34）が B エリア第 3 次床面から出土している。

把頭（32a）は大刀（31）の鍔の下にあり、責金具 2 点（31d・31e）は 2 つがぴったりと重なった状態で丁字形利器（29）の東で出土した。柄頭は大刀 32 に、責金具 2 点は大刀 31 に付属するものと考えられる。足金物 33 は 31d・31e の南から、足金物 34 は大刀 30 の茎近くから出土し、2 点とも大刀 30 に付属する可能性がある。また、A エリアの石室中央奥壁際では刀装具残欠が出土したという記録があり、出土地不明であるが鏑 1 点（35）も出土している。

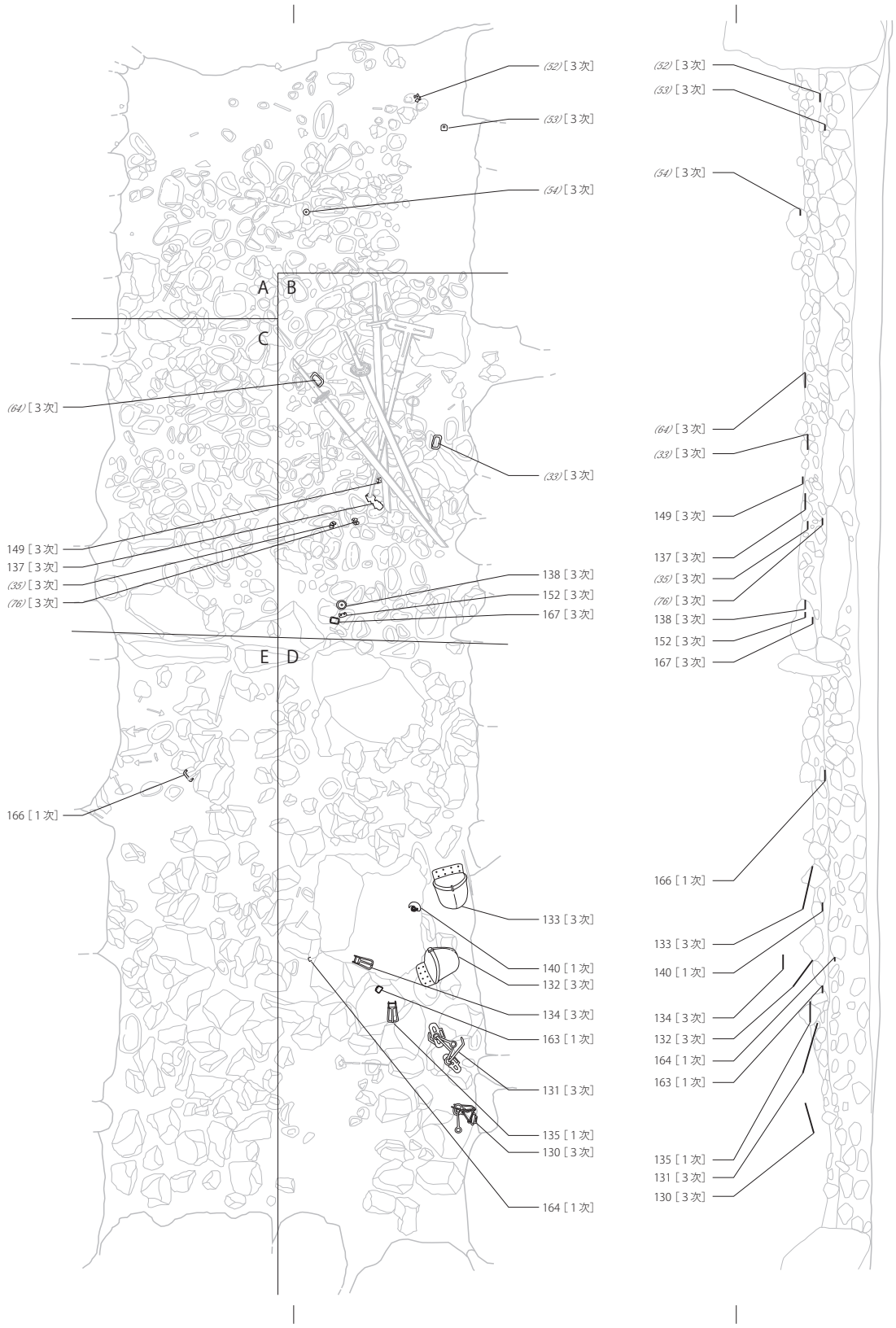
鉄鏃　遺物が認められない C エリアを除くすべてのエリアで出土している。全体的に散在しており、束をなすような様子は見られない。

頸部片・茎部片を含む実測点数として 93 点、それ以外に概報で確認されるものは 30 点を数えるが、このうち鏃身部形状が判明しているものは 35 点、さらに出土位置が判明するものは 23 点である。これらを鏃身部形状ごとに見ていくと、平根式では平根三角形式、平根五角形式があり、平根三角形式は A エリアで 1 点、D エリアで 1 点、E エリアで 6 点、平根五角形式は B エリアで 2 点、D エリアで 1 点、E エリアで 2 点出土している。尖根式には尖根片刃箭式、尖根鑿箭式があり、尖根片刃箭式が A エリアで 8 点、B エリアで 7 点、尖根鑿箭式が A エリアで 1 点、D エリアで 2 点出土している。



※　遺物番号において、
ゴシック体の数字は本報告書での報告番号、
明朝体斜字の数字は調査概報（富士市教育委員会 1990）での報告番号である。

第 28 図　石室内　武器出土状況図



※　遺物番号において、
ゴシック体の数字は本報告書での報告番号、
明朝体斜字の数字は調査概報（富士市教育委員会 1990）での報告番号である。

0　1:25　1m
L=25.50m

第 29 図　石室内　馬具出土状況図

※　遺物番号において、
ゴシック体の数字は本報告書での報告番号、
明朝体斜字の数字は調査概報（富士市教育委員会 1990）での報告番号である。

0　1:25　1m
L=25.50m

第 30 図　石室内　農工具出土状況図

出土床面はA・Bエリアがすべて第3次床面、D・Eエリアが D エリアの尖根鑿箭式1点（64）を除いて第1次床面である。

少ない点数からではあるが、平根式は前室（D・Eエリア）第1次床面に多く、尖根式は後室（A・Bエリア）第3次床面に多い、という傾向が認められるようである。

弓　弓金具1点（129）がBエリア第3次床面、大刀30の刀身の下から鉄鏃などとともに出土した。弓に関わる遺物はこの1点のみである。

馬具

出土位置が判明しないものも多いが、鉄鏃と同様にCエリアを除くすべてのエリアで出土している。

まず目を引くのが、Dエリア第3次床面で出土した轡2点（130・131）、壺鐙2点1対（132・133）、鉸具1点（134）である。さらに、鉸具134と形状、大きさがよく似た鉸具135が同じDエリアの第1次床面で出土しており、本来は1対をなしていた可能性がある。前室であるD・Eエリアの第1次床面からは他に辻金具1点（140）、方形金具3点（163・164・166）が出土している。

後室のA・Bエリアでは第3次床面から、図化できているもので杏葉1点（137）、辻金具1点（138）、飾金具2点（149・152）、方形金具1点（167）が出土し、概報で確認されるものから飾金具5点、方形金具2点が加えられる。

農工具

刀子の刀身が4点（168～171）、鏃が2点（172・173）出土した。出土位置が判明するのは刀身3点であり、1点がBエリア第3次床面から、2点がEエリア第1次床面からの出土である。

土器

図示した須恵器長頸壺（176）は石室床面上で出土したものではなく出土位置は不明であるが、石室上面出土の注記があることから石室内の遺物として扱った。また、土師器片2点がAエリア第3次床面で出土したという記録が概報で確認されるが、器種不明の破片であり、石室へ土器が副葬された様子は不明である。

以上の出土状況をまとめると、

- 第1次床面では前室（D・Eエリア）のみで遺物が認められる。
- 第3次床面では前室・後室とも、西半（C・Eエリア）に遺物が認められない。
- 後室（A・Bエリア）には武器が目立ち、前室（Dエリア）には馬具が目立つ。

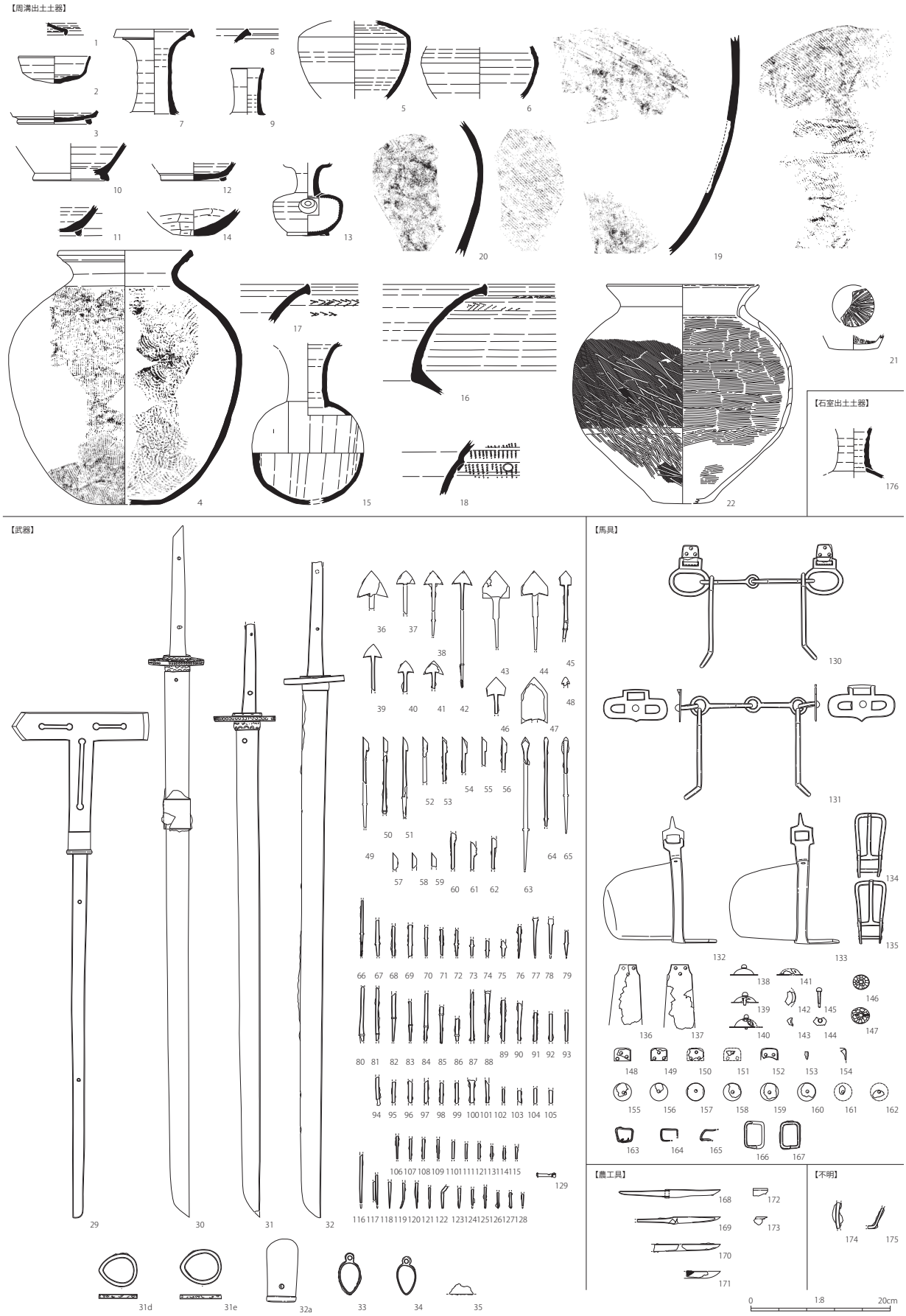
といった傾向がみられる。

埋葬と副葬品の移動については、考察（第4章第5節）で述べることとする。

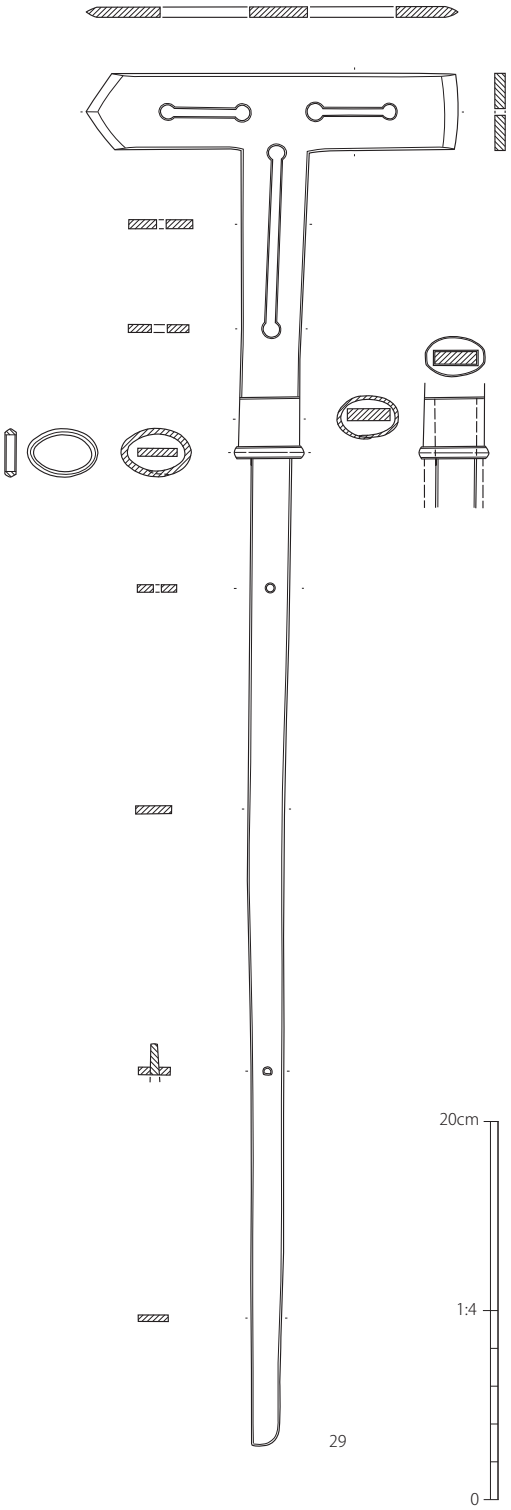
第３表　石室内出土遺物種類別一覧表

遺物の種類	出土点数	遺物					出土状況					
		報告番号※			挿図	図版	出土エリア ※					挿図
		出土位置確定		出土位置不明								
		本報告	概報	本報告								
武器（刀剣）	4						A	B	C	D	E	第 28 図
丁字形利器	1	29			第 32 図	PL.16・17		●				
大刀	3	30 ～ 32			第 34・35・37 図	PL.18 ～ 20		●				
武器（刀装具）	7						A	B	C	D	E	第 28 図
把頭	1	32a			第 38 図	PL.19		●				
責金具	2	31d・31e			第 36 図	PL21.		●				
足金物	2	33・34			第 39 図	PL.19		●				
鏃	1			35	第 39 図	PL.19						
不明	1		*(1)*				●					
武器（鉄鏃）	32+						A	B	C	D	E	第 28 図
平根三角形式	8	36 ～ 42	*(21)*		第 40 図	PL.21	○			○	◎	
平根五角形式	5	43 ～ 47			第 40 図	PL.21		○		○	○	
尖根三角形式	1			48	第 40 図	PL.21						
尖根片刃箭式	15	49・51 ～ 57・61	*(18)・(22)・(29)* *(34)・(47)・(65)*	50・58 ～ 60・62	第 40 図	PL.22	◎	○				
尖根鑿箭式	3	63・64・65			第 40 図	PL.22	○			◎		
不明		81・83・85・87 122・125・127	*(2)・(5)・(9)* *(11)・(12)・(13)* *(15)・(16)・(17)* *(19)・(28)・(49)* *(51)・(55)・(56)* *(60)・(61)・(66)* *(68)・(74)・(80)* *(83)・(92)*	66 ～ 80・82 84・86 88 ～ 121・123 124・126・128	第 41 図	PL.22						
武器（弓）	1						A	B	C	D	E	第 28 図
弓金具	1	129			第 41 図	PL.22		●				
馬具	38+						A	B	C	D	E	第 29 図
轡	2	130・131			第 42・43 図	PL.24・25				●		
鐙	2	132・133			第 44・45 図	PL.26・27				●		
鉸具	2	134・135			第 46 図	PL.23				●		
杏葉	2	137		136	第 47 図	PL.23		◎				
辻金具	10	138・140		139・141 ～ 147	第 47 図	PL.23		○		○		
飾金具（爪形）	7	149・152		148・150・151 153・154	第 47 図	PL.23		○				
飾金具（円形）	8			155 ～ 162	第 47 図	PL.23						
飾金具			*(35)・(52)* *(53)・(54)・(76)*				◎	◎				
方形金具	5	163・164 166・167	*(33)・(64)*	165	第 48 図	PL.23		○		○	○	
農工具	6						A	B	C	D	E	第 30 図
刀子	4	168 ～ 170		171	第 49 図	PL.29		○			◎	
刀子（鏃）	2			172・173	第 49 図	PL.29						
その他	4						A	B	C	D	E	
不明鉄製品	2	175		174	第 51 図	PL.29					◎	
木片	1		*(63)*					●				
鉄塊	1		*(78)*					●				
土器	3						A	B	C	D	E	
土師器破片	2		*(7)・(8)*				●					
須恵器長頸壺	1			176	第 50 図	PL.29						

※ ゴシック体の数字は本報告書での報告番号、明朝体斜字の数字は調査概報（富士市教育委員会 1990）での報告番号である。
※ 石室内における遺物のまとまりから、
A ～ E の 6 つの空間的グルーピングを行った。
A エリア：奥壁周辺の鉄鏃が出土するエリア
B エリア：後室東半の大刀類の出土するエリア
C エリア：後室西半の遺物が認められないエリア
D エリア：前室東半の轡・鐙が出土するエリア
E エリア：前室西半の鉄鏃が出土するエリア
※ 出土状況の凡例
● 80%以上
◎ 50 ～ 79%
○ 49%以下



第 31 図　古墳出土遺物一覧図



第 32 図　武器実測図 1

7. 副葬品

武器

丁字形利器（第 32 図 29）「丁字形利器（ていじがたりき）」と言われるものである。両端に刃部を有する板状の身部と身部中央から下に T 字状に延びる板状の頸部、関より下が長い茎部と区別される。

全長 72.5cm、身部が長さ 19.7cm、幅 4.0cm、厚さ 5.5 ～ 6.0mm で、頸部が長さ 13.1cm、幅は身部との接合部分が 3.6cm でそこから関部に向かって細くなり 3.2cm となる。茎部は 55.4cm、幅 1.6 ～ 2.1cm、厚さ 3.5mm、重量 586.46g を測る。

身部の両端に刃部があり、一方は剣菱形（圭頭刃）を呈し、もう一方は蛤刃状をなしている。刃部は斧状の両刃になっており、刃部以外の身部は厚さ 6mm 程度で断面が長方形の板状をなしている。横一列二箇所に幅 6mm 程度の両端玉縁の細帯状の透孔がある。玉縁の直径は 9mm から 10mm 程度で、全体で長さ 4.8cm を測る。

頸部は、身部のほぼ中央に直角に接続する。上方には長さ 10.15cm、幅 6mm 程度の両端玉縁の細帯状の透かしを有する。玉縁の直径は身部にあるものとほぼ同じ大きさである。

関は両関と推定され、鏃は長さ 3.3cm、長軸 3.3cm、短軸 2.3cm の断面楕円形をなし、下端には覆輪のような環状の金具が巻かれている。また、関と接する部分は楕円形の切羽状金具で蓋をした状態になっている。この形状は後述する象嵌大刀にも見られる特徴といえる。

茎部は細長く、茎尻は隅切りの形態を示す。関から 10.1cm、35.6cm の二箇所に目釘穴があり、茎尻に近いほうには目釘が残存する。目釘は 1.7cm が残存する。目釘穴の直径は 4mm 程度を測る。

鞘の痕跡などは一切残っていないが長軸 3.1cm 程度と推測される。

概要報告の際は、目釘穴の二箇所を近接した場所に図示していたが、改めて観察した結果、修正している。また、茎尻の形状についても、概要報告の図から修正してある。

これまでに「丁字形利器」類例は、静岡県沼津市宮原 2 号墳や宮城県多賀城跡第 66 次調査 SI2300 工房跡で知られていたが、新たに兵庫県香美町月岡下

古墳でも出土していることが明らかとなった。これらの位置づけについては、次章（第 4 章第 1 節）において詳細に検討することとしたい。

大刀（第 34 ～ 39 図 30 ～ 35） 30 は銀象嵌装八窓鍔付大刀で、反りのない直刀である。全長 99.0cm、刀身部長 78.1cm、刀身幅 3.2cm、棟厚 0.65cm、茎部長 20.9cm、茎幅 2.1cm を測る。

関は両関の角関である。茎はやや細くなりながらも直線的に隅切りの茎尻に向かう。関より 6.4cm、16.3cm の二箇所に目釘が認められる。目釘の長さは関側で 2.2cm、茎尻側で 2.8cm、径は 5 ～ 6mm を測る。また、関より切先に向かい 1.2cm に径 3mm 程度の鎺元孔、18.3cm の箇所に長さ 4.4cm の鞘口金具が認められる。鞘口金具は一部が欠損しているが、長軸 4.0cm、短軸（幅）3.0cm に復元される。

鍔（30a）は八窓鍔で面と耳に象嵌が施されている。台形の透窓が 8 箇所、片側 4 箇所ずつに配置される。両面とも窓の間を埋めるように S 字文の象嵌が配置され、外周には円形象嵌がめぐる。また、耳にも円形象嵌が全周している。平面形は丸みのある倒卵形で先端はやや尖る。断面の縁は立ち上がらない。長軸 7.9cm、短軸（幅）7.1cm、内孔長軸 3.1cm、内孔短軸（幅）2.4cm、厚さ 8mm を測る。

鎺（30c）は「堰板」のある閉塞式（キャップ状）の鎺である。側面には 2 段の象嵌があり、堰板のある関側に C 字文、下段に S 字文が全周する。堰板部分に象嵌は認められない。堰板部分の長軸 3.7cm、短軸 2.7cm、鉄板の厚さ 3mm の倒卵形で、側面幅は 1.0cm、鉄板の厚さ 3mm である。

第 33 図　鍔（30a）

責金具（30b）は先端のやや尖る倒卵形で側面に銀象嵌が認められる。側面台形で鍔側の幅が広い。鍔側では長軸 4.2cm、短軸（幅）3.3cm、茎尻側では長軸 3.9cm、短軸（幅）3.1cm、厚さ 0.5cm を測る。

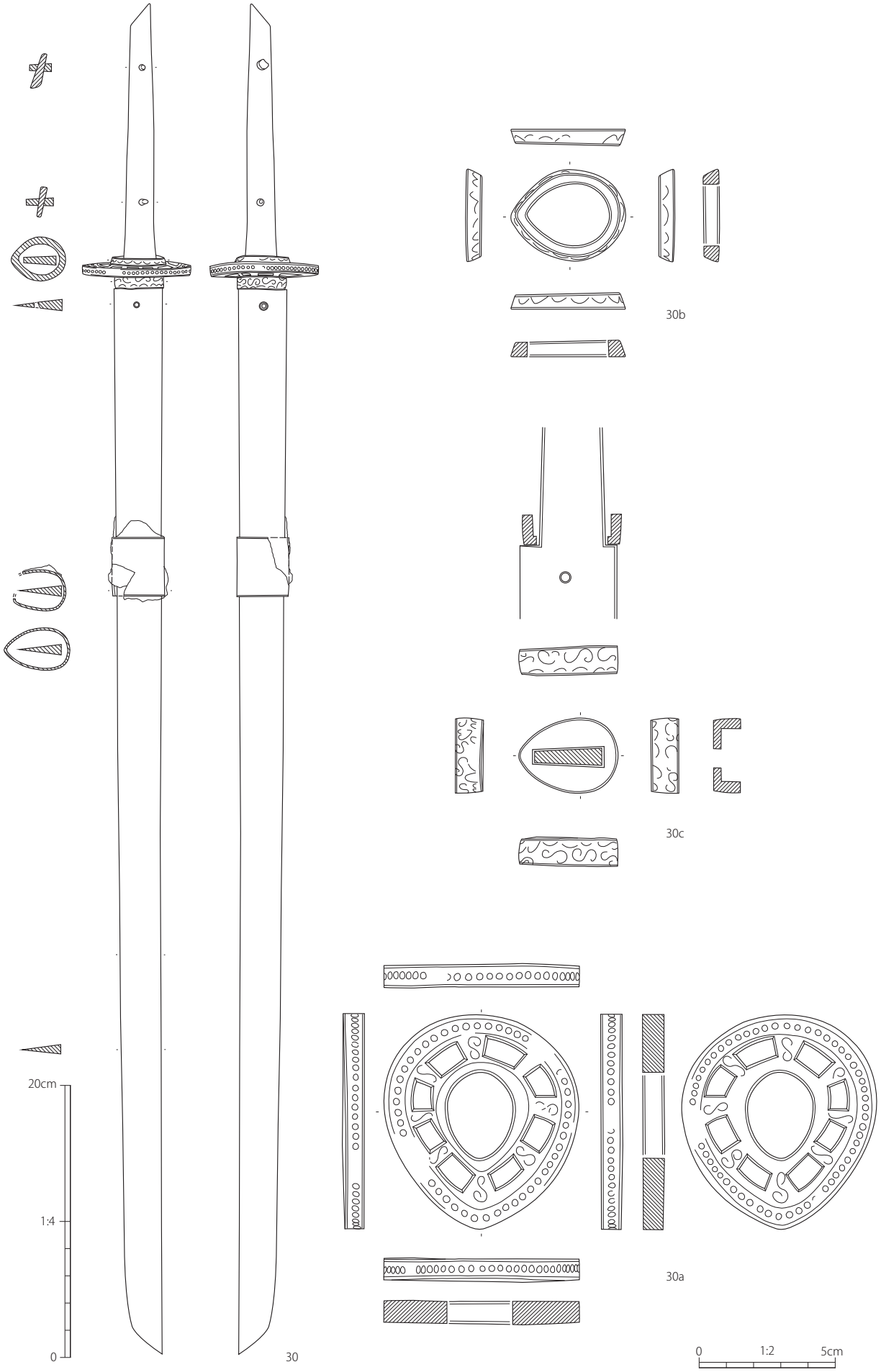
31 は銀象嵌装八窓鍔付円頭大刀で、反りのない直刀である。象嵌文様が若干異なるが、拵え全体が 30 の大刀と共通する。茎はやや細くなりながらも直線的に茎尻に向かうが茎尻が欠損している。関より 5.4cm、13.7cm の二箇所に目釘が認められる。目釘の長さは関側で 2.8cm、茎尻側で 1.1cm を測る。また、関より切先に向かい 1.5cm に鎺元孔が認められる。全長（残存長）84.0cm、刀身部長 70.0cm、刀身幅 3.2cm、棟厚 0.8cm、茎部長（残存）14.0cm、茎幅 2.1cm を測る。

鍔（31a）は八窓鍔で面と耳に象嵌が施されている。両面とも窓の間を埋めるように象嵌が認められるが、X 線でもはっきりしない部分が多い。また、耳にも円形象嵌が全周している。平面形は丸みのある倒卵形で先端はやや尖り、内孔も同じ形態を示す。台形の透窓が片側 4 箇所ずつ均等に配置される。断面の縁は立ち上がらない。長軸 8.8cm、短軸（幅）7.8cm、内孔長軸 3.5cm、内孔短軸（幅）3.4cm、厚さ 7mm を測る。

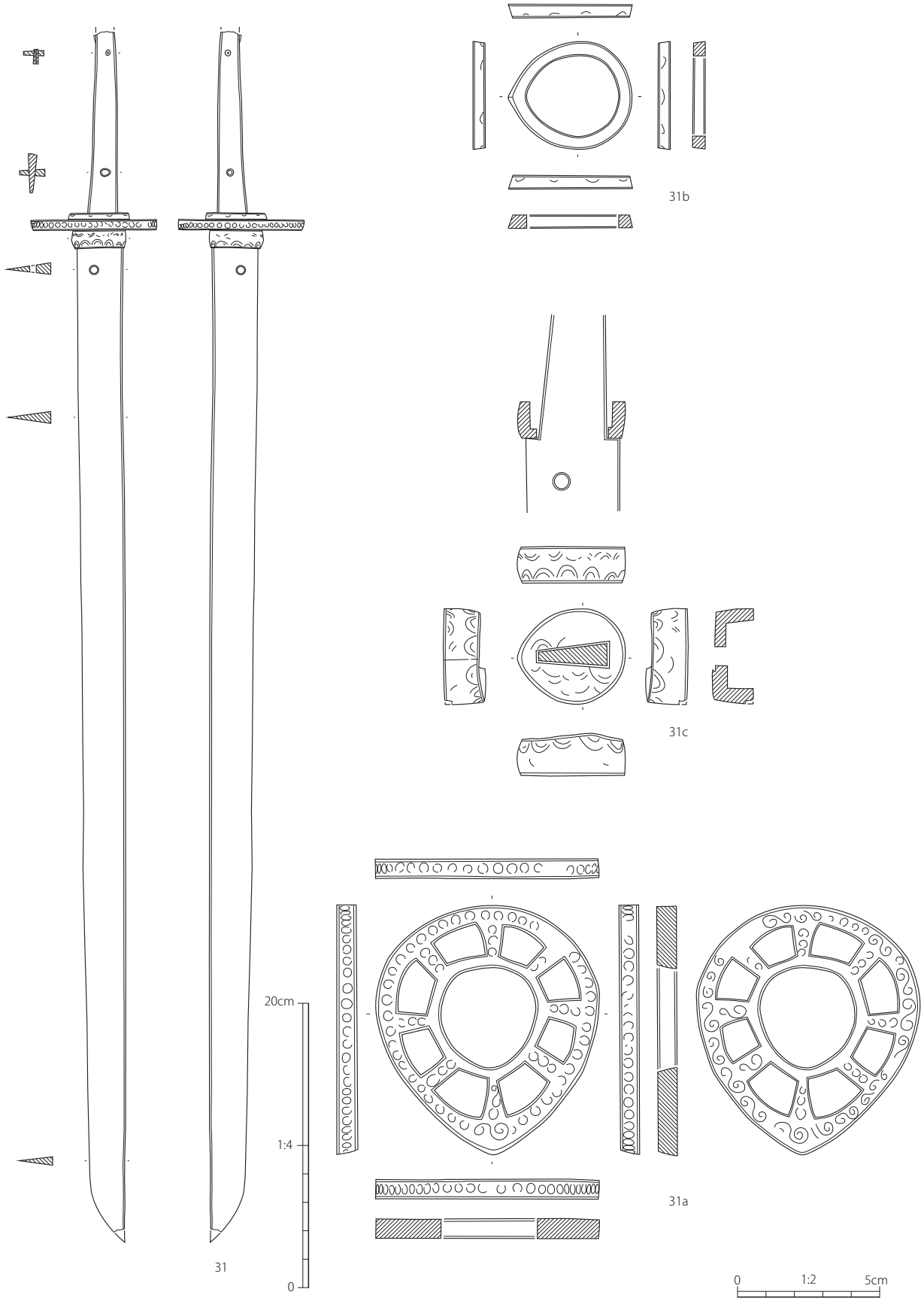
鎺（31c）は「堰板」のある閉塞式（キャップ状）の鎺である。側面には 2 段の重線の半円文の象嵌が全周する。また、堰板部分にも半円文が認められる。堰板部分の長軸 3.8cm、短軸 3.3cm、鉄板の厚さ 3mm の倒卵形で、側面幅は 1.3cm、鉄板の厚さ 3mm である。

責金具（31b）は先端のやや尖る倒卵形で側面に半円文の銀象嵌が認められる。側面台形で鍔側の幅が広い。鍔側では長軸 4.4cm、短軸（幅）3.9cm、茎尻側では長軸 4.1cm、短軸（幅）3.7cm、厚さ 0.45cm を測る。

31d、31e は鞘の責金具である。31d の方が若干小さいことからこちらが切先側と考えられる。いずれも先端のやや尖る倒卵形で側面に二重の半円文の銀象嵌が認められる。31d は長軸 5.5cm、短軸（幅）4.8cm、31e は長軸 6.0cm、短軸（幅）5.0cm を測る。



第 34 図　武器実測図 2

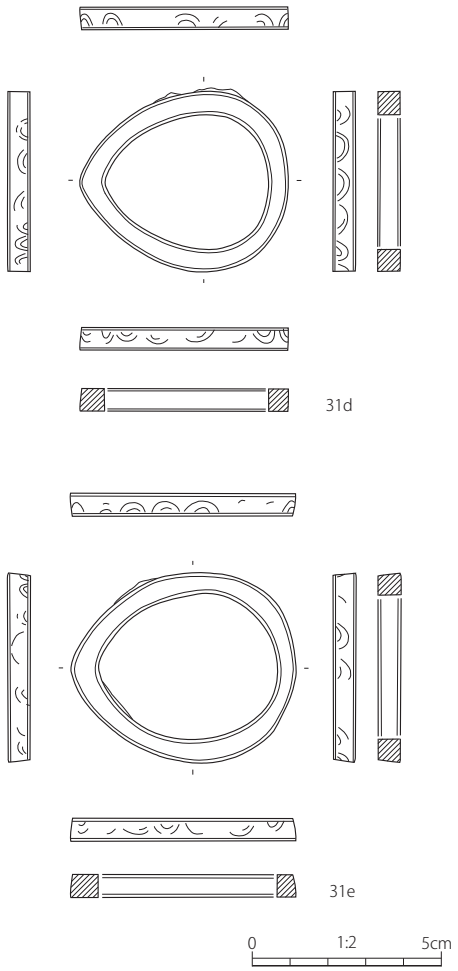


第 35 図　武器実測図 3

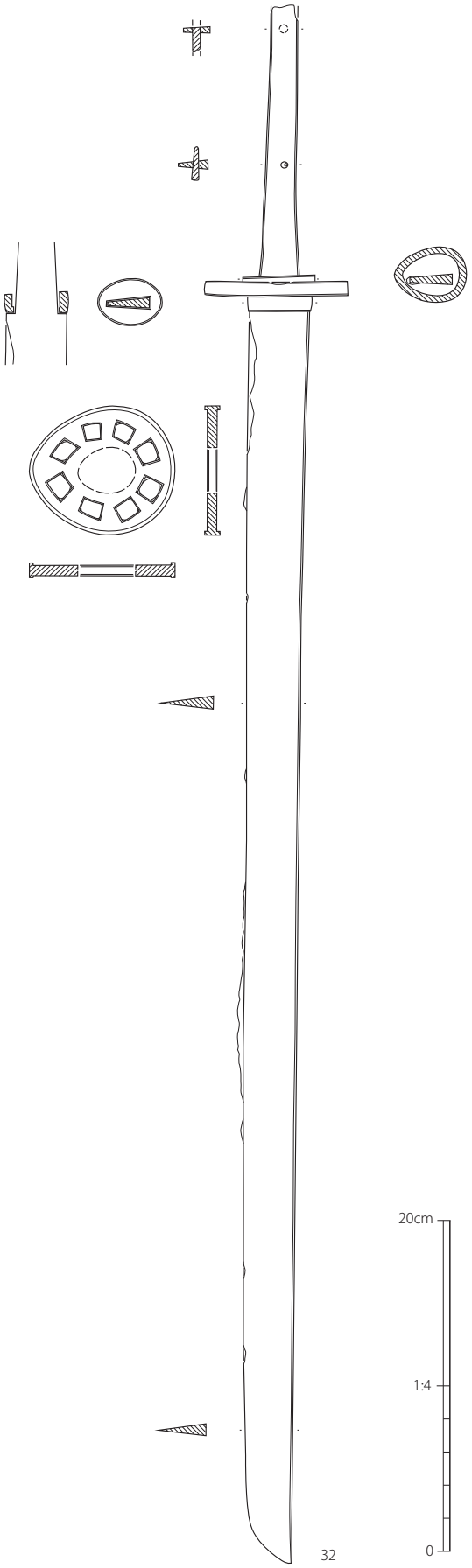
32は八窓鍔付大刀で、反りのない直刀である。関は両関の角関である。茎はやや細くなりながらも直線的に茎尻に向かうが茎尻の一部が欠損している。関より8.8m、17.0cmの二箇所に目釘が認められる。目釘の長さは関側で2.1cm、茎尻側（残存）で1.5cmを測る。鋒元孔は認められない。全長（残存）94.0cm、刀身部長75.5cm、刀身幅3.3cm、棟厚0.8cm、茎部長18.5cm、茎幅2.4cm（茎尻付近1.7cm）を測る。

鍔は八窓鍔で象嵌は認められない。平面形は丸みのある倒卵形で先端はやや尖り、内孔も同じ形態を示す。方形もしくは台形の透窓が8箇所、片側4箇所ずつ均等に配置される。縁部断面はT字形を呈している。長軸8.8cm、短軸（幅）7.8cm、厚さ6mmを測る。鋒、責金具にも象嵌はない。

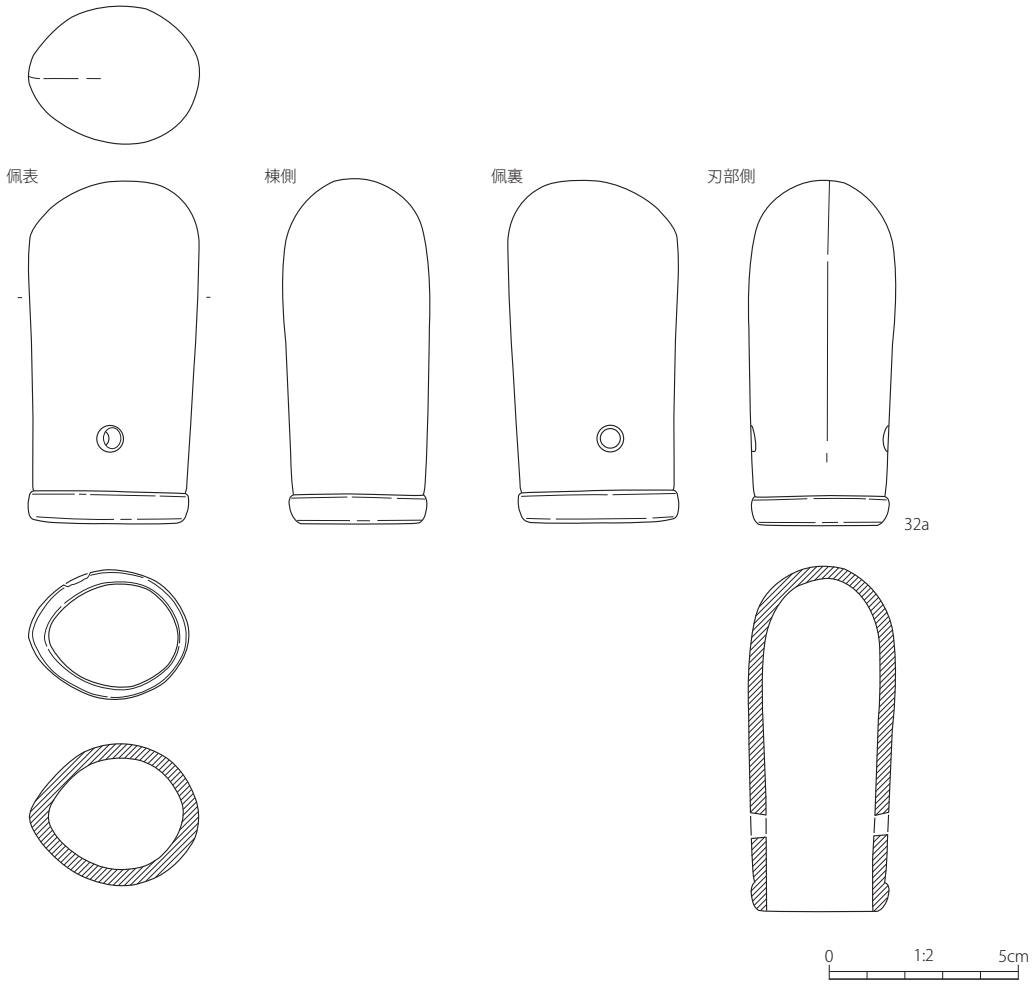
32aの円頭柄頭は大刀32に付属するものとみられる。横断面は切先側がやや窄まる倒卵形を呈している。



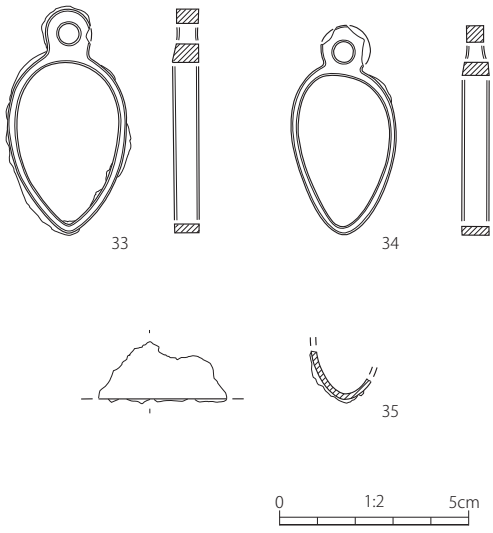
第36図　武器実測図4



第37図　武器実測図5



第 38 図　武器実測図 6



第 39 図　武器実測図 7

柄縁は別造りの鉄製縁金具が装着されるのではなく、柄縁を1mm程度突出させ有段縁にしている。中央よりやや切先側に懸通孔が認められる。内面に木質が若干認められる。全長9.1cm、最大幅4.5cm、厚さ3.7cm、鉄板の厚さ4mmである。X線撮影の結果、象嵌は確認されない。

33・34は大刀の鞘に装着した鉄製の佩用金具（足金物）である。環状部はほぼ同じ幅の倒卵形で、そこに吊り手部が付く。33の方が若干大きく環状部の長軸内法4.3cm、短軸（幅）内法2.7cm、34は長軸内法4.0cm、短軸（幅）内法2.4cmを測る。33・34ともに大刀3振（30・31・32）の周辺から出土しており、サイズなどから32の八窓鍔付大刀に装着されていた可能性が指摘できる。

35は鏂もしくは鞘口金具の破片の可能性が考えられる。残存部から、平面は楕円形をなすものと考えられる。重量は4.44gを測る。

鉄鏃（第40～41図36～128）　概要報告後、遺存状況が悪化し、形状が変化したものが多数あり、また、確認される鉄鏃の本数も少なくなっている。本報告では現在確認される個体を図化し、できる限り概要報告の図面と一致させ、復元図化した。

平根三角形式鉄鏃（36～42）　平根三角形式鉄鏃は現在7点が認められる。36は刃部がややふくらが張り幅広の三角形を示す。鏃身部3.8cm、残存幅3.8cmを測る。

37から42は東駿河でも富士川から潤井川流域に多く分布する特徴的な形式の鉄鏃であり、「尖根三角形式」（長谷川2003・藤村2011）とされてきた一群と考えられるが、大型の36と相似形という共通性や刃部幅を2cm以上も有することから「平根」に分類した。いずれも刃部がややふくらが張り幅広の三角形を示す。鏃身部は1.7cmから2.0cm、幅2.2から2.9cmにおさまる「規格性の高い」鉄鏃（藤村2011）と言える。ただし、頸部長は38が5.1cm、42が11.5cmと違いがある。

平根五角形式鉄鏃（43～47）　平根五角形式鉄鏃は現在5点が認められる。ホームベース形をなすもので、大型（47）、中型（43・44・46）、小型（45）と分けられる。43・44は鏃身部長3.2～3.4cm、鏃身部幅3.8cm、概要報告時の頸部長もほぼ一致している。46は43・44よりは小さいがほぼ相似形といえる。一方、47は、鏃身部長が6.2cm、鏃身部幅3.7cmとやや細長く復元される。45は、尖根系に分類される場合もあるが、他の五角形式との形態的共通性から同じ平根系に分類した。45の茎関は平面的には棘関とされるが、関が全周しており、細い鉄棒を頸部と茎部の境に巻きつけたような製作技法と考えられる。

尖根三角形式鉄鏃（48）　尖根三角形式鉄鏃は現在1点が認められる。非常に小型のもので鏃身部長1.0cm、鏃身部幅1.0cmを測る。

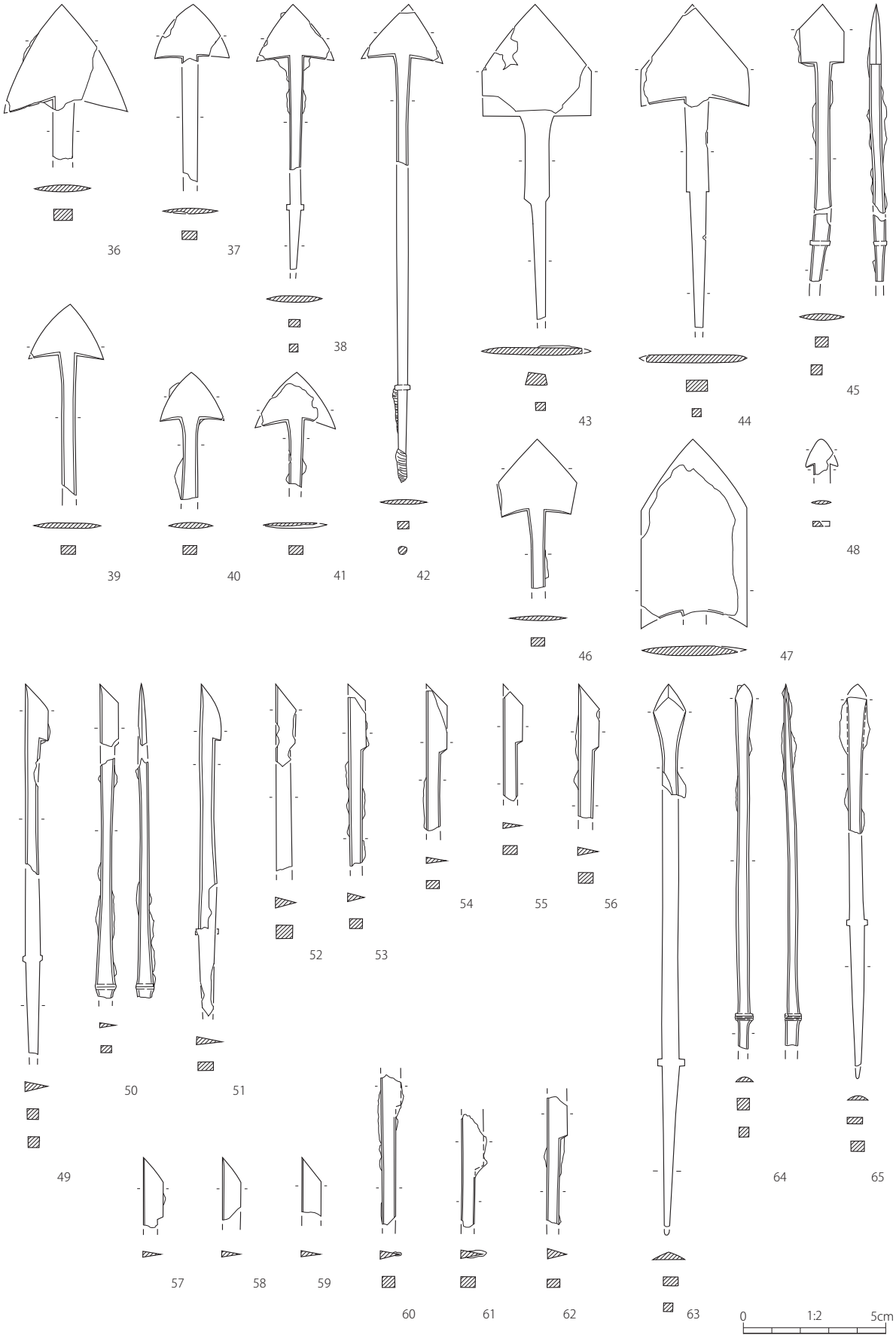
平根片刃箭式鉄鏃（49～62）　平根片刃箭式鉄鏃は現在14点が認められる。51のみが鏃身刃部がやや丸みを残し、逆刺がやや深い。他は鏃身刃部が直線的にカットされ、逆刺はあまり深くない。頸部が残存するものは比較的長く、茎関は基本的に棘関を呈するが50は、45の茎関と同様、関が全周するタイプであろう。東平1号墳でもっとも多く出土した形式の鉄鏃といえる。

尖根鑿箭式鉄鏃（63～65）　尖根鑿箭式鉄鏃は、現在3点が認められる。63は片鎬造り、64・65は片丸造りである。63は鏃身部がやや大きく幅を持つ。64・65は鏃身部と頸部との区別も明瞭でないほどであり刃部が狭い。頸部はいずれも長く、茎関は棘関である。

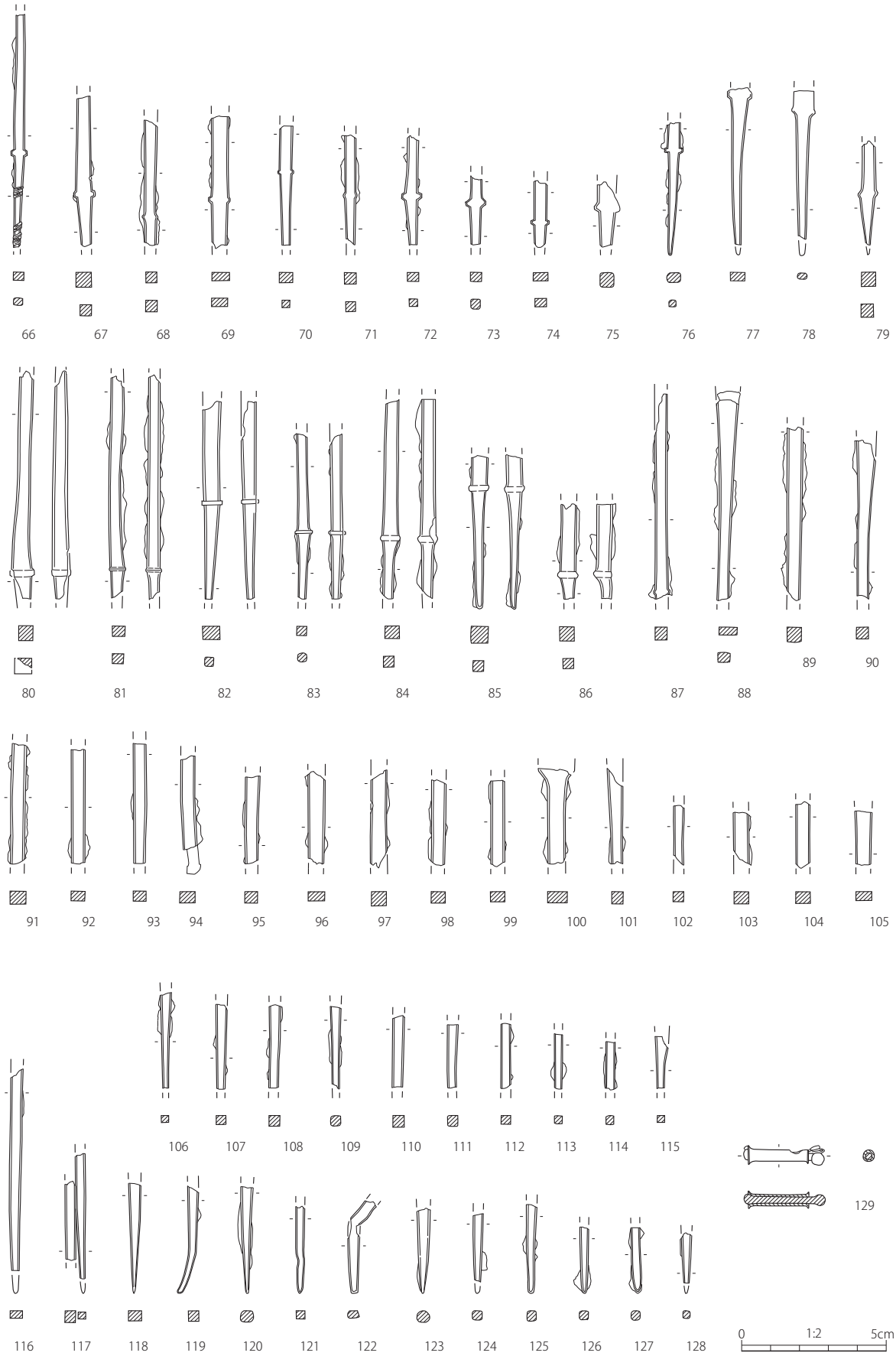
その他の部位（66～128）　66から87は頸部から茎部の茎関が残存するものである。棘関（66～76・79・87）が最も多く、台形関（77・78）も若干ある。注目されるのが80から86の茎関で、前述の通り細い鉄棒などを巻きつけ関を作り出しているタイプである。

88から105は頸部、106から128は茎部と考えられる。

弓金具（第41図129）　129は鉄製の弓金具で球状の頭部をもち、断面は円形である。花弁などは認められない。全長2.8cm、弓幅2.0cm、筒状部径0.4cmを測る。


36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
0
1:2
5cm

第 40 図　武器実測図 8


66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
0
1:2
5cm

第 41 図　武器実測図 9

馬具

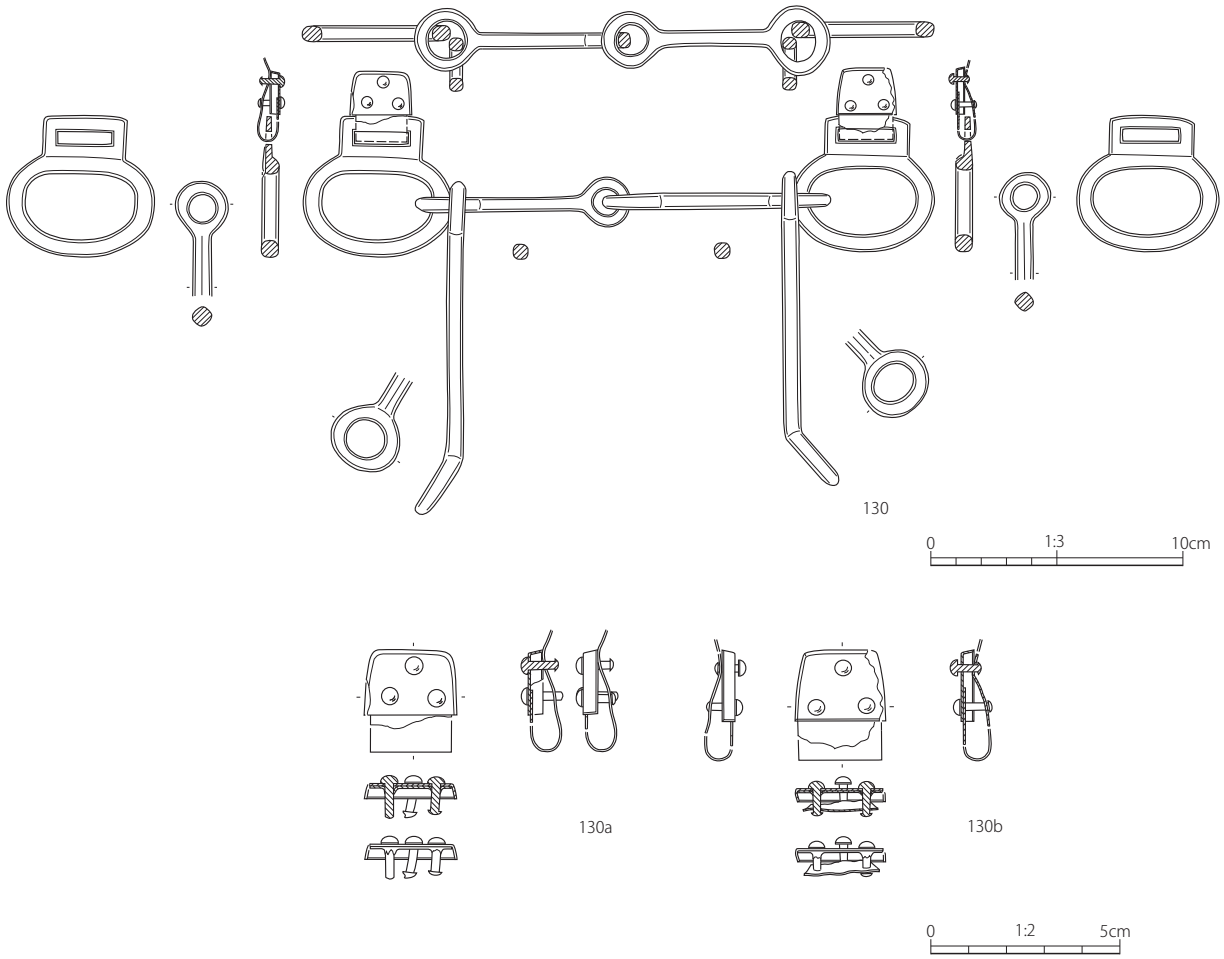
轡（第 42 ～ 43 図 130・131）　130 は大型矩形立聞環状鏡板付轡である。鏡板、引手、銜の接合方法は銜先環に引手と鏡板が装着される「銜介在型」（大谷 2008）の連結である。鏡板は大型矩形（回字形）の立聞が扁平な楕円形の環に鍛接されている。銜は二連銜で、銜先環は C 字形である。引手は一条線引手、く字形引手壺で捩じりは確認されない。左右の立聞には帯飾金具（面繋帯端蝶番金具）（130a、130b）が付く。革帯の表面だけでなく側面も覆うタイプのもので方形を呈している。鋲は 3 箇所に認められる。鮮やかな金色を呈しているが鉄地金銅張ではなくアマルガム技法によるものと考えられる。

法量は鏡板で全高（右）5.4cm、（左）5.6cm、環高（右）3.85cm、（左）3.95cm、環幅（右）5.65cm、（左）5.85cm、立聞幅（右）3.85cm、（左）3.2cm、立聞高（右）1.55cm、（左）1.65cm、立聞孔長辺（右）2.15cm、（左）2.1cm、立聞孔短辺（右）0.45cm、（左）0.5cm である。

銜は左右で 16.5cm である。右側は長さ 9.1cm、銜先端環の外法直径 2.7cm、啣金外法直径 2.3cm である。左側は長さ 8.6cm、銜先端環の外法直径 2.5cm、啣金外法直径 2.0cm である。銜の断面は円形に近い隅丸方形で一辺 0.6cm から 0.8cm である。

引手は右側で 12.5cm、鏡板側の環 2.0cm、引手壺の長さ 2.5cm、幅 2.7cm である。左側で 13.3cm、鏡板側の環 2.1cm、引手壺の長さ 2.6cm、幅 2.8cm である。左右ともに引手の断面は方形から隅丸方形で一辺 0.6cm である。

131 は大型矩形立聞心葉形鏡板付轡である。鏡板、



第 42 図　馬具実測図 1

引手、銜の接合方法は130同様「銜介在型」（大谷2008）の連結である。鏡板は心葉形で長辺部の一辺に大型矩形（回字形）の立聞が鍛接される。鏡板は左右に透かしがあり、中央にある直径2.55cmの円環で銜先環に接続されている。銜は二連銜で、銜先環はC字形である。法量は鏡板で全高（右）5.1cm、（左）4.6cm、心葉部高（右）3.8cm、（左）3.3cm、心葉幅（右）9.6cm、（左）9.2cm、立聞幅（右）3.8cm、（左）3.8cm、立聞高（右）1.2cm、（左）1.2cm、立聞孔長辺（右）2.5cm、（左）2.3cm、立聞孔短辺（右）1.4cm、（左）1.0cmである。

銜は左右で16.9cmである。右側は長さ9.1cm、銜先端環の外法直径2.6cm、啣金外法直径2.3cmである。左側は長さ9.0cm、銜先端環の外法直径2.9cm、啣金外法直径2.3cmである。銜の断面は円形に近い隅丸方形で一辺0.7cmである。

引手は右側で12.7cm、鏡板側の環2.2cm、引手壺の長さ2.7cm、幅2.7cmである。左側で13.2cm、鏡板側の環2.4cm、引手壺の長さ2.85cm、幅2.85cmである。左右ともに引手の断面は方形から隅丸方形である。

鐙（第44～45図132・133）　一対の壺鐙である。壺部が銅製、輪部や踏込部などが鉄製である。柄や壺部との接合方法、全体の形状を勘案しても左右の別は判然としない。

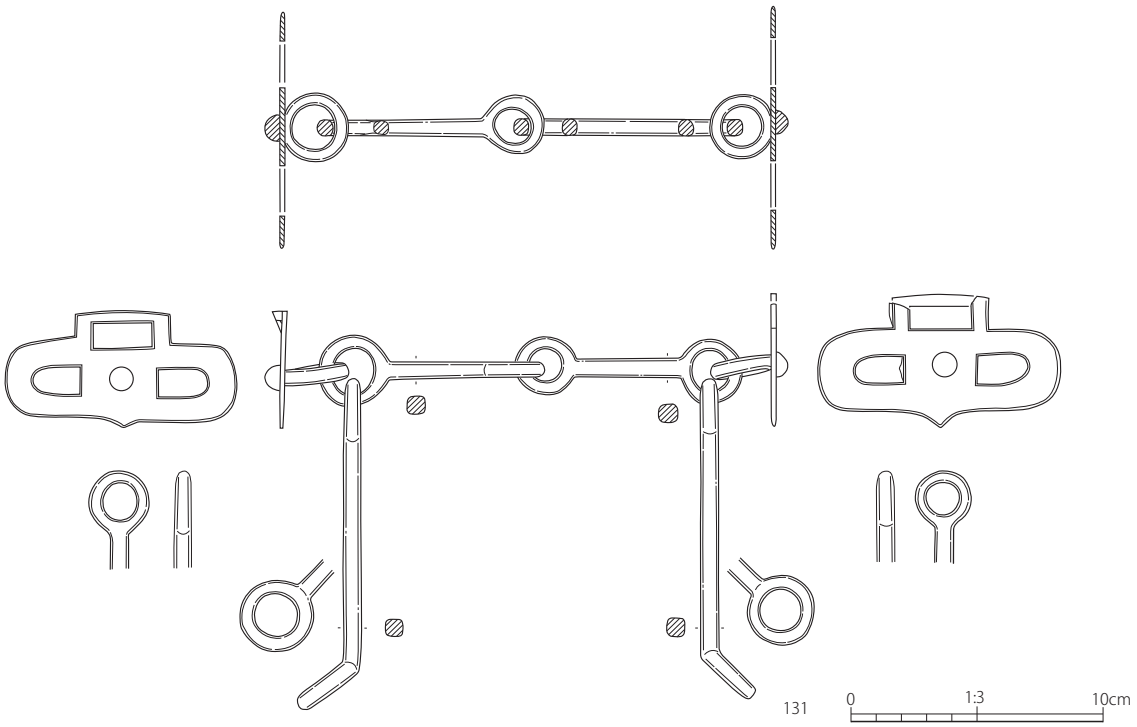
132の柄は上部が欠損するものの、133は完存する。長さ6.5cm、厚さ1.2cmで断面は長方形を呈する。下端に向かって厚くなり、輪部に接合する。

柄の先端には1.7cmほどの突起が付く。また、柄の上部には幅1.9cm、高さ1.2cmの鐙鞦受孔が壺部の口に対して直交方向にあけられている。

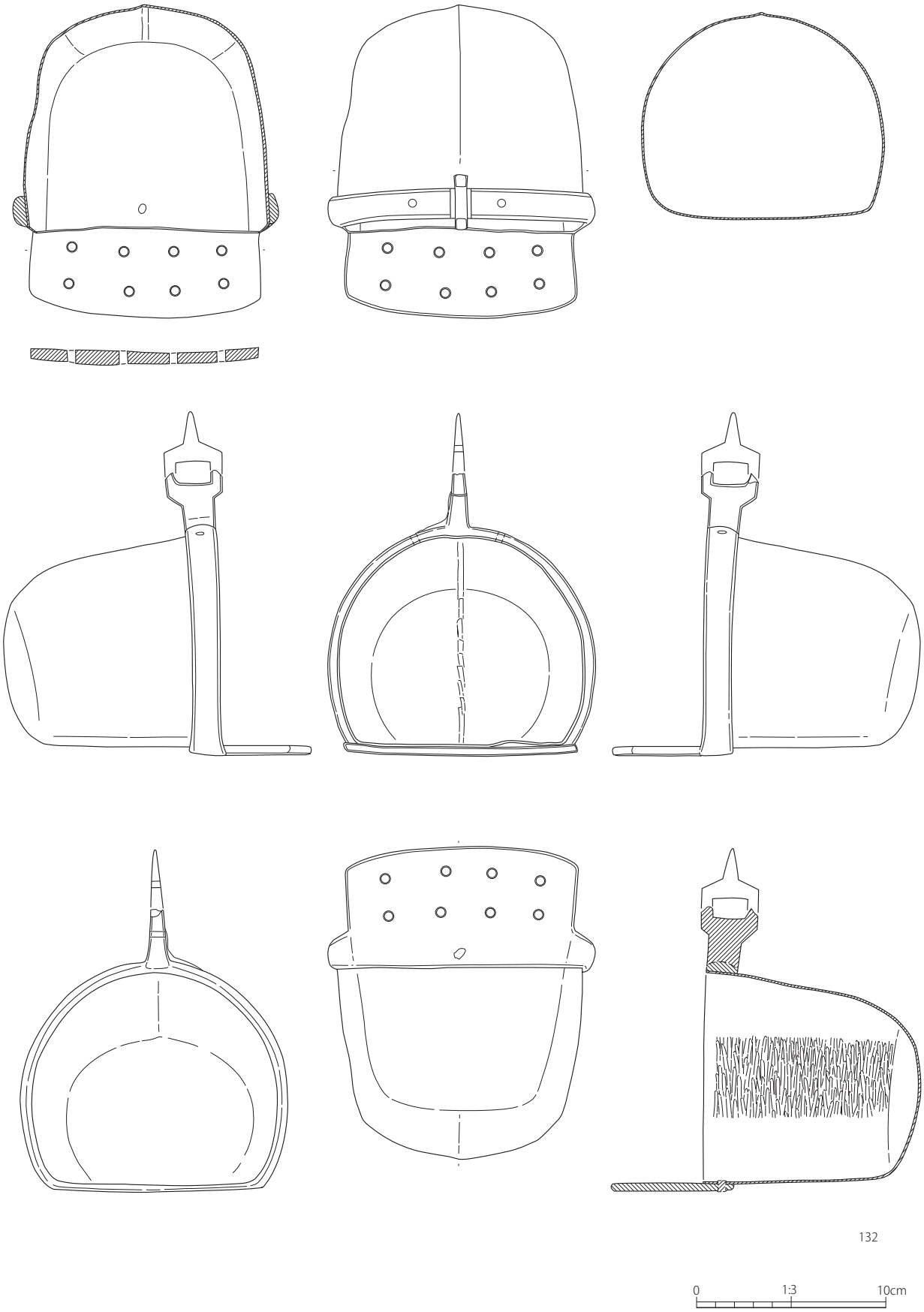
輪部と柄部、踏込部との接合方法は明らかではないが、輪部の断面は蒲鉾形を呈しており、幅1.9cm、厚さ0.75cmを測る。踏込部と輪部は上方2個所の銅製鋲で留められている。鋲の直径は0.4cmである。

踏込部は、長辺12.1cm、短辺6.4cm、厚さ0.5cmの方形板状を呈しており、直径5mm程度の孔が8箇所にあけられている。底板とは直径0.45mmの銅製の鋲により留められている。

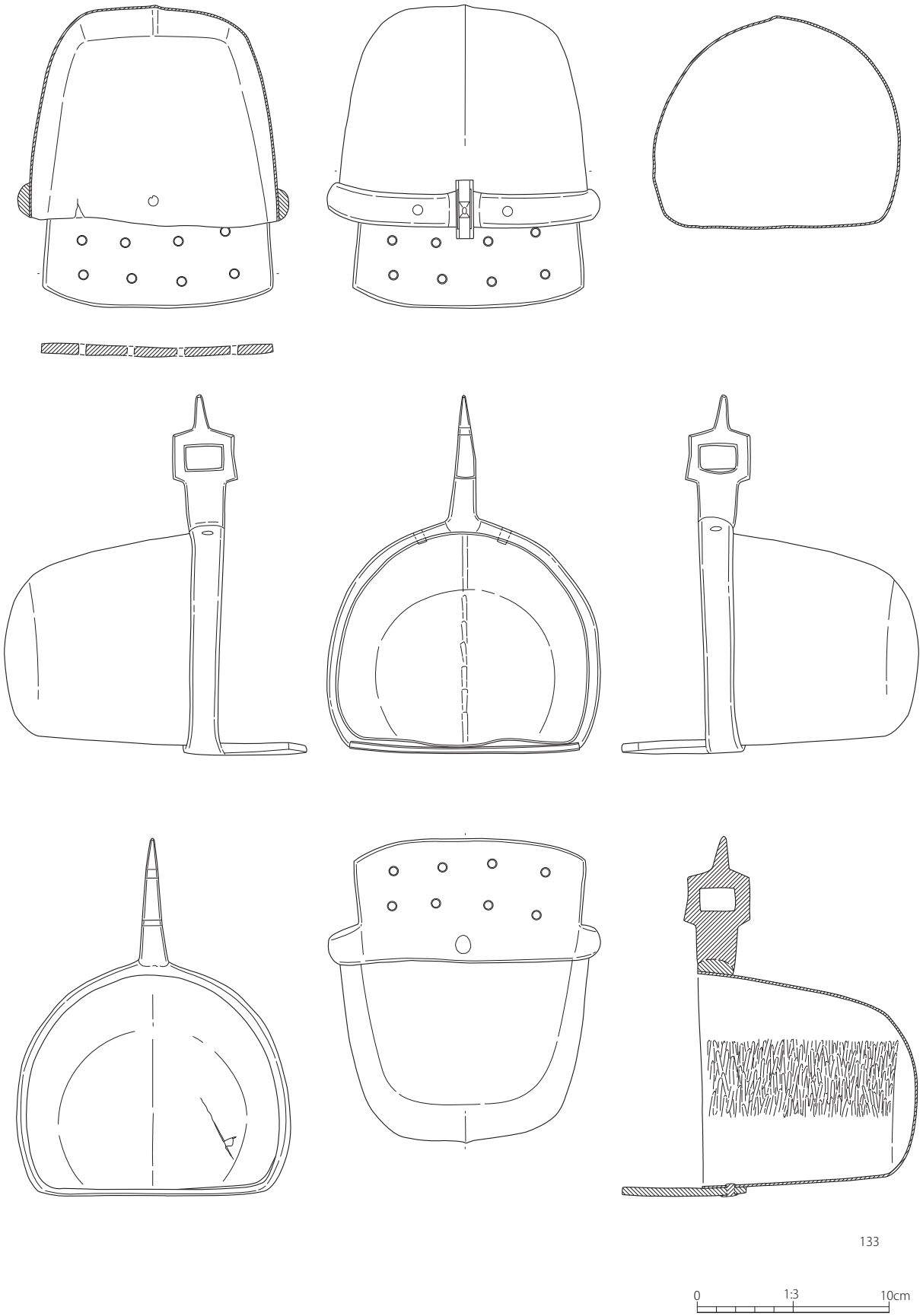
底板と胸板が別の部材から作られているのかは観察できなかったが、胸板上部の中軸線上に接合の際の稜線が確認される。



第43図　馬具実測図2



第 44 図　馬具実測図 3



第 45 図　馬具実測図 4

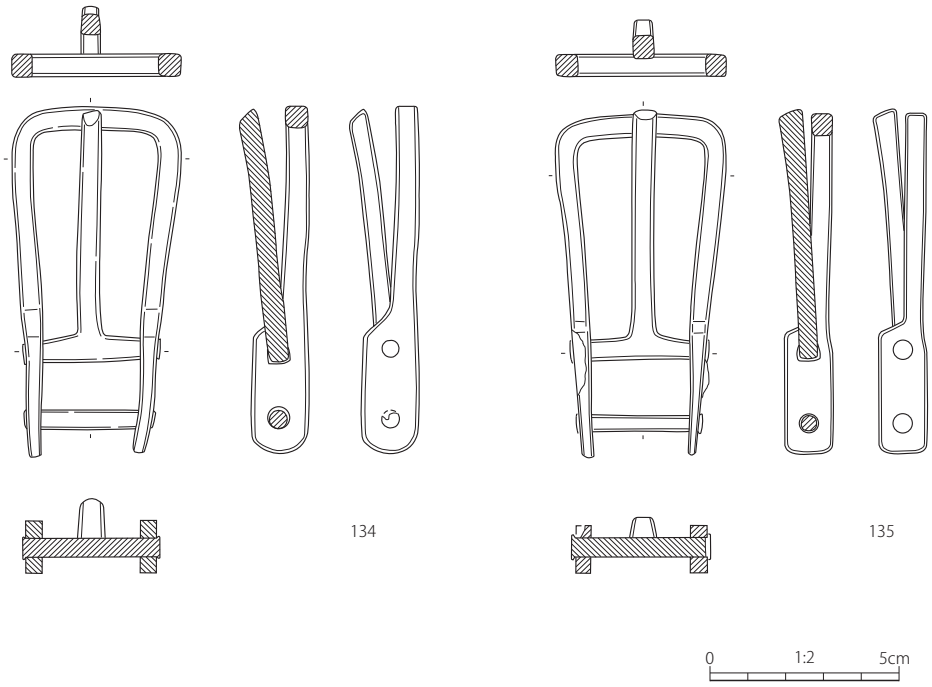
鈒具（第 46 図 134･135）　一対の鉄製鈒具である。T 字形の刺金をもつ。刺金、基部の鉄棒が別づくりで逆 U 字の輪金に貫通させて差し込まれており、側面に鉄棒が観察される。輪金の刺金が差し込まれる部分は 1.5cm ほどの幅をもつ。134 は長さ 9.2cm、基部幅 3.2cm、尻幅 4.5cm、重量 61.94g、135 は長さ 9.2cm、基部幅 3.1cm、尻幅 4.5cm、重量 59.30g とほぼ同じ法量で作られていることから一対をなすものと断定される。

杏葉（第 47 図 136・137）　一対をなすもので花弁形杏葉とした板状の金銅装金具である。非常に薄く、装着に伴う耐久性に乏しく、装飾性の高い金具と考えられる。表面のみアマルガム技法が施されることから布や革などに付けられていた可能性も考えられる。

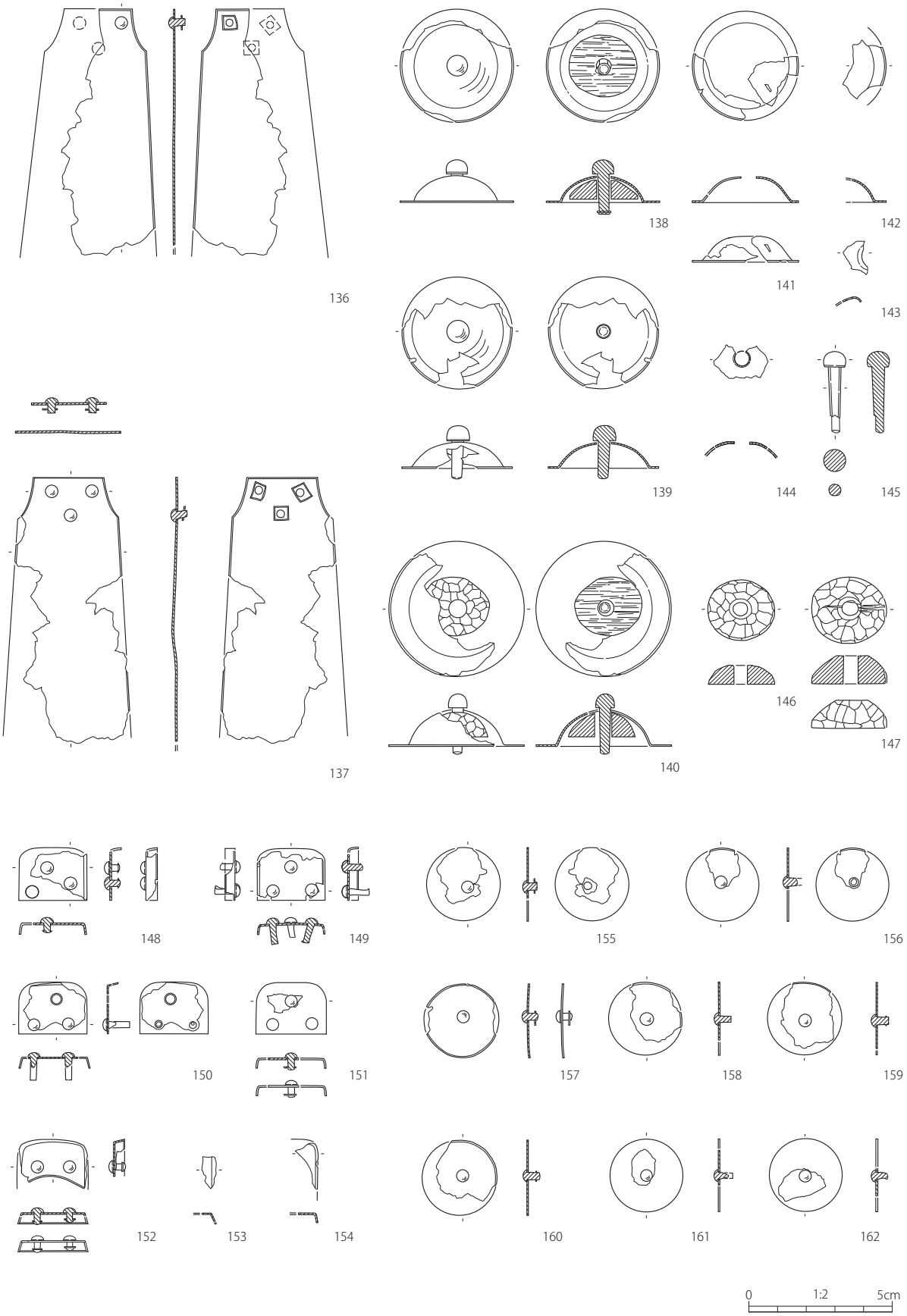
平面形は細長い台形をなすと考えられるが、いずれも図上の下端が欠損する。両側面上方にはえぐりが認められる。上端中央の 3 箇所に円形の鋲があり、裏面には一辺 0.5cm 四方のワッシャーが認められる。

辻金具（第 47 図 138 ～ 147）　半球形の無脚の辻金具である。基本的な構造は本体の鉢形の半球形金具とその頂部中央に 1 個所打たれている笠鋲と鉢形の半球形木部である。138 はもっとも遺存状況が良く、鋲脚にワッシャー状の銅板が付くが、すべてに存在したかは明らかではない。笠鋲や本体から考えられる最低個体数は 4 個体である。

本体である半円形金具は鉢部と縁部に分かれる。表面のみアマルガム技法による鍍金が施される。縁部を含めた直径は 3.9cm、鉢部直径は 2.9cm、鉢部高さ 0.85cm を測る。笠鋲は鉄製で鋲頭のみならず、全体にアマルガム技法による鍍金がされている。鋲頭直径 0.7cm、鋲頭高さ 0.45cm、鋲高は 1.9cm から 2.2cm が残存するが、145 は 2.95cm ある。鋲は笠付近が直径 0.5cm で下に向かって細くなり 0.3cm 程度になる。鉢部内側には半球形の木部が入る。木部中央には半球形金具と同じように笠鋲を貫通させるための直径 0.6cm 程度の穴があく。鉄器による削りにより半球形が作り出され、上部に面を持つものもある。木部の直径は 2.5cm 前後、高さは 0.6cm から 1cm を測る。



第 46 図　馬具実測図 5

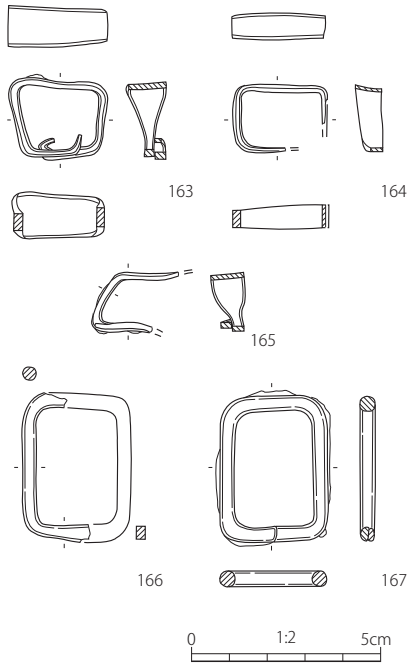

136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
0
1:2
5cm

第 47 図　馬具実測図 6

帯飾金具（第 47 図 148 ～ 162）　148 から 154 は爪形帯飾金具である。いずれも革帯の表面のみならず、側面も覆う形態のもので、爪形を呈している。いずれもアマルガム技法による鍍金が施される。一辺が緩やかなカーブを持ち、鋲が 3 箇所あるタイプ（148 ～ 151）と緩やかなカーブで一辺がえぐられ、鋲が 2 箇所あるタイプ（152）に分かれる。鋲の下方がかしめられているものやワッシャーが認められるものもある。155 から 162 は円形帯飾金具である。直径 2.55cm 程度に復元される円形の帯飾金具で、いずれもアマルガム技法による鍍金が施される。鋲頭の直径は 0.4cm、鋲の長さ 0.6cm を測る。

方形金具（第 48 図 163 ～ 167）　用途不明の方形の金具である。163 から 165 は 1 枚の鉄板を 2.5cm　2.0cm に折り曲げている。重ね合わせ部分は幅を狭くした鉄板を 2 段に合わせるようにしている。鐙の帯などが二重になった部分などを止めておく金具の可能性を考え、馬具として報告する。

166・167 は円形の鉄棒を方形に折り曲げたものである。鉸具の可能性も残るが、サイズも小さく明確ではない。馬具の可能性を考え、ここで報告する。用途としては、前述の 163 から 165 と同じ可能性がある。

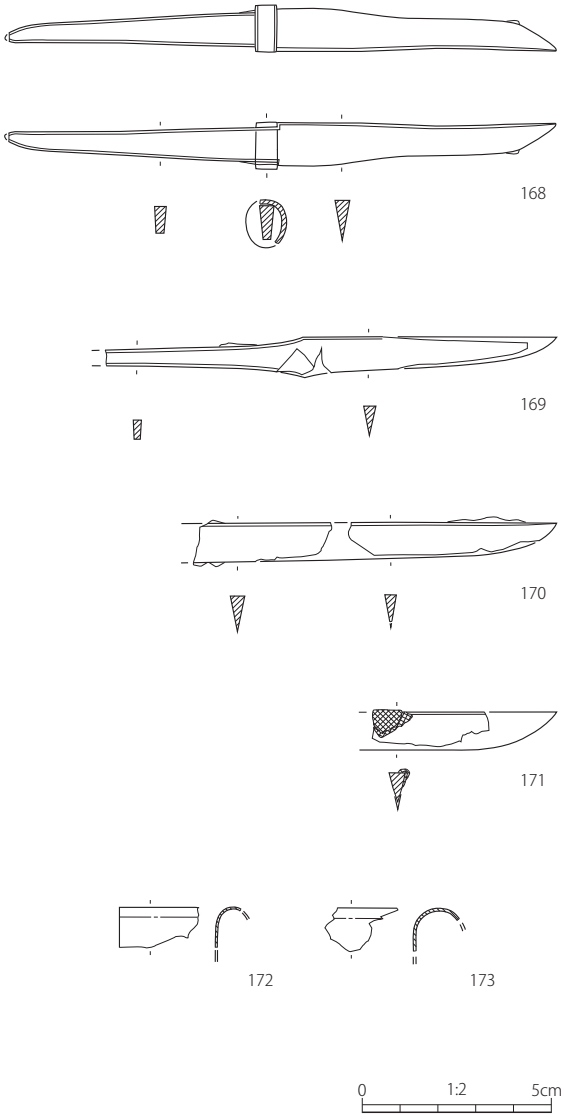


第 48 図　馬具実測図 7

農工具

刀子（第 49 図 168 ～ 173）　168 は完形で柄縁金具（鎹）が装着されている。全長 14.4cm、関幅 1.2cm、茎部長 7.1cm、茎部幅 0.7cm を測る。関は直角両関で茎は窄まりながら直線的に茎尻に向かう。茎尻は円形を呈する。鎹は長軸 1.3cm、短軸（幅）1.0cm に復元される。

169 から 171 はいずれも身部から茎部の破片である。172・173 は外面金銅装の金具である。サイズから刀子の装飾金具の可能性を考え、ここで報告するが、刀装具の可能性も残る。



第 49 図　農工具実測図

土器（第 50 図 176）

須恵器　石室内から出土したことが確実な須恵器は 1 点である。

176 は長頸壺で、肩部から口縁部の一部が残存する。色調は灰色を呈し、白色の砂粒を多く含む。体部と口縁部は別作りで、頸部内面に接合痕が明瞭に残る。外面のノタ目はゆるく、内面にはノタ目が強く観察される。

不明鉄製品（第 51 図 174・175）

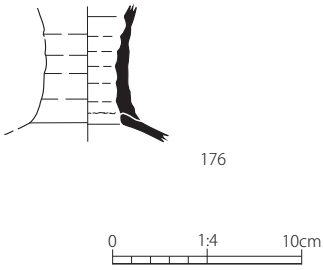
用途不明の鉄製品である。

174 は若干、カーブを有し、175 は屈曲している。断面が方形ではなく、円形の鉄棒のため、鉄鏃ではなく馬具の可能性が想定される。現代の製品の可能性が高く、不明鉄製品とした。

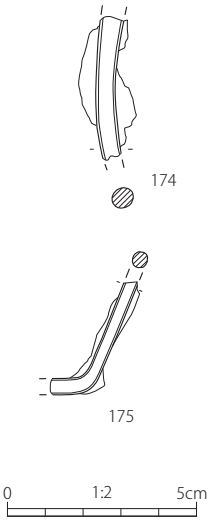
古墳外出土遺物（第 52 図　外 1 ～外 6）

東平第 1 号墳の周囲に設定したトレンチから、奈良時代から平安時代にかけての竪穴建物跡が検出されている。概要報告では建物跡の検出プランが報告されているが、現在、それを示す調査原図が見つかっていない。そのため、本報告では、出土した遺物を報告するに留める。古墳外から出土したものは「外○」と標記する。

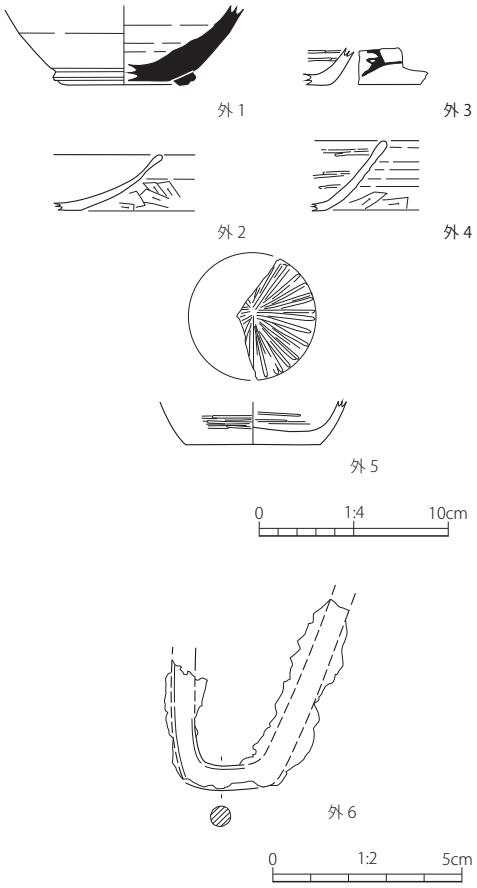
外 1 は須恵器の長頸壺の底部である。高台部は摩滅が著しい。胎土は砂っぽく、全体的に白色を呈する。8 世紀後半から末頃と考えられる。外 2 は土師器の甲斐型坏である。胎土が精緻で底部外面に左上がりのヘラケズリが認められる。甲斐型土器の最終段階の 10 世紀と考えられる。外 3 から 5 は駿東型坏と考えられる。外 3 の外面には墨書が認められるが、判読不能。いずれも 9 世紀と考えられる。外 6 は断面円形の鉄製品である。現代の可能性が高い。



第 50 図　石室出土土器実測図



第 51 図　不明鉄製品実測図



第 52 図　古墳外出土遺物実測図

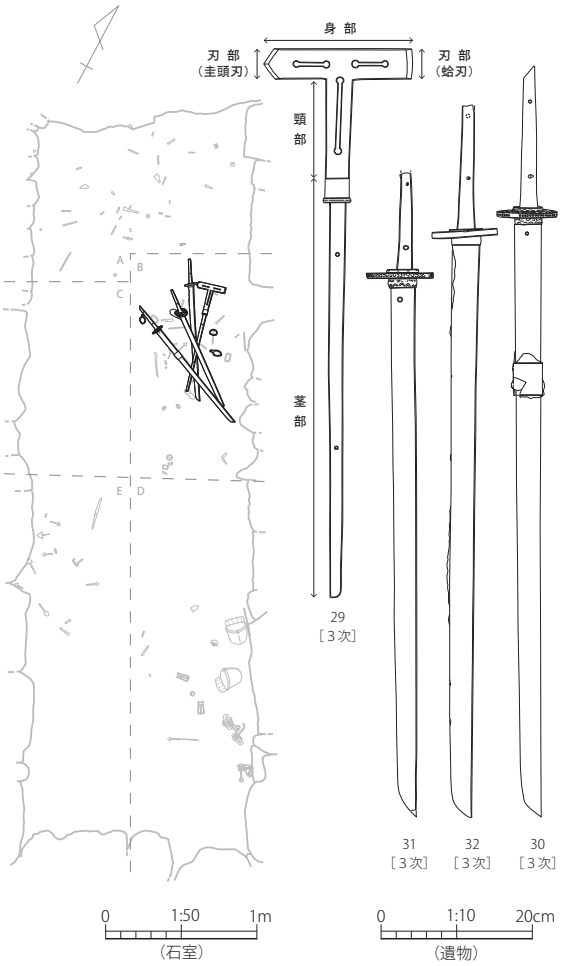
第4章　考　察

第1節　日本列島における丁字形利器について

佐藤 祐樹

はじめに

東平1号墳を特徴付ける遺物のひとつに丁字形利器がある。しかし、その特異な形態の一方で、用途や系譜、年代など不明な点が多い。東平1号墳において丁字形利器が出土した当時は、隣市である沼津市宮原2号墳においても出土例が認められていたがその後、資料の増加はあまりなく、現在、列島内で4例が認められるのみである。以下では、丁字形利器の類例を報告し、用途や系譜などを考察する基礎としたい。



第53図　丁字形利器出土状況

1　丁字形利器の類例

静岡県富士市東平1号墳

東平1号墳は石室全長は5.12mを測る横穴式石室墳で、周溝の内縁から推定される墳丘規模は南北13.50m、東西12.75mを測る円墳である。副葬品として、大刀は象嵌装大刀を含めて3振が出土しており、大刀の横に並べられるように丁字形利器が出土した。

東平1号墳例は、両端に刃部を有する板状の身部と身部中央から下にT字状に延びる板状の頸部、関より下が長い茎部と区別される。全長72.5cm、身部が長さ19.7cm、幅4.0cm、厚さ5.5～6.0mmで、頸部が長さ13.1cm、幅は身部との接合部分が3.6cmでそこから関部に向かって細くなり3.2cmとなる。茎部は55.4cm、幅1.6～2.1cm、厚さ3.5mmを測る。

身部の両端に刃部があり、一方は圭頭刃をなし、もう一方は蛤刃をなしている。刃部は斧状の両刃になっており、刃部以外の身部は断面長方形の板状をなしている。横一列二箇所に幅6mm程度の両端玉縁の細帯状の透孔がある。玉縁の直径は9mmから10mm程度で、全体で長さ4.8cmを測る。

頸部にも一箇所、長さ10.15cm、幅6mm程度の両端玉縁の細帯状の透かしをもつ。

関は両関と推定され、鏃は長さ3.3cm、長軸3.3cm、短軸2.3cmの断面楕円形をなし、下端は覆輪のように環状の金具が巻いてある。また、関と接する部分は楕円形の切羽状金具で蓋をした状態になっている。

茎部は細長く、茎尻は隅切りの形態を示す。関から10.1cm、35.6cmの二箇所に目釘穴があり、茎尻に近いほうには目釘が残存する。目釘は1.7cmが残存する。

埋葬年代は他の共伴遺物から7世紀中頃（飛鳥Ⅱ）と考えられている。

静岡県沼津市宮原2号墳

宮原2号墳は静岡県沼津市下香貫にかつて存在した古墳である。後藤守一らにより報告され知られるようになったが（鈴木・後藤1922）、正式な発掘調査での出土ではなく、墳丘や石室規模、出土状況など明らかでないことが多い。それによると榊原太一郎とされる人物が高さ4m程度の円墳を発掘し、全長9m程度の横穴式石室に組合せ式石棺が2基存在したらしい。そこから丁字形利器1とともに、金環、刀剣、鉄鏃1、環状鏡板付轡1、鏡板付轡1、壺鐙2（1セット）、鉸具1、須恵器（坏蓋3、高坏1、長頸壺1、フラスコ瓶2、平瓶2、瑙2）が出土したとされる（沼津市2002）。

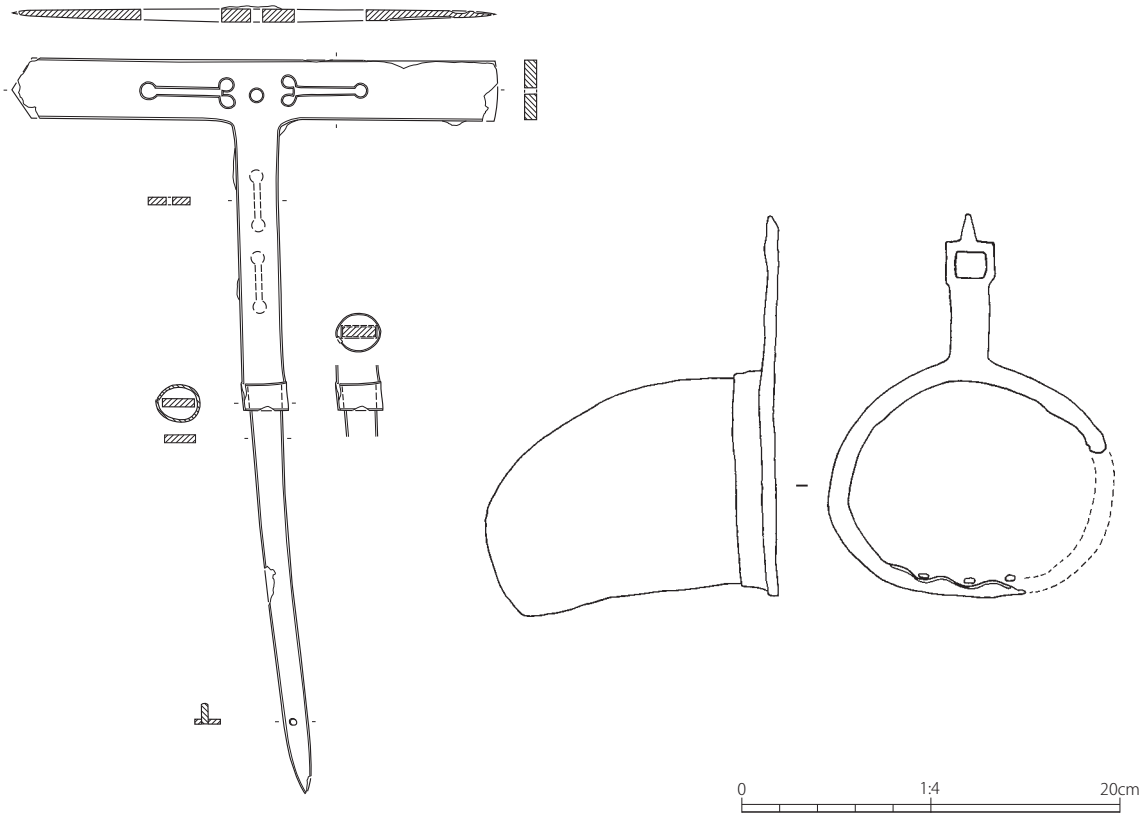
宮原2号墳例は、今回の報告にあわせて改めて実測を行なった。両端に刃部を有する板状の身部と身部中央から下にT字状に延びる板状の頸部、関より下が長い茎部と区別される。全長38.9cm、身部が長さ残存で25.3cm、復元値で25.6cm、幅3.2cm、厚さ5.5～6.0mmで、頸部が長さ13.9cm、幅2.5cm、厚さ4mmを測る。茎部は21.8cm、幅1.2～1.7cm、厚さ4mmを測る。

身部の両端に刃部があり、一方は圭頭刃をなし、もう一方は蛤刃をなしていると考えられるが欠損しているため明らかではない。刃部は斧状の両刃になっており、刃部以外の身部は断面長方形の板状をなしている。横一列二箇所に幅5mm程度の両端玉縁の細帯状の透孔がある。内側の玉縁は2個認められ、玉縁の直径は9mmから10mm程度で、全体で長さ4.5～5.0cmを測る。また、細帯状の透かしの間には直径7mm程度の円形透かしをもつ。

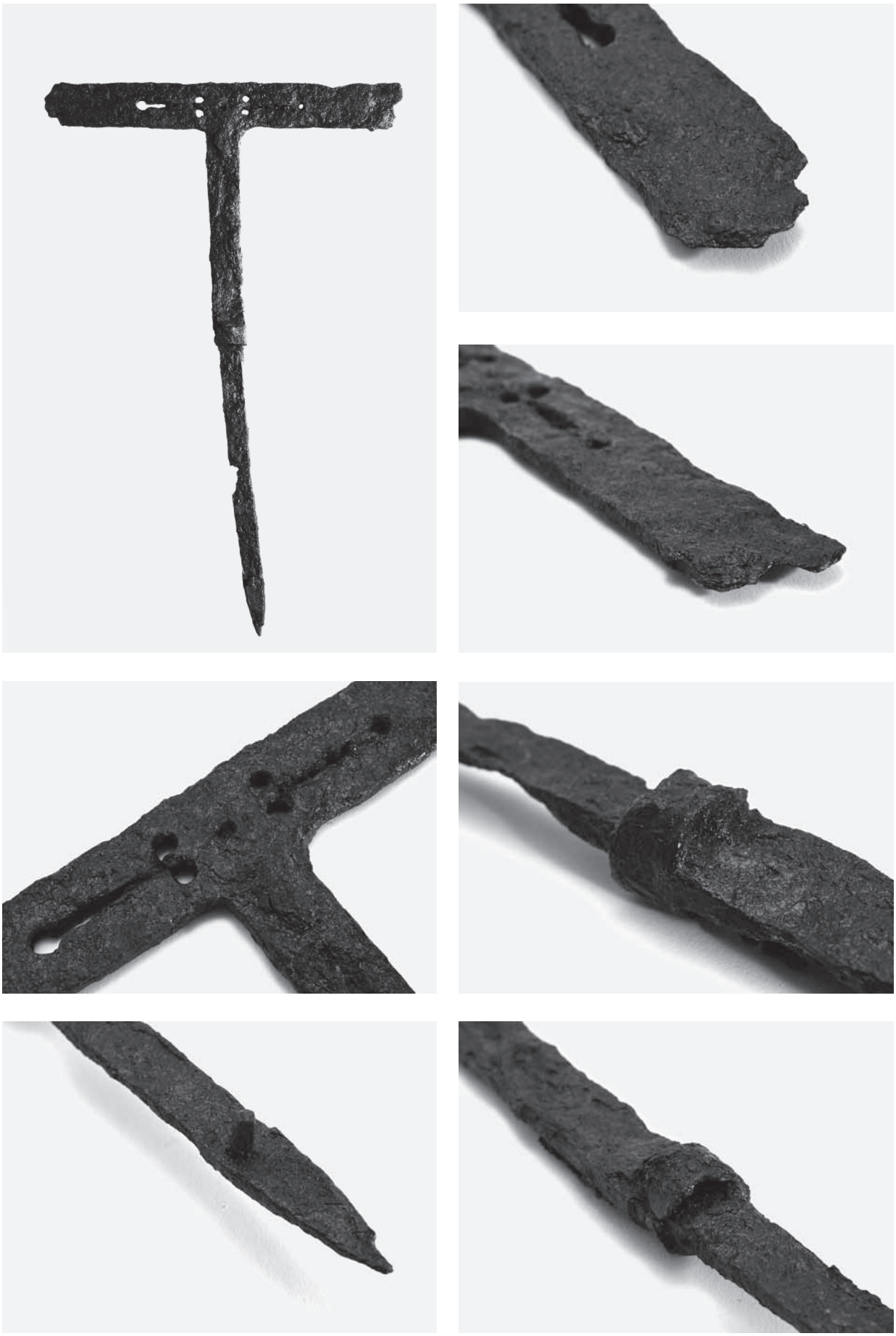
頸部にも一箇所もしくは二箇所、長さ3.3cm、幅3mm程度の両端玉縁の細帯状の透かしをもつように観察される。

関は両関と推定され、鏃は長さ1.5cm、長軸2.3cm、短軸2.0cmの断面楕円形をなす。また、関と接する部分は楕円形の切羽状金具で蓋をした状態になっている。

茎部は細長く、茎尻は尖る。関から7.5cm、17.9cmの二箇所に目釘穴と考えられる痕跡が有るが関側については明確ではない。茎尻に近いほうには目釘が残存し1.1cmが残存する。



第54図　宮原2号墳出土遺物



第 55 図　宮原 2 号墳丁字形利器

時期については、共伴している壺鐙から推測すると、開口部に平行する受口で踏込の舌のないタイプ（第3節大谷論考参照）で、TK209型式～飛鳥Ⅰ併行期のものが多く、『静岡縣史』（静岡縣1930）に掲載された須恵器の写真の時期とも矛盾しないことから、TK209型式～飛鳥Ⅰ併行期と考えられる。

宮城県多賀城市多賀城跡SI2300工房跡

宮城県多賀城跡大畑地区（第66次発掘調査）のSI2300工房跡から出土した（宮城県多賀城跡調査研究所1996）。SI2300工房跡は建替えによる拡張（SI2300A工房跡→SI2300B工房跡）があり、さらにSI2300B工房跡は床面の嵩上げの整地により三段階がある。

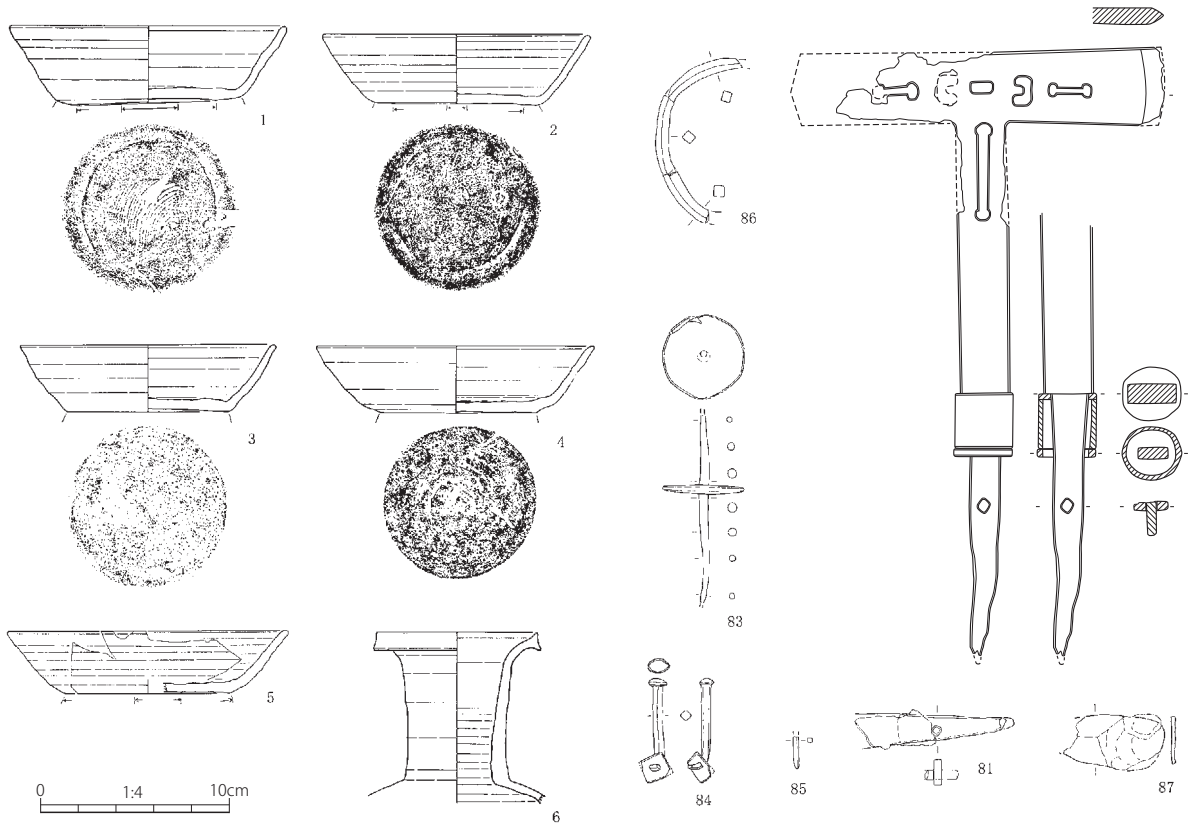
丁字形利器はその最終段階であるSI2300B工房跡第3段階において出土している。SI2300全体では、折り釘や鋲付釘、板状鉄製品、壺金具、錠前、刀子、紡錘車そして丁字形利器などの豊富な鉄製品とともに鍛治炉が検出されていることから、新たに鉄製品を製作するための再利用品の素材として工房に持ち込まれたものと考えられている。8世紀後葉から9世紀初頭頃の遺構と考えられている。

全長31.7cm、身部は70　近く折り曲がった状態で出土し、折れを伸ばした状態で長さ17.2cmが残存し、幅3.7～3.9cm、厚さ8mmを測る。また、頸部は長さ14.1cm、幅2.5cm、厚さ10mm、茎部は先端がわずかに欠損するものの13.8cm、幅2.0cm、厚さ6mmを測る。

身部の一方は蛤刃をなし、もう一方は欠損している。刃部は斧状の両刃になっており、刃部以外の身部は断面長方形の板状をなしている。横一列に左右対称の透孔があり、中央に隅丸長方形透かし、その両脇に勾玉状透かし、さらに両端玉縁細帯状透かしが配置されている。頸部にも一箇所、長さ約5cm程度の両端玉縁細帯状の透かしをもつ。

関は両関と推定され、鏃は長さ3.1cm、長軸3.2cm、短軸2.8cmの断面楕円形をなし、下端は覆輪のように環状の金具が巻いてある。また、関と接する部分は楕円形の切羽状金具で蓋をした状態になっている。茎部は細長く、関から5.7cmの箇所に目釘穴がある。

出土土器から8世紀後葉から9世紀初頭頃の遺構と考えられているが、製作年代はさらにさかのぼると考えられる。



第56図　多賀城跡SI2300B出土遺物

兵庫県香美町月岡下古墳

兵庫県月岡下古墳は、土地区画整理事業の事前調査として確認調査が行われ、丁字形利器（概報では「鉄斧状鉄製品」）が出土しているが（香住町教育委員会 1997）、これまで図が公表されておらずあまり知られていない資料であったが、本報告にあわせて、共伴遺物とともに図化作業を行なった。

月岡下古墳は兵庫県美方郡香美町香住区に所在する横穴式石室墳で、奥壁と片側の側壁が良好に残存し全長 4.3m、幅 1.6m を測る。墳丘規模、墳形ともに明らかではない。確認調査のみで古墳そのものは現在も保存されているため、副葬品の全容も明らかではない。現在確認されるものは、丁字形利器 1、大刀 1、鉄鏃 4 以上、馬具（鉸具 2、飾金具 5 以上）、不明鉄製品 1、耳環 4、勾玉 1、管玉 2（内 1 点はガラス製）、切子玉 10、鉄斧 1、刀子 1、ヤリガンナ 1、紡錘車 1、須恵器 22（坏蓋 7、坏身 8、碗 3、高坏 2、壺 1、甕 1）である。耳環の個数などから追葬の存在が推測され、須恵器も TK209 型式期のものが認められる。丁字形利器は須恵器の坏身や坏蓋に身部を重ねるように出土しており、後述するように茎部が捩れた状態で出土している。

月岡下古墳の丁字形利器は身部の形状や透かしの形状が前述の三例とは異なるものの両端に刃部を有する板状の身部と身部中央から下にＴ字状に延びる板状の頸部、関より下が長い茎部と区別されるなどの基本的要素は共通する。保存処理の際に茎部のねじれを修正しており全長は 81.6cm、身部が長さ 19.9cm、最大幅 5.9cm、厚さ 1.3 ～ 1.5mm で、頸部が長さ 9.4cm、幅は身部との接合部分が 2.8cm、厚さ 1.3cm。茎部は出土時に捩れて直線的になっていたが、処理後、長さ 66.6cm、幅 1.4 ～ 1.8cm、厚さは茎付近で 10mm、茎尻側で 4mm を測る。

身部の両端に刃部があり、一方は圭頭刃をなし、もう一方は蛤刃をなしている。圭頭刃側の刃部は両刃、蛤刃側は扁平方刃になっており、刃部以外の身部は断面長方形の厚い板状をなしている。身部の透かしは中央の縦長方形の透かしを中心に左右に展開する。圭頭刃側には長三角形の透かしを横にして先端を刃部側に向けている。また、三角形の先端上下には勾玉形透かしの凸部を向かい合わせるようにして二個配置する。逆に蛤刃側は幅 0.5cm、長さ 5cm の縦長方形の透かしを上下二段に配置している。

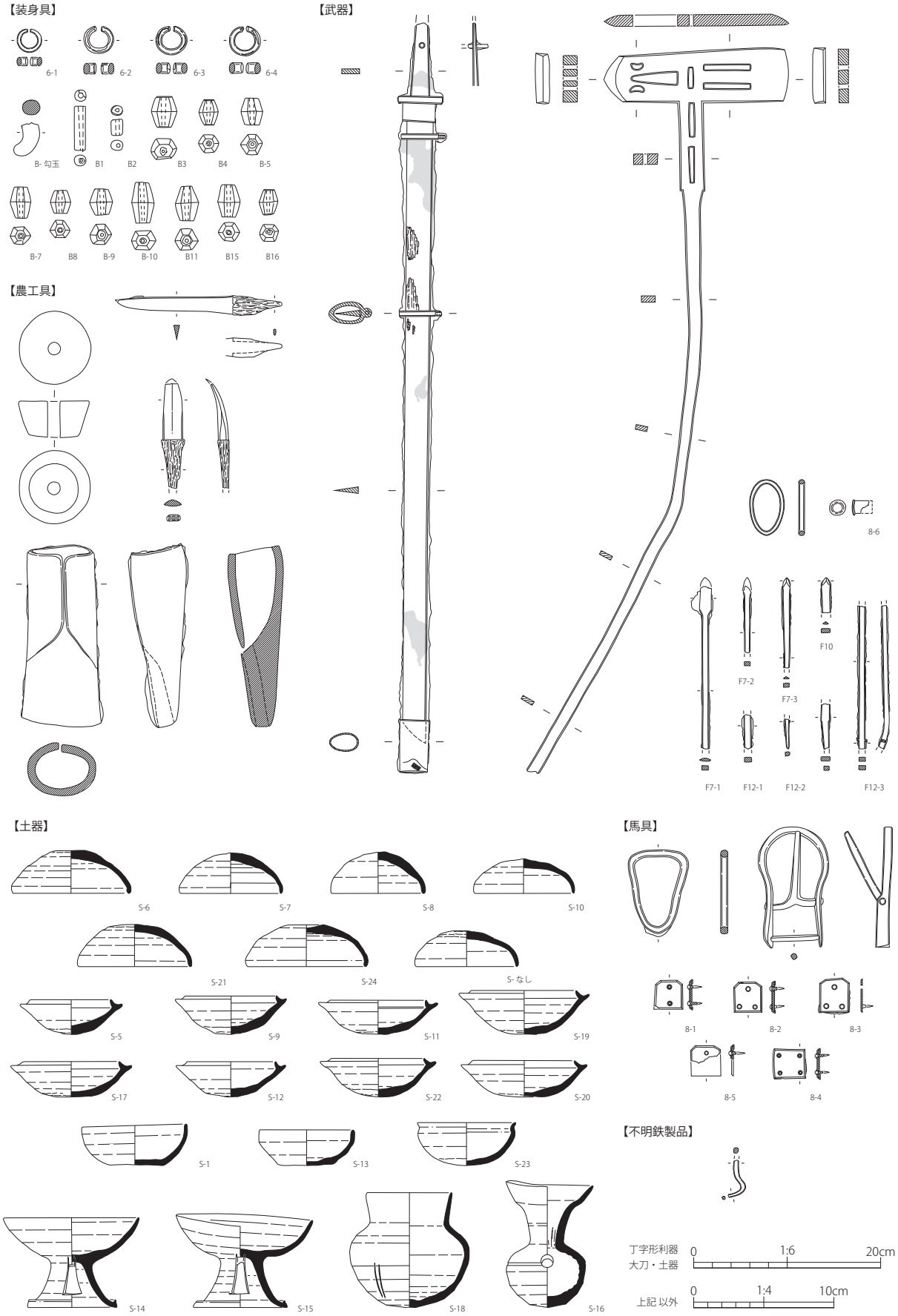
頸部に二箇所、長さ 3.6cm、幅 5mm 程度の縦長方形の透かしを縦に二段もつ。

関は両関で、鏃は残存しない。茎部が捩れていて出土したことからも副葬時には柄が装着されていなかった可能性がある。

茎部は細長く、茎尻は欠損する。肉眼観察からは目釘穴は認められない。

第 57 図　月岡下古墳遺物出土状況（1）

第 58 図　月岡下古墳遺物出土状況（2）



第 59 図　月岡下古墳出土遺物

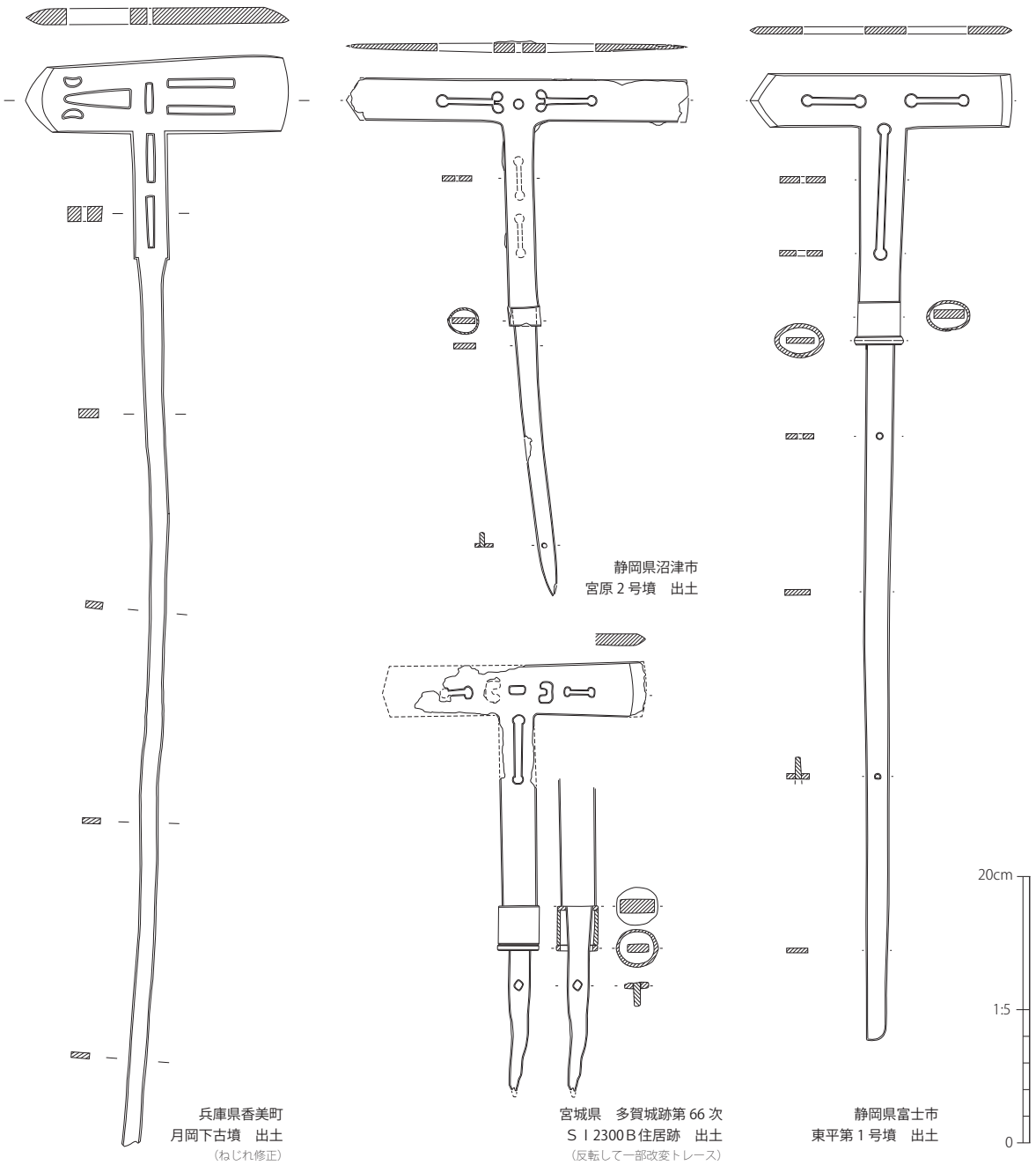
第 60 図　月岡下古墳丁字形利器

第 61 図　月岡下古墳　出土遺物

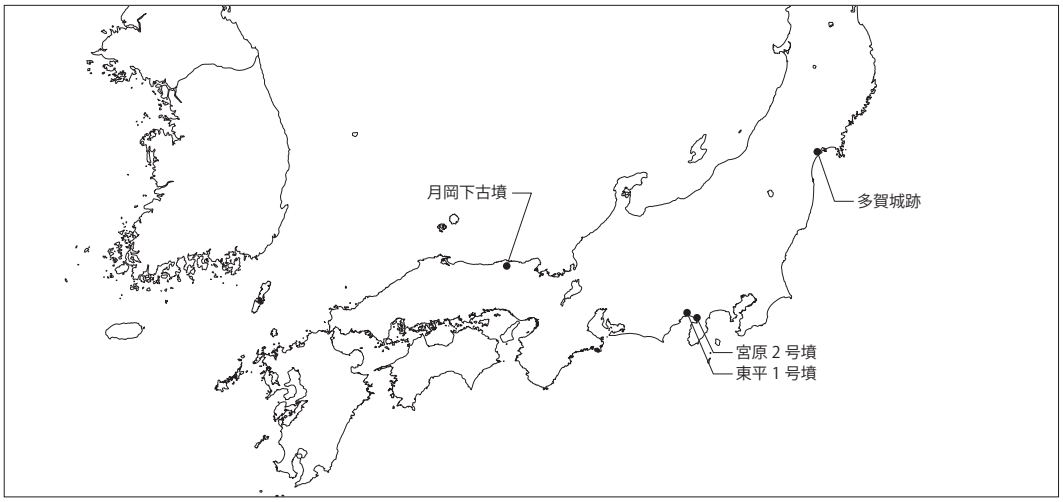
2　形態的特徴と透かし文様

国内の丁字形利器4例についてその概要を述べてきたが、その特徴についてまとめておくこととしたい。

形態的特徴　「丁字形利器」の構成要素としては、板状の身部と身部中央から下にT字状に延びる板状の頸部、関より下が長い茎部をもつことである。その上で、身部には圭頭刃の刃部と蛤刃の刃部をもつこと、さらにそれらが両刃である事も共通要素といえる。月岡下古墳例は身部が厚くさらに頸部よりも幅をもっており、板状というよりも斧状をなしているといえる。4例ともに身部に刃部をもつこと、茎に目釘穴などをもつことから、身部を上にして斧のようなものをモチーフとして製作されたと考えられる。東平1号墳では、大刀3振は切先を南に向け、丁字形利器は身部（刃部）を北側に向けて並べられるように埋葬されており、副葬時に本来の使用、持ち方が意識されていた可能性が高い。



第62図　列島における丁字形利器



第63図　丁字形利器出土分布図

透かし　丁字形利器を特徴付けるものに透かしがあるが月岡下古墳例と他の3例ではその形状に違いがある。月岡下古墳例では、身部の左右で透かし形状が対称ではなく長方形や三角形のように直線の透かしを主体として勾玉文の透かしがある。一方、他の3例は身部の中央を軸として身部の左右および下（頸部）に対称の透かしが施されている。また、透かしも両端玉縁細帯状透かしが多く施される。ただし、注目されるのが両端玉縁細帯状透かしの一方の玉縁が2個であることである。月岡下古墳例や多賀城跡例で認められる勾玉文が長方形透かしと組み合って産まれた透かし形状と推測される。

鋸の形状　月岡下古墳例は茎部分がねじられて出土しており、副葬時に柄が装着されていなかった可能性が考えられており鋸をもたない。一方で、他の3例については鋸を有している。また、関と接する部分は楕円形の切羽状金具で蓋をした状態になっていることが共通した特徴といえる。この切羽状金具で蓋をした鋸は東平1号墳の3振の大刀でも共通した特徴であり、注目される。

時期　4例のみのため、その製作時期を限定することは難しいが、月岡下古墳、東平1号墳、宮原2号墳ともに6世紀後半から7世紀前半頃の副葬と考えられる。多賀城跡例は古墳への副葬がされず、鉄製品の再生産材として8世紀後葉から9世紀初頭頃の遺構から出土しており、製作から伝世されていたもので、再利用材として溶かされる直前であったとも考えることが出来る。

おわりに

以上、国内4例の丁字形利器についてその特徴をまとめてきた。平成元年の出土から30年近くたち、その類例は多賀城跡と月岡下古墳の2例が増えたのみでその実態はあまり明確になったとはいえない。ただし、月岡下古墳例は身部が厚く、斧のような本来のモチーフを比較的忠実に表現している可能性が高く（次節鈴木論考参照）、東平1号墳の丁字形利器の祖形を考える上で貴重な資料といえよう。

謝辞

兵庫県月岡下古墳の資料は未公開資料で有るにもかかわらず、香美町教育委員会の御配慮により図化することができた。資料調査に際し、香美町教育委員会の石松崇氏に御協力いただきました。また、資料調査は、筆者のほか大谷宏治氏、鈴木一有氏、藤村翔氏との共同の成果である。さらに沼津市宮原2号墳例についても沼津市教育委員会に再実測の許可をいただきました。御協力いただきました小崎晋氏に感謝申し上げます。

参考文献

香住町教育委員会　1997『山手開発に伴う埋蔵文化財確認調査概報』

静岡縣　1930『静岡縣史』

鈴木 嘉昭・後藤 守一　1922「丁字形利器發見古墳」『考古学雑誌』12-7

沼津市　2002『沼津市史　資料編　考古』

宮城県多賀城跡調査研究所　1996『宮城県多賀城跡調査研究所年報　1995』

第 2 節　丁字形利器とその系譜

鈴木 一有

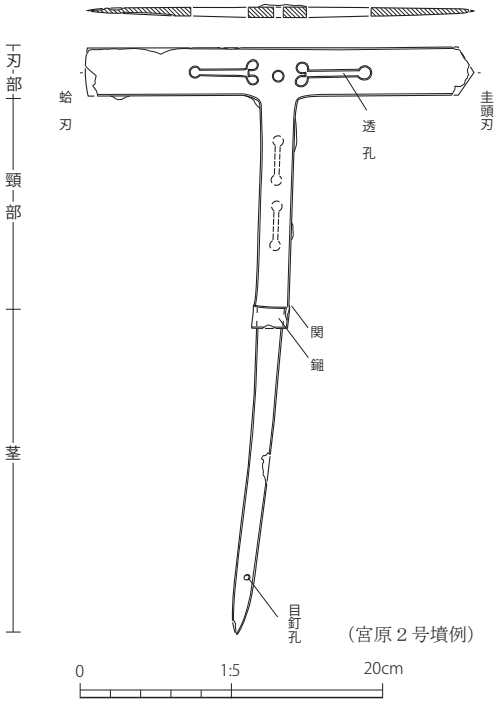
はじめに

東平 1 号墳は静岡県富士市に築かれた直径 13 m の円墳であり、無袖横穴式石室の床面から鉄刀、鉄鏃、刀子、馬具、須恵器とともに、丁字形利器が出土した。丁字形利器は、その特異な形状から古くから注目を集めていたが、類例が極めて少ないことから、現時点に至るまで明確な位置づけがなされているとはいいがたい。本稿では、この特異な利器の系譜を東北アジア地域 (註 1) に求め、その出現過程について考究するとともに、関連が想定できる資料を取り上げて、その分布と性格にかかわる展望を示したい。

1　丁字形利器の発見史と認識

1922 年、静岡県沼津市宮原 2 号墳の出土遺物（第 64 図）が『考古学雑誌』誌上に紹介されることによって（鈴木・後藤 1922）、丁字形利器の存在が広く知られるようになった。宮原 2 号墳は直径 10 m程度の小規模古墳で横穴式石室を内包したものであったらしい。組合式箱形石棺の部材が残り、共伴遺物として金属製壺鐙や環状鏡板轡、鉄鏃、須恵器などが知られている。後藤守一は宮原 2 号墳の報告において、この特異な鉄器を形態的特徴から「丁字形利器」と名づけ、実測図を付して詳細な記述を残している。丁字形利器には、刃があり、茎構造をもつことから、長柄を備える武器の一種と捉えられたが、その異様な形状からその実用性については当初から疑問が呈されていた。後藤はこの利器の身部に毛抜形の透孔があることに注目した。太刀に用いられる毛抜形透孔と同様に考えるとすれば、この遺物も平安時代以降に降る可能性を考慮しつつ、結論的には、古墳からの出土品であること、共伴遺物の年代観との整合性を保つ必要性があることから、同墳出土の丁字形利器を「古墳末期」の中に位置づけてよいことを示した。この見解は 1930 年に刊行された『静岡縣史』（静岡縣 1930）や、1941 年に末永雅雄によって著された『日本上代の武器』（末永 1941）、当地における地域研究の第一人者である小野真一の論考（小野 1957）の中でも繰り返し踏襲され、定説的に受けとめられていった。

宮原 2 号墳例の報告以降、膨大な発掘調査事例が日本列島内に蓄積されたが丁字形利器の類例は増えず、しばらく学会の中でも例外的な存在として扱われていた。しかし、1989 年になって、東平 1 号墳から類例が出土するにおよび、再び脚光を浴びることとなった。静岡県では、おりしも新版『静岡県史』の刊行が企画されている最中であり、日本列島内でも特異な利器が県内東部の古墳に集中することが注目され、多くの県内研究者がこの古墳の調査や出土品の初期整理にかかわった。東平 1 号墳の調査成果については、現地調査後、すみやかに概報が作成され、丁字形利器の詳細な実測図と観察所見が示されている（久松・平林 1990）。同書には、宮原 2 号墳例の再実測図も掲載され、片方が蛤刃、もう一方が圭頭刃である共通性が明確にされた。こうした詳細な観察を通じ、丁字形利器は、槍状の柄を備え、目標物を叩き割る、もしくは断ち切る機能を備えた武



第 64 図　丁字形利器と部分名称

器であり、共伴遺物からその副葬時期は7世紀前葉から中葉であることが示された。

その後、1995年になって宮城県の多賀城跡から全国3例目となる丁字形利器が出土した。静岡県内出土の2例に加えて遠く東北の地から類例が出土したことによって、その分布域が大きく広がった。丁字形利器が出土した遺構は、鍛冶炉を備える竪穴建物跡であり、鉄器生産にかかわる鍛冶工房と捉えられている（新藤ほか1996）。この竪穴建物は共伴遺物から8世紀末から9世紀初頭の年代が与えられている。いっぽう、この遺構から出土した丁字形利器については、地金として集められたものである可能性があり、その詳しい年代を示すことは難しい。丁字形利器の特徴は、先に知られていた2例と基本的に共通し、東北地方で出土したことを考慮すると、この種の製品が日本列島内の広域に流通していたことが想定できるようになった。

多賀城跡において類例が出土した翌年、1996年には兵庫県美方郡香美町に所在する月岡下古墳の発掘調査においても丁字形利器が出土した。近畿地方での確認によって、分布圏についても西に大きく広がり、丁字形利器の性格づけについても日本列島全域の様相を視野に入れて検討すべきことを伝える発見であった。しかし、出土の経緯が部分的な確認調査によるものであったため、出土情報が速やかに公開されず、その存在が学会の中で広く共有される状況には至らなかった[註2]。

1922年の宮原2号墳例の資料紹介から60年以上の空白期間を経て、1989～1996年の間に矢継ぎ早に3例が新たに知られることになったが、丁字形利器そのものの認識が深化するには至っていない。出土例が増えたとはいえ、現在までに知られている製品が僅か4点で、類例が極めて少ない遺物であること、その特異な形状から明確な系譜を示すことが難しいこと、などがその理由であろう。『沼津市史』の作成にあたり、宮原2号墳について触れた滝沢誠も、実用利器としては華奢なつくりに加え、透孔をもつ独特の形状、長い柄部や茎の特徴から判断して、実用武器というよりも儀仗としての性格を見出す見解を示しているが（滝沢2002）、それ以上の認識を見据えた研究はなされていない。

2　丁字形利器の形態的特徴とその起源

現在までに知られている丁字形利器を第65図に示す。4点ともに共通する属性として、以下のような特徴があげられる。

① 刃部と柄部、茎に分かれる。
② 刃部と柄部は一体であり、段関を経て茎に至る
③ 刃部は双方にあり、蛤刃と圭頭刃に分かれる
④ 幾何学的な透孔をもつ
⑤ 鏃をもつ事例がある
⑥ 長い茎をもつ事例がある
⑦ 全体として華奢なつくりである

これらの特徴から判断すると、丁字形利器は斧状の刃部をもち、長柄が伴う武器形の儀器であると説明できよう。また、日本列島内の器物に直接的な系譜が求められないことから、中国や朝鮮からの影響のもと当地に導入されたものであると捉えられる。これら共通した特徴を考慮しつつ、丁字形利器を二つのグループに分類する。以下にその特徴を示す。

１類：刃部の幅が双方で異なるもの
　　鏃をもたない
　　透孔は細長方形や三角形を基本とする
２類：刃部の幅が双方で変わらないもの
　　鏃をもつ
　　透孔は細長方形と円形が組み合う

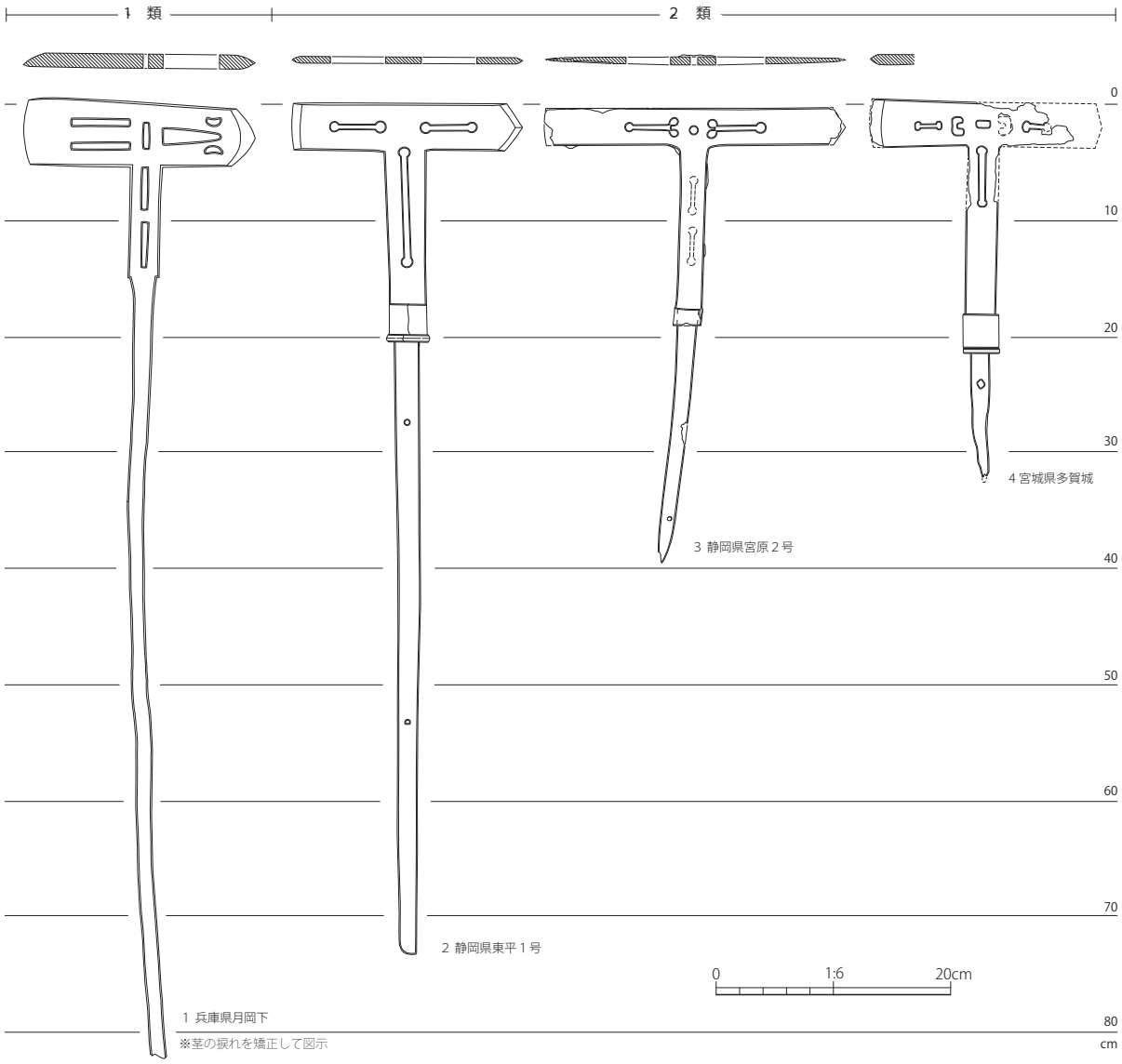
１類は月岡下古墳例が、２類は東平１号墳例、宮原２号墳例、多賀城例が相当する。共伴遺物の特徴を考慮すると１類が古相を示し、２類が新相を示しているといえるだろう。共伴する須恵器から導き出せる年代観としては、１類がTK209型式新相期、２類が飛鳥Ⅰ期後半から飛鳥Ⅱ期と整理できる。東平１号墳例の時期については、共伴遺物から導き出せる飛鳥Ⅱ期を中心とした段階に求めることが妥当である。いずれも7世紀前半代を中心とした年代観が与えられる。純粋に型式学的な観点から新古を考えるとすれば、１類から２類への推移に加え、茎の短小化、頸部の伸長化などが新しい時期の傾向として指摘しうる。

丁字形利器を特徴づける属性の一つとして、刃部と柄部に施される透孔があげられる。１類では、長方形、三角形、勾玉形があり、２類では、勾玉形、円形、円形と方形の組み合わせがみられる。これら

幾何学的模様は、一見、突飛なように見えるが、長方形や円形、三角形といった形状は、刀の鍔や鏶にみられる造形と共通する。勾玉形透孔についても、単葉文の透かし彫り模様を祖形として考えれば、刀の鍔に関連資料が認められる。これらのことから、丁字形利器にみられる透孔模様（特徴④）の多くは、鉄刀にみられる造形と共通する、といえるだろう。丁字形利器２類は鏶を備える（特徴⑤）が、その形状が日本列島内でみられる鉄刀と共通することも注目しうる。同じく、丁字形利器の茎に設けられた目釘の特徴も日本列島内で出土する鉄刀と酷似する。こうした特徴は、丁字形利器が日本列島内の鉄刀製作工人の手により製作された可能性を示唆するものといえるだろう。

鉄製の柄部を共づくりにする丁字形利器の形状はどのような製品に起源があるのだろうか。この問題を考えるにあたり注目できる鉄器が、中国や朝鮮半島の出土品に知られている（第 66 図）。桓仁五女山城の兵器庫（鉄器窖蔵）や漣川瓠蘆古墨では、柄穴をもつ薄手の斧本体に鉄製の柄が装着された鉄器が出土している。これらの製品は、鉄製の柄に段をもつ関と茎がつくり出されている。丁字形利器の特徴①、②との関連性が高く、その祖形とみてよいだろう。これらの鉄器はの帰属時期は、共伴する資料から判断して、6 世紀代と捉えられる。

この他、同じ五女山城の兵器庫からは、柄穴を備え両端に刃部をもつ鉄斧が出土している。柄穴をもつ点では、さきの 2 例と共通し、刃部の形状につい



第 65 図　丁字形利器集成

ては、片方が蛤刃、もう一方が圭頭刃と、丁字形利器の特徴③と一致する。また斧の本体部分には崩れた方形の透孔があり、丁字形利器の特徴④との関連も想定しうる(註3)。

これらの資料との比較によって、丁字形利器にみる特徴①～③の起源を中国東北部や朝鮮半島に求めてよいことが明らかになったといえるだろう。また、特徴④についても、日本列島の鉄刀との関連とともに、外来系的要素と捉えることも可能である。

以上の諸特徴(註4)をふまえ総合的に解釈すると、丁字形利器は中国や朝鮮に起源がある鉄器と評価でき、日本列島内への導入後は、国内で独自に発展した可能性も考慮すべきものといえるだろう。

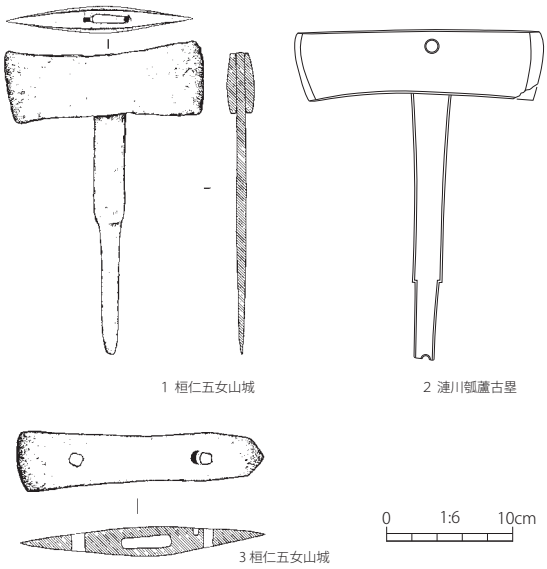
丁字形利器の祖形と捉えた資料を出土した五女山城と瓠蘆古墨はともに高句麗の城塞跡であることは注目してよい。後述するように、丁字形利器は高句麗系の儀器とみる大きな根拠といえよう。

以下、この解釈の妥当性を検討するにあたり、丁字形利器と関連が高い、柄穴をもつ鉄斧について検討を加えておきたい。

3　柄穴鉄斧の分布と推移

板状鉄斧や袋状鉄斧とは異なり、斧本体に刃と並行する方向に柄穴をあけ柄を挿入する斧を柄穴鉄斧と呼ぶ(註5)。

有光教一は、この種の鉄斧を柄穴斧頭と呼び、朝鮮半島の事例を集成し、その系譜について紹介した。合せて日本列島における類例にも触れ、国内での事例が極めて少ないことに注意を促した（有光1967）。井口喜晴は、この種の鉄斧を穿孔斧と呼び、中国中原地域での出土例を集成し、その性格について論じた（井口1973）。井口は柄穴鉄斧を形態的特徴から（ⅰ）刃幅が背幅よりも広く、刃部がほぼ平らなもの、（ⅱ）刃幅が背幅よりも広く、刃部が弧状をなすもの、（ⅲ）刃幅も背幅も同じで長方形を呈しているものの3型式に分類した。井口は柄穴鉄斧を工具としてとらえ、中国中原地域では前漢後期に出現し、後漢にかけて多く用いられたことを指摘している。



第66図　丁字形利器の祖形

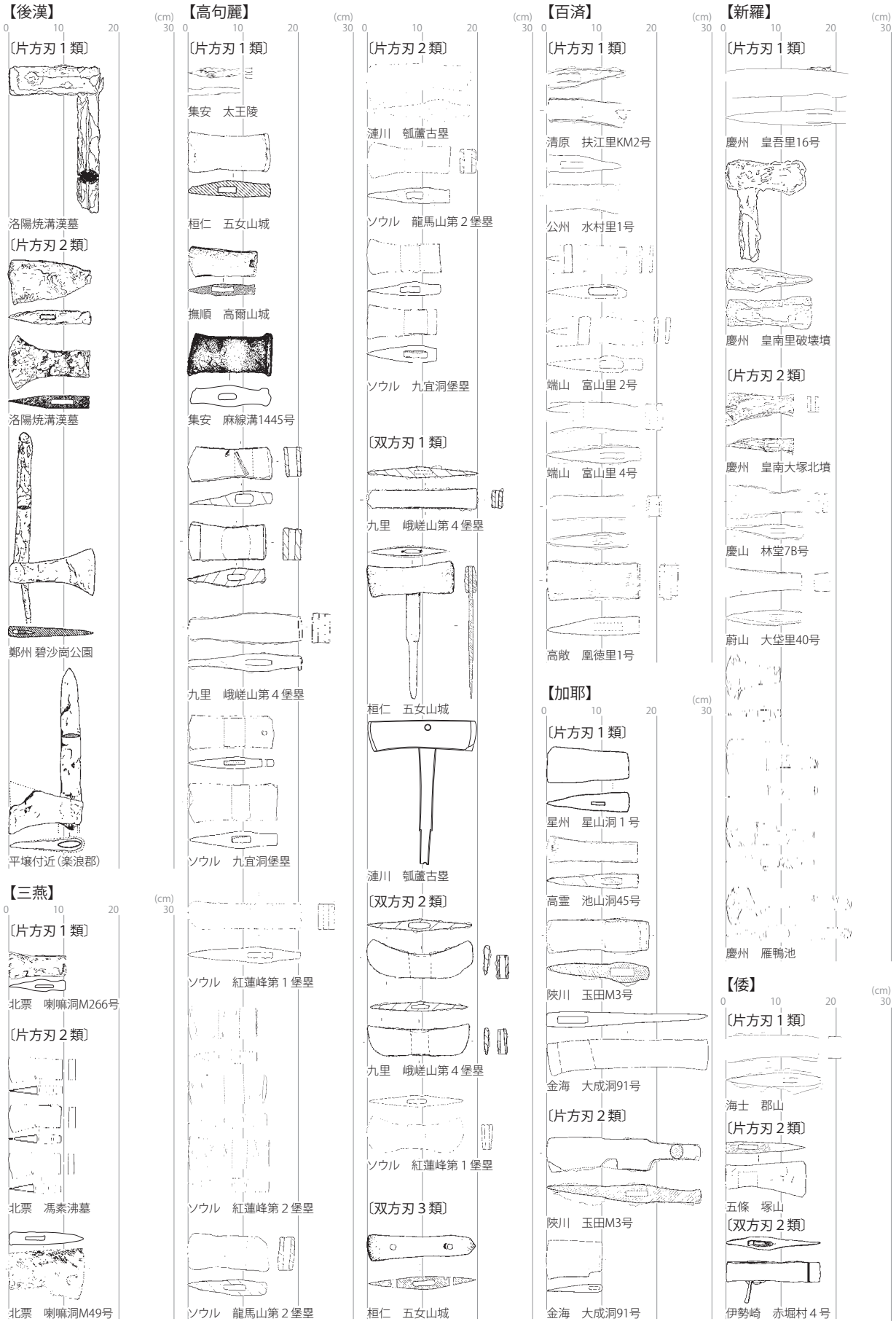
これらの業績を基礎にして、東潮は網羅的に東アジアにおける柄穴鉄斧（東は「柄穴斧」と呼ぶ）を集成し、その分布の傾向と性格について総合的に触れた（東1982）。東の検討は、それまで学界に知られているものを悉皆的に取り上げるものであったが、韓国での調査事例が増加する以前の資料を対象としたものであったため、その分布の傾向と推移にかかわる解釈の精度に課題が残された。

近年、朝鮮半島では柄穴鉄斧の出土例が増加傾向にある。高句麗の武器を体系的に論じた金性泰は、柄穴鉄斧が高句麗の城塞跡から多く出土していること、壁画古墳に柄穴鉄斧を装着した武器をもつ人物が描かれていること、文献資料に斧を戦争に用いた記述がみられること(註6)などから、柄穴鉄斧は高句麗においては武器として用いられたと指摘している（金1994、2007）。

以上の研究史をふまえ、本稿では丁字形利器と直接関わる地域として、中国東北部から朝鮮半島、日本列島に注目する。出土品としては3～7世紀代の事例を集成し、形態の分類を行い（第67図）、その分布、推移を検討しておきたい。

柄穴鉄斧は刃部のあり方から片方刃と双方刃に大別でき、その形態的特徴から以下のように細分できる。

片方刃　本体の片方のみに刃部があるもの
　１類　柄穴部と刃部の幅に大きな違いがないもの
　２類　柄穴部と刃部の幅が著しく異なるもの
　　２ａ類　刃部が直線的なもの
　　２ｂ類　刃部が彎曲するもの


【後漢】
〔片方刃１類〕
洛陽焼溝漢墓
〔片方刃２類〕
洛陽焼溝漢墓
鄭州 碧沙崗公園
平壌付近（楽浪郡）
【三燕】
〔片方刃１類〕
北票　喇嘛洞M266号
〔片方刃２類〕
北票　馮素沸墓
北票　喇嘛洞M49号
【高句麗】
〔片方刃１類〕
集安　太王陵
桓仁　五女山城
撫順　高爾山城
集安　麻線溝1445号
九里　峨嵯山第４堡塁
ソウル　九宜洞堡塁
ソウル　紅蓮峰第１堡塁
ソウル　紅蓮峰第２堡塁
ソウル　龍馬山第２堡塁
〔片方刃２類〕
漣川　瓠蘆古塁
ソウル　龍馬山第２堡塁
ソウル　九宜洞堡塁
〔双方刃１類〕
九里　峨嵯山第４堡塁
桓仁　五女山城
漣川　瓠蘆古塁
〔双方刃２類〕
九里　峨嵯山第４堡塁
ソウル　紅蓮峰第１堡塁
〔双方刃３類〕
桓仁　五女山城
【百済】
〔片方刃１類〕
清原　扶江里KM2号
公州　水村里1号
端山　富山里２号
端山　富山里４号
高敞　凰徳里1号
【加耶】
〔片方刃１類〕
星州　星山洞１号
高霊　池山洞45号
陜川　玉田M3号
金海　大成洞91号
〔片方刃２類〕
陜川　玉田M3号
金海　大成洞91号
【新羅】
〔片方刃１類〕
慶州　皇吾里16号
慶州　皇南里破壊墳
〔片方刃２類〕
慶州　皇南大塚北墳
慶山　林堂7B号
蔚山　大垈里40号
慶州　雁鴨池
【倭】
〔片方刃１類〕
海士　郡山
〔片方刃２類〕
五條　塚山
〔双方刃２類〕
伊勢崎　赤堀村４号
(cm)
0
10
20
30

第 67 図　枘穴鉄斧集成

双方刃　本体の双方に刃部があるもの

１類　柄穴部と刃部の幅に大きな違いがないもの（双方の刃部は直線的である）

２類　刃部が翼状に大きく彎曲するもの

３類　刃部が蛤刃と圭頭刃に分かれるもの

これらの大別をふまえた上で、各地から出土している柄穴鉄斧の分布と一覧を第68図と第4表に示す。発掘の規模や資料報告の精度に違いがあるので、中国東北部、朝鮮半島、日本列島の事例を同一基準でみることには問題がある。しかしながら、当該時期の考古資料が最も充実している日本列島では類例が極めて少ないこと、朝鮮半島においても、多くの鉄器が出土している嶺南地域では出土例が限定的であること、ソウルとその近郊の城塞跡では総出土数の30％を超える20例ほどが集中すること、などは柄穴鉄斧の分布を考える上で動かしがたい傾向を示している。

中国中原地域における柄穴鉄斧の出土例を網羅的に集成することは困難であるが、洛陽焼溝漢墓において出土例が知られるように、前漢後期において柄穴鉄斧が成立していることが知られる（井口1973）[註7]。後漢代には、柄穴鉄斧が剣と組み合い、戟として用いられているものが知られている。その出土地は河南省から楽浪郡統治下の朝鮮半島まで認められ、比較的広い地域に拡散していたことが分かる。戟としての使用例を通じ、後漢代において、柄穴鉄斧は武器として用いられたことを知ることができるといえよう。

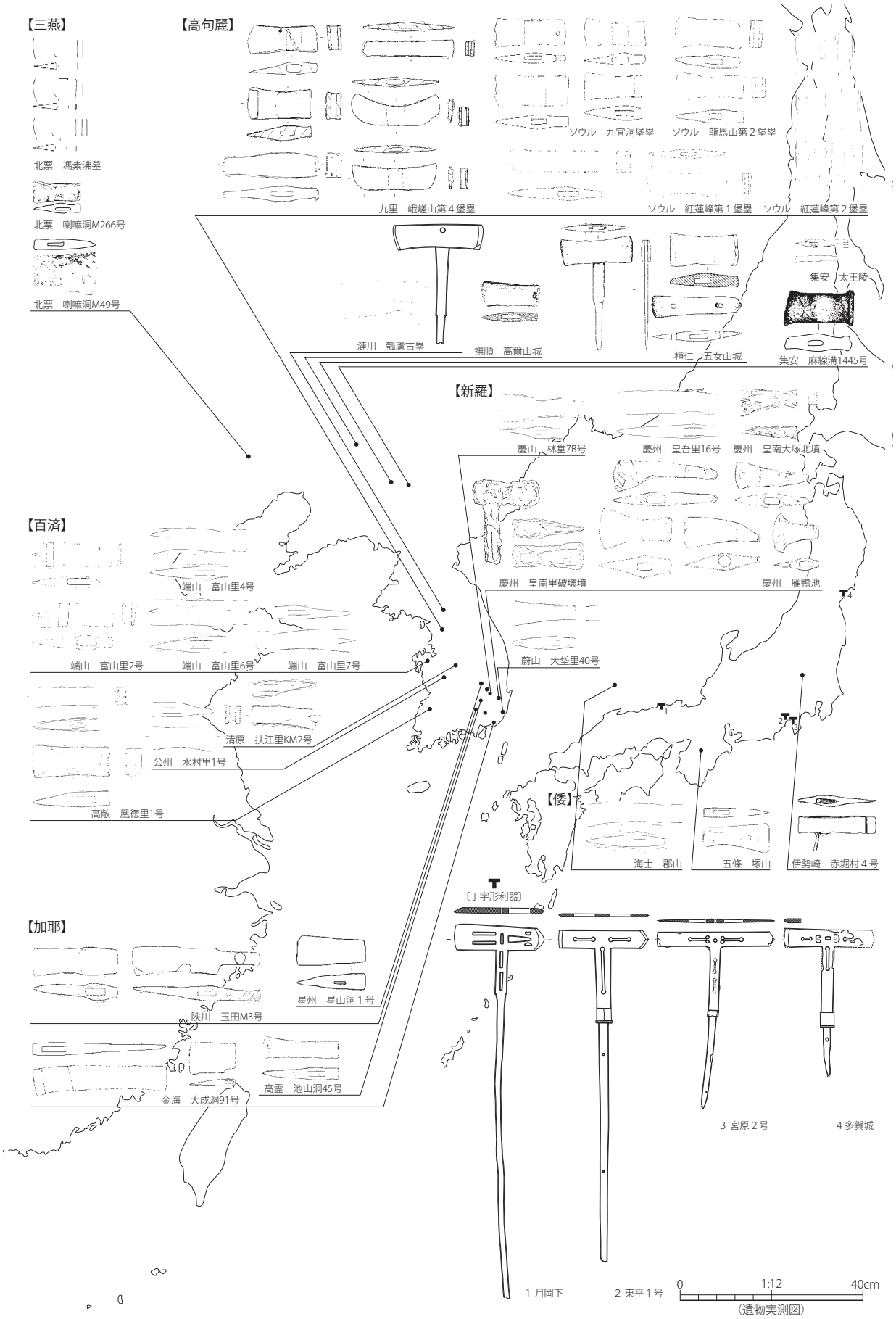
数は少ないながら、中国遼寧省の三燕の墓地からも柄穴鉄斧が出土している。これらの事例は4世紀に中心があることも重要である。朝鮮半島における出土例の多くが5世紀以降に降ることをふまえると、その古さが際立つ。中国中原地域に起源のひとつがある柄穴鉄斧は、東北アジアに拡散、浸透していったとみられるが、古い段階における受容地は、中原地域により近い三燕の地であったといえるだろう。

先述のとおり、高句麗の領域では、丁字形利器の直接的系譜がたどれる鉄柄付の柄穴鉄斧が確認できる。また、後述するように、高句麗の古墳壁画には、柄穴鉄斧を装着した武器が表現されているものがある。さらに、ソウルとその近郊のみならず、五女山城や撫順高爾山城など中国遼寧省内の城塞跡から集中的に柄穴鉄斧が出土している事実も合せて判断すると、東北アジアにおいて柄穴鉄斧の資料が最も多く残されているのは高句麗の領域と評価しうる。高句麗は古墳時代の倭社会とも直接接触する関係にもあることから考えても、柄穴鉄斧を祖形にもつ丁字形利器の故地も高句麗に求められる可能性が最も高いと判断できるだろう。

高句麗以南の百済、新羅、加耶においては、柄穴鉄斧が集中的に出土することはない[註8]。大型の墳墓を中心に数点が散在する状況といえる。これら3地域での柄穴鉄斧のあり方を相互に比較すると、加耶と比べて百済や新羅において比較的多くの事例が認められる。柄穴鉄器の出土量は、近隣の主要受容地である高句麗との地理的な距離が関連していると解釈できるだろう。日本列島は地理的にはさらにその外縁に位置するため、数点程度の事例しか認められないと解釈できる。

柄穴鉄器の推移について、簡単に触れておく。中国中原地域では後漢代において片方刃１類と２類（a・bの双方を含む）がみられる。柄穴鉄斧が東北アジア地域に拡散する過程においても、これら柄穴鉄斧の基本的な形態が伝えらえていた可能性が高い。ただし、現状で確認できる三燕地域の柄穴鉄斧には、刃部が大きく湾曲する片方刃２ｂ類の実例はみられない。4～5世紀の三燕地域では刃部が直線的な片方刃１類もしくは片方刃２ａ類が中心的な形態であったといえるだろう。

高句麗では、5世紀後葉から6世紀にかけての資料が充実している。ソウルやその近郊の軍事拠点である九宜洞堡塁や峨嵯山堡塁など、実戦に用いられた城塞跡からは実に多様な形態の柄穴鉄斧が出土している。高句麗では、柄穴鉄斧を用いた工具、武器が多用され、刃先である鉄斧本体も様ざまな用途に合わせ機能分化していたと評価できるだろう[註9]。高句麗における事例の中に双方刃の柄穴鉄斧が含まれる点は、周囲の諸地域にはみられない特徴である。共伴遺物から、双方刃の柄穴鉄斧が増加する時期は6世紀と捉えてよいだろう。日本列島においても5世紀後葉の奈良県塚山古墳例は片方刃であることに



第 68 図　枘穴鉄斧の分布

第4表　柄穴鉄斧および丁字形利器出土例

勢力	国名	所在地		古墳・遺跡名	遺構等	種別	出土数					備考
							片方刃		双方刃			
							1類	2類	1類	2類	3類	
柄穴鉄斧												
三燕	中国	遼寧省	北票	馮素沸墓	竪穴式石室	墳墓		3				北燕王族墓
	中国	遼寧省	北票	喇嘛洞 M49 号	木棺	墳墓		1				
	中国	遼寧省	北票	喇嘛洞 M266 号	木棺	墳墓	1					
高句麗	中国	遼寧省	桓仁	五女山城		城塞	1		1		1	高句麗城塞
	中国	遼寧省	撫順	高爾山城		城塞	1					高句麗城塞
	中国	吉林省	集安	太王陵	横穴式石室	墳墓	1					高句麗王陵
	中国	吉林省	集安	麻線溝 1445 号	横穴式石室	墳墓	1					
	中国	吉林省	集安	民主村採集		不明	1					
	韓国	京畿道	漣川	瓠蘆古墨		城塞		1	1			高句麗城塞
	韓国	京畿道	九里	峨嵯山第 4 堡塁		城塞	3		1	1		高句麗城塞
	韓国	京畿道	九里	峨嵯山シル峰堡塁		城塞	1					高句麗城塞
	韓国	京畿道	ソウル	九宜洞堡塁		城塞	2	2				高句麗城塞
	韓国	京畿道	ソウル	紅蓮峰第 1 堡塁		城塞	1			1		高句麗城塞
	韓国	京畿道	ソウル	紅蓮峰第 2 堡塁		城塞	3					高句麗城塞
	韓国	京畿道	ソウル	龍馬山第 2 堡塁		城塞	1	1				高句麗城塞
	韓国	忠清北道	清原	南城谷山城		城塞	1					高句麗城塞
百済	韓国	忠清北道	清原	扶江里 KM2 号	横穴式石室	墳墓	1					
	韓国	忠清南道	公州	水村里 1 号	木槨	墳墓	1					有力首長墓
	韓国	忠清南道	端山	富山里 2 号	7 号木棺	墳墓	2					
	韓国	忠清南道	端山	富山里 4 号	7 号木棺	墳墓	1					
	韓国	忠清南道	端山	富山里 6 号	6 号木棺	墳墓	1					
	韓国	忠清南道	端山	富山里 7 号	2 号木棺	墳墓	1					
	韓国	全羅北道	高敞	鳳徳里 1 号	4 号石室	墳墓	1					有力首長墓
	韓国	全羅北道	高敞	鳳徳里 1 号	5 号石室	墳墓	1					有力首長墓
新羅	韓国	慶尚北道	慶州	皇南大塚北墳	積石木槨	墳墓		1				新羅王妃墓
	韓国	慶尚北道	慶州	皇吾里 16 号	第 5 槨	墳墓	3					
	韓国	慶尚北道	慶州	皇南里破壊墳	第 1 槨	墳墓	1					
	韓国	慶尚北道	慶州	皇南里破壊墳	第 2 槨	墳墓	1					
	韓国	慶尚北道	慶州	雁鴨池	園池内堆積層	園池		5				新羅王宮園池
	韓国	慶尚北道	慶山	林堂 7B 号	副槨	墳墓		1				有力首長墓
	韓国	慶尚北道	大邱	達西古墳群		墳墓	1					
	韓国	慶尚南道	蔚山	大垈里 40 号	横口式石室	墳墓		1				
加耶	韓国	慶尚北道	高霊	池山洞 45 号	2 号石槨	墳墓	1					大加耶王墓
	韓国	慶尚北道	星州	星山洞 1 号	横口式石室	墳墓	1					有力首長墓
	韓国	慶尚南道	陜川	玉田 M3 号	木槨	墳墓	1	1				有力首長墓
	韓国	慶尚南道	昌寧	校洞 89 号		墳墓	1					有力首長墓
	韓国	慶尚南道	金海	大成洞 57 号		墳墓		1				
	韓国	慶尚南道	金海	大成洞 91 号	木槨	墳墓	1	1				有力首長墓
倭	日本	島根県	海士	郡山所在古墳		墳墓	1					採集品
	日本	奈良県	五條	塚山	箱形石棺	墳墓		1				
	日本	群馬県	伊勢崎	赤堀村 4 号	横穴式石室	墳墓			1			
丁字形利器												
倭	日本	兵庫県	香美	月岡下	横穴式石室	墳墓					1	
	日本	静岡県	富士	東平 1 号	横穴式石室	墳墓					1	
	日本	静岡県	沼津	宮原 2 号	横穴式石室	墳墓					1	
	日本	宮城県	多賀城	多賀城	66 次 SI2300B	竪穴建物					(1)	鍛冶工房

凡例：パーレン内は不確定であることを示す　ゴシックは鉄柄をもつ事例　勢力区分は便宜的にあてはめたものがある

対して、6 世紀後葉の群馬県赤堀村 4 号墳の事例が双方刃であり、上述の推移の傾向と整合的である。

6 世紀以降の新しい段階になると、柄穴鉄斧本体の扁平化が顕著になり、円孔や方形孔などの透孔があけられるものが散見できるようになる。双方刃 3 類とした蛤刃と圭頭刃の組合せの成立 (註 10) も 6 世紀のこととみられ、扁平化や透孔を持つ事例の増加がみられることも勘案すると、この時期の高句麗において柄穴鉄斧の一部が儀器化すると解釈しうる。柄穴鉄斧に鉄柄が装着される事例についても、木柄を鉄に置き換える儀器化の特徴と共通し（鈴木 2002）、象徴的器物を特徴づける属性の一つとみてよい。こうした高句麗における柄穴鉄器の様相から判断すると、丁字形利器は柄穴鉄斧を用いた武器の象徴性を顕在化させた姿を呈していると評価できるだろう。

柄穴鉄斧が出土した墳墓の階層性についても触れておきたい。柄穴鉄斧が出土した墳墓には、北票馮素沸墓（北燕王族墓）、集安太王陵（高句麗王陵）、慶州皇南大塚北墳（新羅王妃墓）、高霊池山洞 45 号

墳（大加耶王陵）など各領域の王墓や王族墓が数多く含まれる。また、公州水村里 1 号墳や高敞凰徳里 1 号墳、慶山林堂 7 号墳、星州星山洞 1 号墳、昌寧校洞 89 号墳、陜川玉田 M3 号墳、など小地域でも最有力階層の造営と目される墳墓からの出土例も目立つ。柄穴鉄斧が中小墳墓から出土する事例はむしろ稀であり（註 11）、副葬品としての柄穴鉄斧は、実用的な器物というよりも、上位階層に共有される儀器としての性格が強いことを示唆している。丁字形利器もこうした副葬用柄穴鉄斧の象徴的意味が特化する中で出現したものと捉えてよいだろう。

統一新羅の王宮に附属する苑池である慶州雁鴨池から柄穴鉄斧がまとまって出土していることも注目できる。雁鴨池は、新羅文武王 14 年（674）に造営されており、池内から多様な遺物が出土している。出土品の中には 8 世紀以降に降るものがあるが、仏像や金属工芸品を含むなど一般的な集落出土品とは明らかに異なり、国家祭祀にかかわる奉斎品としての性格が見出せる。雁鴨池では 5 点の柄穴鉄斧が報告されているが、その形態は実に多様であり、たんなる工具というよりも、多種類を揃えた儀礼用具であった可能性を示唆している。

日本列島における柄穴鉄斧の出土例は 3 例と少ないがその内容を瞥見しておこう。島根県の郡山所在古墳の事例は採集品であるため、副葬された古墳の実態をうかがうことは難しい。ただし、柄穴鉄斧を出した古墳の近隣には、鉄鋌を出土した郡山西古墳や鉄柄刀子を出土した新開 3 号墳など、朝鮮半島系の鉄器を保有する古墳が集中する。郡山所在古墳の事例は、隠岐における 5 世紀の朝鮮半島系鉄器の移入と関連づけて理解することができるだろう（角田 2017）。

奈良県塚山古墳は初期の金銅製品や鍛冶具など渡来系遺物が豊富に出土した五條猫塚古墳を含む近内古墳群の近隣地に築かれた一辺 24 mの方墳である。結晶片岩製の箱形石棺を埋葬施設とし、甲冑、鹿角装大刀、鉄鏃、農工具、漁具などが出土した。築造時期は 5 世紀後葉である。柄穴鉄斧は副室の工具の集積内において出土した。渡来系要素が濃厚な近内古墳群に隣接して古墳が築造されており、塚山古墳にかんしても、その被葬者に渡来系集団との関係を見出すことは許されよう。

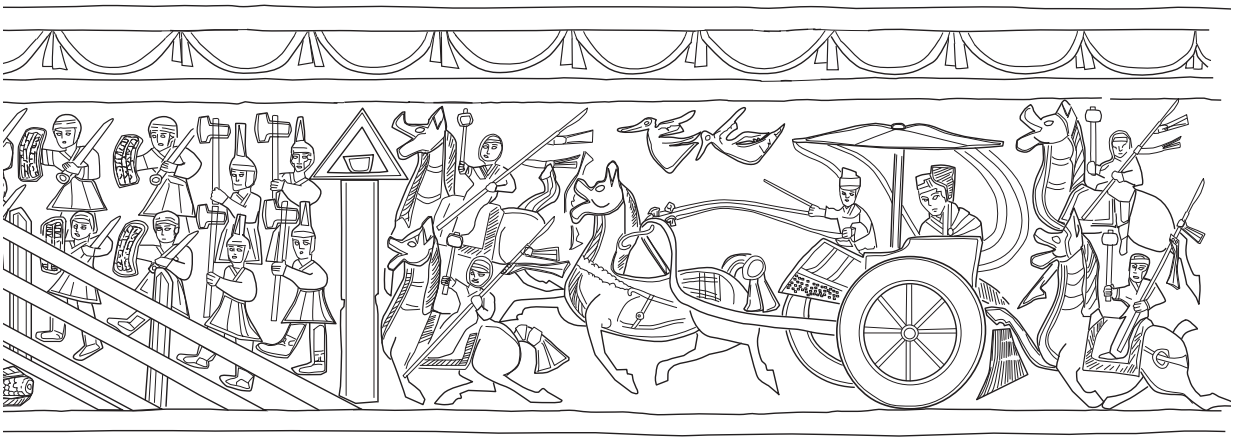
6 世紀後葉の築造である群馬県赤堀村 4 号墳では、柄穴鉄斧と共に全長 106cm の鉄棒製品が副葬されていた。この鉄器は一端が把手のように成形されている。この製品は、鉄柄のサルポとみるのが妥当であろう。鉄柄のサルポは朝鮮半島系の儀器の一つであり、その保持、副葬には、水田の畝立てや水口の開削といった有力階層が執行する農耕儀礼にかかわる象徴的意味がある。この棒状品を鉄柄のサルポと捉えてよければ、赤堀村 4 号墳は柄孔鉄斧とともに渡来系器物が集積する特異な古墳であると評価できる。

以上、日本列島内における柄穴鉄斧を瞥見してきた。当地における柄穴鉄斧は類例が少ないながらも、渡来系文物が集まる地域や古墳との関連を見出す事ができる。こうした出土地や古墳にかかわる情報と、当地における出土例が極めて限定的な状況から判断すると、日本列島から出土する柄穴鉄斧は朝鮮半島からの搬入品であり、特殊な用途が関わるものや象徴的意味が付与されたものであったと捉えてよいだろう。

4　斧鉞とその象徴性

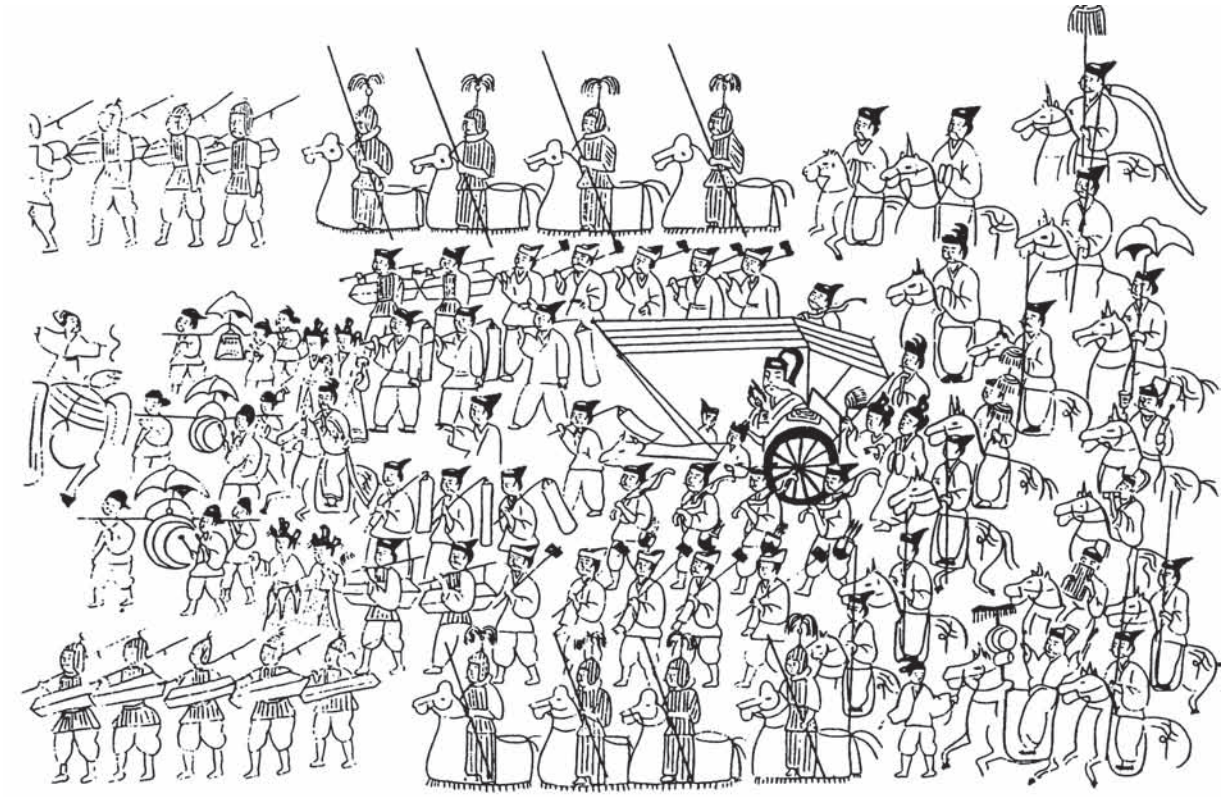
高句麗の古墳壁画の中に、柄穴鉄斧を装着した武器を手にした人物を見出すことができる。北朝鮮の平壌駅前二室墓や、南浦薬水里古墳、安岳 3 号墳などでは、軍隊の一部に柄穴鉄斧を装着した武器が描かれている（第 69 図 - 2・3）。安岳 3 号墳は永和 13 年（357）に死去した前燕の貴族、冬寿の墓であることが、前室壁面の墨書銘から明らかにされており、4 世紀半ばの壁画墓であることが知られる。これらの壁画に描かれた柄穴鉄斧は、長い柄がつけられ、いずれも肩に担がれている。柄を装着した全長は 1 ～ 1.5 mほどの長大なものであり、丁字形利器の使用方法を考える上でも参考になる。柄穴鉄斧を装着した道具は平服姿の人物の持ち物で、この道具を担ぐ人々は斧鉞手と呼ばれている。斧鉞手はある程度の集団として表現されており、近隣に騎兵が描かれていることから、この道具も武器と考えてよいだろう。

柄穴鉄斧を装着した武器を携えた軍事編成は、山



1 沂南漢画像石墓

2 薬水里古墳



3 安岳3号墳

第69図　後漢画像石・高句麗古墳壁画にみる鬪斧と軍事編成

東省沂南漢画像石墓（第 69 図 - 1）を代表例に中原地域やその周囲の画像石にみられ、高句麗を中心とする東北アジアに限定されるものではないことは明らかである。枘穴鉄斧を武器として用いることは、後漢代に戟として用いたことからもうかがえるように、中原地域にも広く受け入れられている。器物を叩き壊し、敵兵をなぎ倒す闘斧（戦斧）は広く中央アジアから東アジアに浸透しており、その多くは刃先として枘穴鉄斧が用いられたとみてよいだろう。

枘穴鉄斧の象徴性を考える上では、中国における「斧鉞」にかかわる認識も深くかかわる（第 70 図）。斧鉞とは字義のごとく鉞形の斧のことをさす。古くは袋部をもつ青銅器であったが、後漢以降は枘穴鉄斧がその刃部として用いられた。斧鉞は、軍事統率権を示す儀器であり、君主が出征する将軍に渡すものであった。また、斧鉞は首を切り落とす道具としても用いられたことから、刑罰執行権の象徴物としても認識されている（林 1992、信 1996）。

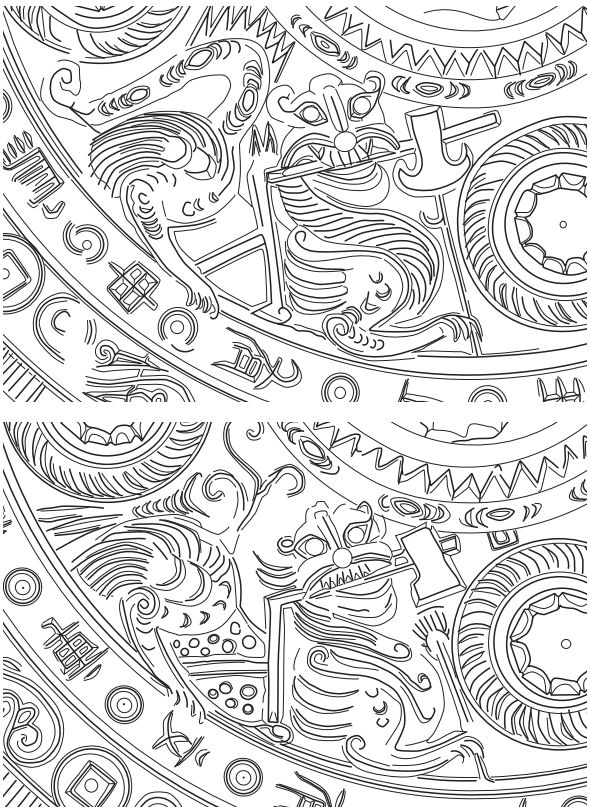
斧鉞にかかわる象徴性は、後漢以降の図像表現に認めることができる。軍事統率権を示す斧鉞は、車馬に乗る将軍の持ち物として沂南漢画像石墓などに表現されている。また、刑罰執行権を示す斧鉞も、山東省肥城孝堂山祠堂にみるように、処刑された人物の生首に伴って表現されている。髪を切る刑罰の場面を描いた画像石として著名な山東省諸城漢墓にも、斧鉞とみられる道具を持った人物が集団で表現されている。斧鉞とみられる道具は刀とともに髪を切る利器として扱われていた様子がうかがえる。

古代中国において斧鉞は権力の象徴物として広く認識されていたことを紹介した。枘穴鉄斧の出土事例が多い朝鮮半島の中央部以北においても、その認識は変わらなかったとみられる。日本列島からの出土品についても、三角縁神獣鏡の鏡背図像（第 71 図）にみるように、斧鉞にまつわる表現が見出せる。制度として明確化されていたとはいいがたいが、倭の社会においても斧鉞にかかわる思想や象徴的意味はある程度、理解されていたと考えられる。7 世紀の日本列島内に丁字形利器が導入された際にも斧鉞との関連が意識され、この特異な形状の利器を軍事統率権や刑罰執行権の象徴物として捉えていた可能性は充分、考慮してよいだろう。

1 沂南漢画像石墓　2 肥城孝堂山祠堂

3 諸城漢墓

第 70 図　中国画像石にみる斧鉞



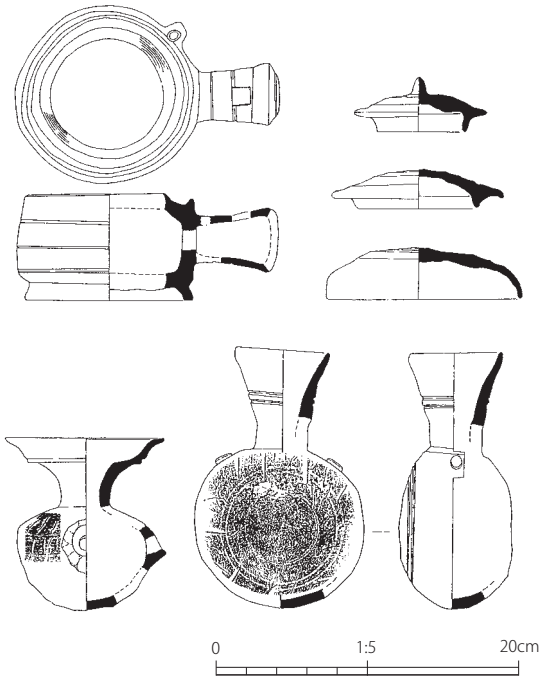
鳥取県普段寺 1 号墳出土三角縁神獣鏡

第 71 図　三角縁神獣鏡にみる斧鉞

5　丁字形利器出土古墳とその性格

さいごに、丁字形利器を出土した古墳とその周辺の地域的特性について、若干触れておきたい。丁字形利器１類が出土した月岡下古墳は、日本海に向って開かれた小平野を望む位置に構築されている。この古墳が立地する兵庫県の香住平野には、先行する有力古墳はみられない。高塚古墳も極めて少なく、代わりに外来系埋葬施設と評価しうる箱形石棺墓が多く築かれている。箱形石棺墓が築かれた詳細な時期は不明ながら、月岡下古墳が横穴式石室墳であることを考えると、箱式石棺を構築する集団よりは上位階層の墳墓であったとみてよいだろう。月岡下古墳の近隣地には、初期の毛彫馬具を出土したと伝えられている油良地区所在古墳が知られ、7 世紀前葉を中心に、突如として豊富な副葬品をもつ古墳が構築された地域といえる。

月岡下古墳が構築された但馬地域は、無袖石室が卓越する地域でもある。竪穴系横口式石室を起源にもつような開口部に段をもつ大型無袖石室もみられ、東平 1 号墳が築かれた東駿河の状況と類似する。段をもつ無袖石室の導入には、渡来系集団が関わっている可能性があり、但馬と東駿河において類似した地域的特性を見出すこともできるだろう。



第 72 図　宮原 1 号墳出土遺物

丁字形利器２類が出土した宮原 2 号墳は、飛鳥Ⅱ期、7 世紀第 2 四半期を中心とした古墳であり、出土品にみられる装飾馬具や壺鐙などは東平 1 号墳例と共通性が高い。双方の古墳被葬者には近似した性格が読み取れる。宮原 2 号墳の隣接地には、次の世代に構築されたとみられる宮原 1 号墳が築かれている。宮原 1 号墳からは中空円面硯が出土しており（第 72 図）、この地域に古墳を構築した集団の性格を考えるうえで注目に値する。古墳副葬品に硯が選択されることは極めて異例であり、被葬者には文字と関係が深い人物が想定できる。中空円面硯が副葬された被葬者は、評の経営といった文字を必要とする組織の運営にかかわった人物とみてよいだろう。宮原 2 号墳と 1 号墳は相互に関連が高い位置関係にあり、その被葬者は同一系譜に属すると捉えられる。丁字形利器を保有した人物の後継者の一人に文字との関連が見出せることは、被葬者集団の性格を考える上で看過できない特徴といえよう。

同じく丁字形利器２類が出土した東平 1 号墳も、飛鳥Ⅱ期、7 世紀第 2 四半期の築造と考えられる。直径 13 m と規模こそ小さいものの、近隣地には白鳳後期創建の寺院である三日市廃寺が築かれ、奈良時代なると富士郡家の中枢地とみられる東平遺跡の建物群が構築されている。東平 1 号墳は、後に郡家が展開する地域に築かれた唯一の終末期古墳であり、その立地環境には明確な計画性がうかがえる。その被葬者の後継者には後の郡司層に連なる人物が含まれていた蓋然性が高いとみられよう。

富士郡域は、渡来系集団との関係が深い竪穴系横口式石室を祖形にもつ無袖石室が排他的に構築される地域でもある（鈴木 2017）。東海地方では極めて珍しい古墳時代の鍛冶具を出土した中原 4 号墳（6 世紀後葉の築造）も東平 1 号墳の近隣地にある。こうした横穴式石室導入期の特徴から判断すると、富士郡域は渡来系技術集団の入植地の一つであったと目される。無袖石室が排他的に構築され続けることを考慮すると、当該地域の 7 世紀における渡来系集団の割合も周辺地域と比べると高かった可能性は十分考慮してよい。東平 1 号墳から出土した丁字形利器の存在意義もこうした外来的要素が濃厚な地域的特性が関係していると捉えられる。

結　語

ここまでの検討において、丁字形利器が枘穴鉄斧を装着した武器を祖形に成立した朝鮮半島系の儀器であり、軍事統率権や刑罰執行権を象徴する斧鉞と関連があることを述べてきた。その淵源地は、その祖形とみられる枘穴鉄斧の集中度から判断して、高句麗の領域に求めた。また、丁字形利器は7世紀初頭頃（TK209型式新相期）に出現し、その後7世紀第2四半期（飛鳥Ⅱ期）にかけて日本列島内で製作された可能性も指摘した。

7世紀第2四半期に位置づけられる東平1号墳例は副葬古墳の全容が判明している点で、丁字形利器の典型例といえ、地域の最有力首長層の権威を象徴する器物として、様ざまな儀式の場で用いられたことが想定できよう。朝鮮半島系譜の儀器は、金銅装サルポにみるように、7世紀前半の古墳副葬品に散見できる。それらの器物を副葬した古墳の被葬者には、地域社会の中に居住する渡来系集団を統括することが期待されていたと捉えられる。地域社会の統率者それぞれの出自はつまびらかにできないものの、少なくとも丁字形利器の系譜を重視する限り、その保有者は高句麗を淵源地として意識していた可能性は考慮してよい。さらに、東平1号墳のような、後の郡家中枢地に築かれる古墳の立地環境から判断すると、丁字形利器の所有者には奈良時代に郡司層に成長するような地域の最有力首長としての性格を読み取ることも許されよう。

以上、7世紀前半における丁字形利器は、渡来系集団を統べる権威の象徴として用いられた可能性を指摘した。日本列島中央部の広域に評制がいきわたる7世紀後葉までの間、地域秩序を維持する儀仗の武器が機能していたことを示す事例として、東平1号墳出土の丁字形利器は重要な意味をもつと評価できる。

謝辞

武器としての斧を考えるように示唆を受けたのは、大阪大学考古学研究室において都出比呂志先生に指導いただいた演習の時であるから、既に四半世紀を経過している。以来、関連した資料に接するたびに思いをめぐらせてみたものの、今に至るまで論文にまとめるには至らなかった。今回、はからずも30年来の宿題に一定の答えを出せたのは、富士市教育委員会からの依頼によるものであったが、改めて様ざまな出会いの連続の中に生きていることを実感した次第である。本稿は都出先生からの課題がなければ実現できなかったものであり、まずは先生のご指導に感謝したい。また、貴重な機会を与えていただいた富士市教育委員会および挿図製作に快く協力いただいた佐藤祐樹氏にも謝意を表したい。

最後になったが、本稿をなすにあたり、次に示す方々、機関からご協力、ご教示を得た。その名を記し、深くお礼申し上げる。

金武重、趙晟元、李承一、石松崇、岩本崇、臼杵勲、大谷晃二、大森信宏、菊地芳朗、金宇大、斎藤大輔、鈴木京太郎、高田健一、高橋透、古田成美、村上恭通、柳本照男、横澤真一、香美町教育委員会、静岡県埋蔵文化財センター

註

1　本稿では、中華人民共和国を中国、朝鮮民主主義人民共和国を北朝鮮、大韓民国を韓国と呼ぶ。また、対象とする東北アジアとは、日本列島、朝鮮半島、中国東北部（遼寧省、吉林省、黒龍江省）を中心とする地域をさす。

2　今回、東平1号墳の正式報告を作成するにあたり、月岡下古墳の出土遺物や出土状態を再検討した。その詳細は本書第4章第1節に掲載している。資料調査にあたっては、香美町教育委員会及び石松崇氏にご高配をいただいた。

3　丁字形利器にみられる透孔の起源を、枘穴をもつ鉄斧の透孔のみに求めることは難しい。本文中に示した通り、丁字形利器の透孔の形状は日本列島内で製作された可能性を示唆するが、同時に、朝鮮半島の有棘利器など、かの地で用いられた儀器に透孔を多用する事例があることも注目しておく必要があるだろう（徐・李 1997）。今のところ、丁字形利器にみられる透孔の直接的な起源を示すことは難しいが、中国や朝鮮にみられる儀器に加え、日本列島内における刀の鍔などの透彫り意匠などが関連していると捉えておきたい。

4　特徴⑤～⑦については、中国や朝鮮からの影響とともに、日本列島内で製作が繰り返された結果、成立した特徴である可能性も考えられる。

5　韓国ではこの種の鉄斧を「横孔斧」と呼んでいる。枘穴鉄斧という呼称は、坂靖によって示されたものであり（坂 2013）、本稿もこの名称を踏襲する。

6　『三国史記』には、624年、新羅が百済に攻められた際に守備にあたった新羅の将軍、訥催が百済兵の振りかざす

斧によって撃たれたとの記録がある（金 2007）。『三国史記』巻 47 列伝七訥催条「有一賊出後、以斧撃訥催」（この時、敵の一人が後から出てきて、斧をもって訥催を撃ち、林訳 1975、188 頁）。

7　枘穴鉄斧と同様の構造をもつ斧は、北方遊牧民族にも認められる。闘斧としての使用方法も共通することから、何らかの関係を想定することも可能であろう。ただし、本稿で対象とする地域や時期とは懸け隔てがあることから、ここでは、中国中原地域とその周辺世界に限って検討を進めたい。

8　枘穴鉄斧の出土地については第 4 表にまとめたが、ここでは図面や写真などで実物の存在が確認できる事例のみを扱った。第 4 表に示したもの以外にも、扶余陵山里 3 号墳、羅州大安里、京都府穀塚古墳から枘穴鉄斧が出土していることが、浜田耕作と梅原末治によって指摘されている（浜田・梅原 1922、12 頁）。ただし、これらの事例を含めても、本文中に示す傾向に影響はない。

9　片方刃の枘穴鉄斧の中には、基部（刃部の逆側）が潰れた状況が確認できるものが散見できる。基部を強く叩いた痕跡とみられ、枘穴鉄斧の使用方法の一端を伝えている。

10　古来中国では玉器「圭」とその先端形状は権力の象徴として捉えられていた。丁字形利器の圭頭刃にも、何らかの象徴的な意味が込められていた可能性がある。

11　このほか、清原扶江里 KM2 号墓、端山富山里墳墓群、慶州皇吾洞 16 号墳なども地域の中では有力階層の墳墓であり、被葬者の階層性の高さがうかがえる。

参考文献（日本語文献）

東 潮　1982「東アジアにおける鉄斧の系譜―古代朝鮮の資料を中心として―」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』

東 潮　1999「楽浪郡の鉄」『古代東アジアの鉄と倭』渓水社

有光 教一　1967「朝鮮―三国時代の農具と工具―」『日本の考古学Ⅵ』河出書房

井口 喜晴　1973「漢代の鉄器について―中原出土の農工具を中心に―」『文学論集』50　愛知大学文学会

小野 真一　1957「スルガの国東部古墳群」『沼津長塚古墳』沼津市教育委員会

角田 徳幸　2017「海士町郡山西古墳の鉄鋌」『島根考古学会誌』第 34 集　島根考古学会

北野 耕平　1957「塚山古墳」『奈良県埋蔵文化財調査報告書』第一輯　奈良県教育委員会

静岡縣　1930「沼津市上香貫の丁字形利器を出したる古墳」『静岡縣史』第 1 巻

伸 立祥　1996『中国漢代画像石の研究』同成社

末永 雅雄　1941「利器の転用」『日本上代の武器』弘文堂書房

末永 雅雄　1957「郡山古墳出土の鉄斧」『史泉』7・8　関西大学史学会

鈴木 嘉昭・後藤 守一　1922「丁字形利器発見古墳」『考古学雑誌』第 12 巻第 7 号　日本考古学会

鈴木 一有　2002「捩りと渦巻き」『考古学論文集　東海の路』

鈴木 一有　2017「東海地方における横穴系埋葬施設の多様性」『一般社団法人日本考古学協会 2017 年度宮崎大会研究発表資料集』日本考古学協会 2017 年度宮崎大会実行委員会

滝沢 誠　2002「宮原二号墳」『沼津市史』資料編　考古　沼津市教育委員会

浜田 耕作・梅原 末治　1922『大正七年度古蹟調査報告』第一冊　朝鮮総督府

林 英樹訳　1975『三国史記』下　雑志　列伝　三一書房

林 巳奈夫　1992『石に刻まれた世界―画像石が語る古代中国の生活と思想―』東方書店

坂 靖　2013「塚山古墳」『5 世紀のヤマト』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

久松 義昭・平林 将信　1990『東平第 1 号墳発掘調査概報』富士市教育委員会

松井 和幸　2001『日本古代の鉄文化』雄山閣

参考文献（ハングル文献）

金性泰　1994「高句麗の武器（2）―鉄鉾、戟、弩、斧―」『文化財』第 27 号

金性泰　2007「高句麗の武器、武装、馬具」『高句麗の文化と思想』東北亜歴史財団（東北亜歴史財団編、篠原啓方訳 2013『高句麗の文化と思想』明石書店）

徐姈男・李賢珠　1997「三韓・三国時代鉄器の儀器的性格に対する一考察」『伽耶考古学論叢 2』（財）駕洛国史蹟開発研究院

本稿で触れた古墳、遺跡にかかわる典拠文献

【中華人民共和国】

［河南省］

洛陽焼溝漢墓：中国科学院考古研究所 1959『洛陽焼溝漢墓』科学出版社

浚県出土：李京華 1965「漢代的鉄鈎鑲和鉄鉞戟」『文物』1965 年第 2 期

鄭州碧沙崗公園：鄭州市博物館 1966「河南鄭州市碧沙崗公園東漢墓」『考古』1966 年第 5 期

［山東省］

沂南漢画像石墓：曾昭燏ほか 1956『沂南古画像石墓発掘報告』文化部管理局出版

肥城孝堂山：関野貞 1916『支那山東省に於ける漢代画像墓の表飾』、伸立祥 1996『中国漢代画像石の研究』同成社

山東省諸城漢墓：諸城県博物館・任日新 1981「山東省諸城漢墓画像石」『文物』1981 年第 10 期

［遼寧省］

撫順高爾山城：徐家国・孫力 1987「遼寧撫順高爾山城発掘簡報」『遼海文物学刊』1987 年第 2 期

北票喇嘛洞：遼寧省文物考古研究所ほか 2004「遼寧北票喇嘛洞墓地 1998 年発掘報告」『考古学報』2004 年第二期

北票馮素沸墓：遼寧省博物館 2015『北票馮素沸墓』文物出版社
桓仁五女山城：遼寧省文物考古研究所 2004『五女山城―1996 ～ 1999、2003 年桓仁五女山城調査発掘報告―』文物出版社
［吉林省］
集安太王陵：吉林省文物考古研究所・集安市博物館 2004『集安高句麗王陵―1990 ～ 2003 年集安高句麗王陵調査報告―』文物出版社
集安麻線溝 M1445 号：吉林省文物工作隊・集安文管所 1984「1976 年集安洞沟高句麗墓清理」『考古』1984 年第 1 期
集安民主村：吉林省文物考古研究所ほか 2010『集安出土高句麗文物集粋』科学出版社

【朝鮮民主義人民共和国】
［平安南道］
平壌駅前壁画古墳：社会科学院考古学及民俗学研究所 1958『大同江流域古墳発掘報告』科学院出版社
南浦薬水里：朱栄憲 1963「薬水里壁画古墳発掘報告」『各地遺跡整理報告』科学出版社
［黄海南道］
安岳 3 号墳：科学院考古学及民俗学研究所『安岳 3 号墳発掘報告』科学院出版社

【大韓民国】
［京畿道］
漣川瓠蘆古墨：韓国土地住宅公社 2014『漣川瓠蘆古墨Ⅳ』
ソウル九宜洞：九宜洞報告書刊行委員会 1997『漢江流域の高句麗要塞』
ソウル紅蓮峰第 1 堡塁：高麗大学校考古環境研究所 2007『紅蓮峰第 1 堡塁―発掘調査綜合報告書―』
ソウル紅蓮峰第 2 堡塁：高麗大学校考古環境研究所 2007『紅蓮峰第 2 堡塁―1 次発掘調査報告書―』
ソウル龍馬山第 2 堡塁：ソウル大学校博物館 2009『龍馬山第 2 堡塁―発掘調査報告書―』
九里峨嵯山第 4 堡塁：ソウル大学校博物館 2000『峨嵯山第 4 堡塁―発掘調査報告書―』
九里峨嵯山シル峰堡塁：ソウル大学校博物館 2002『峨嵯山シル峰堡塁』
［忠清北道］
清原芙江里古墳群：高麗大学校埋蔵文化財研究所 2002『芙江里遺蹟』
清原南城谷山城：忠北大学校博物館 2004『清原南城谷高句麗遺跡』
［忠清南道］
端山富長里：忠清南道歴史文化研究院 2008『端山富長里遺蹟』
公州水村里 1 号：忠清南道歴史文化研究院 2007『公州水村里遺蹟』
扶余陵山里 3 号：浜田耕作・梅原末治 1922『大正七年度古蹟調査報告』第一冊　朝鮮総督府（12 頁）
［全羅北道］
高敞鳳徳里 1 号：馬韓・百済文化研究所 2016『高敞鳳徳里 1 号墳』
［全羅南道］
羅州大安里：浜田耕作・梅原末治 1922『大正七年度古蹟調査報告』第一冊　朝鮮総督府（12 頁）
［慶州北道］
慶州皇南大塚北墳：文化財管理局文化財研究所 1985『皇南大塚（北墳）』
慶州皇吾里 16 号：有光教一・藤井和夫 2000『朝鮮古蹟研究會遺稿Ⅰ』ユネスコ東アジア文化研究財団・財団法人東洋文庫
慶州皇南里：朴日薫 1964「皇南里破壊古墳発掘調査報告」『皇南里四・五号古墳　皇南里破壊古墳発掘調査報告』国立博物館古蹟調査報告書第 5 冊　国立博物館
慶州雁鴨池：文化財管理局 1978『雁鴨池』（西谷正ほか訳 1993『雁鴨池』学生社）
慶山林堂 7 号：嶺南大学校博物館 2005『慶山林堂地域古墳群Ⅷ林堂 7 号墳』
大邱達城古墳群：野守健・小泉顕夫 1931「慶尚北道達城郡達西面古墳調査報告」『大正十二年度古蹟調査報告』第 1 冊　朝鮮総督府、国立大邱博物館 2015『大邱達城遺蹟Ⅱ―達城古墳群　発掘調査報告書（1）―』日帝強占期資料調査報告 14 輯
高霊池山洞 45 号：高霊郡 1979『大伽倻古墳発掘調査報告書』
星州星山洞 1 号：浜田耕作・梅原末治　1922『大正七年度古蹟調査報告』第一冊　朝鮮総督府
［慶尚南道］
蔚山大垈里 40 号：蔚山文化財研究院 2006『蔚山大垈里中垈遺蹟』
陜川玉田 M3 号：慶尚大学校博物館 1990『陜川玉田古墳群Ⅱ』
金海大成洞 57 号：大成洞古墳博物館 2013『東アジアの交易の架橋　大成洞古墳群』
金海大成洞 91 号：大成洞古墳博物館 2015『金海大成洞古墳群―85 号墳～ 91 号墳―』

【日本国】
［島根県］
郡山所在：末永雅雄 1957「郡山古墳出土の鉄斧」『史泉』7・8　関西大学史学会、角田徳幸 2017「海士町郡山西古墳の鉄鋌」『島根考古学会誌』第 34 集
郡山西：角田徳幸 2017「海士町郡山西古墳の鉄鋌」『島根考古学会誌』第 34 集
新開 3 号墳：隠岐島前教育委員会 1990『新開古墳群』
［鳥取県］
普段寺：高田健一（編）2013『山陰における前方後円墳の出現過程』鳥取大学地域学部
［奈良県］

塚山：北野耕平・伊達宗泰 1957「中期古墳」『奈良県埋蔵文化財調査報告書』第一輯　奈良県教育委員会
五條猫塚：奈良国立博物館 2013・2014・2015『五條猫塚古墳の研究』
［兵庫県］
月岡下：本書
油良地区所在古墳：大手前大学史学研究所・香美町教育委員会 2014『文堂古墳　図版篇』図版 84
［京都府］
穀塚：浜田耕作・梅原末治 1922『大正七年度古蹟調査報告』第一冊　朝鮮総督府（12 頁）
［静岡県］
宮原 1 号：滝沢誠 2002「宮原一号墳」『沼津市史』資料編　考古　沼津市教育委員会
宮原 2 号：鈴木嘉昭・後藤守一 1922「丁字形利器発見古墳」『考古学雑誌』第 12 巻第 7 号　日本考古学会、滝沢誠 2002「宮原二号墳」『沼津市史』資料編　考古　沼津市教育委員会
中原 4 号：佐藤祐樹（編）2016『伝法　中原古墳群』富士市教育委員会
東平 1 号：久松義昭・平林将信 1990『東平第 1 号墳発掘調査概報』富士市教育委員会、本書
［群馬県］
赤堀村 4 号：松村一昭 1979『赤堀村地蔵山の古墳 2―伊勢崎北部土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告―』赤堀村教育委員会
［宮城県］
多賀城：新藤秋輝・丹羽茂・柳澤和明・白崎慶介 1996『宮城県多賀城跡調査研究所年報　1995　多賀城跡－第 66 次調査』宮城県多賀城跡調査研究所

図出典

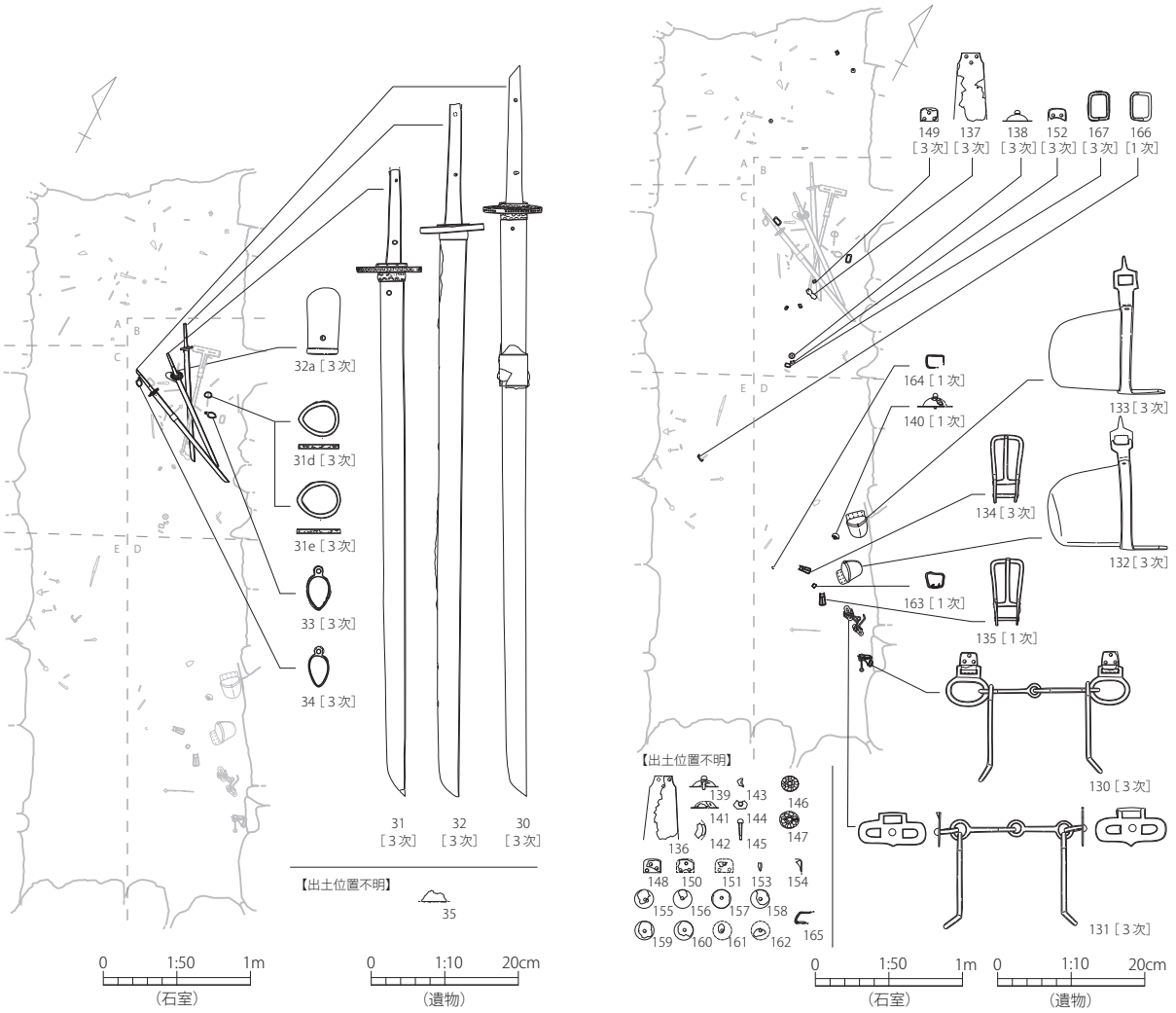
第 64 図：富士市教育委員会作成の図に加筆
第 65 図：富士市教育委員会作成の図に多賀城例を出典文献より再トレースの上引用
第 66 図、第 67 図、第 68 図、第 69 図 - 2・3、第 70 図：出典文献より引用して作成　ただし、漣川瓠蘆古墨例は写真トレース
第 69 図 - 1：出典文献より線画トレース
第 71 図：高田健一氏より提供の図をトリミングの上引用
第 72 図：出典文献より引用して作成

第 3 節　東平 1 号墳副葬馬具と大刀の特徴からみた被葬者像

大谷 宏治

はじめに

東平 1 号墳の副葬品のうち、大刀では象嵌装鍔付大刀 2 点（30・31）、鉄製鍔付大刀 1 点（32）のほか、鉄製無象嵌円頭大刀柄頭 1 点（32e）、足金物 2 点（33・34）、象嵌装責金具 2 点（31d・31e）、大刀に伴う金具（35）が出土している。刀身から大刀は 3 点副葬されているが、円頭柄頭等刀装具がどの大刀に装着されるのか（拵え）については後述する。馬具では轡 2 組－鉄製横長心葉形鏡板付轡 1 組（130）[註 1]、金銅製帯状吊金具付大型矩形立聞環状鏡板付轡 1 組（131）－、銅製壺鐙 1 組（132・133）、金銅製（無文）棘付花弁形杏葉 2 点（136・137）[註 2・3]、金銅製帯金具・飾金具（半球形 5 点以上、断面コ字形隅切方形金具 4 点、断面コ字形半円形切込入方形金具 1 点、断面板状円形金具 8 点、138 ～ 162）、鉸具 2 点（134・135）、鉄製ロ字形金具（帯留金具か）大 2 小 3 点（163 ～ 167）がある。鞍に伴う海金具や磯金具、鞍金具は出土していないため、鞍については金具を伴わない木製品であったか鞍そのものが副葬されなかった可能性が高い。ここでは、副葬された馬具・大刀から東平 1 号墳の被葬者像を明らかにしたい。



第 73 図　東平 1 号墳大刀及び馬具出土状況図

第 5 表　鉄製無象嵌円頭大刀出土例

遺跡名	所在地	墳形	規模	埋葬施設	材質	鍔	刀身	文献
下触牛伏 1 号墳	群馬県伊勢崎市	方	18.7	横石	鉄製	八窓鍔	両関	1
立野 12 号墳	埼玉県熊谷市	古墳	―	横石	鉄製	不明	不明	2
比奈窪中屋敷 15 号横穴墓	神奈川県中井町	横穴墓	―	横穴	鉄製	八窓鍔	両関	3
東一本柳古墳	長野県佐久市	円	10+	横石	鉄製	不明	不明	4
東平 1 号墳	静岡県冨士市	円	13	横石	鉄製	八窓鍔？	両関？	本書
醍醐 1 号墳	京都府京都市	円	22	横石	鉄製	六窓鍔？	不明	5

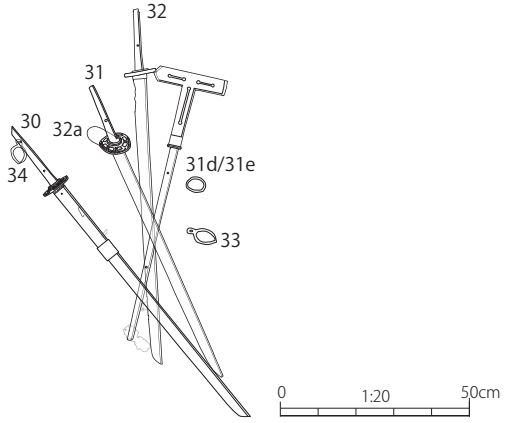
墳形　円＝円墳　方＝方墳　古墳＝墳形不明　　埋葬施設　横石＝横穴式石室　横穴＝横穴墓

1　大刀の帰属年代

(1) 大刀拵えの復原

東平 1 号墳の大刀 3 点は、鍔、柄縁責金具、鏰は装着された状況で出土したが、円頭柄頭 1 点、鉄製吊金具 2 点、象嵌装鉄製責金具は刀からは外れた状況で出土した（第 73・74 図）。この取り外しが副葬時に行われたか、追葬の際のかたづけで外されたのか不明確ではあるが、最終段階では大刀（30）の鞘口金具を除いて、鞘は外され、柄頭も外された状態で配置された。そこで編年的位置づけを探る前に、刀装具の出土位置や特徴などから、外れている刀装具について、他の事例などとの比較を通して検討し、大刀 3 振の拵えを復原しておきたい。

無象嵌円頭柄頭　鉄製無象嵌円頭柄頭は、隅抉（欠）のある象嵌装大刀（30，Ａとする）には装着されない可能性が高い。出土位置からは象嵌装大刀（31，Ｂとする）、八窓鍔付大刀（32）のどちらに装着されたか判断できない。無象嵌円頭柄頭は象嵌装円頭柄頭の影に隠れて目立たないが、東平 1 号墳以外にも管見で 5 例存在する（第 5 表）。このうち拵え全体が出土しているのは神奈川県比奈窪中屋敷 15 号横穴墓 (註 4) と群馬県下触牛伏 1 号墳である。いずれも無象嵌の鉄製八窓鍔を伴い、両関である（第 75 図）。この 2 例から判断するのは心許ないが、東平 1 号墳では鉄製無象嵌八窓鍔付大刀が出土していること、象嵌装鍔付大刀で鉄製円頭柄頭をもつもので円頭に象嵌が施されないものは管見では確認できないことから、象嵌装大刀 B ではなく、鉄製円頭柄頭はこの八窓鍔付大刀の柄頭であると判断した。



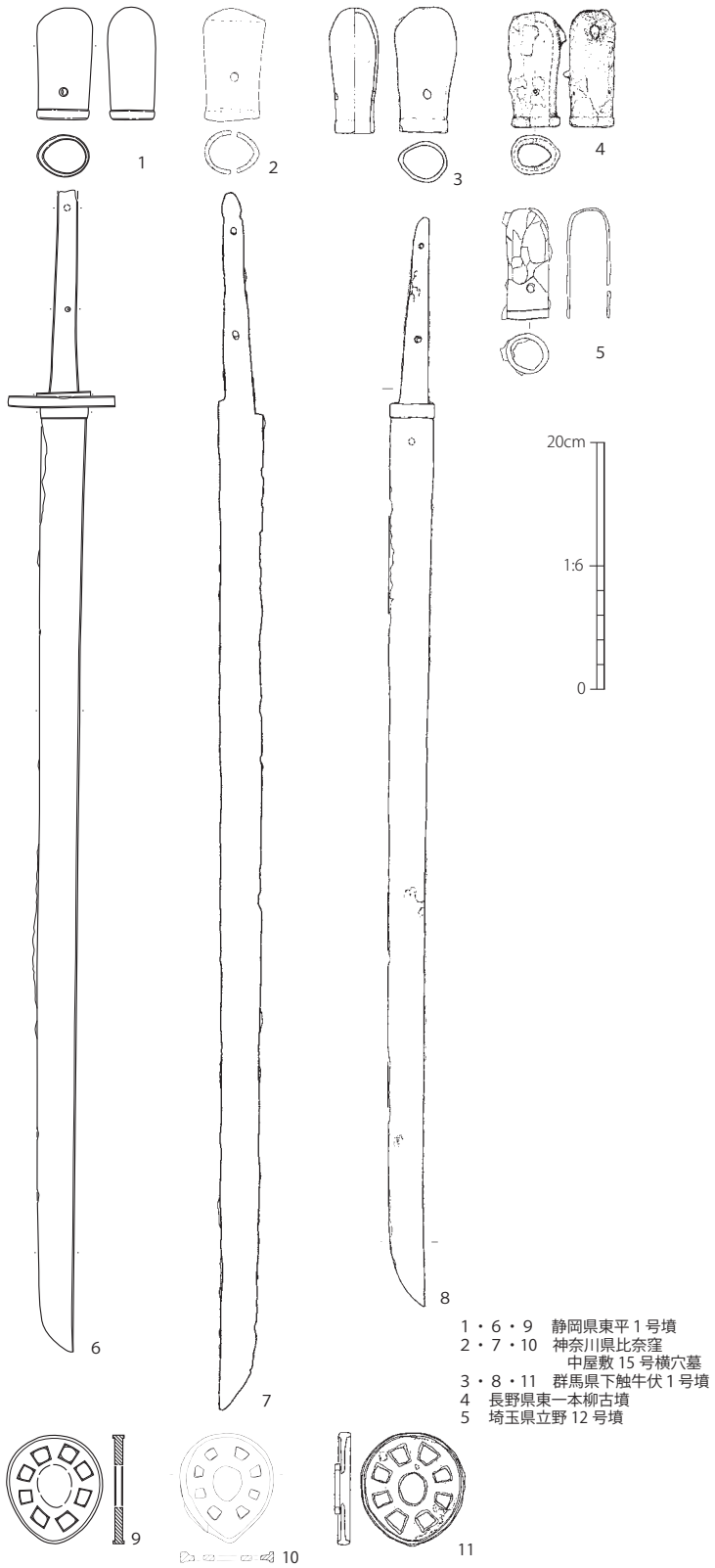
第 74 図　大刀出土状況

象嵌装責金具　象嵌装責金具 2 点は、文様が二重半円文であること、象嵌装大刀Ａに装着された鞘金具と形状が合わないこと、象嵌装大刀Ｂの鏰の文様に二重半円文が採用されていることから、象嵌装大刀Ｂに伴うものと判断した (註 5)。

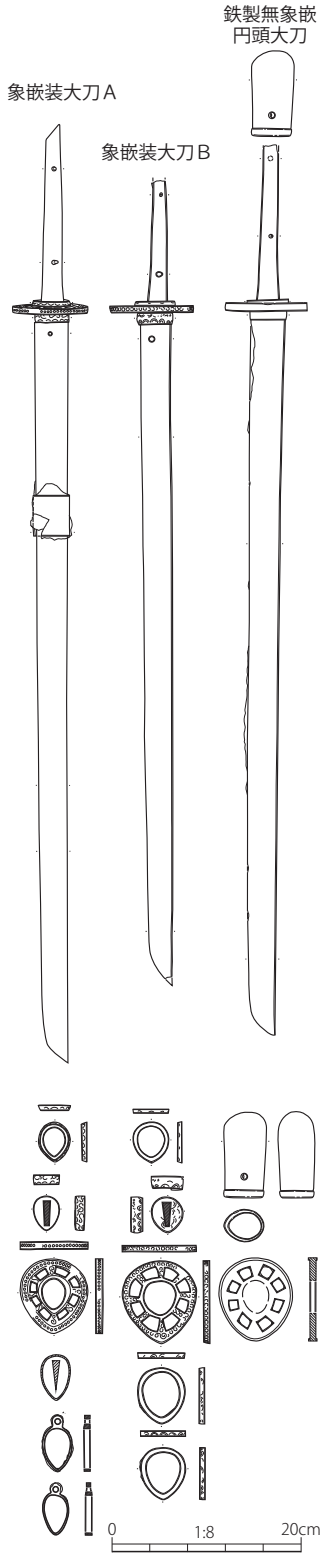
吊孔付足金物　佩用金具である鉄製吊孔付足金物 2 点は同形状であることから同一の大刀に伴う可能性が高い。象嵌装大刀Ｂに伴う象嵌装責金具とは形状が異なること、無象嵌円頭大刀は類例として挙げた 2 例ともに足金物を伴わないこと、象嵌装大刀Ａの鞘金具の断面形状と大きさが吊孔付足金物 33 とほぼ同一であることから象嵌装大刀Ａに伴うと判断した。なお、33 が鍔側、34 が切先側に取り付けられた可能性が高い。34 が 33 より内孔がやや小さいことから、大刀の鞘は切先に向かいやや細くなるような構造であったことが窺える。

東平 1 号墳出土大刀の拵え　上記により、東平 1 号墳の大刀は、佩用金具付（二足佩用）象嵌装八窓鍔付大刀 1 振、象嵌装八窓鍔付大刀 1 振、鉄製無象嵌八窓鍔付円頭大刀 1 振の 3 点であり（第 76 図）、金属製の鞘金具がない、あるいは少ない、素鞘（瀧瀬 1984）であることが判明した。

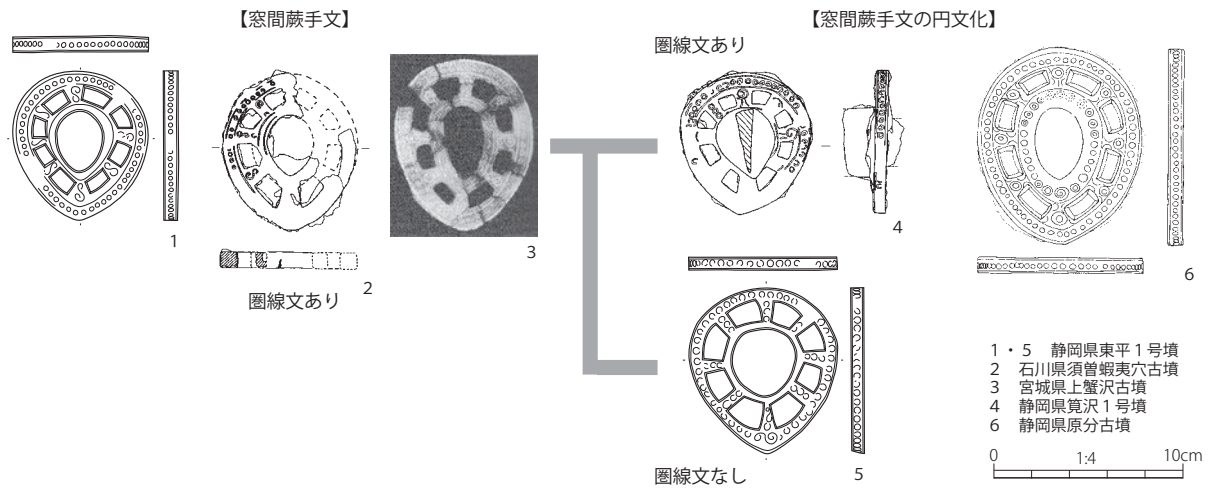
なお、東平 1 号墳は象嵌装大刀 2 振、八窓鍔付円頭大刀 1 振を有するが、方頭大刀など金銅装大刀を保有しないところに特徴がある。また、象嵌装大刀 2 振は有機質製の柄頭で頭椎か円頭大刀である可能性が高い。



第75図　鉄製無象嵌円頭柄頭の類例と拵え



第76図　東平1号墳出土大刀の拵え



第 77 図　連珠文象嵌鍔の類例と変遷

(2) 大刀の帰属年代

象嵌装鍔付大刀　筆者は長泉町原分古墳出土象嵌鍔を位置づける際に、面・耳に圏線連珠文（円文）を施す象嵌鍔の検討を行った。八窓鍔は古い様相を示すと考えられるが、共伴する柄頭の文様などから八窓鍔でも圏線連珠文象嵌八窓鍔は古墳時代終末期前半、7 世紀前半～中葉に位置づけられることを明らかにした（大谷 2008a）。東平 1 号墳出土の 2 例は、圏線連珠文・連珠文であるが、面の窓間の文様が S 字（蕨手）文のもの（象嵌装大刀Ａ）と円文のもの（象嵌装大刀Ｂ）がある。前者は須曽蝦夷穴古墳例（能登島町教委 2001）が、後者は原分古墳例（静岡県埋文研 2008）が類似しており（第 77 図）、時期差はそれほどないものの両者の柄頭の文様から、須曽蝦夷穴古墳例から原分古墳例へ変化したことが明らかである（大谷 2008a）。これにより圏線連珠文八窓鍔は東平 1 号墳象嵌装大刀Ａ（窓間蕨手）の方が象嵌装大刀Ｂ（窓間円文）より古く位置づけられる。両者共に 7 世紀前半～中ごろに位置づけられる。一人の被葬者が 2 振を別々の機会に入手したのか、二人の被葬者が別々に入手したのかは明らかにできない。

八窓鍔付無象嵌円頭大刀　醍醐 1 号墳例は 7 世紀前半、下触牛伏 1 号墳は 7 世紀後半であることから、無象嵌円頭大刀が古墳時代終末期に存在したことは間違いないが、東平 1 号墳例の時期を特定するのは難しい。無象嵌八窓鍔は、西澤正晴氏の遠江・駿河の鍔の研究による有窓鍔Ｂ類（平面形が倒卵形で、短軸の最大幅が長軸の中心付近にあるもの）に該当する（西澤 2002）。西澤氏によると有窓鍔Ｂ類は、TK209 型式期に出現し、飛鳥Ⅲ併行期まで存在した可能性が高く、その主体は飛鳥Ⅰ～Ⅱ併行期と想定されている（西澤 2002）。

また、刀身の形態は臼杵勲氏による均等両関で、茎は中細茎であり、臼杵氏の均等両関一文字尻中細茎か均等両関栗尻中細茎に分類できる。茎尻が欠損しており、どちらか判断が難しいが、いずれも臼杵氏分類「Ⅸ」で、古墳時代終末期（7 世紀以降）に位置づけられる（臼杵 1984）。つまり、八窓鍔付円頭大刀は刀身の特徴と八窓鍔から飛鳥Ⅰ期以降に位置づけられる。同じ場所に副葬された象嵌装鍔付大刀が飛鳥Ⅱ併行期に位置づけられる蓋然性が高く、後述するように馬具も飛鳥Ⅱ併行期に位置づけられることから、八窓鍔付円頭大刀も飛鳥Ⅱ併行期に位置づけるのが妥当と考える。

3　馬具の帰属年代

(1) 轡

ア　帯状吊金具付大型矩形立聞環状鏡板付轡

大型矩形立聞環状鏡板付轡（以下、環状鏡板付轡は円環轡とする）は通常金属製の吊金具は装着されないが、東平 1 号墳出土例は、金銅製で幅広の帯状吊金具で面繋の繋に装着される。古墳時代の轡の吊金具は吊脚まで一体で作られている場合が多いが、東平 1 号墳例は、方形帯金具に別造りの金銅製吊脚を鋲留めするものである。

第 6 表　帯状吊金具付大型矩形立聞環状鏡板付轡出土例

遺跡名	所在地	墳形	規模	埋葬	材質	断面	吊脚	連結	心轡	花弁	その他の馬具	文献
古凍 14 号墳第 2 土坑	埼玉県東松山市	―	―	土坑	金銅装	板状	別造	銜	なし	―	壺鐙他	1
古凍 14 号墳第 4 土坑	埼玉県東松山市	―	―	土坑	鉄製	板状	一体	銜	なし	―	鞍金具他	1
東平 1 号墳	静岡県富士市	円	13	横石	金銅製	コ字形	別造	銜	鉄製	●	壺鐙他	本書
上向嶋 2 号墳	愛知県豊橋市	円	16	横石	金銅製	コ字形	別造	銜	なし	●	鉸具造他	2
川子原横穴墓	島根県奥出雲町	―	―	横穴	鉄製	板状	一体	銜	なし	―		3

略記　墳形　土壙＝馬殉葬土壙か　円＝円墳　埋葬＝埋葬施設　横石＝横穴式石室　横穴＝横穴墓　材質＝帯金具の材質
吊脚＝吊金具と吊脚の製作方法　連結　轡・銜・引手の連結方法　銜＝銜介在型連結（大谷 2008b）
心轡＝横長心葉形鏡板付轡の有無　花弁＝棘付花弁形杏葉の有無

第 7 表　横長心葉形鏡板付轡出土例

遺跡名	所在地	墳形	規模	埋葬	分類	材質	連結	轡	花弁	文献
成田 3 号墳	茨城県行方市	円	18	横石	Ⅰ	鉄	遊環リベット留・銜介在	―	●	1
宮中野 99-1 号墳	茨城県鹿嶋市	―	―	土坑	Ⅱ	鉄	遊環リベット留・銜介在	鑣轡	●	2
六孫王原古墳	千葉県市原市	後円	46	不明	Ⅱ	金銅	遊環リベット留・銜介在	―	―	3
塚原出土	群馬県みなかみ町	―	―	―	―	金銅	（未確認）	―	―	4
御門 1 号墳	群馬県昭和村	円	11	横石	Ⅱ	鉄	遊環リベット留・銜介在	双環式円板轡	●	5
若田 B 号墳	群馬県高崎市	円	14	横石	Ⅰ	鉄	―	―	●	6
御崎古墳	山梨県笛吹市	古墳	―	横石	Ⅱ	金銅	遊環リベット留・銜介在	―	●	7
東一本柳古墳	長野県佐久市	円	10+	横石	Ⅰ	鉄	遊環リベット留・銜介在	―	●	8
御蔵上 3 号墳	静岡県長泉町	―	―	横石	Ⅱ	金銅	遊環有？・銜介在？	―	●	9
東平 1 号墳	静岡県富士市	円	13	横石	Ⅰ	鉄	遊環リベット留・銜介在	※1	●	本書
千人塚古墳	静岡県富士市	円	20	横石	Ⅰ	鉄	遊環リベット留・銜介在	―	―	10
白砂ヶ谷Ｄ 2 号墳	静岡県藤枝市	円	10	横石	―	鉄	遊環リベット留・銜介在	―	―	11

略記　墳形　円＝円墳　後円＝前方後円墳　埋葬＝埋葬施設　横石＝横穴式石室　花弁 = 棘付花弁形杏葉の有無
※1　東平 1 号墳出土の轡は帯状吊金具付大型矩形立聞円環轡。

第 8 表　横長心葉形鏡板付轡と関連する透十字文心葉形鏡板付轡出土例

遺跡名	所在地	墳形	規模	埋葬	材質	文様	連結	花弁杏葉	文献
しどめ塚古墳	群馬県高崎市	円	16.6	横石	鉄製	―	外接（8 字形遊環介在）	●	12
塚山古墳群	三重県伊勢市	古墳	―	―	金銅製	毛彫	外接（8 字形遊環介在）	―	13
坂本古墳	滋賀県大津市	古墳	―	―	金銅製	毛彫	外接（8 字形遊環介在か）	―	5
伝香美町油良出土	兵庫県香美町	―	―	―	金銅製	毛彫	外接（8 字形遊環介在）	―	本書
古柳塚古墳	山梨県笛吹市	円	―	―	金銅装	透彫	外接（8 字形遊環介在）	―	14
仁田山ノ崎古墳	静岡県牧之原市	古墳	―	横石	鉄製	―	銜リベット留・銜介在	―	15
小畑 3 号墳	鳥取県岩美町	古墳	―	横石	鉄製	―	二重銜先環（交差式）	―	16

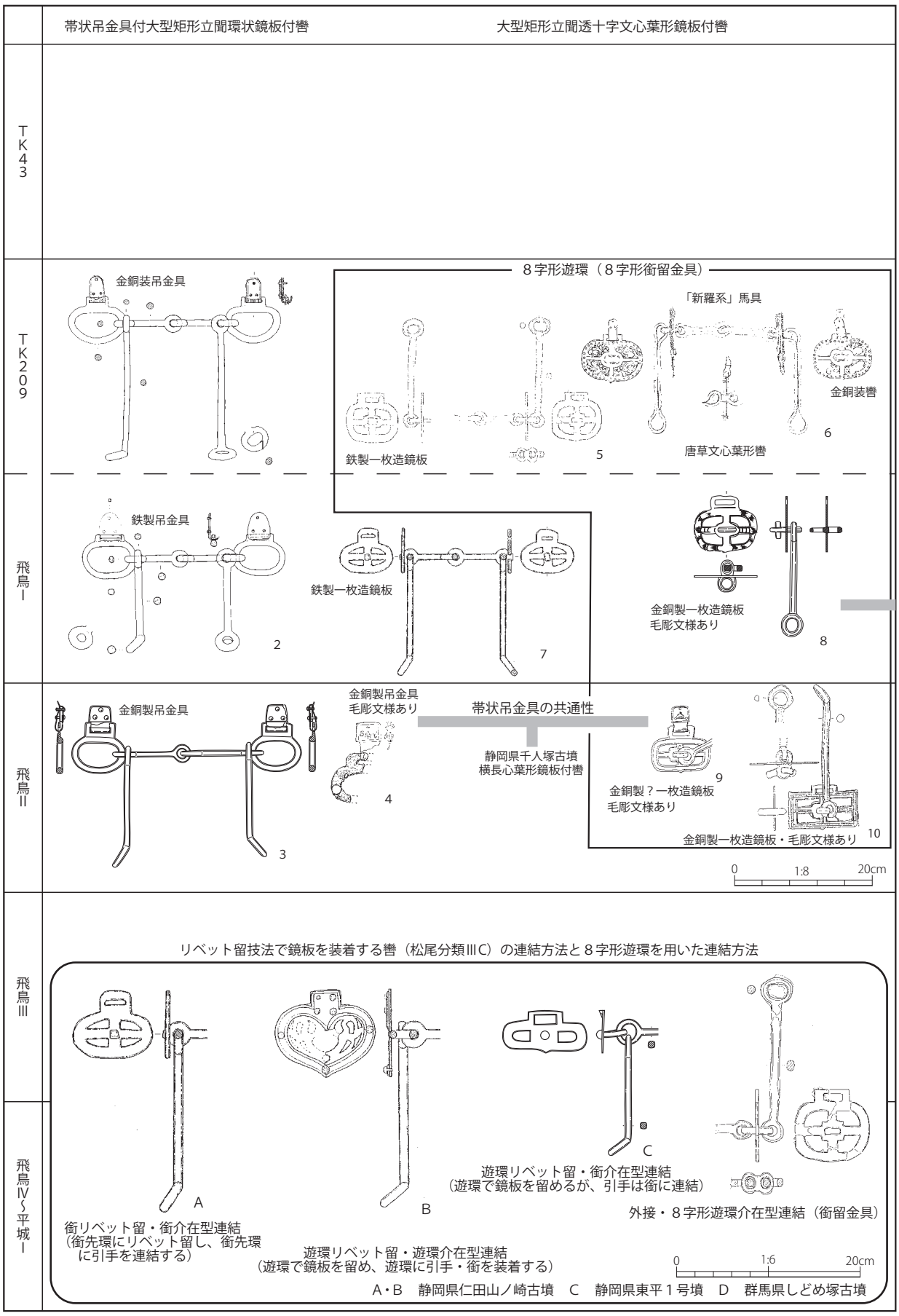
略記　墳形　円＝円墳　埋葬＝埋葬施設　横石＝横穴式石室　8 字形遊環＝ 8 字形銜留金具（神 2017）
花弁杏葉＝棘付花弁形杏葉の有無　銜リベット留・銜介在（第 6 図参照）
※仁田山ノ崎古墳例は楕円形鏡板付轡とされるが、大型矩形立聞で透十字文を有する鏡板付轡は心葉形であることが多いため、心葉形と判断した（註 7 参照）

東平 1 号墳出土の帯状吊金具の類例は、埼玉県古凍 14 号墳第 2・4 土坑（馬殉葬土坑）などで確認できる（第 6 表）。また、上向嶋 2 号墳では円環轡 2 種類とともに東平 1 号墳と同様の吊金具が出土している。断定はできないが、棘付花弁形杏葉に伴うことが多い横長心葉形鏡板付轡は出土していないこと、2 つの円環轡のうちひとつは鉸具造立聞円環轡であり、吊金具は不必要であることから、東平 1 号墳と同様に大型矩形立聞円環轡に伴う可能性が高い。

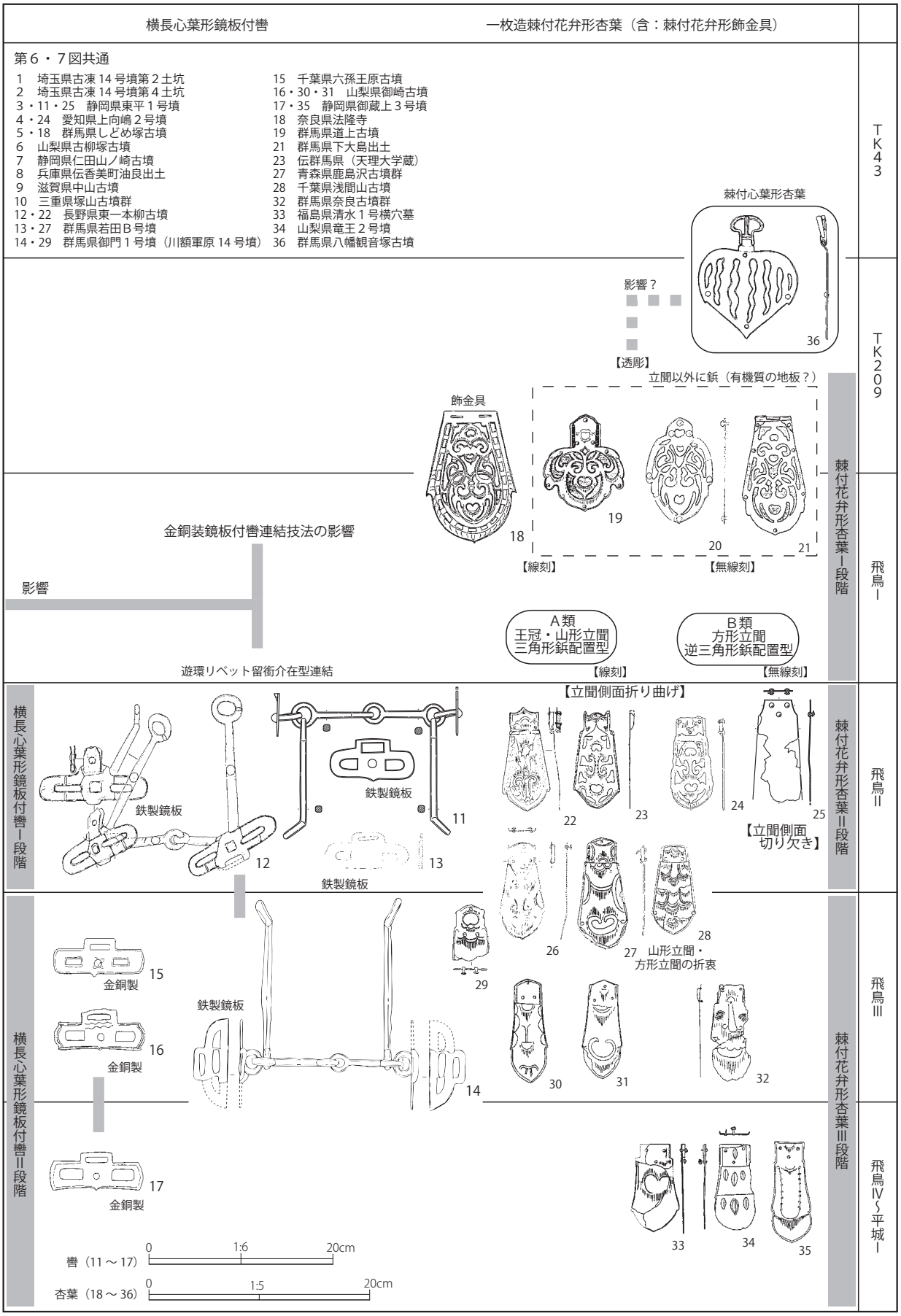
大型矩形立聞円環轡は、岡安光彦氏により鏡板の大きさが大きなものから小さいものへ変化すること、TK217 型式期に高さ 7.2cm、幅 6.4cm 前後になることが指摘される（岡安 1984・1985）。それに従えば、古凍 14 号墳第 2 土坑出土例はそれよりも大きく、4 号土坑はほぼ同法量、東平 1 号墳や上向嶋 2 号墳例はそれよりも小さいことから、第 78 図に示したような変遷を想定できる。東平 1 号墳例は TK217 型式でも新しい時期、飛鳥Ⅱ期併行期に位置づけることができる。

イ　横長心葉形鏡板付轡

東平 1 号墳出土の横長心葉形鏡板付轡（以下、横長心葉形轡）は、鏡板が鉄製一枚造である。この轡は鏡板がハート形を押し潰したように扁平で横長の心葉形であること、立聞が大型矩形立聞であることが特徴である。また、銜・鏡板・引手の連結方法は、銜先環に遊環、引手を連結し、鏡板は遊環の先端に突起をつけて鏡板を通した後先端をかしめて留める（リベット留する）ものである。松尾充晶氏の分類によるⅢＣ類 [註 6] に該当し、TK217 型式（飛鳥Ⅰ）



第78図　東平1号墳出土馬具の編年的位置づけ①（帯状吊金具付大型矩形立聞環状鏡板付轡・横長心葉形鏡板付轡と関連する轡）



第79図　東平１号墳出土馬具の編年的位置づけ②（横長心葉形鏡板付轡・棘付花弁形杏葉）

以降に出現するとされる（松尾 1999）。

横長心葉形轡は、佐藤信孝氏の類例集成と分類研究により、第 7 表に示したように、東平 1 号墳を含めて 12 例が知られる（佐藤 2005）。この轡は連結方法が判明するものは、すべて東平 1 号墳と同様の連結方法を採用する、規格性の高い轡である。

横長心葉形轡の展開　横長心葉形轡は佐藤氏の集成と研究（佐藤 2005）や白井久美子氏の研究（白井 2002）を参考に分類すると、東一本柳古墳例や若田 B 号墳例のように心葉形の隅角が丸みを帯びるものと、六孫王原古墳・御蔵上 3 号墳のように長方形に近いもの、側面が御崎古墳のように E 字形に加工されるもの、御門 1 号墳のように鏡板の形状が心葉形から逸脱するものに区分できる。丸みを帯びるものをⅠ類、それ以外のものをⅡ類に区分する（第 7 表）。Ⅰ類は鉄製のみであり、Ⅱ類は金銅製のものが多い。Ⅰ類とⅡ類で材質・形状が異なることから、この時期に画期があった可能性がある。

東平 1 号墳は鏡板の肩が丸みを帯びているためⅠ類に区分できる。Ⅰ類はおおむね 7 世紀前半～中ごろに位置づけることが可能であり（横長心葉形鏡板付轡Ⅰ期）、Ⅱ類は 7 世紀中ごろ～ 8 世紀初頭（横長心葉形鏡板付轡Ⅱ期）に位置づけられる。東平 1 号墳は 7 世紀前半～中ごろ、飛鳥Ⅱ併行期に位置づけたい。

横長心葉形轡の成立　横長心葉形轡は古墳時代終末期に新たに出現する轡とされる（内山 1996）。上述したようにこの轡は 7 世紀前半以降に位置づけられる可能性が高いが、板状一枚造である点、立聞が大型矩形である点が大部分の古墳時代後期末以降の板状鏡板付轡とは大きく異なっており、古墳時代後期からの系譜関係を探ることで、横長心葉形轡の成立について検討し、東平 1 号墳例の評価を試みたい。

横長心葉形轡の特徴は、下辺に突起があるものが多いことから心葉形であることが意識されている、立聞は大型矩形立聞である、初期のものは鉄製である、轡の連結方法が遊環リベット留・銜介在型連結である。

古墳時代後期後半の鏡板付轡は、「新羅系」（千賀 2003）とされる、奈良県藤ノ木古墳例（橿考研 1990・1995）や静岡県賤機山古墳例（東海古墳文化研 2006）のような唐草文心葉形鏡板付轡や伝名古屋市出土（熱田神宮蔵、東海古墳文化研 2006）の透十字文心葉形鏡板付轡（○○鏡板付轡の場合は、○○轡とする）以外は、小型矩形立聞であることが多い（「非新羅系」）。また、6 世紀末以降鋲留立聞が採用されることが一般的になる。そのような状況の中、「新羅系」馬具の特徴である大型矩形立聞を横長心葉形轡が古墳時代終末期に至っても保持することは大きな特徴である。そこで大型矩形立聞の鏡板付轡で鉄製一枚造のものを探ると、第 8 表に示したように、しどめ塚古墳の透十字文心葉形轡、仁田山ノ崎古墳の心葉形轡[註 7]、小畑 3 号墳の透十字文心葉形轡がある。いずれも透十字文であることが特徴である。このうちしどめ塚古墳例は、8 字形遊環（大谷 2014、8 字形銜留金具＝神 2017）を用いて鏡板を留めるもの（第 78 図参照）で、轡の連結方法として非常に特殊なものである。この事例はしどめ塚古墳以外に、古柳塚古墳の金銅装唐草文心葉形轡、伝香美町油良出土・塚山古墳群の一枚造の透十字文心葉形轡があり、中山古墳例もその可能性が高い（第 8 表、第 78 図）。8 字形遊環も大型矩形立聞透十字文心葉形轡に伴うもので、金銅装のものが存在することも特徴である。この 8 字形遊環をもつ透十字文心葉形轡をはじめとする透十字文心葉形轡は、引手の特徴や鏡板の平面的な特徴などから、TK209 ～飛鳥Ⅰ併行期に古柳塚古墳例、しどめ塚古墳例、小畑 3 号墳例で、続く飛鳥Ⅰに肩が丸みのある仁田山ノ崎古墳例、伝香美町油良出土例、飛鳥Ⅱに平面形が長方形に近い中山古墳例や角がしっかりした長方形の塚山古墳群例を位置づけることができる（第 78 図）。

横長心葉形轡のⅠ段階のものが丸みを帯びる傾向にあるものの、長方形に近い扁平な心葉形に変化していることを考慮すると、中山古墳例・塚山古墳群例と同時期と考えることができる（第 78 図）。

なお、中山古墳例は毛彫文様のある帯状吊金具を採用しているが、上述したように横長心葉形轡の千人塚古墳例も同様の帯状吊金具を採用しており、時期的にも形態的にも共通性が窺える。したがって、長方形に近い心葉形であること、一枚造、大型矩形立聞である特徴は、「新羅系」馬具の系譜を引く透

第 9 表　棘付花弁形杏葉出土例

遺跡名	所在地	墳形	規模	埋葬	心轡	数	立聞	飾金具コ字形			飾金具板状				時期	文献
								方	円	透方	長	円	透長	透方		
道上古墳	群馬県前橋市	円	16	横石		1	山三	●	●	－	－	－	－	－	Ⅰ	9
八幡下大島出土	群馬県高崎市	古墳	－	－		1	蝶番	－	－	－	－	－	－	－	Ⅰ	9
しどめ塚古墳	群馬県高崎市	円	16.6	横石		3+	半円三	－	●	－	－	－	－	－	Ⅰ	12
法隆寺献納宝物	奈良県斑鳩町	寺院	－	－		1	蝶番	－	－	－	－	－	－	－	Ⅰ	5
鹿島沢古墳群	青森県八戸市	古墳	－	－		2	A類	●	●	－	－	●	－	●	Ⅱ	5・17
成田 3 号墳	茨城県行方市	円	18	横石	●	2	A類	●	●	－		●	－	－	Ⅱ	1
奈良古墳群	群馬県沼田市	古墳	－	－		1	B類	●	●	－	－	●	－	－	Ⅱ	5
若田B号墳	群馬県高崎市	円	14	横石	●	4	A類	●	●	－	－	●	－	－	Ⅱ	6
伝群馬県出土	伝群馬県	－	－	－		4	A類	－	－	－	－	－	－	－	Ⅱ	5
浅間山古墳	千葉県栄町	後円	70	横石		2	折衷	●	●	－	－	－	－	－	Ⅱ	20
東一本柳古墳	長野県佐久市	円	10+	横石	●	4	A類	●	●	●	－	●	－	－	Ⅱ	8
東平 1 号墳	静岡県富士市	円	●	横石	●	2	B類	●	－	－	－	●	－	－	Ⅱ	本書
上向嶋 2 号墳	愛知県豊橋市	円	16	横石		4	B類	●	●	－	－	●	－	●	Ⅱ	23
清水 1 号横穴墓	福島県いわき市	－	－	横穴		2	B類	－	－	－	－	－	－	－	Ⅲ	5・17
柴崎Ⅱ遺跡 64 号	茨城県つくば市	竪穴	－	－		1	B類	－	－	－	－	－	－	－	Ⅲ	5
宮中野 99-1 号墳	茨城県鹿嶋市	－	－	土坑	●	1	A類	－	－	－	－	－	－	－	Ⅲ	2
奈良古墳群	群馬県沼田市	古墳	－	－		2	B類	－	－	－	－	－	－	－	Ⅲ	5
御門 1 号墳	群馬県昭和村	円	11	横石	●	1	A類	●	－	●	－	－	●		Ⅲ？	5
立野 12 号墳	埼玉県熊谷市	円	21.5	横石		2	B類	－	－	－	－	－	－	－	Ⅲ	19
北囲護台遺跡 37 号	千葉県成田市	竪穴	－	－		1	B類	－	－	－	－	－	－	－	Ⅲ	5
囲護台遺跡 79 号	千葉県成田市	竪穴	－	－		1	－	－	－	－	－	－	－	－	Ⅲ	5
竜王 2 号墳	山梨県甲斐市	円？	14	横石		1	B類	●	●	－	－	－	●	－	Ⅲ	21
御崎古墳	山梨県笛吹市	古墳	－ －	－ －	●	2 4	A類 A類	●	●	－	－	－	●	－	Ⅲ Ⅲ	7
御蔵上 3 号墳	静岡県長泉町	古墳	－	横石	●	4	B類	●	●	－	－	－	●	－	Ⅲ	9･22
西本 6 号遺跡	広島県東広島市	－	－	－		1	B類	－	－	－	－	－	－	－	Ⅲ	5
弁財天遺跡 61 号	茨城県土浦市	竪穴	－	－		1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	5
鳥屋八幡 2 号墳	宮城県大和町	円	14	横石		1+	未確認	－	－	－	－	－	－	－	－	9
口明塚南古墳	愛知県豊橋市	円	23	横石		1	B類	－	－	－	－	－	－	－	－	24
参考：塚山古墳群	三重県伊勢市	－	－	－		－	－	●	－	－	－	－	●	●	Ⅱ	13

略記　遺跡名　「号」のあとに「墳」がつかないものは竪穴建物を表す。墳形　竪穴＝竪穴建物　後円＝前方後円墳　円＝円墳
埋葬＝埋葬施設　横石＝横穴式石室　横穴＝横穴墓、宮中野 99-1 号墳は周溝内土坑（馬殉葬土坑か）
心轡＝横長心葉形鏡板付轡の有無　数＝杏葉の点数　立聞　A類＝王冠山形立聞三角形鋲配置型　B類＝方形立聞逆三角形鋲配置型
立聞　折衷＝方形立聞三角形鋲配置
飾金具コ字形＝飾金具横断面コ字形　飾金具板状＝飾金具横断面板状　方＝方形　長＝長方形　円＝円形

十字文心葉形轡製作者集団が関与した可能性が高い。

一方で、上述した心葉形轡が外接である点が横長心葉形轡と異なり、唯一仁田山ノ崎古墳例のみが銜先環に鏡板をリベット留めし、その銜先環に引手を装着する銜リベット留・銜介在型連結を採用している（第 78 図下段）。ただし、この方式も横長心葉形轡の遊環リベット留・銜介在型連結とは異なる。遊環リベット留・銜介在型は、花形鏡板付轡、心葉形鏡板付轡など板状鏡板付轡で採用されており、それらの影響が窺える。

横長心葉形轡は、大型矩形立聞、一枚造である点は、「新羅系」馬具の系譜を引く大型矩形立聞透十字文心葉形轡の影響を受けつつ、古墳時代後期から続く花形・心葉形の金銅装鏡板付轡の連結方法の影響も受けて生産された可能性が高い。その工房は透十字文心葉形鏡板付轡や後述するように透彫や毛彫文様のある棘付花弁形杏葉製作工人集団と関連する工人集団であった可能性が高い。

（2）棘付花弁形杏葉

東平 1 号墳からは金銅製一枚造で無文の棘付花弁形杏葉と推測する金具が出土した。棘付花弁形杏葉は文様の表現方法が透彫か線刻かにより大きく区分され、透彫から線刻へ変遷することが明らかにされ、後者は文様の変化により時期的な位置づけが行われている（田中 1980、白井 2002、森田 2005、高松 2011 ほか）。ただし、東平 1 号墳例は無文であり、文様の特徴により時期を決めることは難しいため、棘付花弁形杏葉の集成（第 9 表）を行ったうえで、諸特徴を検討し、共伴する飾金具・帯金具の特徴を含めて東平 1 号墳例を位置づけたい。

棘付花弁形杏葉は、いずれの研究者も、透彫であるしどめ塚古墳例や道上古墳例を古く位置付ける[註8]。これに従い、透彫の棘付花弁形杏葉をⅠ段階とする。棘付花弁形杏葉Ⅰ段階は、しどめ塚古墳例が TK209

～飛鳥Ⅰ併行期に、法隆寺例が610年前後とされる（田中1980）ことから、TK209～飛鳥Ⅰ併行期としておきたい。続くⅡ段階、Ⅲ段階は線刻で文様が表現される段階で、多くの研究者同様、立聞[註9]の形状と鋲配置により王冠形・山形立聞で三角形に鋲を配置するＡ類（王冠・山形立聞三角形鋲配置型）と、立聞の先端が直線に裁断される方形立聞で、逆三角形に鋲が配置されるＢ類（方形立聞逆三角形鋲配置型）に区分する。蝶番立聞の東一本柳古墳例は蝶番が王冠形であることからＡ類に区分する。

Ⅱ段階は、おおむね花弁部の文様が大きく3段以上に施文しているものを位置づける（高松2011）。透彫を線刻で表現した伝群馬県出土例（Ａ類）や上向嶋2号墳例（Ｂ類）や、蝶番立聞で三葉文を毛彫りで表現する東一本柳古墳例（Ａ類）をⅡ段階でも古く、三葉文が崩れる鹿島沢古墳群例（Ａ類）や若田Ｂ号墳例（Ａ類）を新しい段階に位置づける（白井2002、高松2011、田中1980、森田2005ほか）。浅間山古墳例は方形立聞であるが三角形鋲配置でありＡ・Ｂ類の折衷である（高松2011）。Ａ・Ｂ類は立聞の形状や鋲配置は異なるものの文様が類似することから近しい工房で生産された可能性が高い（高松2011）[註10]。Ⅱ段階は、飛鳥Ⅱ併行期に位置づけられ、7世紀前半～中ごろとする。

Ⅲ段階は、花弁部の文様が1～2段のものや、三葉文とは異なる葉文が採用されたり、心葉文（猪目文）のみのものを位置づける。竜王2号墳例（Ｂ類）や御蔵上3号墳例（Ｂ類）から、Ⅲ段階は7世紀後半から8世紀初頭に位置づけられる。

それでは無文の東平1号墳はどの段階に位置づけることができるか。透彫が施されないことからⅡ段階以降に位置づけられる。立聞は方形立聞逆三角形鋲配置であり、Ｂ類に位置づけられる。残存長は約9cmであり、復原される大きさは10cmを超える。大きさによる分類を行った高松氏の検討では、高松氏のⅠ期（高松2011）＝筆者のⅡ段階の大きさとなる。

立聞の特徴をみると、棘付花弁形杏葉のⅡ・Ⅲ段階の立聞は側面が折り曲げられ、横断面がコ字形であるのに対し、東平1号墳例は立聞側面が切り欠きされ平板（一文字）である。この特徴はⅠ段階に分類した道上古墳例やしどめ塚古墳例と共通する。ただし、透彫ではないこと、Ⅰ段階の特徴である立聞以外に鋲を打つという特徴がないこと、形状はⅡ期以降のものと同形と推断できることから、Ⅰ段階に位置づけることは難しい。よって、Ⅱ段階でも、古い時期に位置づけたい。

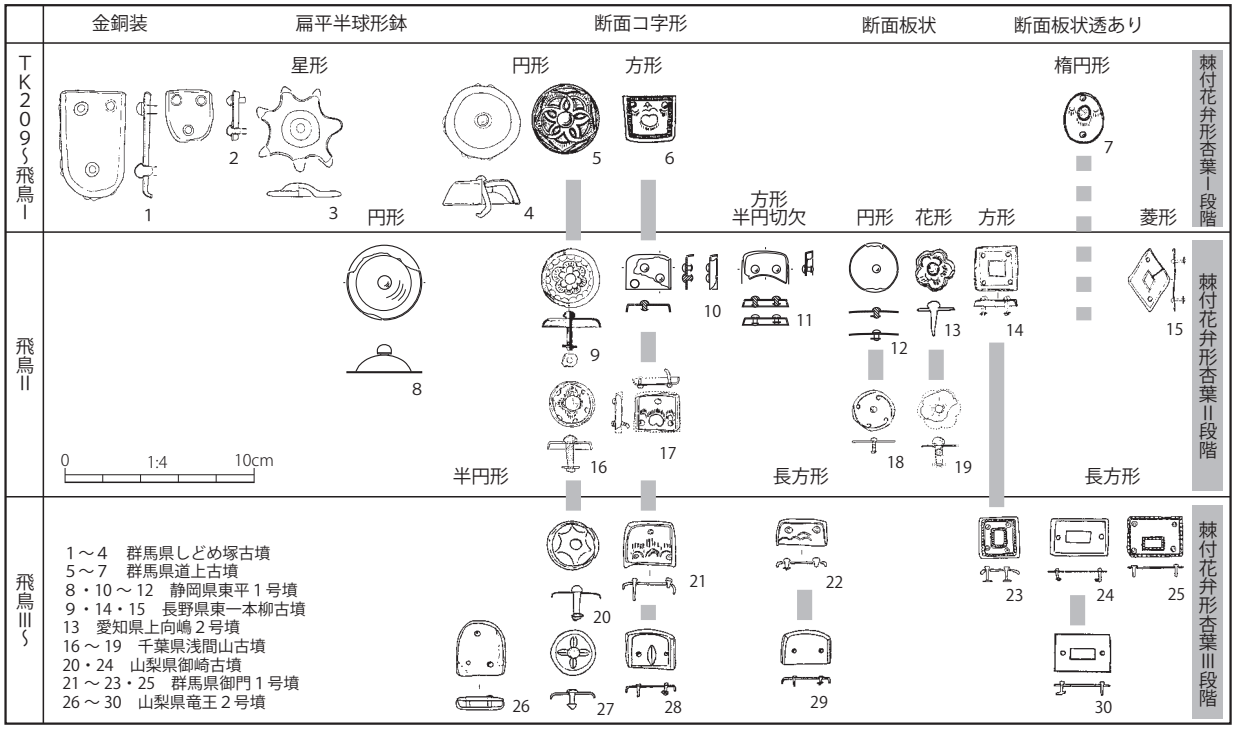
想像をたくましくすれば、線刻文様が取り入れられ、定形的な棘付花弁形杏葉が成立する前の試行段階の製品とできようか。また、横長心葉形轡も上述したように横長心葉形轡の初現的な製品の可能性があり、東平1号墳には古墳時代終末期に新たに創出された馬具が最初に配布された可能性もある。

棘付花弁形杏葉に伴う飾金具　棘付花弁形杏葉には、第80図に示したような飾金具（辻金具を含む）が共伴することが多い。それらの飾金具は断面コ字形で方形・円形の全時期を通じて確認されるものがある一方で、1段階には半球形ものが、2段階には円形板状のもの、3段階には板状長方形で透かしのあるものが確認できる（第80図）。特に長方形で透かしのあるものはこれまでの研究により（岡安1987、白井2002ほか）、新しい傾向にあることが明らかであったが、これ以外にも各段階に特徴的な形態があることがわかった。

東平1号墳例は棘付花弁形杏葉Ⅰ段階にみられる半球形飾金具がある一方でⅡ段階に特徴的な板状円形のものがあることから杏葉と同じくⅡ段階でも古い段階の組合せであるといえ、飾金具の組合せからも棘付花弁形杏葉Ⅱ段階の初現的な位置づけをすることができる。

棘付花弁形杏葉と横長心葉形轡の組合せ　横長心葉形轡は、12例中8例が棘付花弁形杏葉と共伴する（第8表）ため、組合関係にあったことが想定される。東平1号墳でも共伴するが、円環轡も出土しているため同一の馬具の組合せであったのか検証したい。

棘付花弁形杏葉Ⅰ段階では、横長心葉形轡が出現していないが、しどめ塚古墳例は鉄製透十字文心葉形轡と組合関係にあると考える。また、Ⅱ段階の上向嶋2号墳例は横長心葉形轡は出土しておらず、大型矩形立聞円環轡と鉸具造立聞円環轡である。鉸具造立聞円環轡は、棘付花弁形杏葉と共伴している事



第 80 図　東平 1 号墳出土馬具の編年的位置づけ③（飾金具）

例がほとんどなく、それらは当初から組合関係にはないことが想定される。上向嶋 2 号墳では横長心葉形杏葉が発掘調査前に失われた可能性があるが、その場合組合関係にあると想定される金銅製吊金具は 2 点出土しており、轡のみが失われ、吊金具だけが残ったとは想定しにくい。そのため筆者は第 78 図に示した通り、東平 1 号墳のように大型矩形立聞円環轡に帯状吊金具が伴うと想定した。この想定が正しければ、金銅製帯状吊金具付であり、吊金具の材質は棘付花弁形杏葉に近いことから、東平 1 号墳例と上向嶋 2 号墳例は帯状吊金具付大型矩形立聞円環轡と棘付花弁形杏葉が組合関係にあった可能性が高い。

一方で、東一本柳古墳では横長心葉形轡と棘付花弁形杏葉が組合関係にある。また、Ⅱ段階でも新しい若田 B 号墳、成田 3 号墳ではそれらが組合関係にある。若田 B 号墳の轡と同形状の千人塚古墳例では、金銅製帯状吊金具を伴う。金銅製帯状吊金具が横長心葉形轡に取り入れられるⅡ段階で、組合せが増加する。Ⅲ段階以降、御崎古墳、御蔵上 3 号墳などで組合せとなる。

したがって、棘付花弁形杏葉と横長心葉形轡は当初から組合関係にはなく、最初は横長心葉形轡につながる大型矩形立聞透十字文心葉形轡などと組み合わされていた（この段階で鉄製鏡板付轡と金銅製棘付花弁形杏葉という組合せは成立している）。Ⅱ段階には、東一本柳古墳のように横長心葉形轡と棘付花弁形杏葉の組合せが成立しているが、大型矩形立聞円環轡と組合されるものもあり、一定していない。Ⅱ段階の新しい段階の若田 B 号墳、成田 3 号墳やⅢ段階の御崎古墳、御蔵上 3 号墳などで確認されることから、Ⅱ段階の新しい時期以降時期が降るにつれてその組合せが普及したと考える。

轡と杏葉の組合せからみても、東平 1 号墳の棘付花弁形杏葉が線刻のない帯状吊金具付大型矩形立聞円環轡と組み合わされた可能性が高いことから東平 1 号墳例は線刻のある定形的なもの（Ⅱ段階）の成立期直前か成立期の製品として位置づけられる。

（3）壺鐙

東平 1 号墳では、壺部が銅製で、軸部と踏込（舌）が鉄製の壺鐙が出土した。

金属製壺鐙の分類　壺鐙は壺部が有機質と金属製の 2 種類があり、前者は金属の飾金具・吊金具がつ

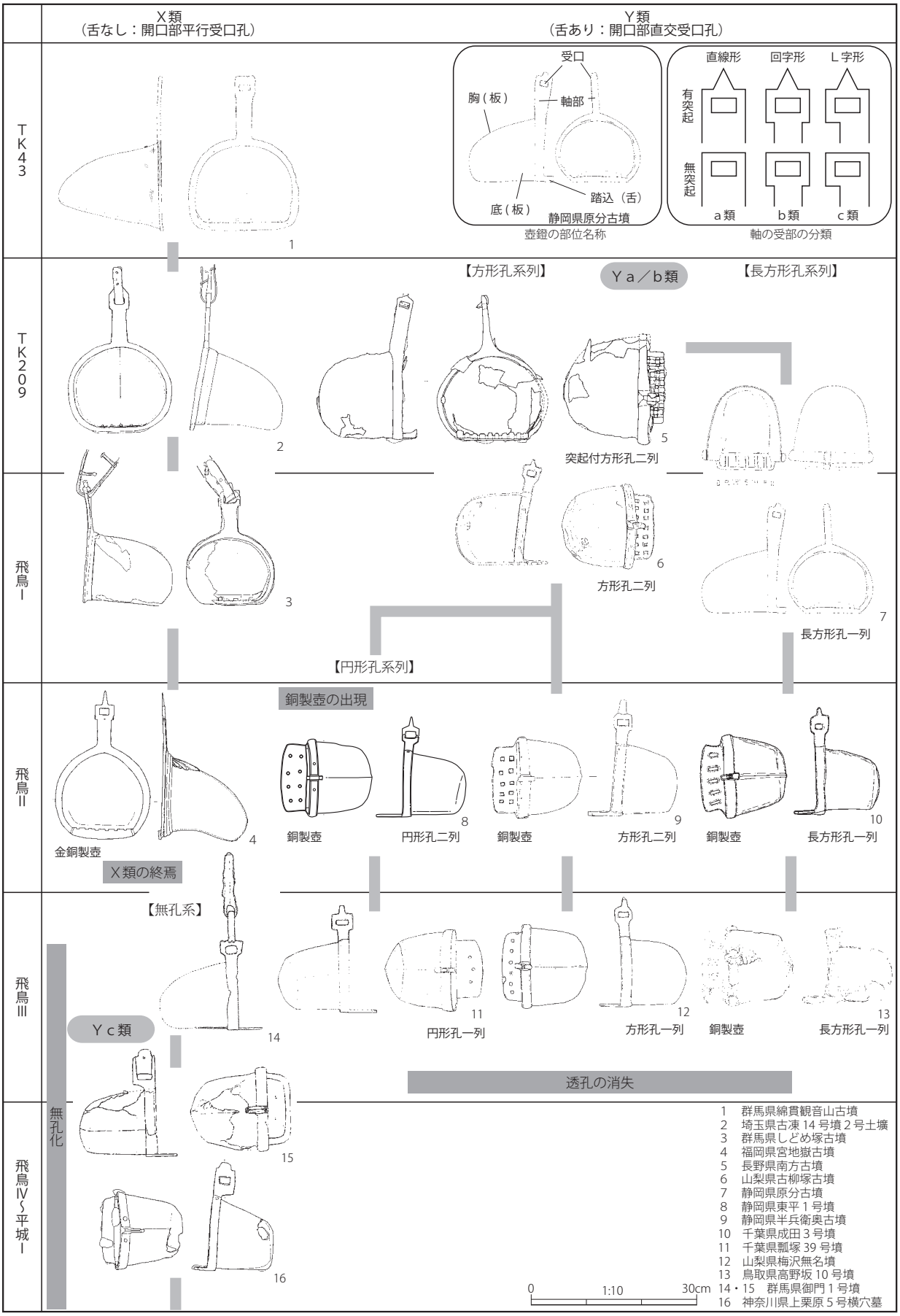
第 10 表　壺鐙出土例

遺跡名	所在地	墳形	規模	埋葬	材質	分類	孔	舌	孔の形状	受口形状	文献
足利公園麓古墳	栃木県足利市	古墳	―	―	鉄	X	平行	無	―	突 b	1
藤井 38 号墳	栃木県壬生町	円	22	横石	鉄	X	平行	無	―	突 b	2
東浦古墳	栃木県真岡市	円？	―	横石？	鉄	X	平行	無	―	突 b ？	3
水泉寺 6 号墳	群馬県渋川市	円	10	横石	鉄	X	平行	無	―	無突 b	5
しどめ塚古墳	群馬県高崎市	円	16.6	横石	鉄	X	平行	無	―	突 b	4
前山古墳	群馬県高崎市	後円	47+	横石	鉄	X	平行	無	―	突 b	5・6
綿貫観音山古墳	群馬県高崎市	後円	94	横石	鉄	X	平行	無	―	無突 b	7
伝美久里出土	群馬県藤岡市	―	―	―	鉄	X	平行	無	―	突 b	5・8
伝甘楽町金井	群馬県甘楽町	―	―	―	鉄	X	平行	無	―	突 b	8
古凍 14 号墳 2 号土坑	埼玉県東松山市	―	―	土坑	鉄	X	平行	無	―	突 b	9
松面古墳	千葉県木更津市	方	44	横石	鉄	X	平行	無	―	不明	10
伝常楽寺上塚出土	長野県	―	―	―	鉄	X	平行	無	―	突 b	11
藤明古墳	静岡県沼津市	古墳	―	横石	鉄	X	平行	無	―	突 b	12
宮原 2 号墳	静岡県沼津市	古墳	―	横石	鉄	X	平行	無	―	突 b	12
石州府 1 号墳	鳥取県米子市	円	40	横石	鉄	X	平行	無	無	突 b	13
宮地嶽古墳	福岡県福津市	円	38	横石	金銅	X	平行	無	―	突 a	14
合戦原 53 号横穴墓	宮城県山元町	―	―	横穴	鉄	Y	直交	有	無	突 L 字形	15
名古谷新 2 号横穴墓	福島県楢葉町	―	―	横穴	鉄	Y	直交	有	―	―	16
成田 3 号墳	茨城県行方市	円	18	横石	金銅	Y	直交	有	長 1	突回字	17
前林古墳	茨城県古川市	古墳？	―	―	鉄	Y？	直交	有	不明	L 字？	1
伝茨城県出土	伝茨城県	―	―	―	鉄	Y	直交	有	方 2 ？	突回字？	11
御門 1 号墳	群馬県昭和村	円	11	横石	鉄	Y	直交	有	無	突回字	18
						Y	直交	有	無	突 L 字形	18
奈良カ号墳	群馬県沼田市	円	―	横石	鉄	Y	直交	有	円 1	突回字	5
伝倉賀野出土	群馬県高崎市	―	―	―	鉄	Y	直交	有	長 1	突 b	19
下佐野 12 号墳	群馬県高崎市	古墳	―	―	鉄	Y	直交	有	方 2	突 a	20
諏訪神社古墳	群馬県藤岡市	後円	57	横石	鉄	Y	直交	有	不明	突 b	21
向吹張古墳	群馬県前橋市	円	―	横石？	金銅	Y	直交	有	長 1	突 b	5・19
瓢塚 39 号墳	千葉県成田市	方	14	土坑	鉄	Y	直交	有	円 1	突 b	22
天王・船塚 4 号墳	千葉県成田市	方	42	横石	鉄	Y	直交	有	方 2	突 b	22
上栗原 5 号横穴墓	神奈川県伊勢原市	―	―	横穴	鉄	Y	直交	有	無	突 c	23
さんごじ塚古墳	山梨県笛吹市	―	―	―	鉄	Y	直交	有	方 1	―	24
梅沢無名墳	山梨県笛吹市	―	―	横石	鉄	Y	直交	有	方 1	突 b	25
古柳塚古墳	山梨県笛吹市	古墳	―	横石？	鉄	Y	直交	有	方 2	突 b	26
伝右佐口出土	山梨県甲府市	―	―	―	鉄	Y	直交	有	―	突 b	25
コウモリ塚古墳	長野県岡谷市	円	15	横石	鉄	Y	直交	有	無	突 c	27
南方古墳	長野県松本市	古墳	―	横石	鉄	Y	直交	有	方 2	突 a	28
原分古墳	静岡県長泉町	円	18		鉄	Y	直交	有	長 1	突 a	29
東平 1 号墳	静岡県富士市	円	13	横石	銅	Y	直交	有	円 2	突 b	本書
半兵衛奥古墳	静岡県静岡市	古墳	―	横石	銅	Y	直交	有	方 2	突 b	30
高野坂 10 号墳	鳥取県岩美町	八角墳	12	横石	銅	Y	直交	有	長 1	突 b ？	31
糠塚横穴墓群	山口県長門市	―	―	横穴	銅	Y	直交	有	無	突 c	32
西都原地下式横穴墓	宮崎県西都市	―	―	地下	銅	Y	直交	有	無	突 c ？	33
伝新岩里出土	韓国論山市	―	―	―	鉄	Y	直交	有	無	無突 a	34
馬老山城	韓国光陽市	―	―	―	鉄	Y	直交	有	格子	無突 a	35
馬老山城	韓国光陽市	―	―	―	鉄	Y	直交	有	格子	無突 a	36
馬老山城	韓国光陽市	―	―	―	鉄	Y	直交	有	格子	無突 a	37
西大須賀横穴墓群	千葉県成田市	―	―	横穴墓	有機質	Z	直交	無？	―	突 b	10
下土狩西 1 号墳	静岡県長泉町	円	20+	横石	有機質	Z	直交	無？	―	無突 b	12
藤沢狄森古墳群	岩手県矢巾町	―	―	―	鉄	（未確認）	―	―	―	―	36
玉造古墳	千葉県多古町	古墳	―	―	金銅製	（未確認）	―	―	―	―	37

略記　墳形　円＝円墳　後円＝前方後円墳　方＝方墳　埋葬＝埋葬施設　横石＝横穴式石室　横穴＝横穴墓　地下＝地下式横穴墓
分類　X＝X 類（開口部に平行する受口で踏込の舌なし）　Y＝Y 類（開口部に直交する受口で舌あり）　Z ＝ Z 類（壺部有機質）
孔の形状＝踏込舌に穿孔された孔の形状　長 1 ＝長方形孔 1 列　方 1・2 ＝方形孔 1・2 列
円 1・2 ＝円形孔 1・2 列　無＝孔なし
格子＝格子刻み　受口の形状　無突／突 a ＝無突起／有突起 a 類　無突・突 b ＝無突起／有突起 b 類
無突／突 c ＝無突起／有突起 c 類　（第 81 図参照）

く金属装のものと金属製金具がない木製のものが存在する。一方金属製のものは金銅製・銅製と鉄製がある。

東平 1 号墳で出土している金属製壺鐙は、斎藤弘氏が集成と分析を行い、A （開口部平行の受口）と A・B・C（開口部直交の受口）に区分し、A ・A（軸部回字形）から B（兵庫鎖付）・C（軸部 L 字形）へ変遷したことを明らかにした（斎藤 1985）。ただし、A とAという区分は当初から型式分類に時期差が含まれており、さらに受部の形状と吊金具の有



第81図　東平1号墳出土馬具の編年的位置づけ④（金属製壺鐙）

無による分類基準が混在するなど課題が多い。ここでは鈴木一有氏による壺鐙の集成（鈴木 2008）を基礎に新規に確認したものを追加し（第 10 表）、それらを斎藤弘氏の分類視点を援用しながら、下記の通りに分類する。金属製壺鐙は軸部受口の方向が開口部に平行するものと直交するものがあり（斎藤 1985）、前者は踏込（以下、舌とする）を伴わず、後者は舌を伴うことから、前者をＸ類、後者をＹ類とする（第 81 図）。なお、有機質の壺であるが金属製壺鐙と同様の軸部の特徴をもつ下土狩西 1 号墳例などをＺ類とする。

壺鐙は軸部受口の形状から頂部に突起があるもの（有突起）とないもの（無突起）に大きく区分でき、受口の形状から、ａ類＝軸部が直線的なもの、ｂ類＝軸部と受口の間に段差があり、回字形のもの、ｃ類＝軸部と受口の間に段差があるが、軸部からＬ字形に曲がるものがある（第 81 図）。また、滑り止めに突起や透孔が施されるが、Ｘ類は突起のみ、Ｙ類は突起付方形孔、方形孔、円形孔、長方形孔、無孔がある。

金属製壺鐙の編年　金属製壺鐙は朝鮮半島でも出土しているが、最も古く位置づけられるのはＸ類の綿貫観音山古墳例である。Ｘ類は古凍 14 号墳第 2 土坑例やしどめ塚古墳例のように TK209 型式～飛鳥Ⅰ併行期のものが多く、宮地嶽古墳のように飛鳥Ⅱ段階のものがあるが、飛鳥Ⅲ以降に降るものは確認できないため、飛鳥Ⅱ併行期で金属製壺鐙Ｘ類は終焉した可能性が高い。

一方、東平 1 号墳例はＹｂ類に位置づけられるが、Ｙ類は、Ｘ類よりも一段階遅れて TK209 型式にＹａ類が出現し、Ｙｃ類が 8 世紀以降まで継続する。東平 1 号墳例は、受口が回字形で、踏込の舌に円形孔を二列施すが、これまでの金属製壺鐙の編年では、細かい編年的位置づけが難しいため、検討を加えたい。

Ｙ類のうち、舌の滑り止めがＸ類に確認できる突起があり、突起付方形孔の南方古墳例や下佐野 12 号墳例が最も古く、TK209 型式併行期に位置づけられる。つづいて、TK209 ～飛鳥Ⅰ併行期に滑り止めの突起が失われ、方形孔のみとなる古柳塚古墳例が出現し、長方形孔をもつ原分古墳例が創出される[註 11]。その後、飛鳥Ⅱ併行期に舌に長方形孔、方形孔、円形孔を穿つものの 3 者が確認できる。また、この段階に銅製壺が出現し鉄製と併存する。Ｘ類でも金銅装の宮地嶽古墳例が同時期に確認できるため、材質の多様化はこの段階にあった可能性が高く、以後銅製・鉄製が奈良時代まで共存する。

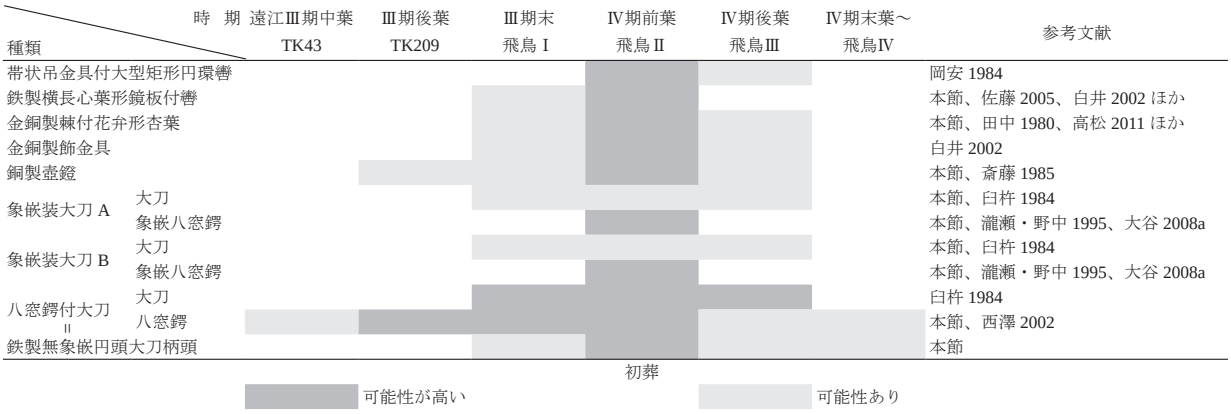
飛鳥Ⅲ併行期に斎藤弘氏の研究（斎藤 1985）により後出することが明らかなＬ字形受部のＹｃ類が出現する。Ｙｃ類が無孔であること、古く位置づけられる踏込の有突起のものが方形孔二列であることから、穿孔のあるものは二列から一列へ、孔数が多いものから少ないものへ変化し、最終的に無孔化することがわかる。この段階ではＹｂ類でも方形孔・円形孔一列、長方形孔一列で透かし孔が少ない有孔のものと、無孔のものが並存する。また、御門 1 号墳ではＹｂ・Ｙｃ類が共伴しており[註 12]、Ｙｂ類とＹｃ類がこの段階では併存する。飛鳥Ⅳ併行期以降はＹｂ類はなく、Ｙｃ類のみとなる。

なお、受口の形態では、直線的なＹａ類に突起付のもの（南方古墳例・下佐野古墳例）や古手の長方形孔（原分古墳例）があり、頸部が長いものが多い（斎藤 1985）ため、日本列島ではＹａ類がＹｂ類に先行する[註 13]。

東平 1 号墳の壺鐙の位置づけ　東平 1 号墳例は円形孔二列であり、他の金属製壺鐙の時期的位置づけ（第 81 図）により、方形孔二列配置で孔数がほぼ同様の半兵衛奥古墳と同時期、飛鳥Ⅱ併行期に位置づける。円形孔系列 3 例では最も古く位置づけられるもので、東平 1 号墳以外の瓢塚 39 号墳例（一列 3 孔）と奈良古墳群出土例（一列 2 孔）は飛鳥Ⅲ以降に位置づける。銅製が出現することも考慮すると、東平 1 号墳例は銅製であり、この段階で当時の最先端を行く銅製の壺鐙と評価できる。

（4）大刀と馬具の編年的位置

ここまでに、個々の出土遺物について編年的位置づけを中心に分析を行った。そのうちそれぞれの遺物の時期を取りまとめたのが第 82 図である。無象嵌八窓鍔付円頭大刀、金銅製棘付花弁形杏葉など若干遡る可能性があるものも確認できるが、大刀・馬具は飛鳥Ⅱ併行期に位置づけることができる。



第 82 図　副葬された大刀と馬具の編年的位置からみた東平 1 号墳の埋葬時期

大刀は象嵌装鍔付大刀 2 振、鉄製円頭大刀 1 振、馬具は轡が 2 組、壺鐙 1 組、棘付花弁形杏葉 1 組はほぼ同時期に位置づけられることから、象嵌鍔に若干の時期差があるが、一人の被葬者（初葬者）に副葬された可能性が高く、追葬者には大刀・馬具は全く副葬されなかった可能性が高い。

3　東平 1 号墳の被葬者像

(1) 大刀と馬具の分布

東平 1 号墳の大刀と馬具の編年的位置づけを探るのに多くの紙面を使いながら集成を提示し、個々の副葬品について先学の研究を援用して分類、編年の組み立てを行った。上述したとおり東平 1 号墳の大刀と馬具は飛鳥Ⅱ併行期、7 世紀前半から中ごろに位置づけられることが確認できた。ここでは、いくつかの副葬品の分布等から東平 1 号墳の被葬者像を検討したい。

象嵌装大刀の分布と特徴　東平 1 号墳からは 3 振大刀が出土しているが、象嵌八窓鍔付大刀と同様の象嵌装鍔のある大刀は、東平 1 号墳（2 点）、原分古墳、筧沢 1 号墳（川江 1992a）の静岡（駿河）4 例をはじめ、石川 1 例、宮城 1 例であり、東日本に点在する。

圏線連珠文象嵌鍔は、圏線 C 字文象嵌鍔と渦巻文象嵌鍔の文様が融合して 7 世紀前半代に創出された可能性が高く、象嵌装大刀生産工人集団再編によって文様の融合が起こった可能性が高い（大谷 2011）。したがって、古墳時代後期からの連続性と、別文様の融合が起こっていることから生産工房は王権近くにあったものが再編され、その生産品が配布された可能性が高い（大谷 2011）。

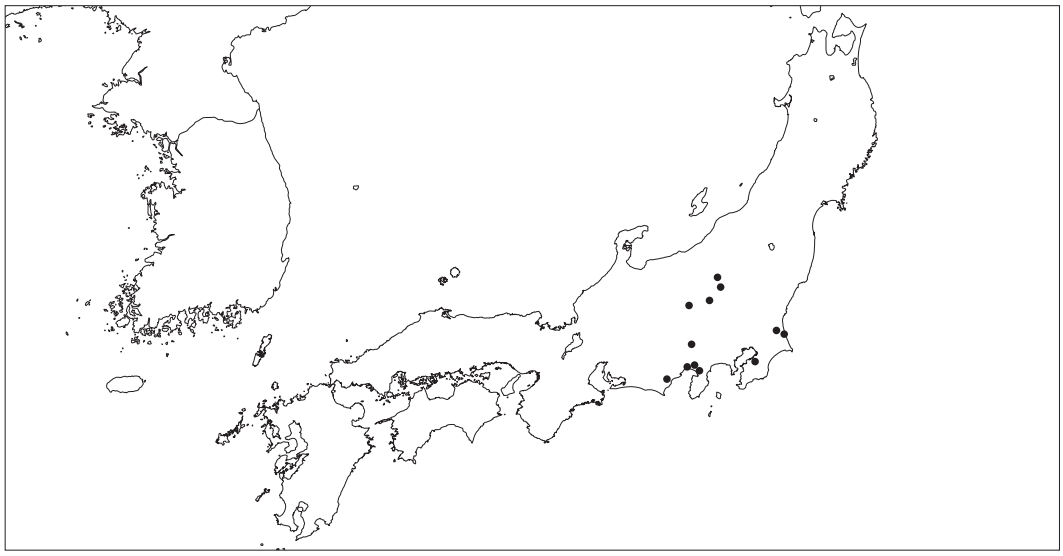
東平 1 号墳と同文様の原分古墳の象嵌鍔を位置づけるにあたり、井田松江 17 号墳例のように眼下に水田を営むような場所はないことから、海を介した東西交通や交易に長けた被葬者像が描ける（滝沢 2000）など、象嵌装大刀保有者集団の性格を、東西交易や軍事などとの関係で捉えた（大谷 2008a）が、東平 1 号墳は、1 段階前の TK43 ～ TK209 に位置づけられ近接して存在する中原 4 号墳（2 振の波状 C 字文象嵌鍔付大刀・剣）と同様 2 振の同文様の象嵌鍔を持つ点が、中原 4 号墳と性格が類似する被葬者像を描ける。両古墳は近在して存在しており、時期的に 1 世代後の世代と考えられることから、中原 4 号墳の被葬者の性格を引き継いで、東西交易や軍事的な役割を担っていた可能性が高いと考える。

無象嵌円頭大刀の分布と特徴　無象嵌円頭大刀は京都の 1 例はあるものの、象嵌装大刀と同様、静岡、長野以東で確認される。形状は類似しており、生産地も限定され、東日本に重点的に配布された可能性がある。

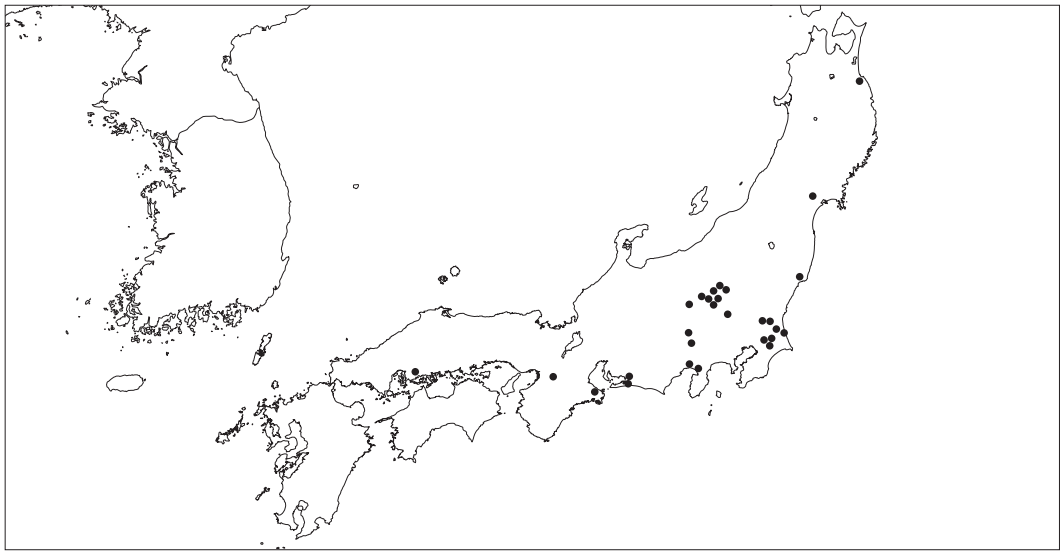
また、5 例中 3 例が棘付花弁形杏葉と共伴しており（註 14）、無象嵌円頭大刀と棘付花弁形杏葉が同じような性格の被葬者に配布された可能性がある。

横長心葉形轡・棘付花弁形杏葉の分布と特徴　横長心葉形轡、棘付花弁形杏葉は 7 世紀前半以降組合関係にあることもあって、いずれも静岡、長野以東に多い（第 83 図、田中 1980、白井 2002）。

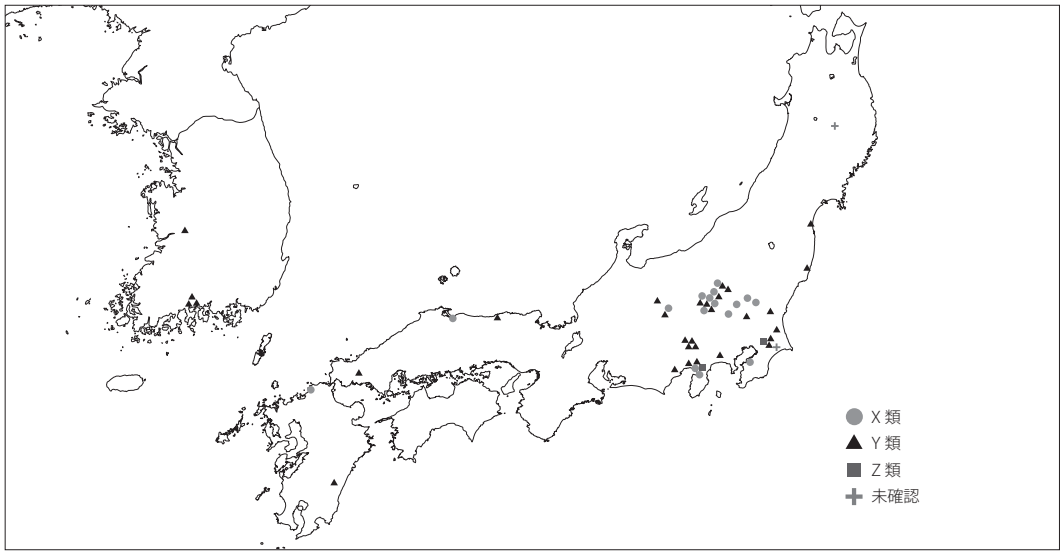
横長心葉形轡の祖形の可能性が高い透十字文心葉形轡は兵庫、滋賀、三重、群馬に、棘付花弁形杏葉のⅠ段階のものは、奈良、群馬に分布しており、東日本に偏在するわけではない。一方、横長心葉形轡



横長心葉形鏡板付轡



棘付花弁形杏葉



金属製壺鐙

第 83 図　横長心葉形鏡板付轡・棘付花弁形杏葉・金属製壺鐙の分布

が成立以降、横長心葉形轡Ⅰ段階、棘付花弁形杏葉Ⅱ段階、つまり7世紀前半～中ごろ以降東日本を中心に分布する。中でも、東駿河の東平1号墳と千人塚古墳、群馬の奈良古墳群、若田B号墳などのある高崎市八幡地区などにやや集中する傾向にある。同様の性格の被葬者に重点的に配布された可能性を想定できる。

壺鐙の分布と特徴　壺鐙は鈴木一有氏により静岡・長野以東の東日本に偏在することが明らかにされた（鈴木2008）。中でも、東駿河には4例とやや集中傾向にあるとともに、山梨県笛吹市周辺、群馬の高崎市から沼田市・昭和村にかけての地域、千葉の成田市周辺に集中して分布する。これらの地域には上述した横長心葉形轡・棘付花弁形杏葉も分布する。壺鐙・横長心葉形轡・棘付花弁形杏葉の3つを保有する古墳は茨城の成田3号墳、群馬の御門1号墳・奈良古墳群、東平1号墳である。いずれも壺鐙Y類との共伴であり、X類とは横長心葉形轡・棘付花弁形杏葉は共伴しない。この4者は同じような経緯で3種類の副葬品を入手した可能性が考えられる。

また、これらの轡・杏葉・壺鐙は馬具の出土が多い群馬・長野・山梨・静岡（特に駿河）に分布するとともに、千葉・茨城や東北地方の沿岸部にみられる。長野、山梨・静岡・群馬は牧が多く形成され、騎馬軍団の存在が想定されており（岡安1986）、馬匹生産や流通にかかわるような地域に、壺鐙や横長心葉形轡・棘付花弁形杏葉が重点的に配布された可能性を想定したい。

なお、東日本に偏在する壺鐙であるが、西日本にも一定量存在し、そのうちの大半が銅製あるいは金銅製の壺鐙である。東日本でも東平1号墳や半兵衛奥古墳をはじめ銅製のものが出土するが、鉄製が多い。飛鳥Ⅱ期以降、材質による西日本と東日本での使い分けがあった可能性が想定される。

（2）まとめ－大刀と馬具からみた被葬者の性格－

馬具の系譜　壺鐙は最も古いものは綿貫観音山古墳出土のものであるが、内山敏行氏は綿貫観音山古墳の副葬品全体を位置づける中で、壺鐙を朝鮮半島系、特に新羅系の遺物として位置づける。壺鐙には静岡の半兵衛奥古墳、茨城の宮中野99-1号墳など、新羅系とされる鉄製鐎轡と組み合わされることもあり（内山2012、高田2015）、7世紀代までその系譜関係が意識されていた可能性がある。また、上述したように横長心葉形轡は新羅系馬具とされる大型矩形立聞の心葉形鏡板付轡や透十字文心葉形轡からの系譜関係にあることが考えられる。棘付花弁形杏葉は、形状が法隆寺の飾金具など仏教美術系のものであり、百済系と想定される（田中1980）が、棘付花弁形杏葉の祖形が、上述した高崎市観音塚古墳の心葉形杏葉や、形態が類似する棘葉形杏葉である－棘葉形杏葉に形態は類似しており、いずれは祖形となる形態の棘葉形杏葉が出土する可能性が高い－とすれば、これらも新羅系であり、新羅系という意識があり、横長心葉形轡と棘付花弁形杏葉がのちに組み合わされた可能性もある。また、大型矩形立聞円環轡に取り付けられた帯状吊金具は、鋲が3鋲であり、幅広であることは、新羅系馬具（轡）の吊金具の特徴でもある。

そのような馬具を東平1号墳は2組保有していることは、中原4号墳で想定されたように渡来系集団である可能性も視野に入れておく必要がある。

馬具の保有　東駿河は小規模古墳からの馬具の出土が多く、また鉄製環状鏡板付轡が多く出土する地域である（大谷2006）。それも規格性が高く（岡安1985）、全国的に分布する大型矩形立聞円環轡と鈒具造立聞円環轡の2種が8割以上である。東駿河はこれらの馬具の出土数の多さを根拠に「東国舎人騎兵」が存在していたことが想定される（岡安1986）。「舎人騎兵」が存在していたかは今後詳細な検討を行う必要があるが、東駿河の初現期の横穴式石室である富士市中原4号墳（富士市教委2016）からは3組の円環轡が出土し、宮代栄一氏の複数の鉄製馬具を有する古墳の被葬者集団は馬匹生産と関係するという意見（宮代2015）を受けて、東駿河地域でも馬匹生産が始められたと想定した（大谷2016）。中原4号墳以降大型矩形立聞・鈒具造立聞円環轡が富士山麓から箱根山麓まで出土するようになり、継続的に馬匹生産が続けられた可能性がある。このような状況の中、東平1号墳でも大型矩形立聞円環轡を保有することから、馬匹生産にかかわった

可能性がある。ただし、金銅装馬具を有するなど自らが直接生産にあたったわけではなく、生産を総括するような立場であったと考えられる。また、馬は移動手段であることから、岡安氏が想定したように騎兵として活躍した可能性も想定しておくべきだろう。

象嵌装大刀　象嵌装大刀は、上述したように日本の東西を結ぶ海・陸上交通や交易を主とするような被葬者像が描ける（滝沢 2000、大谷 2008a）。

東駿河からみた東平 1 号墳　東駿河は、馬具や装飾付大刀を副葬する古墳が多い地域であるが、時期的な変遷をみると、6 世紀後半代は東駿河全体に分布が見られるものの、7 世紀代まで金銅装馬具や装飾付大刀が出土する古墳は限られる。方頭大刀や蕨手刀が出土するのは東平 1 号墳の周辺地域と、原分古墳や下土狩西 1 号墳のある黄瀬川流域である。黄瀬川流域には東平 1 号墳同様棘付花弁形杏葉が出土した御蔵上 3 号墳や方頭大刀の出土した土狩長塚古墳があり、東平 1 号墳周辺の状況と類似する。

東平 1 号墳を特徴づけるのは、7 世紀代にも装飾付大刀や金銅装馬具が副葬される地域に存在し、金銅装大刀は副葬されないものの象嵌装鍔付大刀 2 振・無象嵌円頭大刀 1 振の装飾付大刀 3 振を保有すること、最先端の金銅装杏葉や壺鐙をはじめとする複数の馬具を保有することであり、東平 1 号墳は 7 世紀前半から中ごろにかけての東駿河西部の有力首長と捉えてよい。ただし、墳丘規模・石室規模、副葬品の質量などを考慮すると地域の中で突出した首長とは言えず、小地域の首長と考えることができる。

東平 1 号墳の被葬者像　東平 1 号墳は、古墳・石室の規模からも同時期の長泉町原分古墳や下土狩西 1 号墳と比較すると小規模である。中原 4 号墳に近在し、両古墳ともに古墳・石室規模が目立って大きくないこと、共通する副葬遺物を保有すること、象嵌装鍔付大刀を複数、馬具を複数保有すること、副葬品から導き出される中原 4 号墳の性格を引き継ぐ小首長だった可能性が高い。東平 1 号墳被葬者集団は中原 4 号墳の持つ役割を継承しながら、中原 4 号墳が保有していない金銅装馬具を保有しており、畿内王権にとってこの地域の重要度が増したことが想定される。東日本に偏在傾向にある馬具や飾大刀が東駿河以東に多いことを考えると、畿内からみた場合東日本という位置づけがあったことは間違いないが、その中でも定形的な棘付花弁形杏葉の古手のもの、横長心葉形轡の古手のもの、銅製壺鐙が成立する段階のものという最先端の馬具を入手しており、非常に重要視されていた可能性が高い。

東駿河が馬匹生産など重要拠点でありながら、関東、東北への拠点のひとつとして認識され、東駿河の重要度が増加していたからにほかならない。東平 1 号墳の後、西平 1 号墳（富士市教委 2003）では方頭大刀が副葬され、同地域に富士郡衙が形成されるなど、中原 4 号墳以降郡衙成立まで、徐々に重要度が増していた。また、西平 1 号墳では関東以北、特に東北に多い蕨手刀が出土しており、関東・東北地方との交流があった可能性が高い。

東平 1 号墳の被葬者は、畿内王権が行う東日本との交流を軍事的（馬匹生産）、経済的（東西交通・交易）に支える東駿河の首長として、像を描くことができる。そして、ゆくゆくは彼の子孫が富士郡衙を担う官人層へ成長した可能性を想像しておきたい。

謝辞

執筆の機会をいただきました富士市文化振興課　佐藤祐樹氏に深謝いたします。また、兵庫県伝香美町油良出土の轡の調査にあたり香美町教育委員会石松崇氏にご高配いただきました。さらに小論をまとめるにあたり、文献収集、類例集成などで渥美賢吾氏、岩本崇氏、内山敏行氏、齊藤大輔氏、佐藤信孝氏、鈴木一有氏、瀧瀬芳之氏、深澤敦仁氏、藤村翔氏、右島和夫氏、宮代栄一氏にお世話になりました。明記して深謝いたします。

註

1　東平 1 号墳と同形態の鉄製板状鏡板付轡は、「長方形鏡板付轡」と呼称される（内山 1996、佐藤 2005、松尾 1999 ほか）ことが多い。しかし、下辺には心葉形鏡板付轡に特徴的な突起が確認できるものが多く、この轡の祖形と考えられている滋賀県中山古墳出土例や三重県塚山古墳群出土例も隅丸長方形や長方形であるが下辺の突起は確認でき、明らかに突起が意識されている。後述するように、この轡は系譜的には心葉形鏡板付轡の延長線上にあることから、「長方形鏡板付轡」とするのは系譜等を考えた場合適切ではない。したがって、当轡は心葉形鏡板付轡であるが、心葉形でも扁平で横長であることを特徴とするため「横長心葉形鏡板付轡」とする。

なお、当該轡には御門1号墳例のように半円形で下辺に突起がないものが確認できるが、同一系譜上にあることは明らかであり、特に横長であるが突起のないものについては「変形横長心葉形鏡板付轡」とする。ただし、分析に特に必要でなければ「横長心葉形鏡板付轡」とする。

2　東平1号墳出土金銅製品（136・137）は、「毛彫馬具（杏葉）」とされる金銅製品と類似するが、「毛彫文様」が施されないだけではなく、立聞（註9参照）が他の個体は板の端をL字形に折り曲げているのに対し、東平1号墳は立聞両側面が切断されており、折り曲げは確認できないことから、杏葉と断定してよいか判断に迷う。全体的な形状、立聞に3鋲打ち込み、裏で小さい方形金具をワッシャーとしてかませて固定する方法が同一であること、東平1号墳からは板状円形飾金具など、他の「棘付花弁形杏葉」と共通する飾金具が出土していることから、いわゆる「毛彫文様」は施されていないものの「棘付花弁形杏葉」と判断した。

3　東平1号墳の杏葉はいわゆる「毛彫馬具（杏葉）」とされる杏葉であるが、高松由氏の検討により、「毛彫」とされる文様にも「なめくり打ち」があること（高松2011）、多くの研究者が初期の事例とする群馬県下大島出土例やしどめ塚古墳出土例には毛彫りが施されていないことから、「毛彫馬具」と一括することは適切ではない。

さらに、当該杏葉については、5世紀代に見られる「花弁形杏葉」と関連するとされることがあるが、高松由氏の検討にもあるように5世紀代のものとは全く別系統である可能性が高く（高松2011）、それらと同様の名称がつけられているのは系譜関係があるように捉えられる危険があることから、形態的には棘葉形杏葉に類似するが、「棘付花弁形杏葉」（高松2011、森田2005ほか）としたい。

4　古墳等の名称の後ろに参考文献を示さないものについては、各表の文献を参照願いたい。

5　川江秀孝氏は象嵌装大刀Ａに伴う可能性を想定している（川江1992b）が、ここで示した通り象嵌装大刀Ｂに伴う可能性が高い。

6　松尾氏は、轡の連結方法を3種類に区分し、リベット留技法（Ⅲ類）に位置づけた。さらに、リベットを覆金具で覆うもの（ⅢＡ類）、リベット留を平板な1枚板を鏡板全体にかぶせて隠すもの（ⅢＢ類）、リベット留が露出するもの（ⅢＣ類）に区分した（松尾1999）。松尾ⅢＣ類は轡の連結方法により、筆者はさらに3種類に区分する（第78図参照）。

なお、リベット留を用いる轡の連結方法であるが、ここではリベットを形成する場所と銜・鏡板・引手の連結方法により、東平1号墳は遊環にリベットを作り鏡板を留める一方で、引手は銜に連結されることから、「遊環リベット留・銜介在型連結」と呼称する（第78図参照）。

7　仁田山ノ崎古墳の鉄製透十字文鏡板付轡は現状で楕円形とされるが、筆者は古墳時代後期後半以降で鉄製一枚造で楕円形とされるものを確認できなかったことや、ここで論じるように大型矩形立聞である透十字文鏡板付轡は心葉形であることから、心葉形の突起が失われ楕円形に見えるようになっているだけであり、本来は心葉形であったと推断する。

8　透彫で毛彫文様のある法隆寺の飾金具や道上古墳例を毛彫文様のない透彫のしどめ塚古墳例や下大島出土例よりも古く位置づける（田中1980他）が、毛彫が施されない透彫から毛彫のある透彫へ変化した可能性も想定しておく必要がある。

なお、棘付花弁形杏葉の祖形として、形態が類似する棘葉形杏葉が想定されるが、群馬県高崎市八幡観音塚古墳の著名な火炎形透のある心葉形（光背形）杏葉が心葉形杏葉に棘が確認できることから、棘付花弁形轡の祖形の一つとして想定したい（第79図）。

9　杏葉の尻繋に装着される部分は立聞とされることが多いが、その部分について棘付花弁形杏葉は「頭部」とされることがある。しかし、杏葉であれば、他の杏葉と同じく「頭部」ではなく、「立聞」としたほうがよい。

10　Ａ・Ｂ類ともに文様が類似しているため工人集団は近い関係にあった可能性が想定される。Ａ類、Ｂ類の違いは金具にあらわれない尻繋など馬装全体の違いに表れていた可能性を想定しておくべきかもしれない。

11　原分古墳例の踏込の舌の透孔は穿孔ではなく、コ字形の外枠を取り付け、その間に短い鉄棒を配して接合した可能性が高い。踏込の舌を作るための試行錯誤段階の製品の可能性があり、Ｙ類の初現段階である可能性が高い。

12　本来別々の馬具に伴うものであったものが、片方ずつ壊れ、残った片方ずつを組み合わせた可能性がある。

13　朝鮮半島では、4点出土しているが、壺鐙はＹ類で、いずれも無突起a類である。韓国の事例は7世紀代と想定され、日本のＹ類と同時期であるが、軸部の形態が異なる可能性がある。また、馬老山城出土例では、穿孔ではなく、刻みを入れることで滑り止めを形成しており、それも日本列島のものと異なる。ただし、類例が少ないため、今後の増加を俟って再検討する必要がある。

14　東平1号墳、東一本柳古墳と立野12号墳では時期差があることから、長年にわたり棘付花弁形杏葉と無象嵌円頭大刀が同時に配布（流通）していた可能性を考えておく必要がある。

参考文献

【論文等】

岩原 剛　2002「東海の飾大刀」『立命館大学考古学論集Ⅲ』立命館大学考古学論集刊行会

臼杵 勲　1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会

内山 敏行　1996「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館

内山 敏行　2012「装飾付武器・馬具の受容と展開」『馬越長火塚古墳群』 豊橋市教育委員会

大谷 宏治　2006「馬具の分布からみた東海古墳時代社会」『東海の馬具と飾大刀』 東海古墳文化研究会

大谷 宏治　2008a「原分古墳出土刀剣類の復元と被葬者の性格」『原分古墳』調査報告編　静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷 宏治　2008b「瓢形環状鏡板付轡の特質」『静岡県考古学研究』40　静岡県考古学会

大谷 宏治　2011「象嵌装大刀の変遷」『考古学ジャーナル』No.616　ニューサイエンス社

大谷 宏治　2014「古墳時代後期～終末期の鑣轡の新例」『研究紀要』3　静岡県埋蔵文化財センター

大谷 宏治　2015「古墳時代後期以降の鉸具式・板状掛留式立聞鑣轡の特質」『河上邦彦先生古稀記念論集』河上邦彦先生古稀記念会

大谷 宏治　2016「中原 4 号墳出土大刀と馬具からみた被葬者の性格」『伝法中原古墳群』 富士市教育委員会

岡安 光彦　1984「いわゆる『素環の轡』について」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会

岡安 光彦　1985「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』2　古墳文化研究会

岡安 光彦　1986「馬具副葬古墳と東国舎人騎兵」『考古学雑誌』71 巻 4 号　日本考古学会

岡安 光彦　1987「遺物編年の現段階（馬具）」『古墳文化研究会第 7 回研究発表・討論会発表要旨』（古墳文化研究会 2010『日本古代文化研究』に所収）

川江 秀孝　1992a「馬具」『静岡県史』資料編 3　考古 3

川江 秀孝　1992b「飾大刀」『静岡県史』資料編 3　考古 3

斎藤 弘　1985「古墳時代の金属製壺鐙」『日本古代文化研究』2 古墳文化研究会

佐藤 信孝　2004「群馬県高崎市若田 B 号墳出土馬具の検討－毛彫馬具の雲珠について」『専修考古学』10　専修大学考古学会

佐藤 信孝　2005「終末期古墳出土馬具の変遷－長方形鏡板付轡の変遷」『電脳考古学』1

白井 久美子　2002「金銅装毛彫馬具」『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』 千葉県史料研究財団

神 啓崇　2017「馬具の構造変化とその意義」『平成 29 年度九州考古学会総会研究発表資料集』 九州考古学会

鈴木 一有　2008「原分古墳出土馬具の時期と系譜」『原分古墳』調査報告編　静岡県埋蔵文化財調査研究所

高田 貫太　2015「八幡観音塚古墳の副葬品をめぐる地域間交渉」『改訂版「観音塚古墳の世界」』 高崎市観音塚考古資料館

高松 由　2011「棘付花弁形杏葉の変遷と彫金技術」『待兼山論叢』史学篇 45　大阪大学

滝沢 誠　2001「総括」『井田松江古墳群』 静岡県戸田村教育委員会

瀧瀬 芳之　1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会

瀧瀬 芳之・野中 仁　1995「埼玉県内出土象嵌遺物の研究」『研究紀要』12　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

田中 新史　1980「東国終末期古墳出土の馬具」『古代探叢－滝口宏先生古希記念考古学論集』 早稲田大学出版部

千賀 久　2003「日本出土の『新羅系』馬装具の系譜」『東アジアと日本の考古学』 同成社

土屋 長久編　1975『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』 信濃佐久平古氏族の性格とまつり刊行会

東海古墳文化研究会 2006『東海の馬具と飾大刀』

西澤 正晴　2002「遠江・駿河における鉄製板鐔の変遷と展開」『研究紀要』9　静岡県埋蔵文化財調査研究所

福島県文化財センター白河館　2002『弘法山のよこあなー古代ガラスと象嵌の世界』

松尾 光晶　1999「上塩冶築山古墳出土馬具の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究』 島根県古代文化センター

宮代 栄一　2015「熊本県球磨郡多良木町赤坂古墳群出土遺物の研究」『熊本古墳研究』6　熊本古墳研究会

桃﨑 祐輔　2014「馬具からみた九州の地域間交流」『古墳時代の地域間交流 2』 九州前方後円墳研究会

森田 安彦　2005「毛彫施文の金銅装棘付花弁形杏葉の編年的位置付けについて」『立野古墳群』 江南町教育委員会

【報告書】

橿原考古学研究所　1990『斑鳩藤ノ木古墳第 1 次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会

橿原考古学研究所　1995『斑鳩藤ノ木古墳第二・三次調査報告書』 斑鳩町・斑鳩町教育委員会

静岡県埋蔵文化財調査研究所　2008『原分古墳』

高崎市教育委員会　1992『観音塚古墳調査報告書』

能登島町教育委員会　2001『史跡須曽蝦夷穴古墳Ⅱ』（石川県）

富士市教育委員会　2003『東平遺跡発掘調査報告書』

富士市教育委員会　2016『伝法 中原古墳群』

八頭町教育委員会　2014『福本 70 号墳発掘調査報告書』（鳥取県）

第 5 表文献（鉄製円頭大刀）

1　群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986『下触牛伏遺跡』、2　江南町教育委員会 2005『立野古墳群』・熊谷市史編さん室 2015『新熊谷市史』資料編 1　考古、3　かながわ考古学財団 2002『比奈窪中屋敷横穴墓群』、4　土屋長久編 1975『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』 信濃佐久平古氏族の性格とまつり刊行会、5　京都市文化観光局 1987『醍醐 1 号墳発掘調査概報』昭和 61 年度

第 6 表文献（帯状吊金具付大型矩形立聞環状鏡板付轡）

1　東松山市教育委員会 1999『古凍 14 号墳（第 1・2 次）』、2　愛知県営開拓パイロット事業石巻地区埋蔵文化財調査団 1976『二本松古墳群』、3　宮代栄一 1997「古墳時代の面繋構造の復元」『HOMINIDS』Vol.1・仁多町教育委員会 2005『大トシ谷横穴墓・玄蔵坊横穴・コフケ横穴・川子原横穴・上分中山横穴群』

第 7 ～ 9 表文献（横長心葉形鏡板付轡・棘付花弁形杏葉）

1　茨城県教育財団 1998『北浦複合団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』、2　茨城県教育委員会 1970『宮中野古墳群調査報告』、3　千葉県 2003『千葉県の歴史』資料編考古 2、4　佐藤信孝 2005「終末期古墳出土馬具の変遷－長方形鏡板付轡の変遷」『電脳考古学』1、5　白井久美子 2002「金銅装毛彫馬具」『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』 千葉県史料研究財団、6　佐藤信孝 2004「群馬県高崎市若田 B 号墳出土馬具の検討－毛彫馬具の雲珠について」『専修考古学』10　専修大学考古学会、7　山梨県 1999『山梨県史』資料編 2　原始・古代 2、8　土屋長久編 1975『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』 信濃佐久平古氏族の性格とまつり刊行会、9　田中新史 1980「東国終末期古墳出土の馬具」『古代探叢－滝口宏先生古希記念考古学論集』 早稲田大学出版部、10　富士市文化振興課のご教示による、11　藤枝市埋蔵文化財調査事務所 1980『原古墳群白砂ヶ谷支群』、12　石川正之助・佐藤信孝ほか 2010「しどめ塚古墳」『榛名町誌』資料編　高崎市、13　東海古墳文化研究会 2006『東海の馬具と飾大刀』、14　古柳塚古墳研究会　2004 「古柳塚古墳の研究」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告書』12、15　榛原町教育委員会 1986『仁田山ノ崎古墳出土品保存修理報告』、16　鳥取県教育文化財団 2002『小畑古墳群』、17　森田安彦 2005「毛彫施文の金銅装棘付花弁形杏葉の編年的位置付けについて」『立野古墳群』 江南町教育委員会、18　高崎市観音塚考古資料館 2017『小さな古墳の物語』・群馬県古墳時代研究会 1999『群馬県内の横穴式石室Ⅱ』、19　江南町教育委員会 2005『立野古墳群』・熊谷市史編さん室 2015『新熊谷市史』資料編 1　考古、20　千葉県史料研究財団 2002『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』、21　山梨県教育委員会 1979『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－北巨摩郡双葉町地内 2 －－中巨摩郡竜王町地内―』、22　静岡縣 1931『静岡縣史』第 2 巻名著出版、23　愛知県営開拓パイロット事業石巻地区埋蔵文化財調査団 1976『二本松古墳群』、24　豊橋市教育委員会 2002『馬越長火塚古墳群』

第 10 表文献（壺鐙）

1　東京国立博物館 1980『東京国立博物館図版目録古墳遺物編（関東Ⅰ）』、2　壬生町教育委員会 2001『藤井古墳群』、3　斎藤弘 1985「古墳時代の金属製壺鐙」『日本古代文化研究』2、4　石川正之助・佐藤信孝ほか 2010「しどめ塚古墳」『榛名町誌』資料編 1　高崎市、5　群馬県古墳時代研究会 1996『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』、6　高崎市 1999『高崎市史』資料編 1、7　群馬県教育委員会 1999『綿貫観音山古墳Ⅱ』、8　天理大学 1988『ひとものこころ』 天理大学附属天理参考館蔵品　縄文・弥生・古墳』天理教道友社、9　東松山市教育委員会 1999『古凍 14 号墳（第 1 次・2 次）』、10　千葉県 2002『千葉県史編さん資料千葉県古墳時代関係資料』、11　名古屋市博物館 1985『特別展古墳時代の馬具』、12　川江秀孝 1992「馬具」『静岡県史』資料編 3、13　米子市教育委員会 1989『石州府古墳群発掘調査報告書』・米子市史編さん協議会 1999『新修米子市史』7　資料編考古、14　花田勝弘 2000「筑紫・宮地嶽古墳の再検討」『考古学雑誌』85-1　日本考古学会、15　山田隆博 2017「宮城県山元町合戦原遺跡の調査－横穴墓群の調査を中心に」『研究発表資料集』日本考古学協会 2017 年度宮崎大会実行委員会、16　楢葉町教育委員会 1989『名古谷横穴群調査報告』・野馬追の里原町市立博物館 2000『鐙－その歴史と美－』、17　茨城県教育財団 1998『北浦複合団地造成事業内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』、18　昭和村教育委員会 1996『川額軍原Ⅰ遺跡』、19　東京国立博物館 1983『東京国立博物館図版目録古墳遺物編（関東Ⅱ）』、20　高崎市 1999『高崎市史』資料編 1、21　藤岡市 1993『藤岡市史』資料編、22　千葉県企業庁 1975『公津原』、23　伊勢原市教育委員会 1995『三ノ宮・下尾崎遺跡　三ノ宮・上栗原遺跡発掘調査報告書』、24　後藤守一 1928「原始時代の武器と武装」『考古学講座』6、25　山梨県 1999『山梨県史』資料編 2、26　古柳塚古墳研究会 2004「古柳塚古墳の研究」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告書 12』、27　長野県考古学会 1966『松本諏訪地区新産都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告－昭和 40 年度－』、28　松本市教育委員会 1990『大塚古墳　南方古墳　南方遺跡』、29　静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008『原分古墳』、30　川江秀孝 2010「静岡市半兵衛奥古墳とその遺物Ⅲ」『静岡県考古学研究』41・42 合併号、31　岩美町教育委員会 1992『高野坂古墳群発掘調査報告書』、32　山口県 2000『山口県史』資料編　考古 1、33　宮代栄一 1995「宮城県出土の馬具の研究」『九州考古学』70　九州考古学会、34　国立清州博物館 1990『三国時代馬具特別展』、35　光陽市・順天大学校博物館 2005『光陽馬老山城Ⅰ』、36　東日本埋蔵文化財研究会 1997『遺物からみた律令国家と蝦夷』、37　萩悦久 1992「下総東部における終末期古墳の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』44

図の出典

第 73・74・76 図　本書より作成

第 75 図　第 5 表文献より引用

第 76 図　第 6 表文献より引用

第 77 図　1・5（本書）、2（能登島町 2001）、3（福島県文化財センター 2002）、4（東海古墳文化研究会 2006）、6（静岡県埋文研 2008）

第 78 ～ 80 図　第 7 ～ 9 表文献より引用

第 81 図　第 10 表文献より引用

第 82 図　筆者作成

第 83 図　第 7・9・10 表を基に富士市教育委員会作成

第 4 節　東平 1 号墳出土鉄鏃の評価と意義

藤村 翔

はじめに

駿河東部地域の後・終末期古墳出土鉄鏃については、長三角形式や五角形式、三角形式に代表されるようなヴァリエーション豊かな平根系鉄鏃が目立つこと（井鍋 2003、長谷川 2003、藤村 2011）、20 ～ 30 本以上の大量の鉄鏃を保有する古墳が数多く認められること（菊池 2016、大谷 2004、藤村 2017）などの特徴が先行研究でも指摘されている。また、古墳時代のものとしては東海地域唯一の鍛冶具を出土した中原 4 号墳のほか（鈴木 2016 など）、鍛冶生産に関わる特殊遺物（祭祀具）としての性格が推定されている鉄鐸を保有する古墳も当地域に集中する状況から、小規模な鉄器製作や鉄鏃の地域生産が行われていた可能性も考慮しておく必要がある一方で（藤村 2017）、当地域の鉄鏃組成やその変遷を検討する分析は井鍋誉之氏の検討（井鍋 2003）以降低調であり、近年になって目覚ましい調査成果が相次いで報告されている当地域の後・終末期古墳出土資料を反映した編年を再構築する意義は大きい。

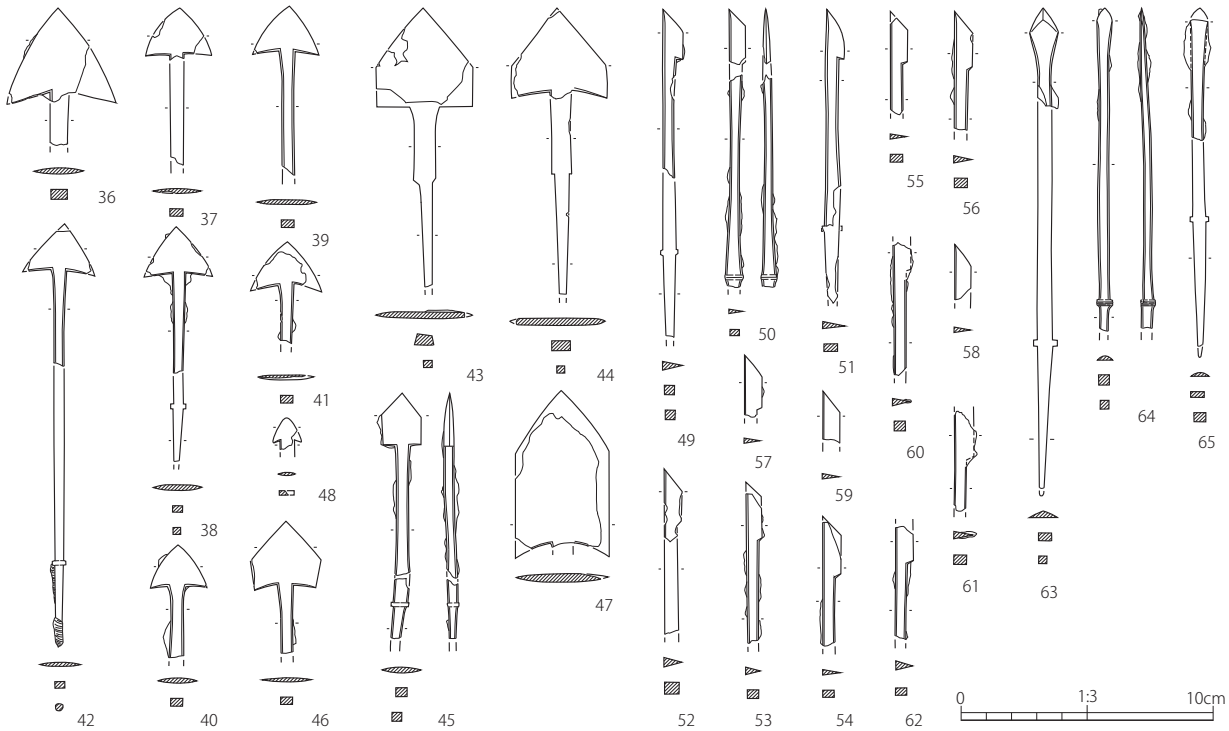
上記のような問題意識のもと、本稿では駿河東部地域における 7 世紀代の代表的な有力首長墳の一つであり、また計 30 点という比較的多量の鉄鏃を保有する東平 1 号墳の資料の特徴を整理し、当地域における鉄鏃組成の時間的推移のなかで本資料が有する意義を考えたい。

1　東平 1 号墳の鉄鏃組成とその特徴

（1）概要

東平 1 号墳の横穴式石室内から、平根系鉄鏃が 12 点、尖根系鉄鏃が 18 点、計 30 点の鉄鏃が出土している（註 1）。このうち、平根系鉄鏃は三角形式が 7 点、五角形式が 5 点、尖根鉄鏃は三角形式が 1 点、片刃箭式が 14 点、鑿箭式が 3 点を数える（第 84 図）。

平根三角形式（36 ～ 42）のうち、大型の 36 は鏃身部長 3.8cm、鏃身部最大幅 4.2cm を測り、平面形が正三角形に近く、浅い腸抉を有する。頸部以下が



第 84 図　東平 1 号墳の鉄鏃

欠損するが、本来は 43 のような短頸の平根鏃であったと考えられる。36 を小型にしたような 37 ～ 42 は、いずれも鏃身部長が 1.8 ～ 2.0cm、鏃身部最大幅が 2.6 ～ 2.9cm に収まり、浅い腸抉を有する規格性の高い長頸鏃群である。頸部は判明しているもので幅 0.5cm 程度、長さ 5.5 ～ 11.7cm を測り、全長にはバラつきがありそうである。茎関が判明するものは、38 が棘関、42 は幅 0.1 ～ 0.2cm 程度の細い鉄棒を頸部に巻いて関を形成しており、円形関（水野 2003 など）に類似するが、断面方形の頸部に沿って巻くので、断面は隅丸方形とみられる。本稿では類円形関と仮に呼んでおく。

平根五角形式（43 ～ 47）のうち、いわゆるホームベース形の 43・44 は鏃身部長が 3.6 ～ 4.0cm、鏃身部幅がともに 3.8cm を測り、頸部長も 3.0 ～ 3.2cm と類似するが、43 が腸抉がないのに対し、44 は浅い腸抉を有する。45・46 はともに長頸鏃とみられるが、45 が幅狭の鏃身部なのに対し、46 は幅広である。47 は鏃身部長 5.5cm、幅 3.7cm を測る大型の平根鏃であり、頸部以下が欠損しているのが惜しまれるが、平根系鏃のなかでも一際象徴性の高い位置づけの鏃であったと考えられる。茎関は 43 が撫関、44 が角関、45 が類円形関とみられる。

尖根三角形式とした 48 は、浅い腸抉を有する長頸鏃とみられる。

片刃箭式（49 ～ 62）は、確認できるものはすべて浅い逆刺を有する形態であるが、逆刺が鋭角のもの（49、51）と鈍角のもの（52 ～ 54、55 ～ 57、62）が混在する。鏃身部長はいずれも 2.0cm 程度であり、比較的短小である。茎関は 49・51 が棘関、50 が類円形関とみられる。

鑿箭式（63 ～ 65）は、鏃身部が片鎬造で丸みをもつ 63 と、片丸造で頸部との差が明瞭で無い 64・65 とが混在する。茎関は 63・65 が棘関、64 が類円形関とみられる。

（2）三角形鏃の特徴

短頸鏃　東平 1 号墳の平根三角形式鉄鏃でみられるような、幅広な鏃身部を有する資料については、後述する長頸鏃も含め、駿河東部地域の中でも富士川西岸～富士山南麓地域にまとまって分布する特徴ある形態として注目されている（長谷川 2003、藤村 2011）。短頸鏃とみられる 36 の類例をみると、第 85 図上段に示したように、いずれもふくらの張る幅広な鏃身部を有し、法量も類似した製品が当地域で多く認められる。特に谷津原 16 号墳から中里 K -99 号墳、横沢古墳、国久保古墳の資料は類似性が高く、時期的にも遠江Ⅲ期後葉～末葉頃に収まることから、近しい工房で継続して製作されていた製品とみられる。これらの資料と比べると、東平 1 号墳例は一回り大きく腸抉が鋭角的な形態を採用しており、やや新しい様相とみてよい。Ⅳ期前葉以降に位置づけられそうである。

長頸鏃　幅広な鏃身部（平根）で腸抉を有する 37 ～ 42 の三角形式の長頸鏃は、駿河地域では富士川～富士山南麓地域を除くと、黄瀬川～狩野川流域の下土狩西 1 号墳や平石 4 号墳、安部川西岸の牧ヶ谷 4 号墳や志太地域の原古墳群谷稲葉支群高草地区 19 号墳でみられる程度の非常に限定的な分布を示す資料であるが（藤村 2011）、東日本全体に目を向ければ、内山敏行氏の指摘する「地域型式」[註 2] として、7 世紀中葉前後に東北南部まで分布が拡大する形態と共通する（内山 2003）。分布が極めて集中する富士川西岸～富士山南麓地域の類例をみると（第 85 図）、遠江Ⅲ期末葉の谷津原 12 号墳で細身のもの（6）と幅広のもの（7）が登場して以後、国久保古墳や一色 D-35 号墳、室野坂 B-4 号墳で東平 1 号墳例と共通する幅広のものが確認される。幅広のものは国久保古墳で 22 点、室野坂 B-4 号墳では 24 点用意されているので、一定量生産・流通されていたことが窺われよう。形態の細部をみると、谷津原 12 号墳例では短小・幅広であったものが、Ⅲ期末葉頃の国久保古墳の段階で正三角形に近い整った形態となり、以後、Ⅳ期後葉以降の一色 D-35 号墳例 [註 3] や室野坂 B-4 号墳例にかけて腸抉が次第に鋭角化するという変化を捉えることが可能である。東平 1 号墳例は腸抉が直角ないしやや鋭角であり、国久保古墳例と一色 D-35 号墳例の中間的な様相を呈する。したがって、こちらもⅣ期前葉頃の所産とみて大過ない。

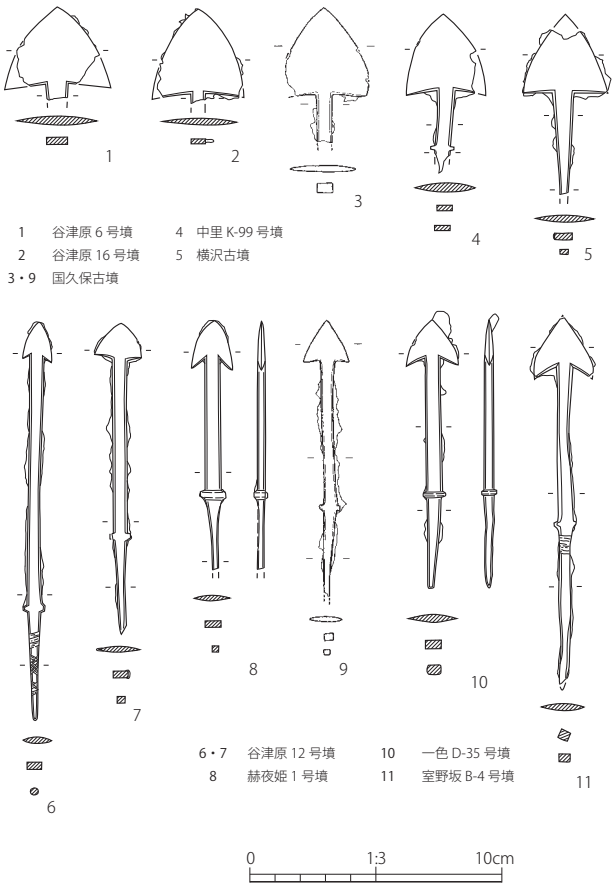
高い規格性　三角形鏃における短頸鏃、長頸鏃の形態は、大小の違いはあれ、相似形のように似通ってお

り、非常に規格性の高い組成と評価されよう。発注から生産・流通までが高度に統率されたなかで被葬者集団へと持ち込まれた可能性を想起させる資料である。

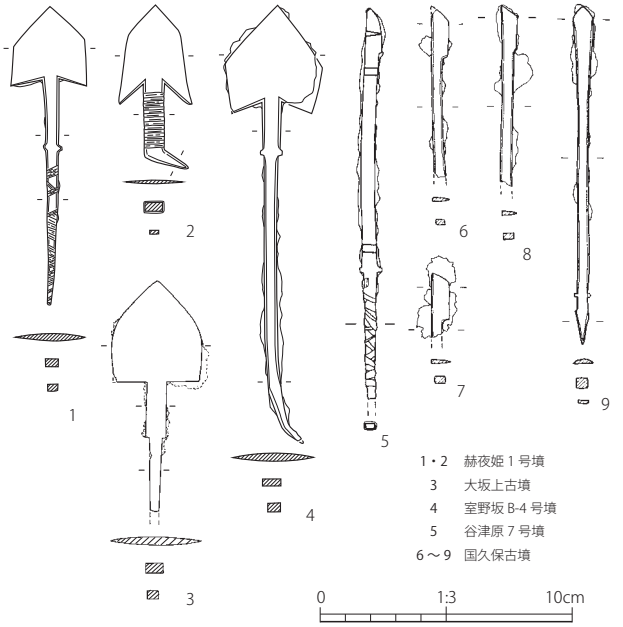
(3) 五角形鏃の特徴

定型的五角形鏃　遠江Ⅲ期中葉以降、駿河西部以東の地域においては、平根五角形式が鉄鏃組成の中心的な位置を占めるようになることが、長谷川睦氏によって指摘されている（長谷川 2003）。第 88 図に示したように、平根五角形短頸鏃は当地域で群集墳が盛行する時期を通じて存続しており、形態的には鏃身部長が次第に短く、幅が次第に長い、いわゆるホームベース形のものへと変化する。東平 1 号墳例（43・44）は典型的なホームベース形といえるものであるが、鏃身部の各辺が直線的なのも特徴である。第 86 図に示した赫夜姫 1 号墳例（1）や大坂上古墳例（3）はともにⅣ期前葉のものであるが、Ⅳ期後葉の室野坂 B-4 号墳例(4)では腸抉が鋭角化し、鏃身部幅が根元部分で窄まる形態となっている。東平 1 号墳例（43・44）については、Ⅳ期前葉に製作された定型的な一群とみてよいだろう。

五角形への指向　当古墳ではほかにも、類例のない特注的大型品の平根五角形鏃（47）があるほか、小型品（46）や長頸鏃（45）と、五角形鏃へのこだわりが強い組成となっている。おそらくは 47 が東平 1 号墳の鏃群のなかでは一際大きな象徴性を有した鏃であり、同種ながら様々な法量の五角形鏃が脇を固めたのであろう。ここにも、三角形鏃同様、発注から流通まで統率された中で集められた鏃群の特徴が垣間見える。駿河東部地域においては特に金銅装馬具などを有する上位階層の古墳で五角形鏃が選択されることが多いこと（菊池 2008）、さらに船津 L-209 号墳例のような無茎の五角形鏃を含め（大谷 2004）、一部の五角形鏃の生産自体が富士山南麓から愛鷹山南麓西部周辺で行われた可能性（菊池 2008）も指摘されているところであり、東平 1 号墳の被葬者がその生産や流通管理に一定の影響力を発揮していたことが想定される。



第 85 図　三角形式鉄鏃の諸例



第 86 図　五角形式・片刃箭鏃の諸例

(4) 片刃箭式の特徴

短小な鏃身部　尖根片刃箭式鉄鏃は、駿河東部地域の後・終末期古墳から出土する鉄鏃のなかでも普遍的な形式の一つであり、ほとんどの鉄鏃出土古墳で副葬されている。鏃身部に逆刺や角関・撫関があるものと、無関のものとがあり、後者が遠江Ⅲ期末葉以降に増加することが指摘されている（大谷 2003b）。鏃身部に関を有するものについては、鏃身部長が 3.0 ～ 4.0cm 程度あるものが一般的な形態であるが、東平 1 号墳の鏃身部長は、2.0cm 前後と短小な形態をとることに特徴がある。このような短小な片刃箭鏃は、駿河東部地域では谷津原 7 号墳や国久保古墳に類例（第 86 図 5 ～ 8）がみとめられ、いずれの事例も富士川西岸～富士山南麓に集中していることから、当地域内で生産された可能性を想起させる（藤村 2011）。

「共有型式」のなかの地域生産品　片刃箭式や鑿箭式の長頸鏃（「共有型式」）は、畿内地域で生産され、列島各地の地域首長層へ搬入された製品が多いことが内山敏行氏によって指摘されているが、不足する分は在地生産分で補われた可能性もまた想定されている（内山 2003・2011）。同じ駿河東部地域でも、鑿箭式や片刃箭式、柳葉式といった「共有型式」長頸鏃の副葬がⅢ期中葉以降特に卓越する愛鷹山東麓～黄瀬川流域に短小な片刃箭鏃の類例がみられないことは、富士山南麓地域とは非常に対照的な現象である。両地域のこの差は、畿内地域との流通経路の粗密によるものか、あるいは逆に、地域内工房の成熟度によるものなのであろうか。即断しかねるが、富士山南麓周辺が平根五角形式や腸抉三角形式長頸鏃をはじめとする地域流通品に重きをおく鉄鏃副葬方式を採用したことと、間違いなく軌を一にする現象として捉えておく必要があるだろう。

(5) 特殊な茎関について

類円形関　前述した通り、東平 1 号墳の鉄鏃の茎関の多くは、一部の平根五角形鏃を除いて棘関であるが、42・45・50・64 は幅 0.1 ～ 0.2cm 程度の細い鉄棒を頸部に巻いて造られたとみられる類円形関である。頸部～茎部破片資料では、80 ～ 86 が類円形関であり、報告書作成時点で確認できる茎関のなかでの割合は約 3.5 割を占める[註4]。同種の茎関は遠江Ⅲ期後葉以降、吹上 2 号墳（尖根柳葉式）や東原 5 号墳（尖根柳葉式）、横沢古墳（長三角形式・雁股式など）、赫夜姫 1 号墳（腸抉三角形式長頸鏃、第 85 図 8）、一色 D-35 号墳（腸抉三角形式長頸鏃、同 10）において実測図上では確認できるが、原資料の確認ができなかったものもあり、検討の余地がある。また茎部の特殊な仕上げとして、国久保古墳で確認された扁平で逆三角形状の茎（第 86 図 9、藤村 2011）についても、未だ類例が少ないが注意される。これらについては、駿河東部地域における地域内生産の可能性を示す特徴として候補に挙げ、今後の良好な事例の増加を待ちたい。

2　駿河東部地域における後・終末期古墳出土鉄鏃組成の変遷

(1) 鉄鏃組成分析の意義

鉄鏃組成への視点　駿河東部地域の後・終末期古墳出土鉄鏃をめぐっては、個別の形式の変遷観や分布論のみならず、その組み合わせや総量に関わる視点も重視されてきた。井鍋誉之氏は、多量の鉄鏃を有する古墳には平根鏃も多く揃えるような「多種多量タイプ」と、尖根鏃が主体となる「同種多量タイプ」が存在することを指摘し、それぞれの古墳被葬者層で異なる鉄鏃の流通経路を掌握していたことを想定した（井鍋 2003）。一方、菊池吉修氏は富士山南麓や愛鷹山南麓東側では規格性の高い多量副葬古墳（同種多量）が集中する点から、鉄鏃の集約・分配に関わる人格の存在を推定する（菊池 2016）。先学が指摘したような鉄鏃組成の傾向に基づけば、東平 1 号墳の組成は平根鏃が 11 点、尖根鏃が 19 点で両者がやや均衡するが、形式でいえば三角・五角・鑿箭・片刃箭をそれぞれ一定量揃えるので、「多種多量」の部類になるだろうか。

「平根指向」観念の変化を追う　しかし、そもそも後・終末期の有力階層の古墳でよくみられると言われる「少量の平根」＋「多数の尖根」という教科書的な組成が、必ずしもすべての有力古墳に貫徹されるわけではない（田村 2003）ということが確認されている中で、駿河東部地域では特に、平根鏃が重視される傾向にあることも指摘されているのであ

第 11 表　駿河東部の古墳出土鉄鏃構成

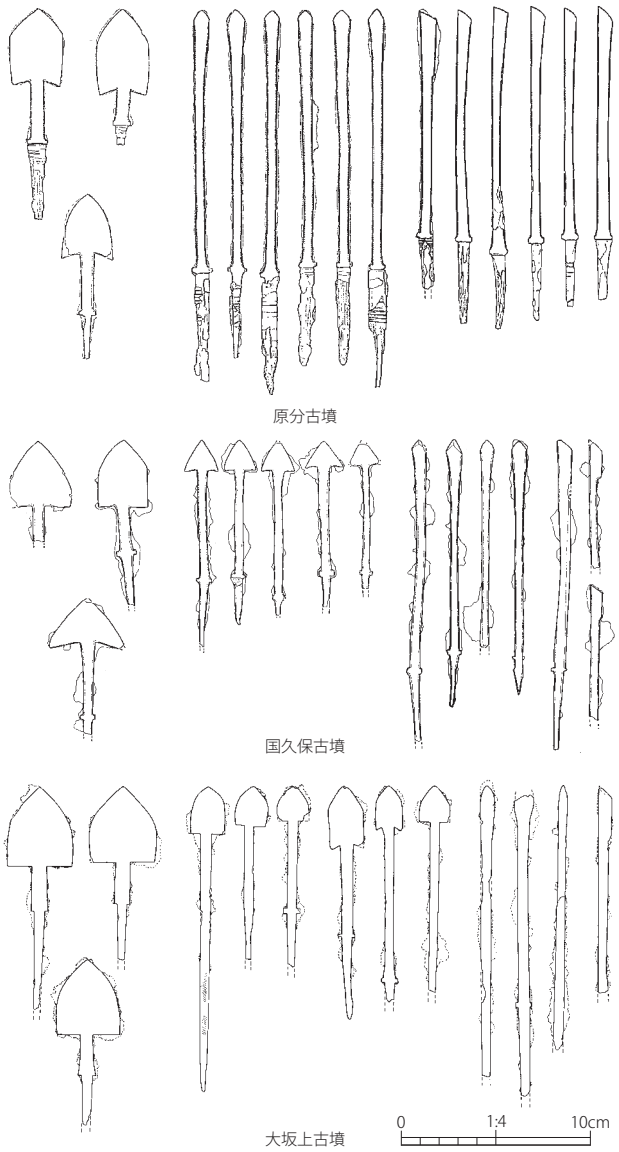
時期（遠江編年）	地域	古墳名	無茎短茎	平根系									尖根系						合計点数（鏃身部）		両頭金具	備考・共伴遺物
				柳葉	撫関三角	圭頭	方頭	長三角	五角	三角	飛燕	雁股	長三角	三角	五角	片刃箭	鏃箭	柳葉	平根	尖根		
Ⅲ期中葉	1	谷津原 6 号墳	2		2			18		1			3			4		27	23	34		脚付甕・長頸壺
Ⅲ期中～後葉	2	中原 4 号墳	2	4	3	3	1	27	3							34	13	7	43	54		銀象嵌装大刀・剣、鉄鉗
Ⅲ期中～後葉　※ 1	1	谷津原 17 号墳							1	2			1			5	4	14	3	24		銀装大刀
Ⅲ期中～後葉	3	清水柳北 3 号墳																41		41		有蓋脚付長頸壺
Ⅲ期中～後葉	3	中里 K-97 号墳	1					1									1		2	1		
Ⅲ期中～後葉	3	中里 K-98 号墳	1	1									2			1		2	2	5		
Ⅲ期中～後葉	1	谷津原 7 号墳						3					1			6	1	18	3	26		胡籙、石突、鞍
Ⅲ期中～末葉	3	中里 K-99 号墳		1				3		1								8	5	8		金銅製切羽・責金具
Ⅲ期後葉	3	石川 6 号墳						5		1		1	11			1	1	5	7	18		脚付短頸壺
Ⅲ期後葉	2	中原 3 号墳	1					3	1				6			13	3	3	5	25		
Ⅲ期後葉	1	谷津原 8 号墳											9					5		14		金銅製鞘尻金具
Ⅲ期後葉	3	寺ノ上 1 号墳						1	1				17			2	3	2	2	24		真珠製棗玉
Ⅲ期後葉	3	吹上 2 号墳														1	1	12		14	2	類円形関
Ⅲ期後葉	5	天神洞 1 号墳											2				2	8		12		
Ⅲ期後葉～Ⅳ期前半	2	横沢古墳						2	2	2		1	2			7	2	1	7	12		金銅製装身具・銅鈴、貝装帯金具、類円形関
Ⅲ期後葉～Ⅳ期前半	3	秋葉林 1 号墳	1					2	1		1					12	6		5	18	6	金銅装圭頭大刀（尖根の茎関数は 26 点）
Ⅲ期後葉～末葉	3	清水柳北 2 号墳														10		26		36		乳文鏡
Ⅲ期後葉～末葉	1	石川 119 号墳						3	5	2	1					4		2	11	6		銅鈴、金銅装大刀、篠籠手
Ⅲ期後葉～末葉	6	夏梅木 6 号墳						3	1							4	5	1	4	10	3	金銅装大刀、金銅装刀子、紡錘車棒軸
Ⅲ期後葉～末葉　※ 1	3	東原 5 号墳											1					32		33		大刀 5 振、類円形関
Ⅲ期後葉～末葉　※ 1	1	谷津原 15 号墳	1					5					4			2			6	6	3	
Ⅲ期後葉～末葉　※ 1	1	谷津原 16 号墳								1			3	2	1	3	3		1	12		銀装大刀
Ⅲ期後葉～末葉　※ 1	3	東原 1 号墳											1	1		4	2	9		17		貝装帯金具？
Ⅲ期末葉	3	中里 K-95 号墳	1						1				2	1	10	5	10		2	28		金銅装圭頭大刀
Ⅲ期末葉	1	谷津原 12 号墳					1	6	2	1	1		3						11	3	4	
Ⅲ期末葉	1	谷津原 2 号墳						1			1		8			3	7	5	2	23		
Ⅲ期末葉	3	的場 3 号墳	1					9		1			11			5	4	6	11	26	4	鉄鐸
Ⅲ期末葉	6	夏梅木 9 号墳														6	1			7		銅釧
Ⅲ期後葉～Ⅳ期前葉	3	須津 J-6 号墳														8	5			13		針
Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉	4	原分古墳							2	1						16	22		3	38	17	家形石棺、金銅装大刀・銀象嵌装大刀、金銅装馬具
Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉	2	国久保古墳							1	24	1					4	23		26	27		銀装大刀、鉄鐸、雁木玉
Ⅳ期前葉　※ 1	3	井出 1 号墳					1		5							2			6	2		金銅製棺座金具
Ⅳ期前葉	4	下土狩西 1 号墳						3		4			6				1	1	7	8	2	家形石棺、金銅装頭椎大刀
Ⅳ期前葉	2	赫夜姫 1 号墳					1	1	14	1	1		2						18	2		紡錘車、類円形関
Ⅳ期前葉	3	須津 J-159 号墳						2	3	5	1						5		11	5	6	鉄製鵐目金具・刀装具
Ⅳ期前葉	2	大坂上古墳							5	3						1	3		8	4	4	金銅装方頭大刀
Ⅳ期前葉	2	東平 1 号墳							4	7				1	1	14	3		11	19	1	銀象嵌装大刀、丁字形利器、金銅装馬具、類円形関
Ⅳ期前葉	3	船津 L-62 号墳	2				1		2	3		1	8		4	1	6	1	9	20	6	銅装馬具
Ⅳ期前葉	3	石川 22 号墳								4									4			
Ⅳ期後葉	1	室野坂 B-4 号墳							1	24						11			25	11		銀象嵌装責金具
Ⅳ期後葉　※ 1	2	一色 D-35 号墳								5									5			鈎帯金具、銅装鞘尻金具、銀装刀子、類円形関
Ⅴ期	1	妙見 I-2 号墳					1			3							13		4	13		有蓋短頸壺

凡例

時期　※ 1：築造時期の参考となる遺物が少ない

地域　1：富士川西岸　2：富士山南麓　3：愛鷹山南麓　4：黄瀬川流域　5：狩野川流域　6：箱根山西麓

合計点数：平根の合計点数は、無茎・短茎を含む。



第 87 図　鉄鏃構成の類例（遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉）

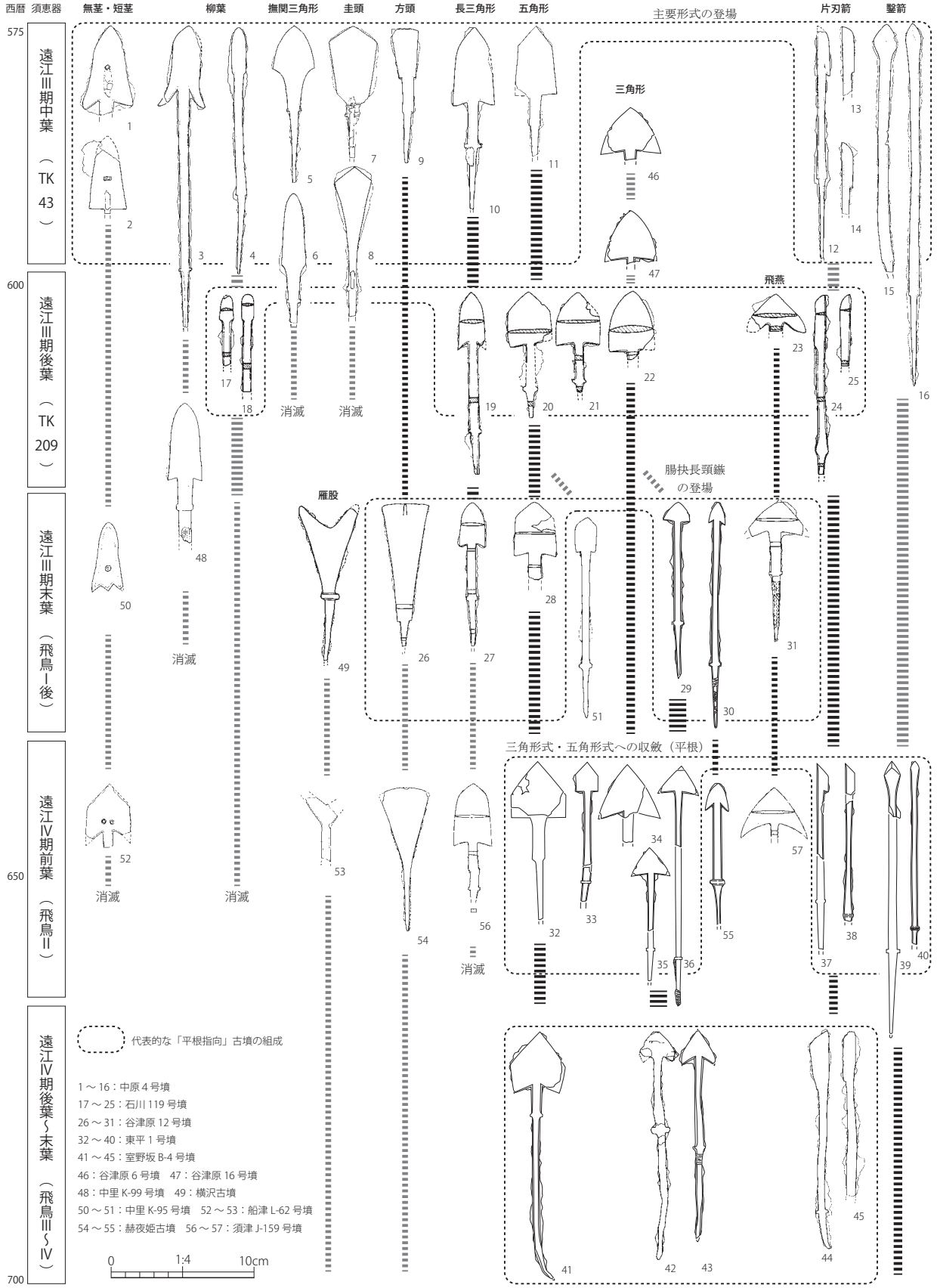
り（長谷川 2003 など）、畿内地域の首長墳で指摘される尖根への指向性よりは、同地域の群集墳層にみられる平根への指向性（豊島 2002）と共通する部分が大きいと考える。そうであるならば、平根系鏃を重視する古墳における鉄鏃組成の時間的推移を明らかにすることができれば、「同種多量」・「多種多量」の議論から一歩進めて、鉄鏃に対する考え方を比較的共有する集団の中で、鉄鏃への観念がいかに変化したのか、またその組成自体にどのような指向性が働いたのかを検証することも可能になってくるのではないだろうか。そのような過程を経ることで、初めて東平 1 号墳の鉄鏃組成が評価しやすくなると考える。

上記の問題意識のもと、駿河東部から一部伊豆地域を含む主要な鉄鏃出土古墳を集成し、各鉄鏃形式の出土点数や共伴遺物を時期別に示した（第 11 表）。鉄鏃の数量を求める際に、他の副葬品の時期や鉄鏃型式の細分によって初葬・追葬を分けてカウントすることは理論上可能であるが、資料操作によって異なる結果を導く危険性もある（内山 2011）。現状の研究水準では悉皆的に埋葬単位別の鏃群を抽出することは困難なことから、同一埋葬施設出土の鏃を集計している。

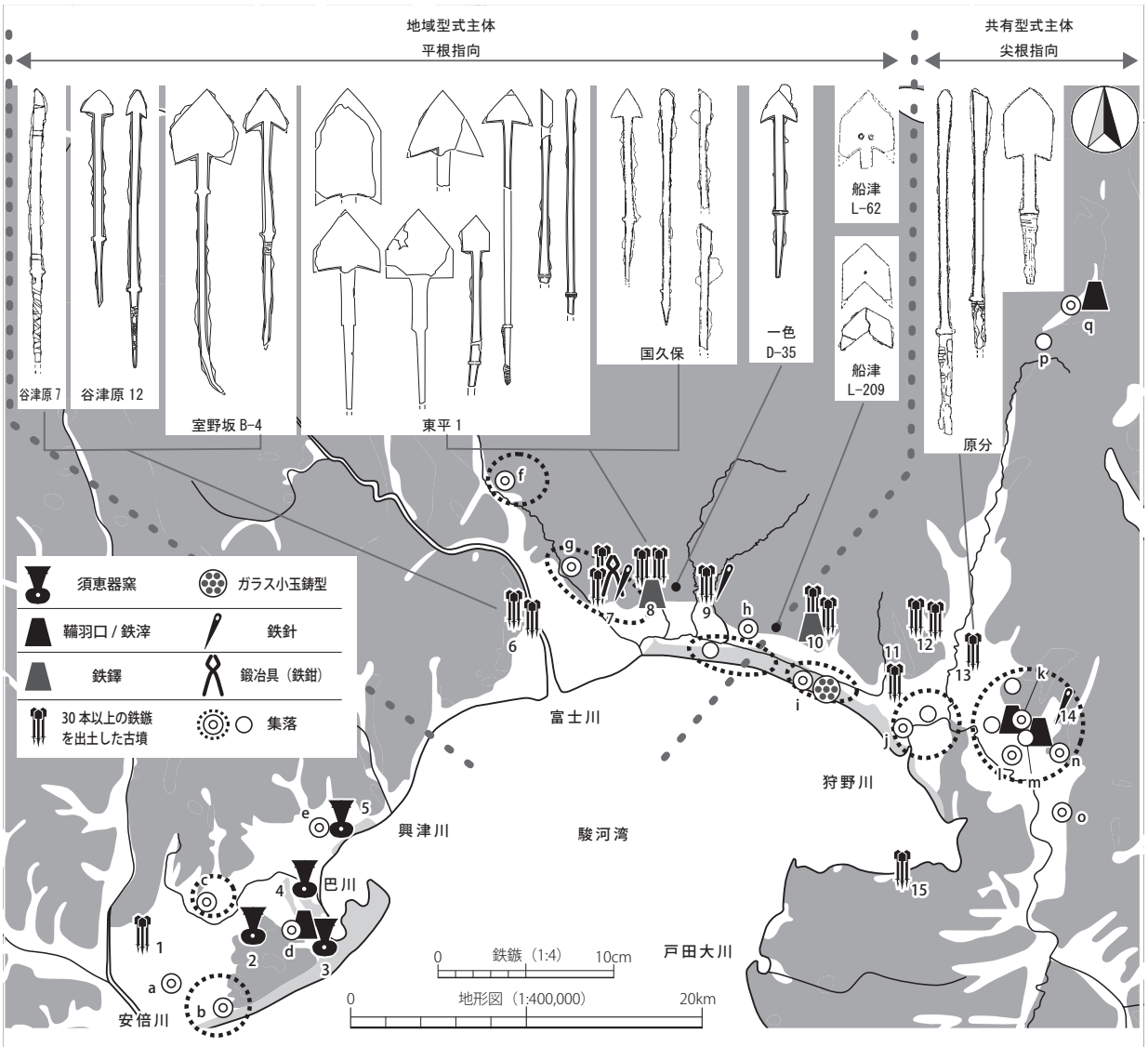
（2）鉄鏃組成の変遷

遠江Ⅲ期中葉～後葉　第 11 表および主要な「平根指向」古墳の鉄鏃組成をまとめた第 88 図を見るに、まず時期が新しくなるにつれ、副葬鉄鏃の種類が少なくなっていくことがわかる。遠江Ⅲ期中葉（TK43 型式併行期）頃の中原 4 号墳や谷津原 6 号墳の段階で、律令的形式ともよばれる雁股式や飛燕式を除くほぼすべての形式が出揃っており、以後の当地域の副葬鉄鏃の展開は、ほぼこの段階である程度方向付けられたと言ってよい。具体的には、平根系鏃の長三角形式・五角形式・三角形の主要 3 種が現れ、これらはⅢ期末葉（飛鳥Ⅰ後半）頃までの「平根指向」古墳の必須形式となっている。特に中原 4 号墳の鉄鏃は「多数の尖根＋多種多量の平根」といえるものであり、「多数の尖根＋少数の平根」という古墳時代中期後半以降顕在化する一般的な鏃構成（田村 2003 など）に、「多種の平根」という駿河東部地域の特徴が加わり、さらに、鉄鏃の生産や流通に携わる立場にあった被葬者が、西日本各地との交流や平根鏃の有する象徴性を重視して集めた結果成立したと考えられている（菊池 2016）。しかしむしろ、中原 4 号墳の被葬者が達成した「平根鏃を多数揃えるという指向性」こそが、駿河東部地域の一定の集団に大きな影響を与え続けたと考えたい。

遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉　そのような組成にも、Ⅲ期末葉からⅣ期前葉（飛鳥Ⅰ後半～Ⅱ）を期に、変化が訪れる。原分古墳や国久保古墳、東平 1 号墳、大坂上古墳といったいずれも装飾付大刀あるいは金銅装馬具といった副葬品を有する有力古墳において、平根長三角形式がみられなくなり、平根系鏃の主要形式が、五角形式と三角形式に収斂されるの



第88図　駿河東部地域の後・終末期古墳における鉄鏃組成の変遷



a：ケイセイ遺跡　b：元宮川神明原遺跡　c：川合遺跡　d：天神山下遺跡　e：小里前遺跡　f：大宮城跡　g：沢東A遺跡　h：宮添遺跡
i：中原遺跡　j：丸子町遺跡　k：金沢遺跡・藤代町遺跡　l：安久遺跡　m：中島下舞台遺跡　n：伊豆逓信病院敷地内遺跡　o：韮山城跡　p：中田遺跡
q：横山遺跡　1：賤機山古墳　2：谷田古窯　3：天神山古窯　4：秋葉山古窯　5：東山田古窯　6：室野坂B4号墳・谷津原6号墳
7：中原3・4号墳　8：東平1号墳・国久保古墳　9：須津J-6号墳・中里K-95号墳　10：的場3号墳・秋葉林1号墳　11：東原1号墳
12：清水柳北2・3号墳　13：原分古墳　14：田頭山1号墳　15：平沢1号墳

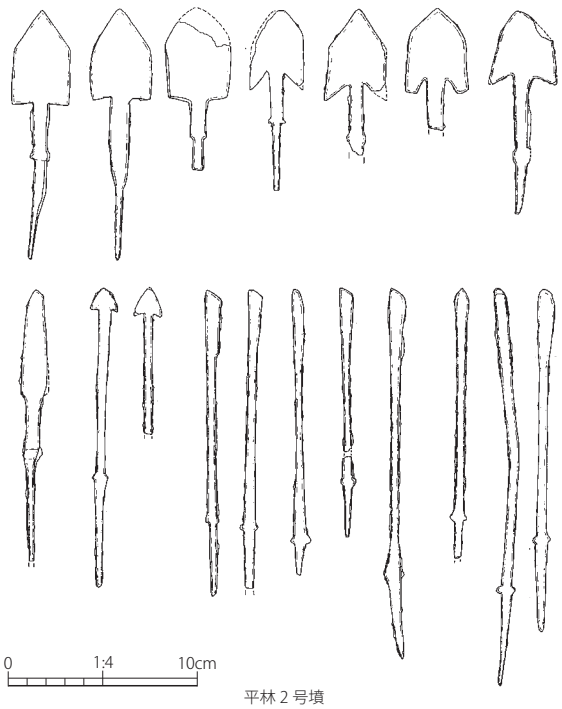
第89図　駿河・伊豆地域の手工業関連遺跡と地域型式鉄鏃の広がり

である（第87図）。無論、同時期のすべての古墳において達成されたのでは無く、他の形式を依然副葬する有力古墳も少なからず存在するのであるが、「平根指向」の集団内にも平根の種類を厳選する指向性が表出したことを評価したい。特にⅣ期前葉には東平1号墳例のような定型的なホームベース形の平根五角形式が創出され、五角形式が「地域の顔」としての様相を帯びてきたことが推察される。

終末期古墳の鉄鏃と地域生産　それでは、鉄鏃形式が収斂されるという現象は、どのような背景によって行われうるのであろうか。一般的に、7～8世紀にかけての鉄鏃は、鏃身部が矮小化した鑿箭、片刃箭といった尖根系鉄鏃と、方頭式、飛燕式、雁股式、長三角形式、柳葉式といった平根系鉄鏃との組み合わせが基本となり、列島中央部から東日本地域で共通性が高い形態へと収斂されるが（津野1990）、そうした背景には、中央で設計された見本（様《ためし》）を参考に、列島各地で鉄鏃の生産が活発化した結果と考えられている（津野・内山2017）。特に、鑿箭・片刃箭が王権中枢から地域首長層を中心に配布された「共有型式」として捉えられる一方、三角形式などの腸抉長頸鏃や三角形式・五角形式な

どの平根系鏃は東海～東日本各地で製作され、中小古墳を中心に供給された「地域型式」として認識される（内山 2003・2011）。後の郡家につながる地域拠点において鉄器の地域生産が活発化する中、平根系に代表されるような鉄鏃の象徴性は薄れ、日常的・実用的な武器としての側面が強調されるようになっていったと考えられているが（鈴木 2003）、そうであるならば、当地域において東日本的な象徴性を帯びた無茎式・短茎式が消失し、平根系が五角形式と三角形式を中心とする組成に収斂していくことは、やはり鉄鏃の地域生産と密接に関わった現象と捉えられる。先に筆者は、鉄鏃を多量に保有したり、鉄鉗・鉄鐸といった鍛冶関連遺物を副葬したりする古墳や、鍛冶関連遺物が出土した集落の分布から、駿河東部地域において 6 世紀後葉から 7 世紀にかけ、鍛冶関連の手工業生産が発達した状況を想定したが（藤村 2017）、鉄鏃組成の変遷からは、7 世紀中頃を前後する時期に、鉄器生産上の第二の画期が到来したことが想定されるのである（第 89 図）。7 世紀後半以降にはそうした鉄鏃形式収斂の流れは一層押し進められ、雁股・方頭・五角形・三角形・片刃箭・鑿箭のいずれかを複数選択する少種組成に変化する。この段階を律令的鉄鏃組成の完成とみるのであれば、7 世紀中頃前後から始まる鉄鏃組成の収斂化の波も、後の郡家につながるような地域拠点を中心とする地域生産の成熟と進展の文脈で捉えてよいだろう。

軍事的観点からの評価　また、7 世紀中頃にみられる「共有型式」の片刃箭・鑿箭と、東国の「地域型式」である腸抉三角形式長頸鏃と平根五角形式短頸鏃によって構成される鏃群については、岡安光彦氏が信濃・甲斐・駿河地域を中心に編成された「東国舎人騎兵」の鉄鏃として評価している（岡安 2013）。岡安氏が「甲斐の勇者」の古墳と認める平林 2 号墳の鉄鏃組成は、平根五角形式、尖根片刃箭式・鑿箭式に腸抉長頸鏃が加わるもので、当地域とも共通点が多い（第 90 図）。鉄鏃組成以外にも、駿河東部地域をめぐっては、石室規模の大小や装飾付大刀の保有などによる階層分化が発達した古墳群の並立（藤村 2016）や鉄器生産・紡織・皮革加工などの各種手工業の展開（鈴木 2016、藤村 2017）、馬



第 90 図　甲斐地域における有力階層の鉄鏃組成

匹生産の可能性（大谷 2016）、交通上の拠点としての地域開発（菱田 2018）など、さまざまな論点が提示されているが、これらの諸特徴について、軍事的側面も考慮した評価も検討していくべきなのかもしれない。後の東海道と東山道を結ぶジャンクションとしての役割を有した富士山南麓地域は、畿内の王権からみれば、後の清見関のすぐ外側、東国経営の最前線ともいえる軍事的要衝の地として捉えられる。農耕生産の基盤も十分とは言いがたい当該地において、百基単位の群集墳が複数並立する背景には、有事の際には自前で装備を調え、兵として出奔できる生産技術を保有した集団が複数存在していた可能性を想定しておくことも必要であろう。

3　東平 1 号墳出土鉄鏃の意義

前節までにおいて、東平 1 号墳出土鉄鏃の形態的特徴と駿河東部地域における鉄鏃組成の変遷についてみてきた。それらの成果を基に、本節では東平 1 号墳出土鉄鏃の意義と被葬者像について検討し、まとめに替えたい。

帰属時期　個別の鉄鏃についてその特徴と駿河東部地域内の類例から判断される帰属時期を述べてきた。まず帰属時期については、平根三角形式、腸抉三角形式長頸鏃、平根五角形式の形態から、遠江Ⅳ

期前葉（飛鳥Ⅱ）頃と捉えた。追葬も当然想定しておくべきではあるが、鉄鏃の形態的特徴からは、積極的に時期差を導く型式差を抽出することはできない。三角形式や五角形式にみられた規格性からも、鏃束の別はあったとしても、初葬者の生前の権力や生産基盤、交流網を象徴するために、大きくは一括で用意された鏃群と判断してよいだろう。

鉄鏃生産と流通の掌握　五角形式や短小な鏃身部の片刃箭長頸鏃は在地における鉄器生産の可能性を示唆する。また東日本で広域的な「地域型式」である平根腸抉三角形式長頸鏃の存在は、そのような地域内生産が東日本各地との情報共有のなかで成熟していった過程を推察させる。鉄鏃組成の観点からは、6 世紀後葉以降のそれとは大きく異なり、平根系が五角形式と三角形式に収斂され、かつ腸抉三角形式長頸鏃も取り入れた新しいスタイルであり、当古墳の被葬者がそうした新様式を積極的に推進した発信源たる指導者の一人であった可能性も指摘される。

伝法古墳群の系譜　東平 1 号墳が所在する富士山南麓地域の伝法古墳群内には、遠江Ⅲ期中葉（TK43 型式併行期）に東海地域では極めて希少な鍛冶具を副葬する中原 4 号墳が築かれ（鈴木 2016）、その後もⅢ期末葉（飛鳥Ⅰ後半）には、やはり鉄器生産と関連する祭具とされる鉄鐸や渡来系集団とのかかわりを示唆する雁木玉を副葬する国久保古墳の存在が確認されている（藤村 2011）。7 世紀中頃のⅣ期前葉（飛鳥Ⅱ）段階に伝法古墳群の最上位階層の地位にあった東平 1 号墳の被葬者は、そうした系譜を引く鉄器生産技術者集団を直接あるいは間接的に管理する立場にあり、自身の築いた東日本諸地域との広域ネットワークを背景として、鉄鏃新様式の創出にみられるように、その生産力をさらに向上・展開させていったことが推察される。そして、そのような指導力を発揮するに至った背景に、後の東海道と、東山道へとつながる中道往還の結節点に位置する伝法古墳群の集団の長として、駿河東部地域の集団間における軍事的結束の一翼を担ったことも想定できるかもしれない。

おわりに

雑駁ではあるが、東平 1 号墳出土鉄鏃をめぐる問題とその特徴・意義について述べてきた。東平 1 号墳は、畿内の王権から下賜されたとみられる銀象嵌装大刀や銅製壺鐙といった東日本諸地域に遍在する副葬品の存在から、王権から重要視されていた東国の最前線たる地域指導者の姿をうかがうことができる（本書、大谷論考）。また丁字形利器の存在からは、渡来系集団の系譜を着実に受け継いだ被葬者の姿も想定される（同、佐藤・鈴木論考）。

鉄鏃の分析では、上述した広域的ネットワークを背景として、駿河東部地域やさらにローカルな富士山南麓地域において、東平 1 号墳の被葬者がいかなる役割や影響力を発揮したのかを描き出すことが、少なからずできたのではないだろうか。地域型式主体・平根指向の古墳の分布域は後の富士郡に、共有型式主体・尖根指向の古墳分布域は後の駿河郡や伊豆国に相当し、畿内の王権とのかかわり方の違いが、律令期以後の地域発展の方向性にもかなりの影響を与えたことが予想される。この点は、今後の地域研究にとって、重要な視座となるだろう。

以上のように、重層的な古代の交流関係や複雑な地域社会を鮮明に描くことのできる可能性を秘めた東平 1 号墳の副葬品群は、当市のみならず、県内外の古墳時代研究にとっても重要な価値を有した一級の資料群として、今後のさらなる活用が期待されるものである。

註

1　鉄鏃の形式分類については、基本的に静岡県の鉄鏃集成（大谷 2003）に即した。広域的な鉄鏃研究との対比から特に長頸鏃・短頸鏃と呼称する場合、前者は頸部長が鏃身部長の 2 倍以上あるものを、後者は 2 倍未満のものをそれぞれ指す（尾上 1993）。

2　内山敏行氏は 2003 年の論文では東日本の「専有型式」と呼称したが（内山 2003）、後に「地域型式」と改めている（内山 2011）。

3　一色 D-35 号墳は未報告資料であるが、富士市文化振興課に資料が保管されている。銅製銙帯金具の鉈尾も出土しているためⅤ期（平城）まで時期が下降する可能性もあるものの、方頭大刀に伴う銅製鞘尻金具（八木 2003 のＢ鍬形《細》）に伴うとみれば、Ⅳ期後葉～末葉（飛鳥Ⅲ～Ⅳ）の範囲で捉えられる。

4　東平 1 号墳の鉄鏃は、本報告中でも述べられたとおり、概報作成時から現在までに破損・散逸してしまった個体が一定量存在するが、実測図は概報時の外形を基に復元している（第 84 図 38・42・43・44・49・51・63・65）。現在までに破損した頸部～茎部破片の一部は本報告第 40 図（武器実測図 8）に示した資料の中に含まれると考えられるが、同定は困難であった。したがって、公表した実測図の茎関数では二重カウントのおそれがあることから、現在（本報告時）確認できる茎関数（26 点）から同様に現在確認できる類円形関数（9 点）の割合として、導いた。

参考文献

井鍋 誉之　2003「富士川西岸～箱根西麓地域」『静岡県埋蔵文化財調査研究所　研究紀要』第 10 号（特集：古墳時代後期の鉄鏃）（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

内山 敏行　2003「古墳時代終末期の長頸鏃―東日本における棘関長頸腸抉鏃の評価―」『七世紀研究会シンポジウム 武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会

内山 敏行　2011「後期・終末期古墳出土の鉄鏃―東日本の場合―」『月刊　考古学ジャーナル』No.616（特集：後・終末期古墳出土の武器）

大谷 宏治　2003a「地域区分、時期区分と鉄鏃分類」『静岡県埋蔵文化財調査研究所　研究紀要』第 10 号（特集：古墳時代後期の鉄鏃）（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷 宏治　2003b「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鏃の変遷とその意義」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第 10 号（特集：古墳時代後期の鉄鏃）（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷 宏治　2004「東と西の狭間―古墳時代後期の鉄鏃にみる東海・甲信地域の特質―」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　設立 20 周年記念論文集』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷 宏治　2016「中原 4 号墳出土刀剣類・馬具の特徴と被葬者の性格」『伝法 中原古墳群』富士市埋蔵文化財調査報告　第 59 集　富士市教育委員会

尾上 元規　1993「古墳時代鉄鏃の地域性―長頸式鉄鏃出現以降の西日本を中心として―」『考古学研究』40（1）　考古学研究会

岡安 光彦　2013「壬申の乱における兵器と兵士―考古学的検討―」『土曜考古』第 35 号（特集：武器・馬文化）　土曜考古学研究会

菊池 吉修　2008「原分古墳出土の鉄鏃について」『原分古墳』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 184 集　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

菊池 吉修　2016「中原 4 号墳出土鉄鏃について」『伝法 中原古墳群』富士市埋蔵文化財調査報告　第 59 集　富士市教育委員会

鈴木 一有　2003「副葬鏃の変質」『七世紀研究会シンポジウム　武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会

鈴木 一有　2016「中原 4 号墳から出土した生産用具が提起する問題」『伝法 中原古墳群』富士市埋蔵文化財調査報告　第 59 集　富士市教育委員会

田村 隆太郎　2003「副葬鏃群への指向」『静岡県埋蔵文化財調査研究所　研究紀要』第 10 号（特集：古墳時代後期の鉄鏃）（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

津野 仁　1990「古代・中世の鉄鏃」『物質文化』物質文化研究会

津野 仁・内山 敏行　2017「武器・武具・馬具」村上恭通 編『モノと技術の古代史　金属編』吉川弘文館

豊島 直博　2002「後期古墳出土鉄鏃の地域性と階層性」『文化財論叢』Ⅲ　奈良文化財研究所

長谷川 睦　2003「静岡県における鉄鏃の地域色と生産・流通」『静岡県埋蔵文化財調査研究所　研究紀要』第 10 号（特集：古墳時代後期の鉄鏃）（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

菱田 哲郎　2018「6・7 世紀の手工業生産と地域の編成」『中原第 4 号墳の被葬者に迫る』平成 29 年度 中原第 4 号墳出土品 市指定文化財記念シンポジウム　富士市・富士市教育委員会

藤村 翔　2011「国久保古墳の評価と被葬者像」『平成 13 年度　富士市内遺跡・伝法 国久保古墳　埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会

藤村 翔　2016「中原 4 号墳の横穴式石室とその歴史的意義」『伝法 中原古墳群』富士市埋蔵文化財調査報告　第 59 集　富士市教育委員会

藤村 翔　2017「駿河・伊豆地域における手工業技術の受容と集落動態―6・7 世紀を中心に―」『東海における古墳時代の手工業生産の展開を考える』考古学研究会東海例会

八木 光則　2003「7・8 世紀鉄刀の画期と地域性」『七世紀研究会シンポジウム　武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会

図の出典

第 84 図　本書

第 85 図　1・2・4・5 ～ 8・10・11 : 筆者実測、小田貴子製図、3・9 : 富士市教育委員会 2011『平成 13 年度　富士市内遺跡・伝法 国久保古墳　埋蔵文化財発掘調査報告書』

第 86 図　1・2・4 : 筆者実測、小田貴子製図、3 : 富士市教育委員会 1988『富士市の埋蔵文化時（古墳編）』、5 :（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001『富士川 SA 関連遺跡（遺物編）』、6 ～ 9 : 前掲・富士市教育委員会 2011

第 87 図　原分古墳 :（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008『原分古墳』、国久保古墳 : 前掲・富士市教育委員会 2011、大坂上古墳 : 前掲・富士市教育委員会 1988

第 88 図　1 ～ 16 : 富士市教育委員会 2016『伝法 中原古墳群』、17 ～ 25 : 沼津市 2002『沼津市史　資料編　考古』、26 ～ 28・31 : 前掲・（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001、29・30・41・43・46・47 : 前掲・筆者実測、32 ～ 40 : 本書、42・44・45 : 富士川町教育委員会 1994『室野坂古墳群』、48・50・51・54・55 : 前掲・富士市教育委員会 1988、52・53 : 富士市教育委員会 2013『船津古墳群Ⅱ』、56・57 :（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010『富士山・愛鷹山麓の古墳群』

第 89 図　谷津原 7 号墳 : 前掲・（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001、谷津原 12 号墳・室野坂 B-4 号墳・一色 D-35 号墳 : 前掲・筆者実測、東平 1 号墳 : 本書、国久保古墳 : 前掲・富士教育委員会 2011、船津 L-62 号墳 : 前掲・富士市教育委員会 2013、船津 L-209 号墳 : 富士市教育委員会 1999『船津古墳群』、原分古墳 : 前掲・（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008

第 90 図　山梨県埋蔵文化財センター 2000『平林 2 号墳』

第 5 節　東平 1 号墳における埋葬過程の復元

佐藤 祐樹

はじめに

東平 1 号墳では、横穴式石室の床石の敷き直しなどから最低でも 3 回の埋葬が推定されている。無袖式の横穴式石室でありながら、その空間利用については、前半部分と後半部分での使い分けが行なわれており、副葬品の移動も想定される。そのため、本節では、調査所見から導き出せる埋葬過程について整理することとする。

1　調査所見について

埋葬過程について復元する際に、調査所見について整理することとしたい。まず、石室全長は 5.12m で奥壁から約 2.3m の箇所に仕切石が存在し、石室空間を前後に二分している。側壁が基底石しか残存しないため、石室構築当初から空間認識がなされていたかは明らかではないが、東側壁に残る側壁の状況などから設計当初からの空間識別と推測される。仕切石の前後では敷設される床石の種類や大きさに違いが見られ、それが、最終埋葬時まで認められることから、当初からの空間認識が残っていたことを示している。

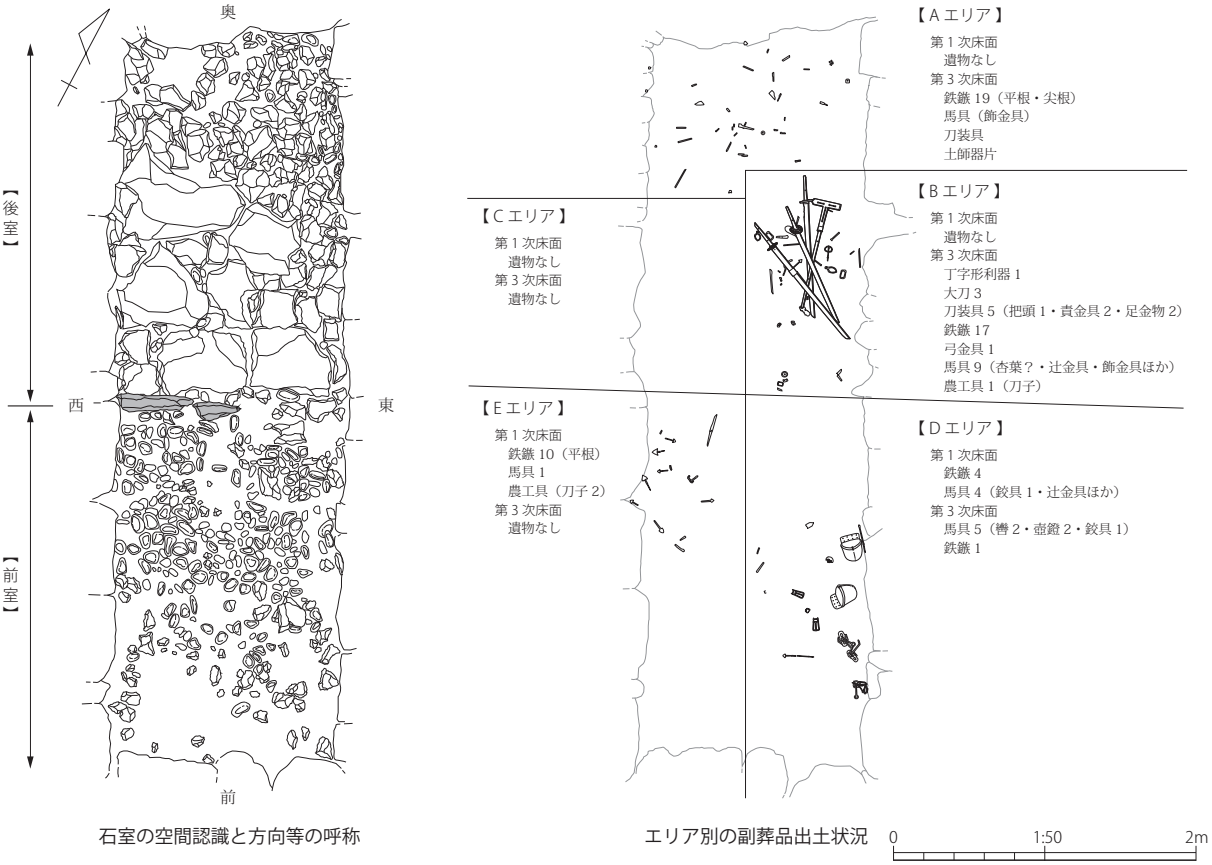
調査所見からは、奥壁側の後室に 2 面、開口部側の前室に 3 面の床面が認識された。その妥当性について、議論するすべはなく、以下ではその所見に基づいて構築された順に下から第 1 次床面、第 2 次床面、第 3 次床面と呼称し、埋葬過程を復元していくこととしたい。

前室と後室の対応は以下の通りとする。

【第 1 次床面】: 前室［下層］後室［下層］

【第 2 次床面】: 前室［中層］後室［下層］

【第 3 次床面】: 前室［上層］後室［上層］



第 91 図　石室内の空間認識と副葬品出土状況

2　遺物出土状況

遺物出土状況については、第 3 章で述べたとおりであるが要点をまとめておきたい。床石の敷き直しを含めて、遺物出土状況を平面的なまとまりから 5 つにグルーピングした。

A エリア：後室再奥部
　　鉄鏃の破片が出土するエリア

B エリア：後室東側
　　大刀や鉄鏃、馬具などの武具類が比較的まとまって出土するエリア

C エリア：後室西側
　　遺物が全く出土しないエリア

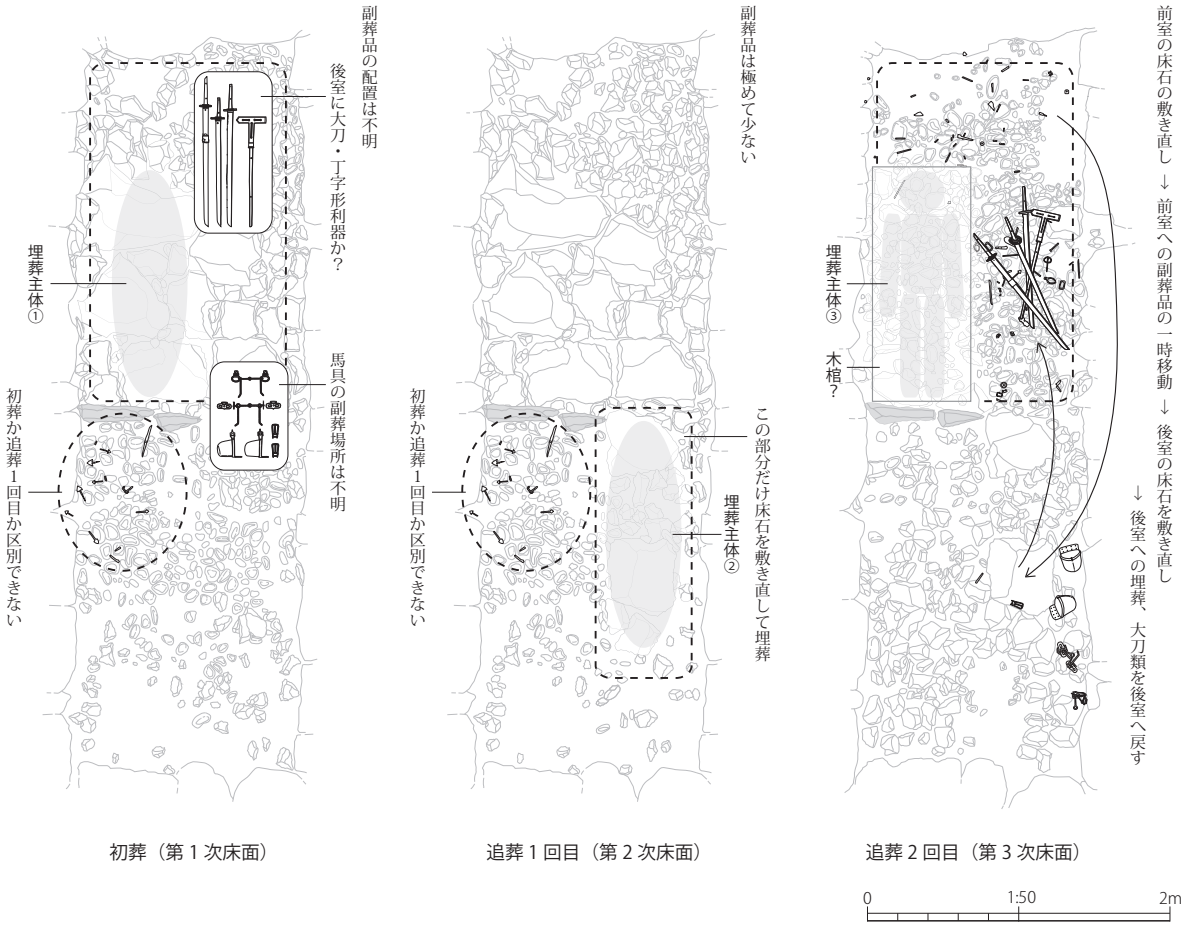
D エリア：前室東側
　　馬具を中心に、鉄鏃が若干認められるエリア

E エリア：前室西側
　　鉄鏃が出土するエリア

それぞれの遺物がどの床面に属するのかということは、出土時の標高や検出状況（写真）などをもとに今回の整理作業時に割り振りを行った結果、第 2 次床面に伴う明確な遺物を認識することはできず、第 1 次床面、第 3 次床面に属する遺物とした。その結果、後室（A ～ C エリア）の遺物は第 3 次床面に属し、前室東側（D エリア）の遺物は第 1 次床面、及び第 3 次床面に、さらに前室西側（E エリア）の遺物は第 1 次床面に属すると認識した。

3　埋葬行為と遺物の副葬・移動

出土状況からは、第 1 次床面と第 3 次床面の遺物を認識するに至ったが、これはあくまでも遺物の最終出土状況であり、埋葬段階を示すものではない。東平 1 号墳では床石の状況から最低 3 回の埋葬が想定されるが、ここでは埋葬を 3 回と仮定し、【初葬】、【追葬（1 回目）】、【追葬（2 回目）】と呼称することとする。



第 92 図　埋葬過程の復元

ここで、副葬品の時期について整理すると、3振ある大刀や丁字形利器、轡や鐙などの馬具などは飛鳥Ⅱの段階の遺物で、副葬品の総体から考えても初葬時の遺物と考えられている。しかし、出土状況からは追葬（2回目）の床面である第3次床面から出土しており、ここに遺物の移動の存在を指摘することができる。しかも、後室の大刀類については、床石を敷きなおした上で改めて、整然と配置するように副葬しており、初葬時の遺物に対する特別な意識が存在したことを示しているといえよう。以下、その出土状況から復元される埋葬行為について整理していきたい。

【初葬】後室に埋葬する。後室に初葬時の元位置を留めた遺物は存在しないが、床面を二分する仕切石は、最初の床面構築段階から認められるもので、初葬時は後室に埋葬されていたと推測される。副葬品の配置は明らかではないが、前室西側のEエリアに平根系鉄鏃が比較的まとまって出土しており、これらが初葬の遺物だとすれば、前室への遺物副葬も想定される。大刀類が初葬時にどこに埋葬されていたのかは推測する術がないが、後室であれば奥壁側が想定される。

【追葬（1回目）】前室東側に棺座状の石を敷き、そこに埋葬【追葬（1回目）】をする。副葬品の分析から、この段階に大刀や馬具の副葬はなかったと考えられる。前室西側Eエリアから出土した平根系鉄鏃や刀子などは、初葬時と同じ床面のため、初葬時の副葬品と追葬（1回目）の遺物を厳密に区分することはできないが、鉄鏃と大刀や馬具に時間差は認められない。そのため、追葬（1回目）時には副葬品は何もなかった可能性が高く、あったとしても、少量であったと推測される。なお、馬具については前室とくに東側において比較的低い位置から出土しているものもあり、初葬時に前室東側に副葬されていた馬具を、追葬時（1回目）に一度、どこかに移動し、棺座状の床石を敷きなおした可能性も有る。そのように想定した場合は、移動し損ねた馬具が前室の第1次床面から出土したと考えることもできよう。

【追葬（2回目）】後室に追葬する。木質の出土などから最終的には後室西側に追葬したと想定されるが、その前に床石の敷きなおし、遺物の移動が想定される。追葬（1回目）終了時段階では、後室には大刀類の副葬品があったと想定され、追葬時（1回目）には、進入する必要がなかったことから、遺物は副葬されたままの状況で第1次床面上に存在したと考えられる。また、前室では追葬（1回目）が行なわれ、初葬時の遺物が多少なりとも動かされた可能性が有る。

後室の床面は明らかに敷きなおされており、初葬時の副葬品は一時的に前室などに仮置きされた可能性が高い。ただし､その前に前室の遺物の片付け（仮移動）と床石の敷きなおしが行なわれた後、後室初葬の遺物を前室へ一時的に移動し、後室の床石を敷きなおしたと考えられる。その後、追葬（2回目）を行い、仮置きしていた副葬品を後室に改めて戻したと復元される。その際に、馬具については大部分が前室に置いたままの状況であったが、一部、大刀類とともに後室に運ばれてしまったと考えられる。大刀類が後室の側壁に立てかけられてその後、倒れた可能性も残るが、整然と並べられた出土状況からはその可能性は低いと判断される。

また、追葬（2回目）時に前室の西側には遺物はまったく存在せず、通路として機能していた可能性が高い。

さいごに

以上、東平1号墳の埋葬行為について不確定な要素を含みながらも復元してきた。3振の大刀や丁字形利器などの初葬時の遺物が、床面を敷き直した後の追葬時にも、丁寧に扱われ、さらに整然と配置されているということに、7世紀中ごろの初葬者とその後の追葬者（3人目の埋葬者）との関係が特別なものであったことを示しており、また、その意識が引き継がれていたことを如実に示している。

8世紀には東平1号墳周辺には駿河国富士郡衙が設置されており、その郡司層の成り立ちを考える上で古墳の被葬者像から接近することが可能な研究段階になったと言えよう。

第5章　総　括

墳丘・石室

東平1号墳は墳丘盛土が流失しており、確認調査においてその存在が知られるようになった墳丘規模（周溝含まず）、東西12.75m、南北13.5mの円墳である。埋葬主体である横穴式石室の上部は残存せず、基底石を残すのみで、石室の構築方法などに関する詳細な情報を得ることができなかった。石室規模は全長5.12mで、幅4.15m、深さ66cmの墓坑を有する。石室床面の貼り直しから、最低3回の埋葬の存在が推測される。

副葬品

丁字形利器　東平1号墳の副葬品を特徴付けるものに丁字形利器がある。東平1号墳以外では、静岡県沼津市宮原2号墳、宮城県多賀城市多賀城跡、兵庫県香住町月岡下古墳の合計4例が類例として知られており、本書作成に伴い詳細な図面を作成した（第4章1節）。

多賀城跡のものについては鉄生産の材料として工房跡から出土しており、製作年代に迫ることはできないが、ほかは6世紀後半から7世紀頃の製作が想定される。丁字形利器は柄穴鉄斧を装着した武器を祖形に誕生した武器型儀器であり、高句麗の領域にその源流が求められることが明らかとなった。

大刀　東平1号墳からは象嵌装鍔付大刀2振、八窓鍔付円頭大刀1振が出土している。これらは丁字形利器とあわせて副葬されており、象嵌装鍔に時間差がある可能性も残るが7世紀中ごろ（飛鳥Ⅱ）の時期が想定される（第4章3節）。

馬具　東平1号墳からは帯状吊金具付大型矩形立聞環状鏡板付轡と横長心葉形鏡板付轡という二種類の轡が出土している。前者は方形帯金具に別造りの金銅製吊脚を鋲留めするタイプで鏡板の大きさから飛鳥Ⅱ期が想定される（第4章3節）。後者の心葉形鏡板付轡は扁平で横長の心葉形で隅角が丸みを帯びることから、前者と同様の飛鳥Ⅱ期が想定される。

また、金銅製一枚造りの無文の棘付花弁形杏葉や銅製の一対の壺鐙も同様の時期に位置づけられる。

鉄鏃　東平1号墳からは30本近い鉄鏃が出土している。組成は平根系11点、尖根系19点で三角、五角、鑿箭、片刃箭がある。五角形式鉄鏃などは地元において生産されていた可能性も指摘され、富士山南麓における鉄器生産の存在が改めてクローズアップされた（第4章4節）。製作年代は馬具や大刀などと同様、7世紀中頃（飛鳥Ⅱ期）が想定されている。

時期　大刀や馬具、鉄鏃などの分析により副葬品の多くは、7世紀中頃に一人の被葬者（初葬者）に副葬された可能性が高い。石室の調査所見からは初葬者を含めて3回の副葬が想定されているが、最終埋葬時には、床面を貼りなおした後、初葬者の副葬品である丁字形利器や大刀3振を改めて被葬者の傍らに配置していることが明らかとなった（第4章5節）。追葬の時期は明らかではないが、初葬者の性格が追葬時まで強く意識されていた可能性が高い。

古墳群における位置づけ

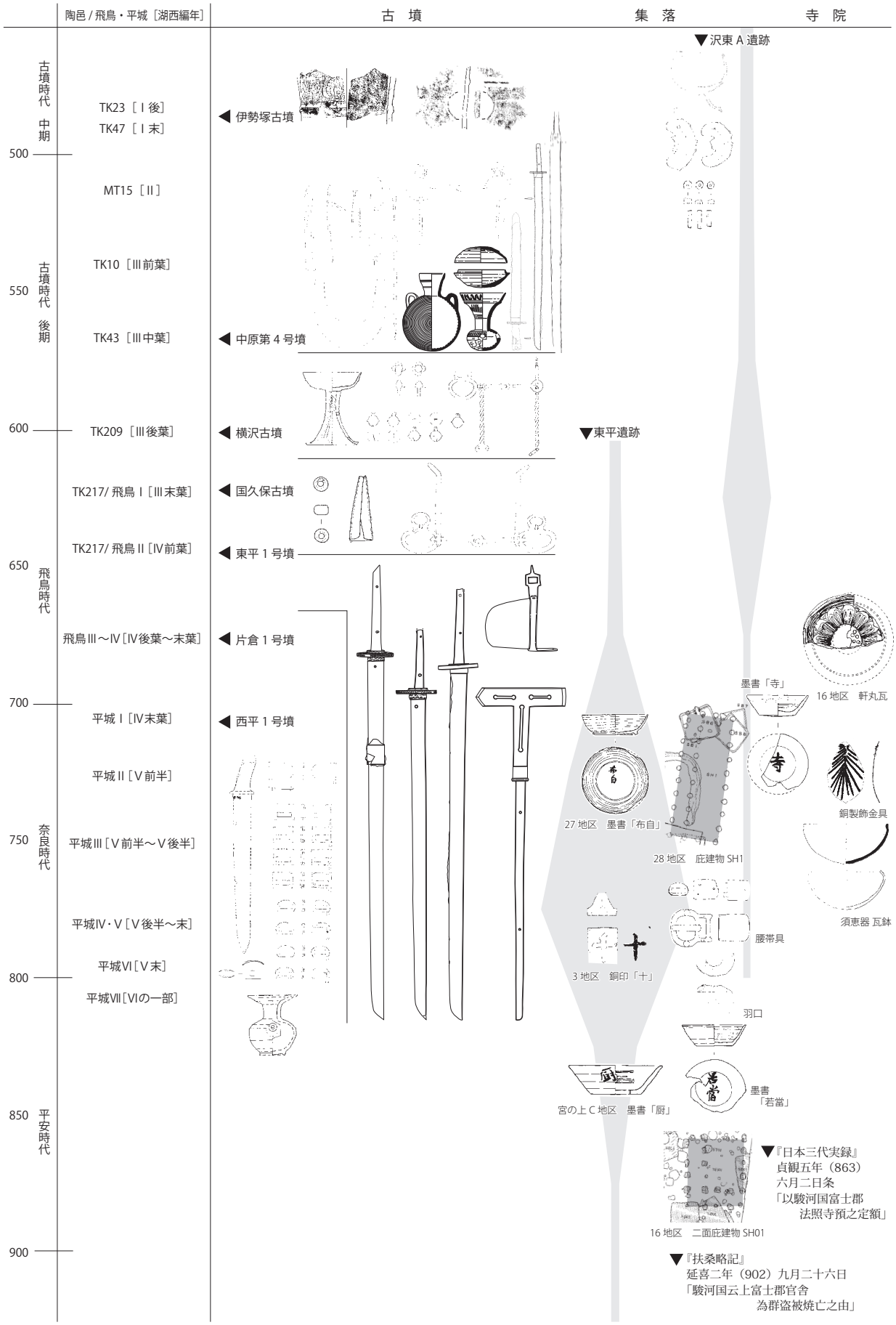
東平1号墳を含む伝法古墳群は、古墳時代中期末頃の伊勢塚古墳（円墳？ 54m）を皮切りに8世紀にいたるまで70基以上の古墳が築造されてきた。

6世紀後葉には渡来系集団との関係も想定され、この地域で新たに配置された技術者集団の統括者という被葬者像が想定されている中原4号墳や、7世紀初頭には同じく渡来系集団とのかかわりを示唆する鉄鐸を副葬する国久保古墳が築造されている。

東平1号墳はこれに続く古墳として築造されており、丁字形利器から想定される渡来系集団との関連が、脈々と引き継がれていることは、古墳群の展開とその構成、さらに東平1号墳の被葬者を考える上で重要な分析結果と言える。

古墳群の展開と富士郡衙へ視座

伝法古墳群を含む一帯には律令制下において駿河国富士郡衙である東平遺跡が広がっている。伊勢塚古墳の築造と呼応するように、子持ち勾玉などを出土する沢東A遺跡が東平遺跡の西方一帯に展開



第 93 図　伝法古墳群の展開と富士郡衙の成立

第 94 図　伝法古墳群と富士郡衙の展開

するが、7 世紀前半を一つの区切りとして、集落の中心は東平遺跡に移る。7 世紀後半における東平遺跡の様相は未だ明らかとなっていない部分もあるが、7 世紀末の可能性も残る長大な庇付掘立柱建物跡（第 28 地区 SH01）は、「郡司層などの首長居館」と推定されている。集落の中心が沢東 A 遺跡にあろうと、東平遺跡に移ろうとも和田川の源流である現在の三日市浅間神社周辺に流通・交易拠点が存在したことは十分に想定される。東平 1 号墳や伊勢塚古墳は和田川を遡ってくる人々の視認性を強く意識した丘陵上に築造されており、加えて、7 世紀後半から末頃には石川寺式軒丸瓦をもつ三日市廃寺跡が東平遺跡の内部に作られるということは、東平 1 号墳の築造から数十年を経て寺院が建設されていることになる。

5 世紀後半の伝法古墳群の築造以来、交通や流通の拠点として機能してきたエリアが、7 世紀後半に「富士評」として評価できるのかは今後の課題だが、その頃に政治・経済・宗教的機能を強化する。また、腰帯具を出土する西平 1 号墳の存在からも、伝法古墳群の被葬者が富士郡衙の官人層に繋がっていることは明白である。

被葬者像

これまでの分析により、東平 1 号墳の被葬者は、朝鮮半島からの渡来系集団との関連が指摘され技術者集団の統括者である中原 4 号墳の被葬者や国久保古墳の被葬者が担ってきた役割を引き継ぎ、軍事権や手工業生産の統括者としての権限を持ち合わせながら、富士郡衙成立に向けて重要度の増大する地域支配の一端を担う地域首長であったと位置づけられよう。

出土遺物観察表

※　法量の（　）は残存値を、［　］は推定される復元値を示す。
　　残存率は図示中での残存率を示した。

出土遺物観察表

・土器

報告番号	挿図番号	図版番号	出土場所	種別	器種	残存率	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	内面色調	外面色調	備考
1	第 11 図	PL.11	周溝	須恵器	坏蓋	-	-	-	(1.8)	2.5Y6/2　灰黄	2.5Y6/1　黄灰	
2	第 11 図	PL.11	周溝	須恵器	坏	70%	10.0	6.7	3.9	2.5Y6/1　黄灰	2.5Y6/1　黄灰	
3	第 11 図	PL.11	周溝	須恵器	有台坏身	25%	-	〔10.3〕	(2.0)	2.5Y6/1　黄灰	2.5Y6/2　灰黄	
4	第 11 図	PL.11	周溝	須恵器	広口壺	40%	〔18.7〕	〔10.6〕	〔36.4〕	N6/　灰	N6/　灰	図上復元
5	第 11 図	PL.11	周溝	須恵器	長頸壺	45%	-	-	(11.0)	10YR7/1　灰白	2.5Y6/2　灰黄	
6	第 11 図	PL.11	周溝	須恵器	長頸壺	25%	-	-	(7.5)	2.5Y7/1　灰白	2.5Y6/2　灰黄	
7	第 11 図	PL.11	周溝	須恵器	長頸壺	60%	〔10.8〕	-	(12.3)	2.5Y6/2　灰黄	2.5Y6/2　灰黄	
8	第 11 図	PL.11	周溝	須恵器	長頸壺	-	-	-	(1.9)	5Y6/1　灰	2.5Y6/1　黄灰	
9	第 11 図	PL.12	周溝	須恵器	長頸壺	40%	〔4.5〕	-	(6.7)	5Y7/1　灰白	5Y5/2　灰オリーブ	
10	第 11 図	PL.12	周溝	須恵器	長頸壺	20%	-	〔10.8〕	(5.3)	2.5Y5/2　暗灰黄	2.5Y5/2　暗灰黄	
11	第 11 図	PL.12	周溝	須恵器	長頸壺	-	-	-	(4.3)	2.5Y7/1　灰白	2.5Y7/1　灰白	
12	第 11 図	PL.12	周溝	須恵器	長頸壺	70%	-	9.4	(2.6)	2.5Y7/2　灰黄	2.5Y7/2　灰黄	
13	第 11 図	PL.12	周溝	須恵器	有台瓶	65%	-	6.1	(10.5)	2.5Y5/1　黄灰	2.5Y5/2　暗灰黄	
14	第 11 図	PL.12	周溝	須恵器	瓶	20%	-	〔5.9〕	(3.7)	2.5Y7/2　灰黄	2.5Y7/2　灰黄	
15	第 11 図	PL.12	周溝	須恵器	フラスコ瓶	90%	-	-	(23.3)	2.5Y5/2　暗灰黄	2.5Y6/2　灰黄	
16	第 11 図	PL.12	周溝	須恵器	甕	-	-	-	(15.9)	2.5Y7/1　灰白	2.5Y7/1　灰白	
17	第 11 図	PL.12	周溝	須恵器	甕	-	-	-	(5.7)	2.5Y7/1　灰白	2.5Y7/1　灰白	
18	第 11 図	PL.12	周溝	須恵器	甕	-	-	-	(7.7)	2.5Y6/1　黄灰	N6/　灰	
19	第 12 図	PL.13	周溝	須恵器	甕	-	-	-	(31.5)	2.5Y7/2　灰黄	2.5Y5/1　黄灰	
20	第 12 図	PL.13	周溝	須恵器	甕	-	-	-	(19.4)	2.5Y6/1　黄灰	2.5Y6/1　黄灰	
21	第 12 図	PL.13	周溝	土師器	坏	30%	-	〔7.1〕	(2.1)	5YR6/6　橙	5YR5/4　にぶい赤褐	
22	第 12 図	PL.13	周溝	土師器	甕	35%	〔21.4〕	〔8.5〕	〔31.4〕	7.5YR6/4　にぶい橙	7.5YR6/4　にぶい橙	図上復元
23	第 12 図	PL.13	周溝	灰釉陶器	皿	-	-	-	(2.9)	2.5Y6/2　灰黄	2.5Y7/1　灰白	
24	第 12 図	PL.13	周溝	陶器	すり鉢	-	-	-	(6.5)	N4/　灰	N4/　灰	
25	第 12 図	PL.13	周溝	陶器	甕	-	-	-	(5.1)	10YR5/1　褐灰	5YR5/3　にぶい赤褐	
26	第 12 図	PL.13	周溝	瓦		-	-	-	(7.7)	7.5YR7/4　にぶい橙	10YR7/4　にぶい黄橙	
27	第 12 図	PL.13	周溝	瓦		-	-	-	(8.3)	2.5Y6/2　灰黄	2.5Y6/2　灰黄	
176	第 50 図	PL.29	石室	須恵器	長頸壺	70%	-	-	(7.1)	2.5Y7/1　灰白	2.5Y7/1　灰白	
外 1	第 52 図	PL.29	1Tr	須恵器	長頸壺	25%	-	〔7.5〕	(4.2)	2.5Y7/1　灰白	2.5Y6/1　黄灰	
外 2	第 52 図	PL.29	1Tr	土師器	坏	-	-	-	(3.0)	5YR6/6　橙	5YR6/6　橙	
外 3	第 52 図	PL.29	4Tr SB	土師器	坏	-	-	-	(1.7)	2.5YR5/6　明赤褐	2.5YR5/6　明赤褐	墨書
外 4	第 52 図	PL.29	4Tr SB	土師器	坏	-	-	-	(3.65)	7.5YR4/2　灰褐	5YR5/4　にぶい赤褐	
外 5	第 52 図	PL.29	4Tr SB	土師器	坏	20%	-	〔7.1〕	(2.2)	5YR5/4　にぶい赤褐	5YR5/4　にぶい赤褐	

・石器

報告番号	挿図番号	図版番号	器種	出土場所	全長(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)
28	第 12 図	PL.13	磨石	周溝	14.9	5.1	3.7	470.65

・武器

丁字形利器

報告番号	挿図番号	図版番号	取上番号	概報番号	下端標高（m）	出土場所 エリア 床面	全長（cm）	身部			頸部			茎部			重量（g）
								長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	長（cm）	幅（cm）	茎尻	
29	第 32 図	PL.16・17	14	23	25.26	石室後室　B　3 次床面	72.5	19.7	4.0	0.55	13.1	3.2 ～ 3.6	0.5	55.4	1.6 ～ 2.1	隅切り	586.46

大刀

報告番号	挿図番号	図版番号	取上番号	概報番号	下端標高（m）	出土場所 エリア 床面	全長（cm）	刀身部		茎部			重量（g）	備考
								長（cm）	幅（cm）	長（cm）	幅（cm）	茎尻		
30	第 34 図	PL.18	11	26	25.23	石室後室　B　3 次床面	99.0	78.1	3.2	20.9	2.1	隅切り	1000.91	銀象嵌装
31	第 35 図	PL.20・21	12	25	25.25	石室後室　B　3 次床面	(84.0)	(70.0)	3.2	(14.0)	1.3 ～ 2.1	-	689.20	銀象嵌装
32	第 37 図	PL.19	13	24	25.26	石室後室　B　3 次床面	(94.0)	75.5	3.3	(18.5)	1.7 ～ 2.4	-	960.95	

刀装具

報告番号	挿図番号	図版番号	取上番号	概報番号	器種	下端標高（m）	出土場所 エリア 床面	長軸全長（cm）	短軸最大幅（cm）	厚（cm）	内孔長軸（cm）	内孔短軸（cm）	吊手部孔径（cm）	重量（g）	備考
30a	第 34 図	PL.18			鍔	-	石室後室　B　3 次床面	7.9	7.1	0.8	3.1	2.4		-	大刀 30 に装着して出土
30b	第 34 図	PL.18			責金具	-	石室後室　B　3 次床面	4.2	3.3	0.5	3.0	2.3		9.78	大刀 30 に装着して出土
30c	第 34 図	PL.18			鏾	-	石室後室　B　3 次床面	3.7	2.7	1.0	-	-		-	大刀 30 に装着して出土
31a	第 35 図	PL.21			鍔	-	石室後室　B　3 次床面	8.8	7.8	0.7	3.5	3.4		112.82	大刀 31 に装着して出土
31b	第 35 図	PL.21			責金具	-	石室後室　B　3 次床面	4.4	3.9	0.45	3.2	2.8		9.63	大刀 31 に装着して出土
31c	第 35 図	PL.20			鏾	-	石室後室　B　3 次床面	3.8	3.3	1.3	-	-		-	大刀 31 に装着して出土
31d	第 36 図	PL.21	20	30	責金具	25.18	石室後室　B　3 次床面	5.5	4.8	0.6	4.3	3.5		22.88	銀象嵌
31e	第 36 図	PL.21	20	30	責金具	25.18	石室後室　B　3 次床面	6.0	5.0	0.6	4.7	3.8		26.47	銀象嵌
32	第 37 図	PL.19			鍔		石室後室　B　3 次床面	8.8	7.8	0.6	-	-		-	大刀 32 に装着して出土
32	第 37 図	PL.19			鏾		石室後室　B　3 次床面	3.9	2.9	1.3	-	-		-	大刀 32 に装着して出土
32	第 37 図	PL.19			責金具		石室後室　B　3 次床面	4.4	3.4	0.4	-	-		-	大刀 32 に装着して出土
32a	第 38 図	PL.19	76	62	円頭把頭	25.26	石室後室　B　3 次床面	9.1	4.5	3.7	-	-		213.37	象嵌なし
33	第 39 図	PL.19	18	32	足金物	25.22	石室後室　B　3 次床面	6.0	3.2	0.7	4.3	2.7	0.5	7.58	
34	第 39 図	PL.19	-	-	足金物	25.22	石室後室　B　3 次床面	5.5	2.8	0.7	4.0	2.4	0.5	6.60	
35	第 39 図	PL.19	-	-	鏾	-	-	-	-	-	-	-		4.40	鞘口金具の可能性あり

鉄鏃　（ゴシック体は概報時の値）

報告番号	挿図番号	図版番号	取上番号	概報番号	形式（部位）	下端標高（m）	出土場所 エリア 床面	全長（cm）	鏃身部			頸部			茎部			重量（g）	備考
									長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）		
36	第 40 図	PL.21	99	82	平根 三角形式	25.11	石室前室 E　1 次床面	(3.8) **(5.4)**	(3.8) **(3.8)**	(3.1) **(3.1)**	0.2 **0.2**	- (2.1)	- **0.7**	- **0.4**	-	-	-	6.47	
37	第 40 図	PL.21	100	89	平根 三角形式	25.21	石室前室 E　1 次床面	(2.0) **(6.2)**	1.8 **1.8**	(2.2) **(2.2)**	0.2 **0.2**	- (4.4)	- **0.5**	- **0.3**	-	-	-	1.63	
38	第 40 図	PL.21	65	90	平根 三角形式	25.13	石室前室 E　1 次床面	(5.8) **(9.3)**	1.8 **1.8**	(2.5) **(2.5)**	0.2 **0.2**	〔4.0〕 **〔5.4〕**	0.4 **0.4**	0.25 **0.25**	- (2.1)	- **0.3**	- **0.3**	4.91	
39	第 40 図	PL.21	70	84	平根 三角形式	25.17	石室前室 E　1 次床面	(6.7)	1.9	〔2.6〕	0.2	(4.9)	0.4	0.3	-	-	-	4.68	
40	第 40 図	PL.21	86	88	平根 三角形式	25.14	石室前室 E　1 次床面	(4.5)	1.7	〔2.2〕	0.2	(2.8)	0.5	0.3	-	-	-	3.65	
41	第 40 図	PL.21	69	81	平根 三角形式	25.19	石室前室 E　1 次床面	(3.5)	(1.3)	(1.8)	(0.15)	(2.2)	0.5	0.3	-	-	-	2.63	
42	第 40 図	PL.21	91	94	平根 三角形式	25.14	石室前室 D　1 次床面	(5.3) **(16.5)**	(1.5) **(1.5)**	(2.4) **(2.4)**	0.2 **0.2**	(3.8) **(11.7)**	0.4 **0.4**	0.25 **0.25**	- (3.2)	- **0.3**	- **0.3**	3.76	
43	第 40 図	PL.21	104	100	平根 五角形式	-	石室前室 E　1 次床面	(3.7) **(11.0)**	(3.7) **(3.9)**	(3.7) **(3.7)**	0.25 **0.25**	- **〔3.1〕**	- **0.7**	- **0.4**	- (4.1)	- **0.35**	- **0.3**	7.69	
44	第 40 図	PL.21	98	87	平根 五角形式	25.11	石室前室 E　1 次床面	(3.5) **(11.2)**	(3.4) **(3.4)**	〔3.7〕 **〔3.7〕**	0.3 **0.3**	(0.3) **3.2**	- **0.8**	- **0.4**	- (4.7)	- **0.3**	- **0.25**	7.73	
45	第 40 図	PL.21	80	71	平根 五角形式	25.23	石室後室 B　3 次床面	(9.5)	2.1	1.6	0.25	6.4	0.5	0.3	(1.3)	0.4	0.35	7.19	
46	第 40 図	PL.21	81	67	平根 五角形式	25.24	石室後室 B　3 次床面	(5.2)	2.6	2.4	0.2	(2.6)	0.5	0.3	-	-	-	6.29	
47	第 40 図	PL.21	94	95	平根 五角形式	25.12	石室前室 D　1 次床面	(5.3)	(5.3)	(3.4)	0.3	-	-	-	-	-	-	13.36	
48	第 40 図	PL.21	-	-	尖根 三角形式	-	-	(1.3)	1.0	〔1.1〕	0.15	(0.3)	(0.4)	0.2	-	-	-	0.43	

報告番号	挿図番号	図版番号	取上番号	概報番号	形式（部位）	下端標高（m）	出土場所 エリア 床面	全長（cm）	鏃身部 長（cm）	鏃身部 幅（cm）	鏃身部 厚（cm）	頸部 長（cm）	頸部 幅（cm）	頸部 厚（cm）	茎部 長（cm）	茎部 幅（cm）	茎部 厚（cm）	重量（g）	備考
49	第 40 図	PL.22	22	27	尖根 片刃箭式	25.29	石室後室 B　3 次床面	(8.0) (12.9)	2.0 2.0	0.8 0.8	0.3 0.3	(6.0) 7.7	0.4 0.4	0.4 0.4	- (3.2)	- 0.4	- 0.4	5.49	
50	第 40 図	PL.22	-	-	尖根 片刃箭式	-	-	(10.5)	(2.2)	0.65	0.2	(8.0)	0.4	0.25	(0.3)	-	-	9.40	
51	第 40 図	PL.22	46	31	尖根 片刃箭式	25.22	石室後室 B　3 次床面	(8.5) (11.7)	2.0 2.0	0.7 0.7	0.25 0.25	(6.5) 6.9	0.5 0.5	0.3 0.3	- (2.8)	- -	- -	5.92	
52	第 40 図	PL.22	38	3	尖根 片刃箭式	25.28	石室後室 A　3 次床面	(2.9) (6.5)	〔2.2〕 〔2.2〕	0.7 0.7	0.3 0.3	(0.7) (4.2)	0.5 0.55	(0.3) 0.5	- -	- -	- -	2.34	
53	第 40 図	PL.22	84	69	尖根 片刃箭式	25.21	石室後室 B　3 次床面	(5.9)	(1.8)	0.6	0.25	(4.1)	0.45	0.4	-	-	-	4.03	
54	第 40 図	PL.22	48	20	尖根 片刃箭式	25.33	石室後室 A　3 次床面	(4.8)	(2.1)	0.7	0.2	(2.7)	0.45	0.3	-	-	-	3.12	
55	第 40 図	PL.22	37	6	尖根 片刃箭式	25.27	石室後室 A　3 次床面	(3.8)	(1.8)	0.7	0.25	(2.0)	0.5	0.3	-	-	-	2.57	
56	第 40 図	PL.22	56	58	尖根 片刃箭式	25.25	石室後室 A　3 次床面	(4.6)	2.3	0.7	0.3	(2.3)	0.5	0.4	-	-	-	3.32	
57	第 40 図	PL.22	80	72	尖根 片刃箭式	25.23	石室後室 B　3 次床面	(2.4)	2.2	0.7	0.2	0.2	-	-	-	-	-	1.91	
58	第 40 図	PL.22	-	-	尖根 片刃箭式	-	-	(2.2)	(2.2)	0.7	0.2	-	-	-	-	-	-	1.24	
59	第 40 図	PL.22	-	-	尖根 片刃箭式	-	-	(2.0)	(2.0)	0.7	0.2	-	-	-	-	-	-	1.60	
60	第 40 図	PL.22	-	-	尖根 片刃箭式	-	-	(5.2)	(1.1)	0.7	0.3	(4.1)	0.45	0.4	-	-	-	4.01	
61	第 40 図	PL.22	55	59	尖根 片刃箭式	25.24	石室後室 A　3 次床面	(3.9)	(1.9)	0.7	0.3	(3.0)	0.5	0.4	-	-	-	2.59	
62	第 40 図	PL.22	-	-	尖根 片刃箭式	-	-	(4.4)	(1.4)	0.7	0.3	(3.0)	0.4	0.3	-	-	-	3.54	
63	第 40 図	PL.22	97	93	尖根 鑿箭式	25.09	石室前室 D　1 次床面	(3.9) (18.9)	1.0 1.0	1.0 1.0	0.2 0.2	(2.9) 12.4	0.5 0.5	0.3 0.3	- (5.5)	- 0.3	- 0.3	3.28	
64	第 40 図	PL.22	6	41	尖根 鑿箭式	25.18	石室前室 D　3 次床面	(12.8)	0.5	0.6	0.2	11.3	0.4	0.4	(1.0)	0.35	0.35	7.83	
65	第 40 図	PL.22	53	50	尖根 鑿箭式	25.16	石室後室 A　3 次床面	(4.7) (13.5)	〔0.5〕 〔0.5〕	〔0.7〕 〔0.7〕	0.15 0.15	(4.6) 8.1	0.5 0.5	0.25 0.25	- (4.9)	- 0.5	- 0.4	3.68	
66	第 41 図	PL.22	-	-	(頸部 ～茎部)	-	-	(8.0)	-	-	-	(4.9)	0.35	0.3	(3.1)	0.3	0.25	3.36	
67	第 41 図	PL.22	-	-	(頸部 ～茎部)	-	-	(5.1)	-	-	-	(3.5)	0.5	0.5	(1.6)	0.4	0.4	5.14	
68	第 41 図	PL.22	-	-	(頸部 ～茎部)	-	-	(4.3)	-	-	-	(3.4)	0.4	0.4	(0.9)	0.4	0.4	3.34	
69	第 41 図	PL.22	-	-	(頸部 ～茎部)	-	-	(4.5)	-	-	-	(3.0)	0.6	0.3	(1.5)	0.5	0.3	3.73	
70	第 41 図	PL.22	-	-	(頸部 ～茎部)	-	-	(4.1)	-	-	-	(1.7)	0.45	0.35	(2.4)	0.3	0.25	2.07	
71	第 41 図	PL.22	-	-	(頸部 ～茎部)	-	-	(3.7)	-	-	-	(2.1)	0.4	0.4	(1.6)	0.35	0.35	2.75	
72	第 41 図	PL.22	-	-	(頸部 ～茎部)	-	-	(3.7)	-	-	-	(2.2)	0.4	0.3	(1.5)	0.3	0.25	1.83	
73	第 41 図	PL.22	-	-	(頸部 ～茎部)	-	-	(2.3)	-	-	-	(1.0)	0.4	0.35	(1.3)	0.35	0.35	1.26	
74	第 41 図	PL.22	-	-	(頸部 ～茎部)	-	-	(2.3)	-	-	-	(1.6)	0.5	0.3	(0.7)	0.4	0.3	0.96	
75	第 41 図	PL.22	-	-	(頸部 ～茎部)	-	-	(2.1)	-	-	-	(1.0)	-	-	(1.1)	0.5	0.5	2.03	
76	第 41 図	PL.22	-	-	(頸部 ～茎部)	-	-	(4.6)	-	-	-	(1.0)	0.45	0.35	3.6	0.25	0.25	1.99	
77	第 41 図	PL.22	-	-	(頸部 ～茎部)	-	-	(5.4)	-	-	-	(0.4)	-	-	(5.0)	0.4	0.3	3.27	
78	第 41 図	PL.22	-	-	(頸部 ～茎部)	-	-	(5.1)	-	-	-	(0.8)	-	-	(4.3)	0.3	0.25	2.12	
79	第 41 図	PL.22	-	-	(頸部 ～茎部)	-	-	(3.6)	-	-	-	(2.0)	0.5	0.5	(1.6)	0.5	0.5	2.75	
80	第 41 図	PL.22	-	-	(頸部 ～茎部)	-	-	(7.9)	-	-	-	(7.1)	0.5	0.5	(0.8)	-	-	6.59	

報告番号	挿図番号	図版番号	取上番号	概報番号	形式（部位）	下端標高（m）	出土場所 エリア 床面	全長（cm）	鏃身部 長（cm）	鏃身部 幅（cm）	鏃身部 厚（cm）	頸部 長（cm）	頸部 幅（cm）	頸部 厚（cm）	茎部 長（cm）	茎部 幅（cm）	茎部 厚（cm）	重量（g）	備考
81	第 41 図	PL.22	39	4	（頸部～茎部）	25.3	石室後室 A 3 次床面	(7.7)	-	-	-	(6.8)	0.45	0.35	(0.9)	0.4	0.35	5.94	
82	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部～茎部）	-	-	(6.8)	-	-	-	(3.5)	0.6	0.5	(3.3)	0.3	0.3	5.75	
83	第 41 図	PL.22	83	70	（頸部～茎部）	25.19	石室後室 B 3 次床面	(5.6)	-	-	-	(3.4)	0.35	0.35	(2.2)	0.3	0.3	4.82	
84	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部～茎部）	-	-	(6.8)	-	-	-	(4.8)	0.5	0.45	(2.0)	0.4	0.4	5.80	
85	第 41 図	PL.22	31	14	（頸部～茎部）	25.25	石室後室 A 3 次床面	(5.2)	-	-	-	(1.2)	0.6	0.6	4.0	0.35	0.35	2.97	
86	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部～茎部）	-	-	(3.3)	-	-	-	(2.6)	0.5	0.5	(0.7)	0.35	0.35	2.89	
87	第 41 図	PL.22	80	72	（頸部）	25.23	石室後室 B 3 次床面	(7.0)	-	-	-	(7.0)	0.4	0.45	-	-	-	5.95	
88	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部）	-	-	(7.2)	-	-	-	(7.2)	0.4	0.3	-	-	-	7.23	
89	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部）	-	-	(5.9)	-	-	-	(5.9)	0.5	0.5	-	-	-	5.57	
90	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部）	-	-	(5.4)	-	-	-	(5.4)	0.4	0.4	-	-	-	4.82	
91	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部）	-	-	(4.1)	-	-	-	(4.1)	0.55	0.5	-	-	-	4.12	
92	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部）	-	-	(3.4)	-	-	-	(3.4)	0.5	0.4	-	-	-	3.14	
93	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部）	-	-	(4.0)	-	-	-	(4.0)	0.4	0.35	-	-	-	2.70	
94	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部）	-	-	(4.0)	-	-	-	(4.0)	0.5	0.4	-	-	-	3.35	
95	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部）	-	-	(3.0)	-	-	-	(3.0)	0.5	0.4	-	-	-	2.66	
96	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部）	-	-	(3.2)	-	-	-	(3.2)	0.6	0.3	-	-	-	2.33	
97	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部）	-	-	(3.4)	-	-	-	(3.4)	0.5	0.5	-	-	-	2.80	
98	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部）	-	-	(2.9)	-	-	-	(2.9)	0.5	0.4	-	-	-	2.21	
99	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部）	-	-	(3.0)	-	-	-	(3.0)	0.5	0.35	-	-	-	2.03	
100	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部）	-	-	(3.3)	-	-	-	(3.3)	0.7	0.4	-	-	-	3.35	
101	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部）	-	-	(3.3)	-	-	-	(3.3)	0.4	0.4	-	-	-	2.26	
102	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部）	-	-	(2.1)	-	-	-	(2.1)	0.35	0.35	-	-	-	0.86	
103	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部）	-	-	(2.4)	-	-	-	(2.4)	0.5	0.4	-	-	-	1.71	
104	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部）	-	-	(2.2)	-	-	-	(2.2)	0.5	0.4	-	-	-	1.56	
105	第 41 図	PL.22	-	-	（頸部）	-	-	(1.9)	-	-	-	(1.9)	0.6	0.3	-	-	-	1.75	
106	第 41 図	PL.22	-	-	（茎部）	-	-	(3.3)	-	-	-	-	-	-	(3.3)	0.25	0.25	1.23	
107	第 41 図	PL.22	-	-	（茎部）	-	-	(2.9)	-	-	-	-	-	-	(2.9)	0.35	0.3	1.43	
108	第 41 図	PL.22	-	-	（茎部）	-	-	(2.9)	-	-	-	-	-	-	(2.9)	0.4	0.4	1.45	
109	第 41 図	PL.22	-	-	（茎部）	-	-	(2.7)	-	-	-	-	-	-	(2.7)	0.35	0.35	1.14	
110	第 41 図	PL.22	-	-	（茎部）	-	-	(2.4)	-	-	-	-	-	-	(2.4)	0.4	0.4	1.46	
111	第 41 図	PL.22	-	-	（茎部）	-	-	(2.2)	-	-	-	-	-	-	(2.2)	0.35	0.35	1.05	
112	第 41 図	PL.22	-	-	（茎部）	-	-	(2.2)	-	-	-	-	-	-	(2.2)	0.35	0.3	1.18	
113	第 41 図	PL.22	-	-	（茎部）	-	-	(1.8)	-	-	-	-	-	-	(1.8)	0.25	0.25	0.58	
114	第 41 図	PL.22	-	-	（茎部）	-	-	(2.1)	-	-	-	-	-	-	(2.1)	0.3	0.3	0.74	
115	第 41 図	PL.22	-	-	（茎部）	-	-	(1.8)	-	-	-	-	-	-	(1.8)	0.25	0.25	0.48	
116	第 41 図	PL.22	-	-	（茎部）	-	-	(6.9)	-	-	-	-	-	-	(6.9)	0.4	0.25	3.06	
117	第 41 図	PL.22	-	-	（茎部）	-	-	(2.7) (4.3)	-	-	-	-	-	-	(2.7) (4.3)	0.35 0.25	0.35 0.25	3.33	2 本癒着
118	第 41 図	PL.22	-	-	（茎部）	-	-	(3.8)	-	-	-	-	-	-	(3.8)	0.45	0.35	1.39	
119	第 41 図	PL.22	-	-	（茎部）	-	-	(3.7)	-	-	-	-	-	-	(3.7)	0.35	0.35	1.13	
120	第 41 図	PL.22	-	-	（茎部）	-	-	(3.6)	-	-	-	-	-	-	(3.6)	0.5	0.4	1.55	
121	第 41 図	PL.22	-	-	（茎部）	-	-	(3.0)	-	-	-	-	-	-	(3.0)	0.3	0.3	0.77	
122	第 41 図	PL.22	33	10	（茎部）	25.24	石室後室 A 3 次床面	(3.3)	-	-	-	-	-	-	(3.3)	0.4	0.25	1.15	
123	第 41 図	PL.22	-	-	（茎部）	-	-	(2.9)	-	-	-	-	-	-	(2.9)	0.4	0.45	1.48	
124	第 41 図	PL.22	-	-	（茎部）	-	-	(2.3)	-	-	-	-	-	-	(2.3)	0.35	0.35	0.83	
125	第 41 図	PL.22	49	57	（茎部）	25.25	石室後室 A 3 次床面	(3.0)	-	-	-	-	-	-	(3.0)	0.35	0.35	1.13	
126	第 41 図	PL.22	-	-	（茎部）	-	-	(2.2)	-	-	-	-	-	-	(2.2)	0.3	0.3	0.79	
127	第 41 図	PL.22	89	48	（茎部）	25.23	石室後室 A 3 次床面	(2.2)	-	-	-	-	-	-	(2.2)	0.3	0.3	0.83	
128	第 41 図	PL.22	-	-	（茎部）	-	-	(1.7)	-	-	-	-	-	-	(1.7)	0.25	0.25	0.49	

弓金具

報告番号	挿図番号	図版番号	取上番号	概報番号	下端標高（m）	出土場所 エリア 床面	全長（cm）	弓幅（cm）	筒状部径（cm）	重量（g）	備考
129	第 41 図	PL.22	67	73	25.23	石室後室 B 3 次床面	2.8	2.0	0.4	1.29	

・馬具

轡

報告番号	挿図番号	図版番号	取上番号	概報番号	下端標高（m）	出土場所 エリア 床面	銜 法量（cm）					鏡板 法量（cm）				立聞 法量（cm）				引手 法量（cm）			重量（g）
							全長		長	喞金外法	銜先端環外法	全高	環・心葉幅	環・心葉高	厚	高	幅	孔長辺	孔短辺	長	銜側環外法	引手壺外法	
130	第 42 図	PL.24	1	46	25.19	石室前室 D 3 次床面	16.5	左 右	8.6 9.1	2.0 2.3	2.5 2.7	5.6 5.4	5.85 5.65	3.95 3.85	-	1.65 1.55	3.2 3.85	2.1 2.15	0.5 0.45	13.3 12.5	2.1 2.0	2.8 2.7	181.49
131	第 43 図	PL.25	2	45	25.17	石室前室 D 3 次床面	16.9	左 右	9.0 9.1	2.3 2.3	2.9 2.6	4.6 5.1	9.2 9.6	3.3 3.8	0.2 0.2	1.2 1.2	3.8 3.8	2.3 2.5	1.0 〔1.4〕	13.2 12.7	2.4 2.2	2.85 2.7	236.03

鐙

報告番号	挿図番号	図版番号	取上番号	概報番号	下端標高（m）	出土場所 エリア 床面	全体 法量（cm）			壺部 法量（cm）			柄部 法量（cm）					鐙鞦受穴		踏込舌部		重量（g）
							長	幅	高	長	幅	高	長	厚	最大幅	最小幅	突起長	幅	高	長	幅	
132	第 44 図	PL.26	3	43	25.19	石室前室 D 3 次床面	16.6	14.1	（14.9）	12.1	13.1	11.2	（3.3）	1.2	3.0	1.6	-	（2.5）	（0.6）	6.4	12.3	629.80
133	第 45 図	PL.27	4	40	25.19	石室前室 D 3 次床面	15.9	14.2	18.7	11.6	13.1	11.2	6.5	1.6	3.4	1.9	1.7	1.9	1.2	6.4	12.1	717.24

鉸具

報告番号	挿図番号	図版番号	取上番号	概報番号	下端標高（m）	出土場所 エリア 床面	長さ（cm）	基部幅（cm）	尻幅（cm）	刺金長（cm）	重量（g）
134	第 46 図	PL.23	5	44	25.31	石室前室 D 3 次床面	9.2	3.2	4.5	6.7	61.94
135	第 46 図	PL.23	92	99	25.2	石室前室 D 1 次床面	9.2	3.1	4.5	6.6	59.30

杏葉

報告番号	挿図番号	図版番号	取上番号	概報番号	下端標高（m）	出土場所 エリア 床面	全体			立聞		鋲					重量（g）
							長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	長さ（cm）	上辺幅（cm）	本数	長（cm）	頭径（cm）	頭高（cm）	ワッシャー	
136	第 47 図	PL.23	-	-	-	-	（8.6）	（3.1）	0.05	1.5	（1.2）	（1）〔3〕	0.6	0.5	0.13	有	3.29
137	第 47 図	PL.23	45	36	25.22	石室後室 B 3 次床面	（9.3）	（4.3）	0.07	1.5	2.0	3	0.55	0.45	0.13	有	5.4

辻金具

報告番号	挿図番号	図版番号	取上番号	概報番号	下端標高（m）	出土場所 エリア 床面	全体	鉢部		木部			鋲				重量（g）
							径（cm）	径（cm）	高さ（cm）	最大径（cm）	高さ（cm）	孔径（cm）	長（cm）	頭径（cm）	頭高（cm）	ワッシャー	
138	第 47 図	PL.23	9	38	25.22	石室後室 B 3 次床面	3.9	2.9	0.85	2.35	0.65	0.55	1.9	0.7	0.45	有	6.53
139	第 47 図	PL.23	-	-	-	-	3.8	3.1	0.85	-	-	-	1.8	0.8	0.55	無	5.08
140	第 47 図	PL.23	95	96	25.15	石室前室 D 1 次床面	〔4.7〕	3.4	〔1.25〕	2.4	0.85	0.55	2.1	0.65	0.5	無	4.93
141	第 47 図	PL.23	-	-	-	-	〔3.8〕	〔3.0〕	（0.8）	-	-	-	-	-	-	無	0.5
142	第 47 図	PL.23	-	-	-	-	（1.7）	（1.2）	（0.75）	-	-	-	-	-	-	無	0.7
143	第 47 図	PL.23	-	-	-	-	（0.65）	-	（0.2）	-	-	-	-	-	-	無	0.08
144	第 47 図	PL.23	-	-	-	-	（1.8）	-	（0.2）	-	-	-	-	-	-	無	0.24
145	第 47 図	PL.23	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.83	0.8	0.55	無	3.37
146	第 47 図	PL.23	-	-	-	-	-	-	-	2.3	0.6	0.5	-	-	-	無	0.55
147	第 47 図	PL.23	-	-	-	-	-	-	-	2.6	1.0	0.55	-	-	-	無	0.89

飾金具

報告番号	挿図番号	図版番号	取上番号	概報番号	形	下端標高（m）	出土場所 エリア 床面	本体				鋲					重量（g）
								長・径（cm）	幅（cm）	厚（cm）	高（cm）	本数	長（cm）	頭径（cm）	頭高（cm）	ワッシャー	
130a	第 42 図	PL.24	-	-	爪形	-	-	1.7	〔2.45〕	0.07	0.4	3	1.1	0.48 ～ 0.53	0.13	無	2.20
130b	第 42 図	PL.24			爪形			1.9	〔2.4〕	0.05	0.35	3	0.9	0.45 ～ 0.51	0.15	無	2.61
148	第 47 図	PL.23	-	-	爪形	-	-	(1.7)	(2.0)	0.05	0.4	(2)〔3〕	0.5	0.45	0.12	無	0.6
149	第 47 図	PL.23	60	75	爪形	25.23	石室後室　B　3 次床面	〔1.86〕	〔2.4〕	0.05	0.4	3	1.0	0.45	0.1 ～ 0.13	無	1.12
150	第 47 図	PL.23	-	-	爪形	-	-	(1.6)	(2.1)	0.05	(0.1)	(2)〔3〕	0.5	0.45	0.13	無	0.53
151	第 47 図	PL.23	-	-	爪形	-	-	(0.6)	(1.2)	0.05	-	(1)〔3〕	0.6	0.4	0.11	有	0.24
152	第 47 図	PL.23	8	39	爪形	25.22	石室後室　B　3 次床面	(1.7)	(2.35)	0.05	0.4	2	0.55	0.45	0.11	有	1.00
153	第 47 図	PL.23	-	-	爪形	-	-	(1.1)	(0.5)	0.05	(0.3)	-	-	-	-	無	0.11
154	第 47 図	PL.23	-	-	爪形	-	-	(1.6)	(0.8)	0.05	0.4	-	-	-	-	無	0.14
155	第 47 図	PL.23	-	-	円形	-	-	(1.7)	-	0.05	-	1	0.55	0.45	0.13	有	0.39
156	第 47 図	PL.23	-	-	円形	-	-	(1.4)	-	0.05	-	1	0.5	0.45	0.11	無	0.25
157	第 47 図	PL.23	-	-	円形	-	-	2.55	-	0.05	-	1	0.6	0.4	0.11	有	1.47
158	第 47 図	PL.23	-	-	円形	-	-	(2.0)	-	0.05	-	1	0.6	0.45	0.12	無	0.65
159	第 47 図	PL.23	-	-	円形	-	-	(2.3)	-	0.05	-	1	0.6	0.45	0.15	有	0.54
160	第 47 図	PL.23	-	-	円形	-	-	(2.1)	-	0.05	-	1	0.6	0.4	0.11	有	0.56
161	第 47 図	PL.23	-	-	円形	-	-	(1.2)	-	0.05	-	1	(0.5)	0.45	0.13	無	0.21
162	第 47 図	PL.23	-	-	円形	-	-	(1.6)	-	0.05	-	1	0.55	0.45	0.16	無	0.3

方形金具

報告番号	挿図番号	図版番号	取上番号	概報番号	下端標高（m）	出土場所 エリア 床面	長（cm）	幅（cm）	厚み（cm）	重量（g）
163	第 48 図	PL.23	93	98	25.15	石室前室　D　1 次床面	2.2	2.6	0.2	3.88
164	第 48 図	PL.23	96	97	25.1	石室前室　D　1 次床面	1.8	2.5	0.2	1.41
165	第 48 図	PL.23	-	-	-	-	1.55	2.25	0.2	2.01
166	第 48 図	PL.23	73	86	25.14	石室前室　E　1 次床面	(3.9)	(1.7)	0.4	3.30
167	第 48 図	PL.23	62	77	25.19	石室後室　B　3 次床面	3.9	2.9	0.4	8.36

・農工具

刀子

報告番号	挿図番号	図版番号	取上番号	概報番号	部位	下端標高（m）	出土場所 エリア 床面	全長（cm）	刀身部			茎部			重量（g）
									長（cm）	幅（cm）	厚み（cm）	長（cm）	幅（cm）	厚み（cm）	
168	第 49 図	PL.29	77	79	刀身	25.15	石室前室　E　1 次床面	(14.4)	7.3	1.2	0.4	(7.1)	0.7	0.3	14.00
169	第 49 図	PL.29	64 7	42 91	刀身	25.23	石室前室　E　1 次床面	(11.1)	(5.9)	0.9	0.3	(5.2)	0.4	0.2	8.27
170	第 49 図	PL.29	16	37	刀身	25.24	-	(9.1)	(9.1)	1.0	0.35	-	-	-	6.62
171	第 49 図	PL.29	-	-	刀身	-	-	(3.0)	(3.0)	(0.8)	0.4	-	-	-	2.25
172	第 49 図	PL.29	-	-	鏃	-	-	(2.1)	-	-	-	-	-	-	0.39
173	第 49 図	PL.29	-	-	鏃	-	-	(1.9)	-	-	-	-	-	-	0.38

・不明鉄製品

報告番号	挿図番号	図版番号	取上番号	概報番号	下端標高（m）	出土場所 エリア 床面	全長（cm）	重量（g）
174	第 51 図	PL.29	-	-	-	-	(3.6)	5.80
175	第 51 図	PL.29	72	85	25.16	石室前室　E　1 次床面	(3.0)	2.91
外 6	第 52 図	PL.29	-	-	-	2Tr	(5.0)	14.05

写 真 図 版

PLATE

東平第１号墳出土　壺鐙（132・133）

1．第３次床面遺物出土状況全景（南より）

1. 調査前全景（西より）

2. 1Tr 精査作業の様子（北より）

3. 2Tr 重機掘削の様子（東より）

4. 1Tr 完掘（北より）

5. 2Tr 完掘（西より）

6. 4Tr 土層

7. 3Tr　壺鐙（132）出土の様子（南東より）

8. 3Tr　大刀（30・31・32）出土の様子（東より）

1. 第 3 次床面後室　丁字形利器（29）、大刀（30・31・32）出土状況（西より）

2. 第 3 次床面後室　丁字形利器、大刀、刀装具、馬具など出土状況（東より）

1. 第 3 次床面後室　鉄鏃出土状況（北より）

2. 第 3 次床面後室　刀装具（34）出土状況（南より）

3. 第 3 次床面後室　円頭柄頭（32a）出土状況（南より）

4. 第 3 次床面　馬具（157）出土状況

5. 第 3 次床面　馬具出土状況

1．第３次床面前室　壺鐙（132・133）、轡（130・131）、鉸具（135）出土状況（西より）

2．第３次床面前室　轡（130・131）出土状況（南より）

1．第３次床面　遺物取り上げ後全景（南より）

1. 後室東および前室西　下部床面検出状況（南より）

2. 3Tr 全景（西より）

3. 下部床面鉄鏃出土状況

4. 前室西　下部床面検出状況（北より）

5. 後室東　下部床面検出状況（南より）

6. 前室西　下部床面検出状況（西より）

7. 後室東　下部床面検出状況（東より）

1. 第 2 次床面全景（南より）

2. 第 2 次床面（北より）

3. 第 1 次床面前室　馬具（135・163）出土状況（西より）

4. 第 1 次床面全景（南より）

5. 第 1 次床面（北より）

6. 第 1 次床面（南より）

1. 石室床面東側半裁状況（南より）

2. 前室床面東側半裁状況（東より）

3. 石室床面形成面全景（南より）

4. 仕切り石（北より）

5. 仕切り石（南より）

6. 石室基底石全景（南東より）

7. 石室基底石全景（北西より）

1. 石室基底石・墓坑・周溝全景（南より）

2. 石室基底石　奥壁側（東より）

3. 奥壁裏込め（南より）

4. 石室基底石抜取り痕全景（南より）

5. 完掘全景（南より）

1

2

3

5

6

4

7

8

PL.12

9

10

11

13

12

14

15

17
16
18

19

20

21

22

24 26 27

23

25

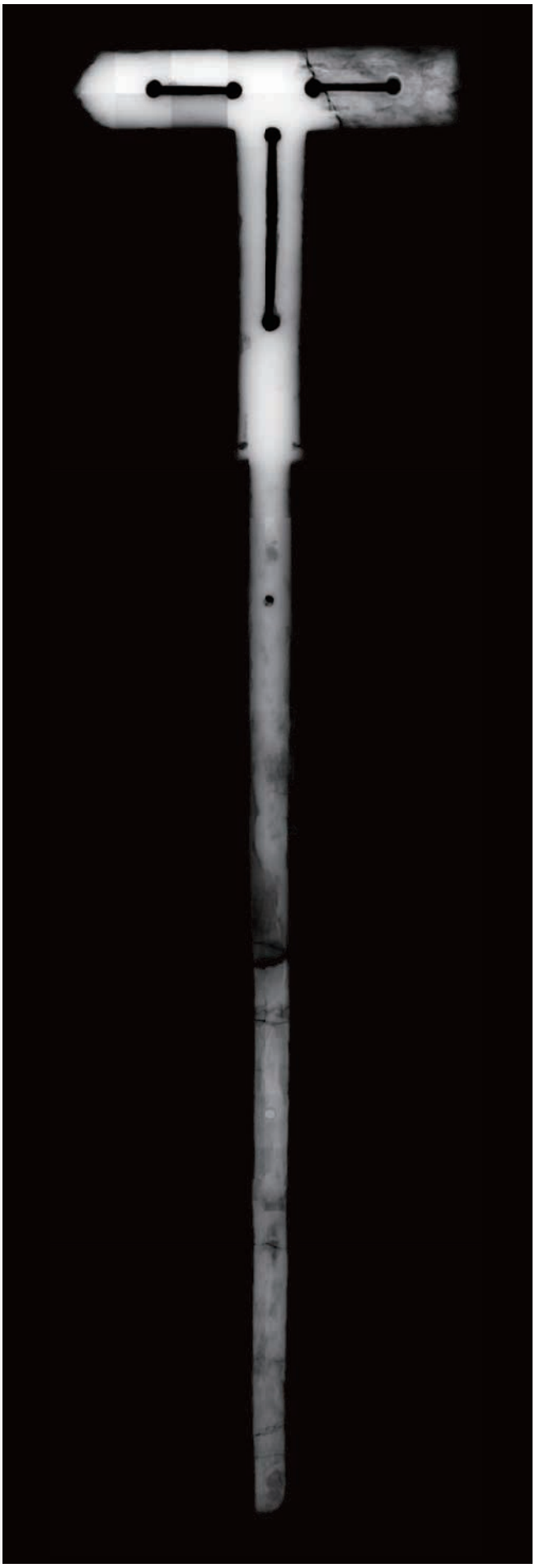
28

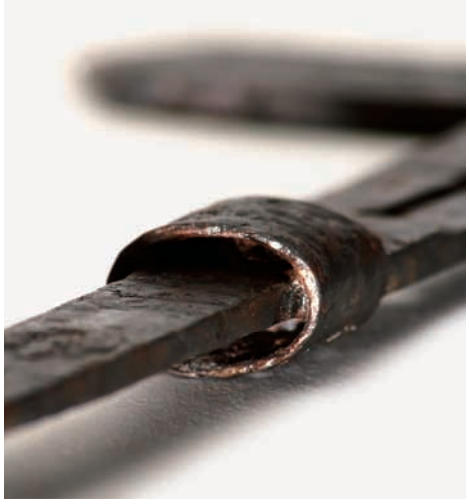
PL.14

出土遺物集合（武器）

出土遺物集合（馬具）

PL.16



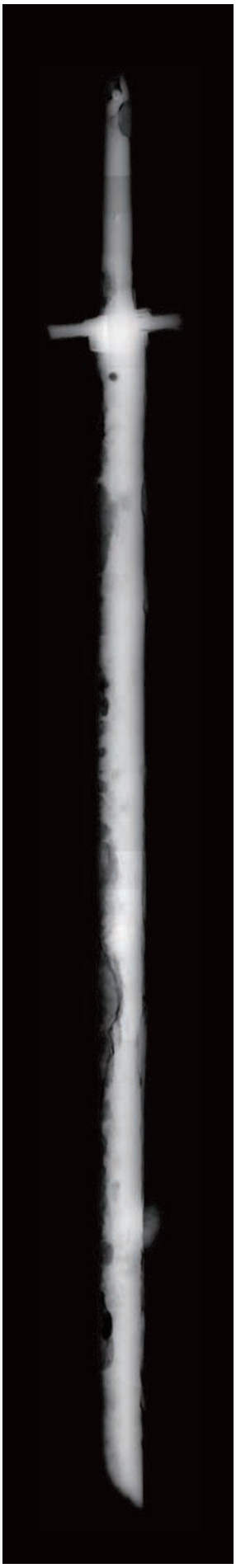


PL.18

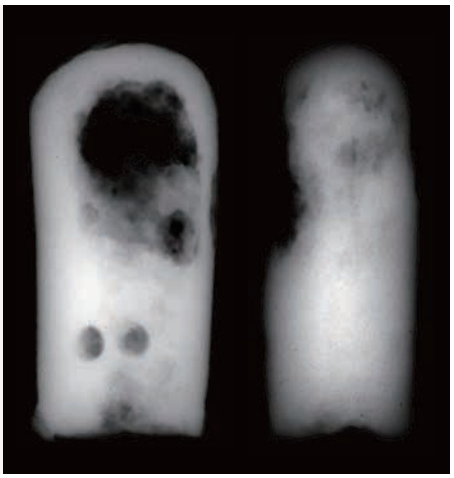
30

30b

32



32a

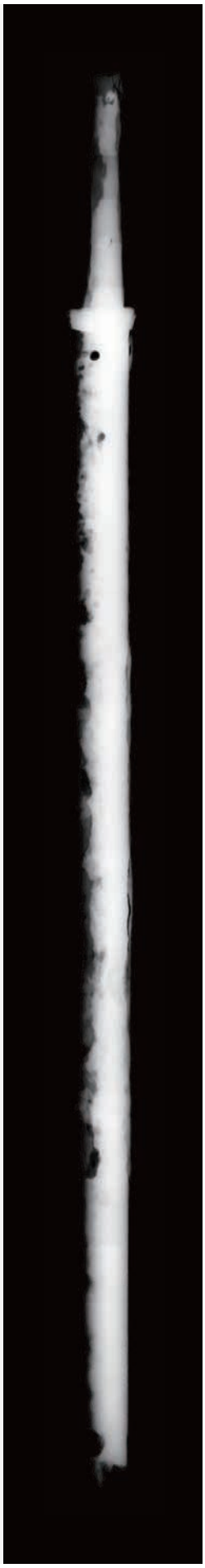


33

34

35

PL.20



31a

31b

31d

31e

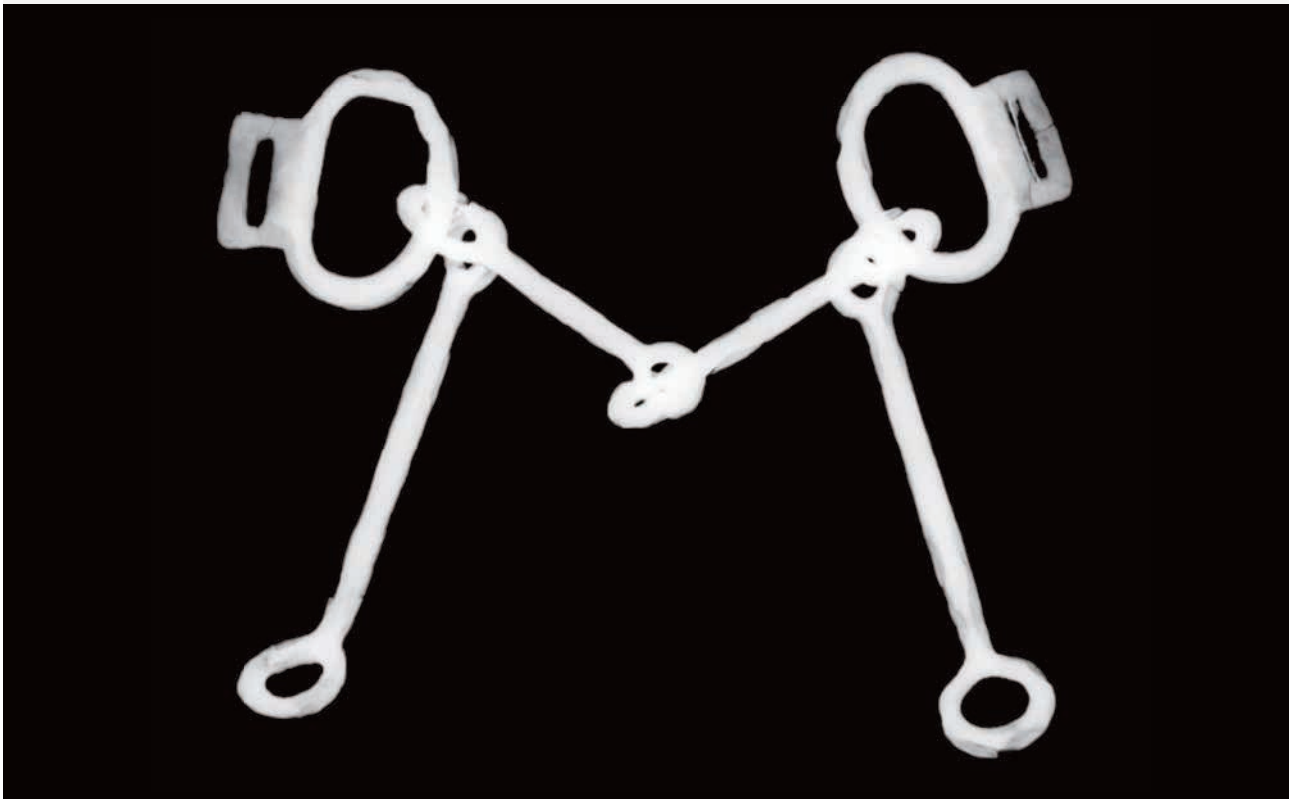
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48

PL.22

49
50
51
52
53
54
55
56
63
65
57
58
59
60
61
62
64
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129

134
135
136
137
138
139
140
145
141
142
143
144
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167

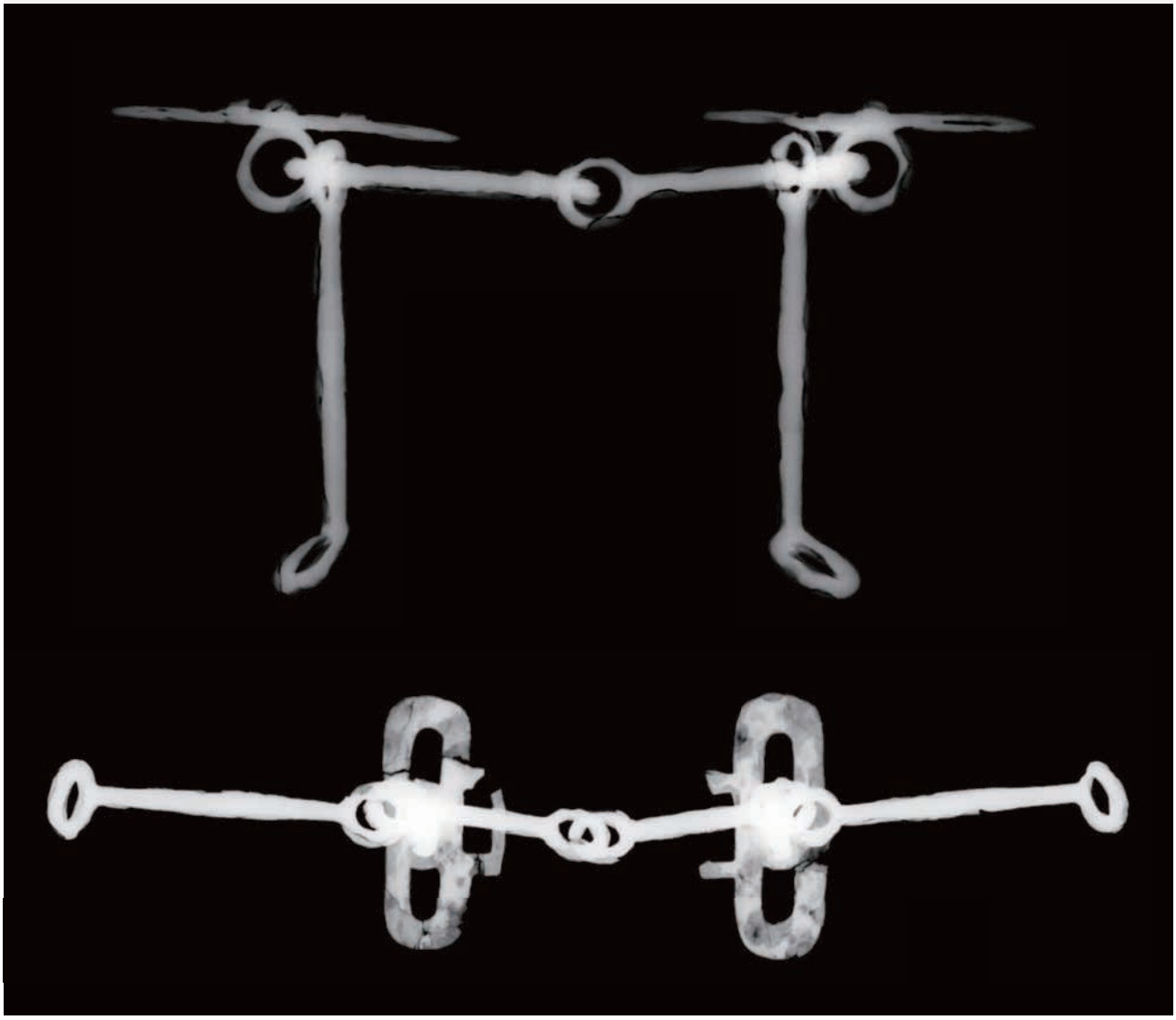
130



130a

130b

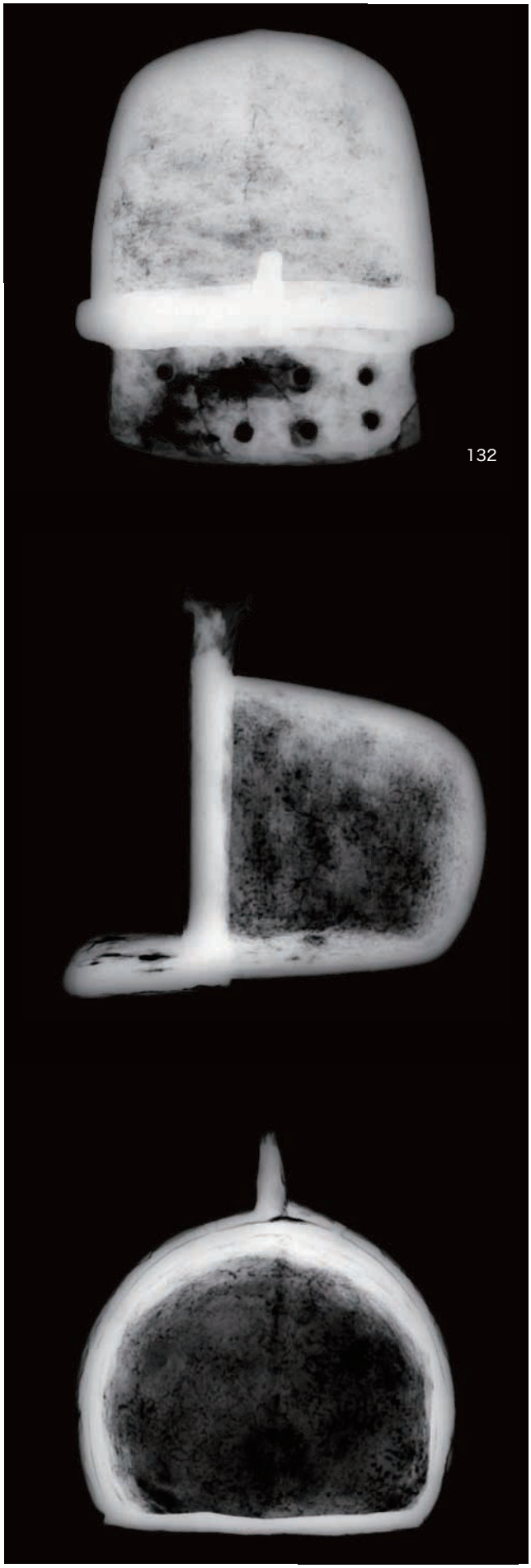
131

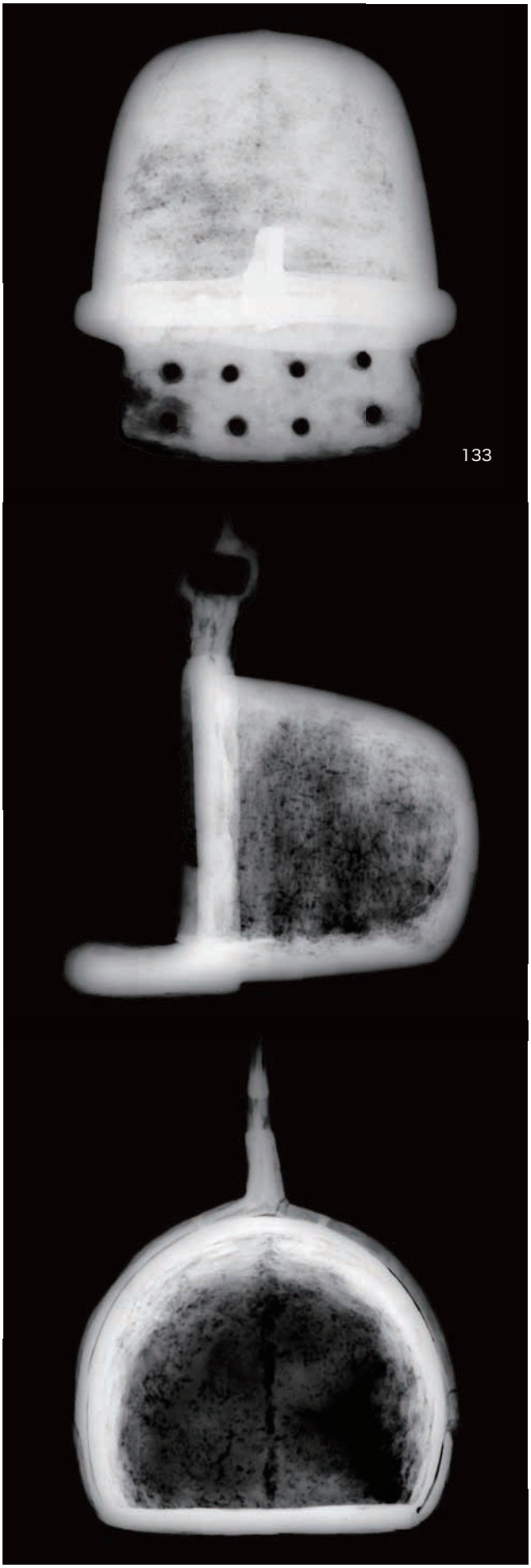


PL.26

133

PL.28





168

169

170

171

172

173

174 175

外 3

外 6

176

外 2

外 4

外 1

外 3

外 5

報告書抄録

ふりがな	でんぼう ひがしだいらだいいちごうふん
書名	伝法 東平第 1 号墳
副書名	
シリーズ名	富士市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 64 集
編著者名	佐藤 祐樹（編著）・大谷 宏治・鈴木 一有・藤村 翔・若林 美希
編集機関	富士市教育委員会　（担当課：文化振興課）
所在地	〒 417-8601　静岡県富士市永田町 1 丁目 100 番地　　TEL　0545-55-2875
発行年月日	平成 30 年 3 月 23 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 古墳番号	北緯 東経	地区名	調査期間	発掘面積 （㎡）	発掘原因
ひがしだいら だいいちごうふん	しずおかけん ふじし でんぼう	22210	595	35　10′　19.48734″ 138　40′　36.954″	東平遺跡 第 12 地区	19891115 ～ 19891120	403.676	確認調査
東平第 1 号墳	静岡県 富士市 伝法					19891121 ～ 19891229	457.610	本発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
伝法 2 古墳群	古墳	古墳時代 （飛鳥時代）	古墳 竪穴建物跡	1 2	丁字形利器 大刀 鉄鏃 弓 馬具（轡、鐙ほか） 刀子 須恵器 土師器	

要　約

本書では、東平第 1 号墳の発掘調査の成果を報告する。

東平第 1 号墳の含まれる伝法古墳群は、南に駿河湾を臨む富士山南麓の緩斜面にひろがる古墳時代中期末頃から 8 世紀にかけての古墳群である。伝法古墳群は、5 世紀後半から末頃の伊勢塚古墳（円墳）の築造に始まり、6 世紀後半の鉄器生産や馬匹生産、食料生産など産業全体に関わる技術者集団の統括者が埋葬されたと考えられる中原第 4 号墳、7 世紀に雁木玉や鉄鐸などを副葬する国久保古墳、8 世紀の腰帯具などを含む西平第 1 号墳などを含む。

東平第 1 号墳は横穴式石室を埋葬主体とする 7 世紀中頃の築造と考えられ、銀象嵌の施された大刀を含めて 3 振の大刀や壺鐙や轡などの馬具など数多くの副葬品が出土した。なかで注目されるのが、国内に数例しか例のない丁字形利器の出土である。分析により丁字形利器は柄穴鉄斧を装着した武器を祖形に誕生した武器型儀器であり、高句麗の領域にその源流が求められることが明らかとなった。

東平 1 号墳は駿河国富士郡衙である東平遺跡の範囲にも含まれており、その被葬者は、朝鮮半島からの渡来系集団との関連が指摘され技術者集団の統括者である中原 4 号墳の被葬者や国久保古墳の被葬者が担ってきた役割を引き継ぎ、富士郡衙成立に向けて軍事権をも持ち合わせながら、重要度の増大する地域支配の一端を担う地域首長であったと位置づけられる。

富士市埋蔵文化財調査報告　第 64 集

伝法 東平第 1 号墳

発行年月日　平成 30 年 3 月 23 日

編集・発行　富 士 市 教 育 委 員 会
〒 417-8601　静岡県富士市永田町一丁目 100 番地
TEL 0545-55-2875　FAX 0545-53-0789
E-mail:si-bunka@div.city.fuji.shizuoka.jp

印刷・製本　文光堂印刷株式会社
〒 410-0871　静岡県沼津市西間門 68 番地の 1

（富士市行政資料登録番号　29-59）